

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告区

鳥取県西伯郡伯耆町

SAKA CHOU
坂長第7遺跡2

SAKA CHOU
坂長第8遺跡3

2013

財団法人 鳥取県教育文化財団

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告区

鳥取県西伯郡伯耆町

SAKA CHOU
坂長第7遺跡2

SAKA CHOU
坂長第8遺跡3

2013

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする全国的にも注目されるような古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

こうした先人が残した素晴らしい地域の遺産である遺跡を後世に伝えることは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところではありますが、この事業に先立ち、当財団は鳥取県から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

このうち、平成23年度に調査を行った坂長第7遺跡では、縄文時代から古代の溝や自然流路、中世から近世の水田などが発掘され、土器、石器、鉄製品、木製品など多彩な遺物が出土しました。また、坂長第8遺跡では古墳時代の竪穴建物や古代の溝などが見つかかり、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。そして、このたび、それらの調査結果を報告書として上梓するはこびとなりました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県西部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 井上善弘

例 言

1. 本報告書は、鳥取県の委託により財団法人鳥取県教育文化財団が一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成23年度に行った坂長第7遺跡、坂長第8遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地および調査面積は以下のとおりである。
坂長第7遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字大清水2259-2番地ほか
調査面積：1,015㎡
坂長第8遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字狐谷尻1582-1番地ほか
調査面積：1,780㎡
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。標高は、海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載した地形図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図「岸本町全図」、および国土地理院発行の1/50,000「米子」を使用した。
5. 本調査は、財団法人鳥取県教育文化財団の野口、玉木が担当し、株式会社イビソク（現場代理人：竹内康晴、支援調査員：服部英雄、熊谷洋一、調査補助員：小澤大介、近藤美穂）の支援を受けた。坂長第7遺跡の土壌分析をバリノ・サーヴェイ株式会社、出土遺物の保存処理を元興寺文化財研究所に委託し、鉄製品および土壌のX線写真撮影については鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
6. 本報告書に掲載した遺構の図面作製は株式会社イビソクが行い、野口、玉木がこれを補佐した。出土遺物の実測、浄書は財団法人鳥取県教育文化財団調査室岸本調査事務所が行った。
7. 本報告書で使用した遺跡の写真撮影は株式会社イビソクが行い、遺物の写真は玉木が撮影した。
8. 本報告書の執筆と編集は玉木が行った。
9. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々、機関に御指導、御協力いただいた。明記して深謝いたします（五十音順、敬称略）。
桑田訓也、財団法人米子市教育文化事業団、西部土地改良区、武井紀子、鳥取県教育委員会、馬場基、平石充、平川南、伯耆町教育委員会、藤井裕之、山本祥隆、山本崇、渡邊晃宏

凡 例

1. 遺物の注記における遺跡名には「サカ7」「サカ8」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号」を記入した。
2. 本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
SI：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SA：柵列 SK：土坑、落とし穴 SD：溝、自然流路 P：ピット
3. 報告書記載時の遺構番号は発掘調査時における遺構番号と変更している。新旧の遺構名・番号対照表は第1表に示した。
4. 遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下のとおりである。
土器、土製品、瓦、木製品：1/4、石器：2/3、1/2、鉄製品：1/3
5. 本書における土層色調、土器色調は『新版 標準土色帳』による。
6. 遺構図、遺物実測図に用いたトーンおよび記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
■：地山 ■：土器赤彩 ■：土器・木製品漆塗布、煤付着範囲
7. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。
8. 遺物観察表等の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
9. 本報告書における遺構、遺物の時期決定は下記参考文献に基づいている。

参考文献

- 清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社
- 清水真一 1978「第VI章第1節土器論」『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育委員会
- 牧本哲夫 1999「第9章第1節古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』鳥取県教育文化財団
- 巽淳一郎他 1983『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』倉吉市教育委員会
- 中森 祥 2006「鳥取県における中世後期土師器の展開」『調査研究紀要1』鳥取県埋蔵文化財センター

目次

序

例言

凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 調査体制	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 坂長第7遺跡の調査成果	9
第1節 調査の概要と層序	9
第2節 第1遺構面の調査	14
第3節 第2遺構面の調査	17
第4節 第3遺構面の調査	24
第5節 第4遺構面の調査	40
第6節 遺構に伴わない遺物	43
第4章 坂長第8遺跡の調査成果	60
第1節 調査の概要と層序	60
第2節 第1遺構面の調査	63
第3節 第2遺構面の調査	86
第4節 第3遺構面の調査	91
第5節 遺構に伴わない遺物	93
第5章 坂長第7遺跡の自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社) 95
第6章 総括	116

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1章		
第1図	調査地位置図	1
第2図	調査地グリッド図	3
第3図	坂長第7遺跡、 坂長第8遺跡グリッド図	3
第2章		
第4図	遺跡位置図	5
第5図	周辺遺跡分布図	7
第3章		
第6図	調査区土層断面位置図	9
第7図	土層断面図①	10・11
第8図	土層断面図②	12
第9図	第1遺構面遺構配置図	15
第10図	畦1～3・出土遺物	16
第11図	第2遺構面遺構配置図	18
第12図	畦4・SD30・31	19
第13図	SD30・31出土遺物①	20
第14図	SD30出土遺物②	21
第15図	SD30出土遺物③	22
第16図	SD32・出土遺物	23
第17図	第3遺構面遺構配置図①	25
第18図	第3遺構面遺構配置図②	26・27
第19図	SD33～42	28・29
第20図	SD33出土遺物①	30
第21図	SD33出土遺物②	31
第22図	SD35～37・39・41・42出土遺物	32
第23図	SD35遺物出土状況	33
第24図	SD43～45・SD45出土遺物	34
第25図	SD47～51・SD47～50出土遺物	35
第26図	第4遺構面遺構配置図	37
第27図	SD52～57	38・39
第28図	SD56堰検出状況	41
第29図	SD54出土遺物	42
第30図	遺構に伴わない遺物①	44
第31図	遺構に伴わない遺物②	45
第32図	遺構に伴わない遺物③	46
第33図	遺構に伴わない遺物④	47
第34図	遺構に伴わない遺物⑤	48
第35図	遺構に伴わない遺物⑥	50
第36図	遺構に伴わない遺物⑦	52
第37図	遺構に伴わない遺物⑧	53
第38図	遺構に伴わない遺物⑨	54
第39図	遺構に伴わない遺物⑩	55
第40図	遺構に伴わない遺物⑪	56
第41図	遺構に伴わない遺物⑫	57
第42図	遺構に伴わない遺物⑬	58
第4章		
第43図	調査区土層断面位置図	60
第44図	土層断面図①	61
第45図	土層断面図②	62
第46図	第1遺構面遺構配置図	64
第47図	SI4～6・焼土1・造成面	65
第48図	SI4・SI4～6出土遺物	66
第49図	SI5・6	67
第50図	SI7～8	68
第51図	SI7・出土遺物	69
第52図	SI8①	70
第53図	SI8②・出土遺物	71
第54図	SI9・出土遺物	73
第55図	SI10	74
第56図	SI10出土遺物	75
第57図	SI11	76
第58図	SI12・出土遺物	77
第59図	SB1①	78
第60図	SB1②	79
第61図	SA1・2	80
第62図	SA3・4	81
第63図	SK5～10	83
第64図	SK7出土遺物	84
第65図	SD3・出土遺物	85
第66図	P40・出土遺物	86
第67図	第2遺構面遺構配置図	87
第68図	SK11・12・SK12出土遺物	88
第69図	SK13～15	89
第70図	SD4	91
第71図	第3遺構面遺構配置図	92
第72図	SD5	93
第73図	遺構に伴わない遺物	94

第5章		第76図	土壤剥片写真……………99
第74図	調査地点の層序および分析層準……96	第77図	主要花粉化石群集の層位分布…… 102
第75図	調査区北壁・南壁断面の堆積状況…98	第78図	植物珪酸体含量…………… 104

挿表目次

第1表	新旧遺構対照表	第4表	花粉分析結果…………… 101
第4章		第5表	植物珪酸体含量…………… 103
第2表	ピット一覧表……………86	第6表	種実分析結果①…………… 106
第3表	ピット一覧表……………91	第7表	種実分析結果②…………… 107

文中写真

第3章		第5章	
写真1	第1遺構面全景……………14	写真5	花粉化石…………… 113
写真2	SD33断面 ……………24	写真6	植物珪酸体…………… 114
写真3	地震痕跡……………24	写真7	大型植物遺体…………… 115
写真4	SD35遺物出土状況 ……………33		

図版目次

坂長第7遺跡		PL.11	SD30出土遺物
PL.1	1. 第1遺構面全景（南東から）	PL.12	SD30出土遺物
	2. 第2遺構面全景（東から）	PL.13	1. SD31出土遺物
PL.2	1. 畦4完掘状況（東から）		2. SD32出土遺物
	2. SD30遺物出土状況（東から）		3. SD33出土遺物
	3. SD30木簡出土状況（W15、西から）	PL.14	SD33・39出土遺物
PL.3	1. 第3遺構面全景（東から）	PL.15	1. SD33出土遺物
	2. 第4遺構面全景（南東から）		2. SD35出土遺物
PL.4	1. SD56堰完掘状況（西から）	PL.16	1. SD35出土遺物
	2. SD56堰検出状況（東から）		2. SD36出土遺物
	3. SD56堅果類出土状況（西から）		3. SD39出土遺物
PL.5	1. A-A'断面全景（西から）		4. SD41出土遺物
	2. A-A'断面近景（北西から）		5. SD47出土遺物
	3. A-A'断面SD33変形状況（北西から）	PL.17	SD36・40～42・45・48～50・54 出土遺物
PL.6	調査区内土層堆積状況（A-A'断面）	PL.18	遺構に伴わない遺物
PL.7	SD30・包含層出土木簡（保存処理前）	PL.19	遺構に伴わない遺物
PL.8	SD30・包含層出土木簡（赤外線写真）	PL.20	遺構に伴わない遺物
PL.9	SD30・包含層出土木簡（保存処理後）	PL.21	遺構に伴わない遺物
PL.10	SD30出土遺物		

- PL.22 遺構に伴わない遺物
 PL.23 遺構に伴わない遺物
 PL.24 SD54・遺構に伴わない遺物
 PL.25 SD33・遺構に伴わない遺物
 PL.26 遺構に伴わない遺物
 PL.27 遺構に伴わない遺物
 坂長第8遺跡
 PL.28 1. 第1遺構面全景（北西から）
 2. 第1遺構面近景（西から）
 PL.29 1. SI4～6完掘状況（東から）
 2. SI7～9完掘状況（西から）
 PL.30 1. SII10完掘状況（北から）
 2. SII11・12完掘状況（北から）
 PL.31 1. SA1完掘状況（南から）
 2. SA2完掘状況（南から）
 3. SA3・4完掘状況（東から）
 4. SD3完掘状況（北から）
 PL.32 1. SK6完掘状況（北西から）
 2. SK7完掘状況（東から）
 3. SK8完掘状況（北西から）
 4. SK9完掘状況（東から）
 5. SK10完掘状況（南西から）
 PL.33 1. 第2遺構面全景（北西から）
 2. SK11完掘状況（東から）
 PL.34 1. SK12完掘状況（北から）
 2. SK13完掘状況（西から）
 3. SK14完掘状況（北から）
 4. SK15完掘状況（西から）
 5. SD4完掘状況（北から）
 PL.35 1. 第3遺構面全景（北西から）
 2. SD5断面（北西から）
 PL.36 1. SI4～6出土遺物
 2. SI8出土遺物
 3. SI9出土遺物
 PL.37 SI8出土遺物
 PL.38 SII10・12出土遺物
 PL.39 1. SII10出土遺物
 2. SK7出土遺物
 3. P40出土遺物
 PL.40 1. SK7・P40出土遺物
 2. SD3出土遺物
 3. 遺構に伴わない遺物

第1表 新旧遺構対照表

坂長第7遺跡

坂長第8遺跡

掲載遺構名	調査時遺構名	掲載遺構名	調査時遺構名	掲載遺構名	調査時遺構名
畦1	No.0002	SI4	No.0080	P27	No.0084
畦2	No.0002	SI5	No.0079	P28	No.0089
畦3	No.0002	SI6	No.0003	P29	No.0028
畦4	No.0004	SI7	No.0002	P30	No.0030
SD30	No.0003	SI8	No.0001	P31	No.0024
SD31	No.0005	SI9	No.0050	P32	No.0056
SD32	No.0001	SII10	No.0004	P33	No.0057
SD33	No.0026	SII11	No.0069	P34	No.0068
SD34	No.0027	SII12	No.0070	P35	No.0055
SD35	No.0024	SB1	No.0009・0014・0015・ 0018・0020・0029・ 0028・0053	P36	No.0054
SD36	No.0019			P37	No.0073
SD37	No.0018			P38	No.0051
SD38	No.0023	SA1	No.0081	P39	No.0066
SD39	No.0014	SA2	No.0019	P40	No.0059
SD40	No.0015	SA3	No.0032	P41	No.0067
SD41	No.0016	SA4	No.0011	P42	No.0036
SD42	No.0017	SK5	No.0085	P43	No.0037
SD43	No.0022	SK6	No.0005	P44	No.0039
SD44	No.0021	SK7	No.0034	P45	No.0040
SD45	No.0007	SK8	No.0006	P46	No.0038
SD46	No.0013	SK9	No.0042	P47	No.0041
SD47	No.0012	SK10	No.0044		
SD48	No.0010	SK11	No.0072		
SD49	No.0011	SK12	No.0074		
SD50	No.0008	SK13	No.0078		
SD51	No.0006	SK14	No.0049		
SD52	—	SK15	No.0076		
SD53	—	SD3	No.0007		
SD54	No.0030	SD4	No.0035		
SD55	—	SD5	No.0071		
SD56	No.0031	P25	No.0091		
SD57	—	P26	No.0092		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

本調査は、平成23年度に一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴い実施した西伯郡伯耆町坂長内の工事予定地に所在する坂長第7遺跡、坂長第8遺跡の発掘調査である。

坂長第7遺跡、坂長第8遺跡周辺の長者原台地上では、長者屋敷遺跡などの相見郡衙に関連する遺構の存在が以前から知られていた。このため道路建設工事に先立ち、鳥取県西部総合事務所長が道路予定地内における埋蔵文化財の有無の照会を行った。これを受け、伯耆町教育委員会は国（文化庁）および県の補助金を受け、平成17年度に試掘調査を実施することとなり、坂長第7遺跡では土坑や縄文時代から古代の遺物、坂長第8遺跡ではピットや弥生時代から古墳時代の遺物が確認され、遺跡の存在が明らかとなった。

上記の結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行ったところ、現状保存は困難であり、記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は、文化財保護法第94条の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出したところ、事前の発掘調査の指示を受けた。このため、平成18年度は工事用仮設道路部分、平成22年度は橋脚部分の発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託し、発掘調査が行われた。残りの部分の発掘調査については、平成23年度に財団法人鳥取県教育文化財団に委託し、調査が行われることとなった。

これを受け、当財団理事長は鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第92条の規定に基づく発掘調査の届出を提出し、当財団調査室岸本調査事務所が調査にあたることとなった。



第1図 調査地位置図

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

坂長第7遺跡は、長者原台地の南側斜面から谷部の水田にかけて、坂長第8遺跡は越敷山からのびる丘陵北側斜面が範囲である。

調査地の基準点及び包含測量については、長者原台地上で発掘調査が行われた相見郡衙に関連するとみられる長者屋敷遺跡や坂長下屋敷遺跡、坂長第6遺跡とグリッドを揃えることでその位置関係を把握することを目的に、これらの遺跡に従って、世界測地系公共座標第V系に載る9m方眼のグリッドを設定し、その名称を付けた。なお、平成18年度に実施した両遺跡の調査区についても同様の設定が試みられたが、誤って日本測地系でグリッド設定がなされたため、今回の調査地や長者屋敷遺跡や坂長第6遺跡と整合せず、すでに刊行された報告書では間違ったグリッド名が掲載されている（本報告書では訂正したグリッド名で掲載している）。

調査区内に堆積する客土および表土は、重機によって掘削を行い、その他の包含層の掘削や遺構の掘削は人力によって行った。人力掘削によって生じた廃土は、ベルトコンベアーによって調査区外まで運搬し、そこから重機を用いて仮置き処理をした。

検出した遺構や遺物の記録は、光波トランシットおよび電子平板、自動レベル等を用いた簡易遣り方測量や光波トランシットによる座標測量、写真測量によって行った。現地での写真撮影は35mm判カメラやブローニー（6×7）判カメラ、デジタルカメラを使用し、地上または写真用組み立て足場、高所作業車によって行った。

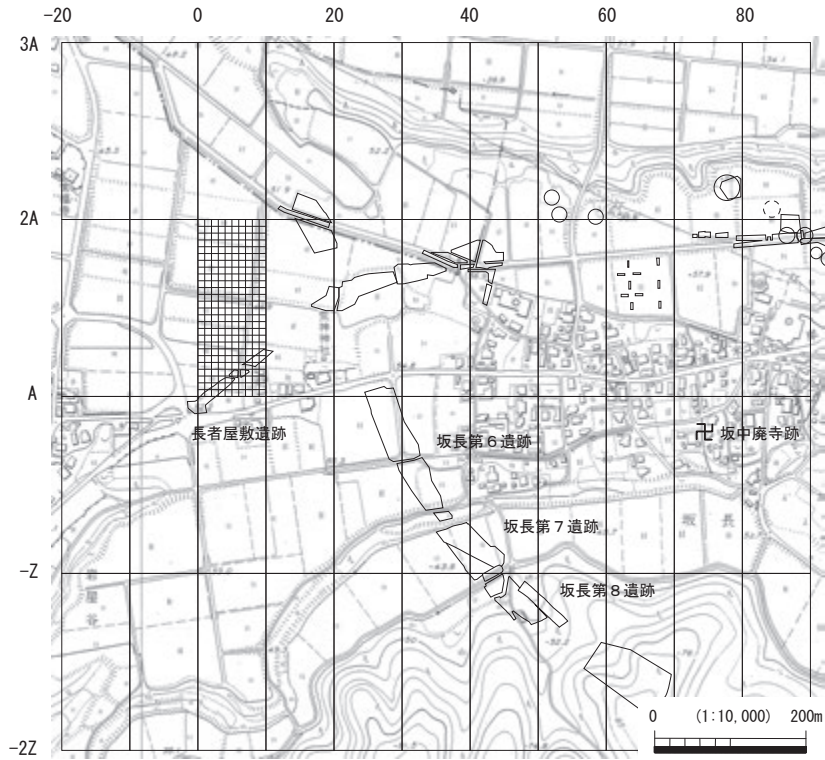
2. 調査の経過

坂長第7遺跡

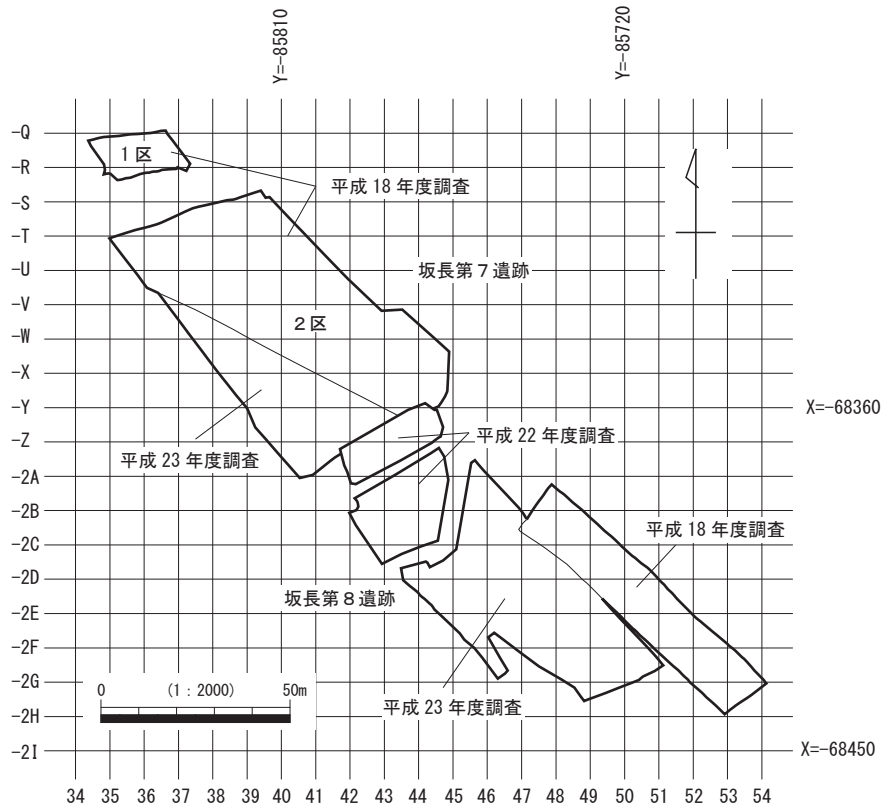
坂長第7遺跡の調査は、8月17日から重機による表土掘削を行い、31日から坂長第8遺跡の調査と並行しつつ、人力による掘削を開始した。第1遺構面では10月1日に近世の水田跡を確認し、12日に写真撮影等の記録作業が終了した。その後すぐに第2遺構面の調査に取り掛かり、19日には古代の溝2条（SD30・31）、20日には水田に伴う畦の痕跡（畦4）を確認した。このうち、SD30からは「河村郡合定貳仟柒百参拾陸束 久米郡定五千壹佰壹拾陸束 相見郡合定五千陸拾貳束 合三郡定税員一万二千九百十四束」と記された木簡（W15）が出土した。27日には第2遺構面の調査が概ね終了し、第3遺構面の調査を開始した。11月1日には19条の溝や自然流路を確認し、9日にはそれらの遺構掘削や記録作業が概ね終了した。その後すぐ第4遺構面の調査に着手した。16日から遺構掘削を行い、30日には遺構掘削や記録作業等、現地での作業が全て終了した。

坂長第8遺跡

坂長第8遺跡の調査は、5月24日から重機による表土掘削を開始し、6月6日から人力による掘削に取り掛かった。22日には竪穴建物（SI4～12）を検出し、7月29日には第1遺構面の調査が概ね終了した。8月1日から第2遺構面の調査に着手し、8日には土坑（SK11）、溝（SD4）を検出した。17日からは遺構検出と並行し遺構の掘削を行った。25日には第2遺構面の調査がほぼ終了し、第3遺構面の調査に着手した。10月28日には遺構掘削や記録作業を終え、現地での作業が終了した。



第2図 調査地グリッド図



第3図 坂長第7遺跡、坂長第8遺跡グリッド図

第3節 調査体制

坂長第7遺跡、坂長第8遺跡の発掘調査および報告書作成は以下の体制で行った。

平成23年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上 善弘

事務局長 漆原 貞夫

事務職員 岡田美津子

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室長 松井 潔（鳥取県教育委員会 派遣）

次長 石本 富正

事務職員 福田早由里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所長 國田 俊雄

主任文化財主事 野口 良也（鳥取県教育委員会 派遣）

文化財主事 玉木 秀幸（鳥取県教育委員会 派遣）

平成24年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上 善弘

事務局長 漆原 貞夫

事務職員 岡田美津子

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室長 松井 潔（鳥取県教育委員会 派遣）

次長 石本 富正（平成24年5月まで）

中川 眞一（平成24年6月から）

事務職員 福田早由里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所長 國田 俊雄

副主幹 玉木 秀幸（文化財主事 鳥取県教育委員会 派遣）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

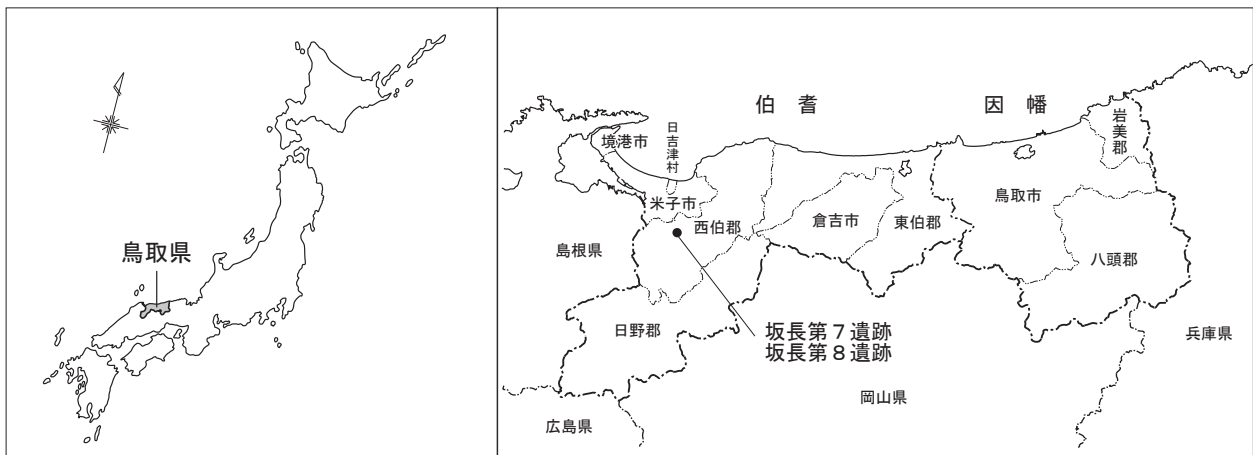
坂長第7遺跡、坂長第8遺跡は、鳥取県西部の西伯郡伯耆町坂長に所在する。

周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、今回調査した遺跡が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

さて、坂長第7遺跡、坂長第8遺跡であるが、越敷山から派生する丘陵と越敷山の北側に広がる長者原台地に挟まれた谷部に位置する。この長者原台地には相見郡衙との関連が窺われる遺跡をはじめ多くの遺跡が分布している。

第2節 歴史的環境

旧石器時代 この時代のものとして確認されている遺跡は少ない。長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、石刃を二側縁加工した珪岩製のナイフ形石器がローム層中から2点出土しているほか、坂長村上遺跡（50）から黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。泉中峰遺跡（79）や小波原畑遺跡（80）においてもナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はま



第4図 遺跡位置図

だない。

縄文時代 草創期においても確認されている遺跡は少ない。坂長村上遺跡から多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする石器群が出土したほか、貝田原遺跡(61)や奈喜良遺跡(20)などで、ヌカイト製有茎尖頭器がみついている。早期後半になると、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られるようになり、このうち上福万遺跡(73)では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成されるようになり、目久美遺跡(8)や陰田第9遺跡(9)では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期では、新たに出現する遺跡は少ないが、後期になると再び増加するようである。晩期には、古市河原田遺跡(12)をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多くみついている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が確認されており、妻木晩田遺跡(83)で963基、青木遺跡(22)で228基、越敷山遺跡群(45)で341基を数える。年代の判明したものでは、後晩期の例が多い。

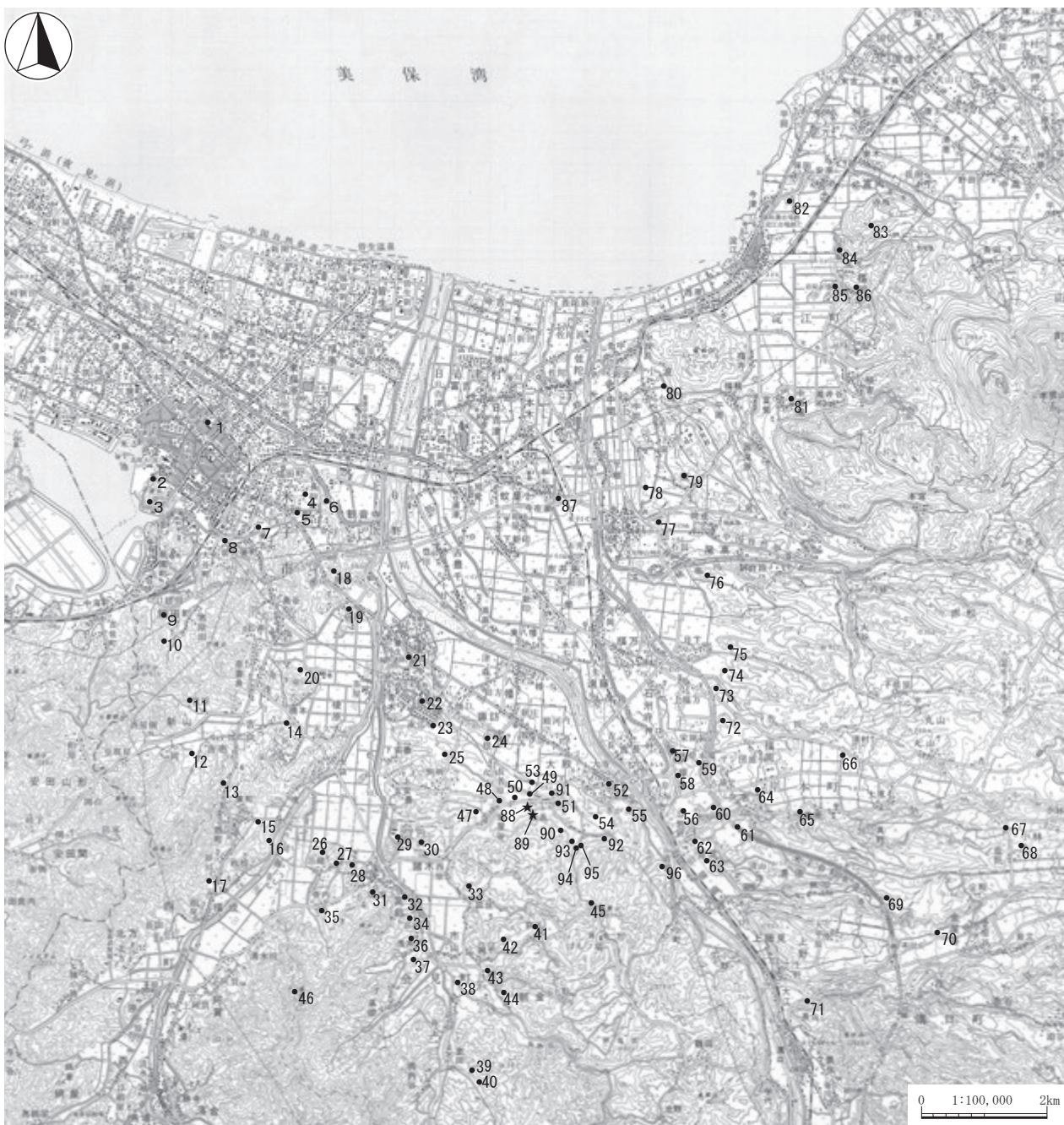
弥生時代 前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡(8)や長砂第2遺跡(4)などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡(28)や諸木遺跡(29)では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡(17)の環壕は、その内部に竪穴建物などが認められない点で注目される。

中期後葉以降になると遺跡数が増加し、丘陵上には妻木晩田遺跡(83)、青木遺跡(22)、福市遺跡(21)など大規模な拠点集落が出現する。越敷山遺跡群(45)は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区、仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下1号墓(75)は中期の木棺墓群に、尾高浅山1号墓(76)はほぼ同時期の環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

古墳時代 前期の主要な古墳には、三角縁神獸鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺1・2号墳(35)、方墳で6基の埋葬施設をもつ日原6号墳(19)がある。この頃の古墳は、墳丘規模20m前後の比較的小さなものが多い。中期古墳については、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳(26)が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。そのほかには画文帯神獸鏡が出土した浅井11号墳(36)、宮前3号墳(32)といった小型の前方後円墳が築造されている。後期になると、古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群(53)などが形成される。なお、後期の古墳の中には、吉定1号墳(63)の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像5号墳(18)の横穴式箱式棺などのように、九州地方との関連性を窺わせるものがある。終末期になると、陰田横穴墓群(9)や日下横穴墓群(75)などの横穴墓が造営されるようになる。

集落遺跡については、主に台地上や丘陵上に分布しており、福市遺跡(21)や青木遺跡(22)のように、弥生時代後期から継続して営まれたものがみられるほか、坂長第8遺跡(89)や坂長尻田平遺跡(95)のように中期から集落が形成されるものもある。

古代 白鳳期になると、大寺廃寺(52)が創建される。大寺廃寺は、東向きの法起寺式伽藍配置をとる寺院であり、金堂の瓦積基壇と三段舍利孔を持つ塔心礎のほか、全国的に数少ない石製鴟尾が確認されている。この寺院に使用された瓦については、創建時のものと同一文様の瓦が金田瓦窯(39)から出土したようであり、そこで焼かれた可能性がある。この他、長者原台地上には坂中廃寺(51)



1 錦町第1遺跡	17 清水谷遺跡	33 田住古墳群	49 坂長下屋敷遺跡	65 番原遺跡群	81 井手勝遺跡
2 久米第1遺跡	18 東宗像古墳群	34 宮前遺跡	50 坂長村上遺跡	66 須村遺跡	82 今津岸の上遺跡
3 米子城	19 日原古墳群	35 普段寺1号墳	51 坂中廢寺	67 真野ブナ遺跡	83 妻木晩田遺跡
4 長砂第1・2遺跡	20 奈喜良遺跡	36 浅井11号墳	52 大寺廢寺	68 藍野遺跡	84 晩田遺跡
5 長砂第3遺跡	21 福市遺跡	37 浅井土居敷遺跡	53 長者原古墳群	69 林ヶ原遺跡	85 向山古墳群
6 水道山古墳	22 青木遺跡	38 天王原遺跡	54 坂中第5遺跡	70 下山南遺跡	86 上淀廢寺跡
7 池ノ内遺跡	23 樋ノ口第4遺跡	39 金田瓦窯	55 岸本大成遺跡	71 長山馬籠遺跡	87 今在家下井ノ原遺跡
8 目久美遺跡	24 諏訪西山ノ後遺跡	40 両部太郎窯	56 岸本古墳群	72 石州府古墳群	88 坂長第7遺跡
9 陰田遺跡群	25 別所新田遺跡	41 荻名遺跡群	57 岸本遺跡	73 上福万遺跡	89 坂長第8遺跡
10 奥陰田遺跡群	26 三崎殿山古墳	42 田住松尾平遺跡	58 岸本要害跡	74 日下寺山遺跡	90 坂長下門前遺跡
11 新山遺跡群	27 天萬土居前遺跡	43 朝金古墳群	59 岸本下の原遺跡	75 日下古墳群	91 大殿狐谷遺跡
12 古市遺跡群	28 宮尾遺跡	44 朝金小チャ遺跡	60 久古第3遺跡	76 尾高浅山遺跡	92 坂長前田遺跡
13 吉谷遺跡群	29 諸木遺跡	45 越敷山遺跡群	61 貝田原遺跡	77 尾高城	93 坂長武寿羅遺跡
14 橋本遺跡群	30 後埜山古墳	46 手間要害跡	62 口別所古墳群	78 尾高御建山遺跡	94 坂長ブジラ遺跡
15 福成石佛前遺跡	31 天万遺跡	47 荒神上遺跡	63 吉定1号墳	79 泉中峰・前田遺跡	95 坂長尻田平遺跡
16 福成早里遺跡	32 宮前3号墳	48 長者屋敷遺跡	64 久古北田山遺跡	80 小波原畑遺跡	96 金廻家ノ上ノ内遺跡

第5図 周辺遺跡分布図

があり、塔心礎が残り、奈良末から平安初め頃の瓦が散布するものの、伽藍配置等は明らかでない。

ところでこの周辺地域は、『和名類聚抄』によると伯耆国相見郡に編成されている。このうち長者原台地上には相見郡衙が存在していたとみられ、長者屋敷遺跡（48）や坂長第6遺跡（92）などのように郡衙に伴う施設と考えられる大型の掘立柱建物跡が確認されているほか、坂長村上遺跡（50）や坂長第7遺跡（88）から円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土している。さらに北方の台地上では諏訪西山ノ後遺跡（24）で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺、樋ノ口第4遺跡（23）で石帯が出土している。

古代山陰道については、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通して、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されているが、発掘調査による明確な遺構の確認にはいたっていない。

中世 平安時代になると各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡荘に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承があり、坂長前田遺跡（92）では平安時代末期から鎌倉時代の甲冑に用いられた小札が出土している。

南北朝時代になると、大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり、名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄8年（1565）に、杉原盛重に焼き討ちされている。坂中地区の旦那寺である普門寺は、もとはこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80）、尾高城（77）、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。坂長熊谷遺跡上方の字岩コゴロにも坂中丹波なる人物の陣屋があったという伝承が残る。坂中の賀茂神社の棟札には慶長4年（1599）に坂中九兵衛が建立したことが記されていて、その古宮跡は字熊谷にあるという。

近世 西伯耆は、吉川広家、中村一忠、加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年（1617）に、因幡、伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永9年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年（1869）まで荒尾氏による鳥取藩独特の自分手政治が行われた。

坂長村は、明治11年（1878）に坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか2戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和4年（1618）から数回の中断を経ながら約250年にわたり、文久元年（1861）にようやく完成をみた。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田や畑地となり、現在にいたっている。

参考文献

地質調査所 1962『5万分の1地質図幅説明書 米子』（岡山一第18号）

山名巖 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』

岸本町 1983『岸本町誌』

会見町 1996『会見町誌 続編』

米子市 2003『新修 米子市史』

第3章 坂長第7遺跡の調査成果

第1節 調査の概要と層序

1. 調査の概要

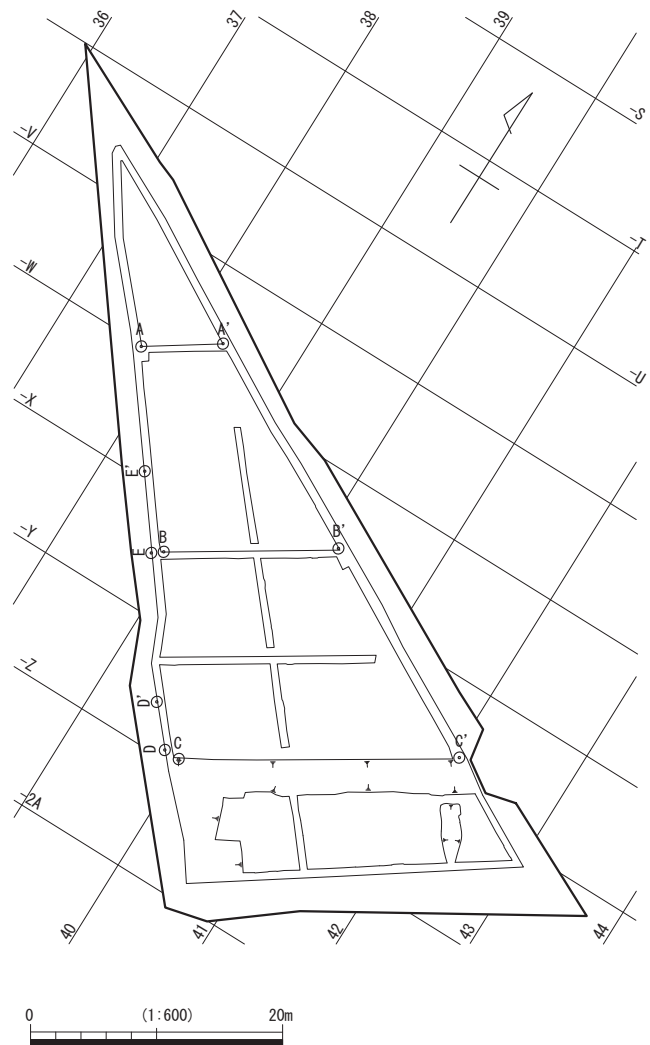
坂長第7遺跡は標高約55mの長者原台地と標高226mの越敷山から北へとのびる丘陵に挟まれた谷部に位置する。遺跡のすぐ北側の長者原台地上では相見郡衙との関連性がうかがわれる8世紀代の掘立柱建物や鍛冶関連の遺構が確認された坂長第6遺跡、南側の丘陵では古墳時代中期後葉頃の竪穴建物が確認された坂長第8遺跡がある。

平成18年度には北側部分の調査が行われており、この時には長者原台地の南側斜面を1区、谷部を2区として調査を行っている。1区では8世紀前半頃の段状遺構が確認され、2区では調査区内の堆積物を基本層序Ⅰ～Ⅳ層の4つに大別し、Ⅲ層上面（第1遺構面）とⅣ層上面（第2遺構面）において遺構を確認しており、第1遺構面では古代の溝状遺構や性格不明遺構、第2遺構面では弥生時代中期前葉から古墳時代前期前葉頃と考えられる溝状遺構、掘立柱建物、土坑、ピットを確認している。

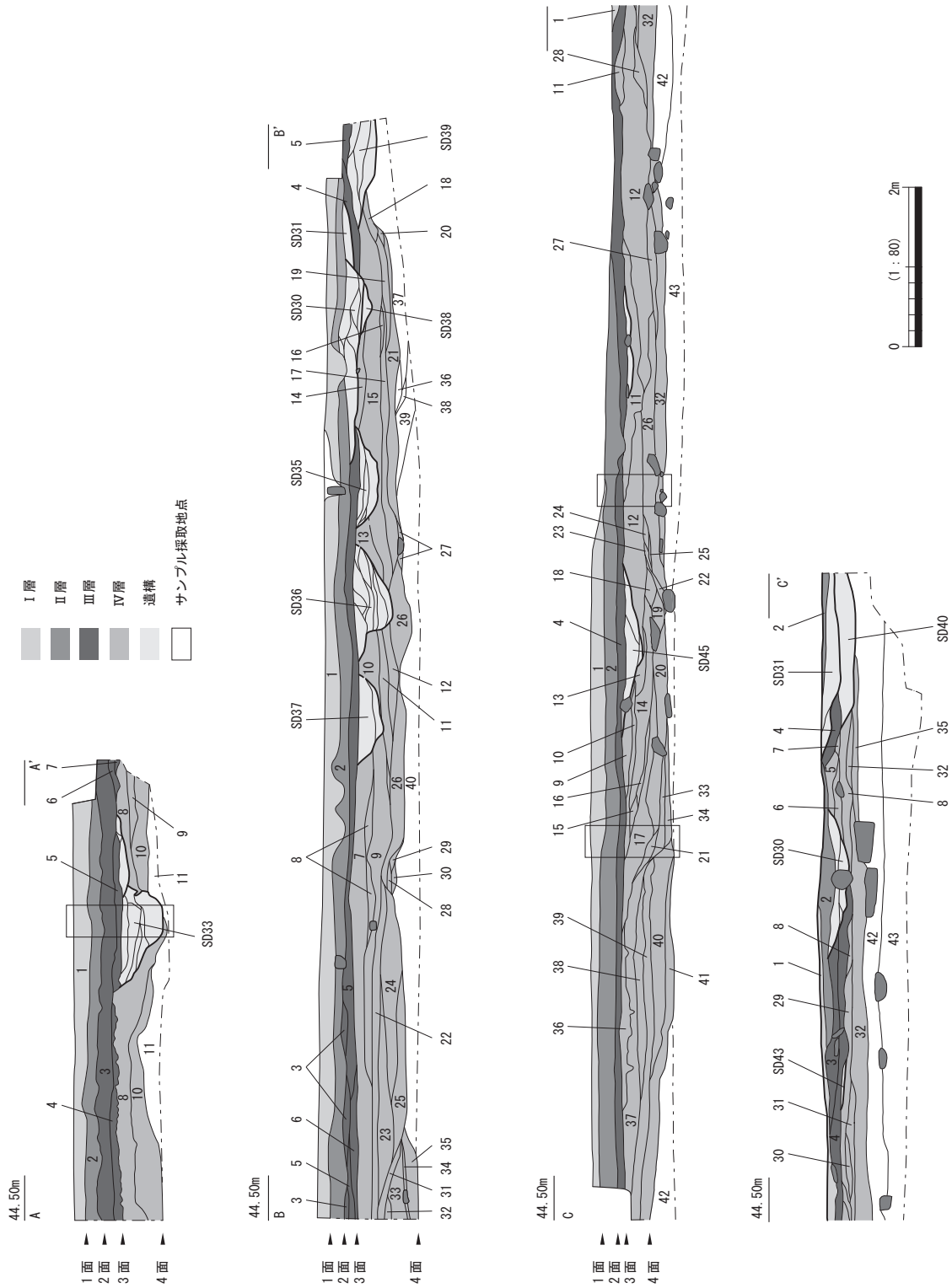
今回の調査では、前回の調査との整合を図るため層序の確認を行ったが、Ⅲ層に分類された層序を確認することができず、かわってⅡ層とⅣ層の間において黒褐色を呈するシルトや砂質土、粘質土を確認した。これらは調査区全体にわたり堆積していることから、Ⅲ層として調査を行うこととした。このため、Ⅲ層の取り扱いについては前回の調査と異なっている。

調査の結果、Ⅱ層上面、Ⅲ層上面、Ⅳ層上面、地山上面において遺構を確認した。なお、調査ではⅡ層上面を第1遺構面、Ⅲ層上面を第2遺構面、Ⅳ層上面を第3遺構面、地山上面を第4遺構面としたため、以後、これを踏襲し報告する。

さて、第1遺構面では近世と考えられる水田の畦の基底部を確認した。つづく第2遺構面では中世の水田に伴う畦の基



第6図 調査区土層断面位置図



第7図 土層断面図①

底部、古代から中世前期の溝や自然流路、第3遺構面では古墳時代前期から古代の溝や自然流路、第4遺構面では縄文時代から弥生時代の自然流路を確認した。

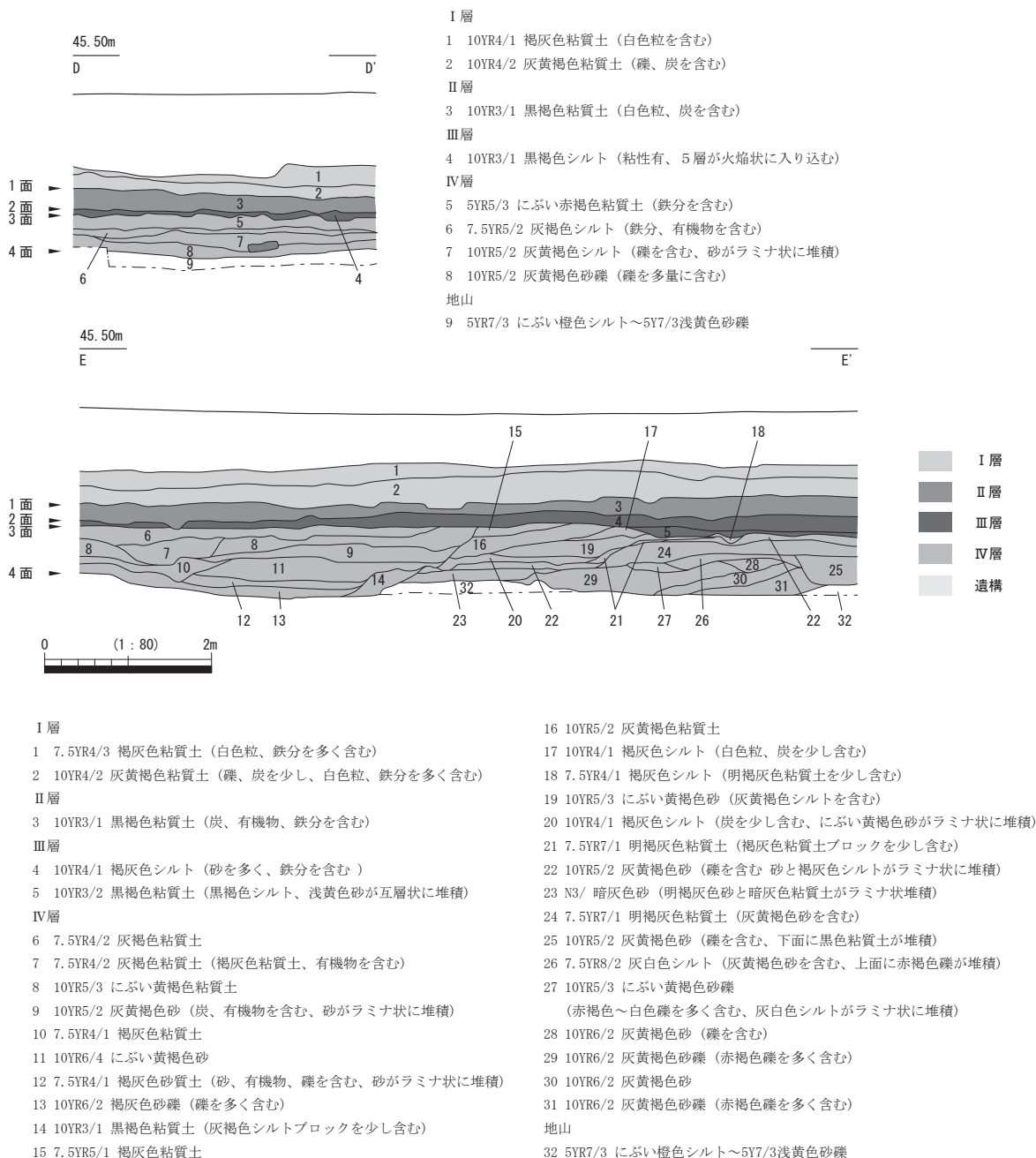
出土遺物については、縄文時代から近世までの土器、陶磁器、木製品、鉄製品、石器が出土しているが、注目すべきものとして、第2遺構面のSD30から出土した木簡（W15）があげられる。W15は、

A-A' 断面	20 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト	14 10YR4/2 灰黄褐色砂 (礫を多く含む)
I層	21 10YR4/1 褐灰色砂礫 (赤褐色、黄色礫を多く含む)	15 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性有)
II層	22 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性有、礫、炭、有機物を含む、砂がラミナ状に堆積)	16 10YR5/2 灰黄褐色砂 (粘性有)
III層	23 7.5YR4/1 黒褐色粘質土 (白色粒を少し含む)	17 10R4/2 暗赤灰色粘質土
	24 10YR3/2 黒褐色粘質土 (上面に灰白色砂が部分的に薄く堆積、白色粒を少し含む)	18 5YR4/1 褐灰色シルト
	4 10YR3/1 黒褐色粘質土 (白色粒を少し含む)	19 7.5YR4/2 灰褐色シルト (砂を多く含む)
	5 10YR3/1 黒褐色粘質土 (白色粒を少し含む)	20 10YR5/2 灰黄褐色砂 (礫を含む)
	6 10YR3/1 黒褐色粘質土 (白色粒を少し含む)	21 10R4/1 暗赤灰色砂質土 (にぶい橙褐色シルトを少し含む)
IV層	7 10YR5/2 灰黄褐色シルト	22 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
	8 7.5YR7/3 にぶい橙褐色粘質土	23 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
	9 10YR7/3 にぶい黄褐色砂 (礫を含む)	24 10YR4/1 褐灰色シルト
地山	10 7.5YR7/2 明褐色シルト (粘性有)	25 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
	11 7.5YR7/3 にぶい橙褐色砂礫 (赤褐色、明黄褐色、灰白色礫を多く含む)	26 5YR4/1 暗青灰粘質土
B-B' 断面		27 5YR4/1 褐灰色粘質土
I層	1 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (白色粒、鉄分を多く含む)	28 10YR5/2 灰黄褐色シルト (炭を含む)
II層	2 10YR3/1 黒褐色粘質土 (白色粒を少し含む)	29 7.5YR4/1 灰褐色粘質土 (鉄分を含む)
III層	3 10YR4/2 灰黄褐色砂	30 7.5YR6/4 にぶい橙褐色粘質土
	4 10YR3/1 黒褐色シルト (炭を少し含む)	31 7.5YR6/2 灰褐色シルト (白色粒、鉄分、炭を含む)
	5 10YR3/2 黒褐色粘質土	32 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (礫を多く含む)
IV層	(上面に灰白色砂が堆積、白色粒を少し、鉄分を含む)	33 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (炭を少し含む)
	6 5YR2/1 青黒色粘質土 (白色粒を含む)	34 7.5YR4/1 褐灰色砂礫 (礫を多く含む)
	7 10YR4/1 褐灰色シルト (炭、白色粒を多く含む)	35 5YR7/3 にぶい橙褐色粘質土 (明黄褐色、暗褐色礫を多く含む)
	8 10YR4/2 灰黄褐色細砂 (礫を含む)	36 10R4/1 暗赤灰色粘質土
	9 10YR4/1 褐灰色粘質土 (下層に礫を含む)	37 5YR6/4 にぶい橙褐色粘質土 (鉄分を多く含む)
	10 10YR5/2 灰黄褐色シルト (灰色粒を多く含む)	38 5YR6/2 灰褐色シルト (鉄分を含む)
	11 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (礫を含む)	39 7.5YR4/2 灰褐色砂 (赤色、淡黄色礫、鉄分を含む)
	12 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 (上面に砂が薄く堆積)	40 5YR7/3 にぶい橙褐色粘質土 (鉄分を含む)
	13 7.5YR4/1 褐灰色粘質土	41 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫 (赤色、青灰色礫を含む)
	14 7.5YR4/2 灰褐色粘質土	地山
	15 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土 (鉄分を少し含む)	42 5YR7/8 にぶい橙褐色シルト (暗黄褐色、明褐色礫を多く含む)
	16 7.5YR5/2 灰褐色シルト	43 5Y7/3 浅黄色砂礫 (青灰色粘質土を少し含む)
	17 7.5YR4/1 褐灰色粘質土	
	18 10YR4/2 灰黄褐色シルト (礫を多く含む)	
	19 10YR4/1 褐灰色粘質土 (有機物、炭を含む)	
C-C' 断面		
I層	1 5YR4/1 褐灰色粘質土 (白色、黄色、褐色砂粒を多く、マンガンを少し、鉄分を含む)	
II層	2 N3/1 暗灰色粘質土 (白色粒、明黄色、橙色礫を少し含む)	
III層	3 10YR4/1 灰褐色シルト (炭化物を少し含む)	
IV層	4 10YR3/1 黒褐色砂質土 (白色を多く含む)	
	5 7.5YR4/1 褐灰色シルト (炭を含む)	
	6 10YR4/1 褐灰色粘質土 (礫を含む)	
	7 7.5YR4/1 褐灰色粘質土	
	8 7.5YR4/1 褐灰色シルト (粘性有、鉄分を含む)	
	9 10YR6/2 灰黄褐色砂 (礫を多く含む)	
	10 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性有、炭を多く含む)	
	11 10YR4/1 暗赤灰色砂質土	
	12 5YR6/4 にぶい橙褐色粘質土 (鉄分を含む)	
	13 10YR5/2 灰黄褐色砂	

表面に「河村郡合定貳仟柒佰参拾陸束 久米郡定五千壹百壹拾陸束 相見郡合定伍千陸拾貳束 合三郡定税員一万二千九百十四束」と記されており、伯耆国内における正税に関する木簡とみられる。

2. 層序

調査区内の層序については、先にも述べたとおり、平成18年度の調査を概ね踏襲し、I～IV層に分



第8図 土層断面図②

類して調査を行っている。ただし、Ⅲ層の取り扱いについては、前回の調査とは異なっており、今回の調査では、主に黒褐色を呈する砂粒を含むシルトや砂質土、粘質土をⅢ層としている。各層の詳細については以下に示す。なお、各層の堆積状況については、写真およびX線写真を巻末に掲載しているのでそちらも参照されたい (PL.6)。

I層

近世までの遺物を含む。調査区全体にわたり20～44cm堆積する。

色調は褐灰色や灰黄褐色を呈し、粘性に富む。人為的に攪拌されており、鉄分を含む。前回の調査

で実施した土壌分析では、イネの植物珪酸体が多く検出されている。なお、今回の調査では、第2遺構面において本層に伴う水田の畦の基底部が確認されている。このためI層は近世の水田に伴う耕作土と考えられる。

II層

中世までの遺物を含む。上面は第1遺構面の遺構検出面である。調査区全体に堆積し、その厚さは20cmほどである。平成18年度の調査では、II-1～3の3層に細分されているが、今回の調査では1つの層として取り扱った。

色調は黒褐色から暗灰色を呈する。I層と同様、人為的に攪拌されており、粘性が強い。この層の中には、イネの植物珪酸体が多く含まれる。第3遺構面では、本層に伴う水田の畦の基底部が確認されており、II層は中世の水田に伴う耕作土と考えられる。なお、この層は地震による流動変形が認められる（第5章参照）。

III層

古代までの遺物を含む。上面は第2遺構面の遺構検出面である。調査区全体に認められ、その厚さは6～23cmを測る。平成18年度の調査では確認されていないことから、北側には堆積していないと思われる。

色調は黒褐色、褐灰色、灰黄褐色を呈する。II層に比べ砂粒を多く含むことが特徴であり、氾濫堆積物と考えられる。種実同定や花粉分析では、水生植物や湿生植物が確認されており、本層は氾濫堆積物が時折流入する湿地のような状況で堆積したと考えられる。なお、II層と同様、III層もまた地震による火焰状の流動変形が認められる（第5章参照）。

IV層

縄文時代から弥生時代の遺物を含む。上面は第3遺構面の遺構検出面である。調査区全体に堆積し、その厚さは25～82cmを測る。平成18年度の調査では、遺物が出土しなかったことから地山として取り扱われており、調査は行われていない。

色調はにぶい橙色、灰褐色、褐灰色、黒褐色など多彩である。堆積物は、礫、砂、シルト、粘質土と様々であり、概ね下に凸の堆積を示し、流路による堆積物とみられる。このため、包含層として調査を行っているが、その大半が第4遺構面で確認した自然流路の埋土と考えられる。なお、この上面においても、地震による流動変形が認められる（第5章参照）。

地山

無遺物層であり、上面は第4遺構面の遺構検出面である。色調はにぶい橙色や浅黄色を呈し、シルトや砂礫からなる。上層には赤褐色や明黄褐色の礫、下層には粘質土が認められる。

この他、I層上面には圃場整備に伴う造成土が60～98cmと厚く堆積する。

第2節 第1遺構面の調査

第1遺構面の調査は、Ⅱ層上面で行った。Ⅱ層上面は、平成18年度の調査で遺構検出が試みられているが、遺構は確認されていない。なお、Ⅰ層はプラントオパールが多く含まれており、Ⅱ層は土壌が攪拌されていることから、中世以降、水田耕作が行われていた可能性が指摘されている。

調査の結果、調査区南側において畦1～3を確認した。これらの畦は畦2を中心に繋がっており、その状況から水田に伴うものと思われる。ただし、これらはⅠ層とⅡ層の間において砂層の堆積が認められず、洪水砂によってパックされたものとは考えにくく、Ⅱ層を耕作土とした水田の畦というよりも、Ⅰ層を耕作土としていた水田の畦の基底部（耕作痕跡）と思われる。なお、出土遺物についてみると、検出面から中世後期のものが出土していること、Ⅰ層中から近世の遺物が出土していることから、これらの畦は中世後期以降、概ね近世において形成されたと考えられる。

畦1（第9・10図、PL.1）

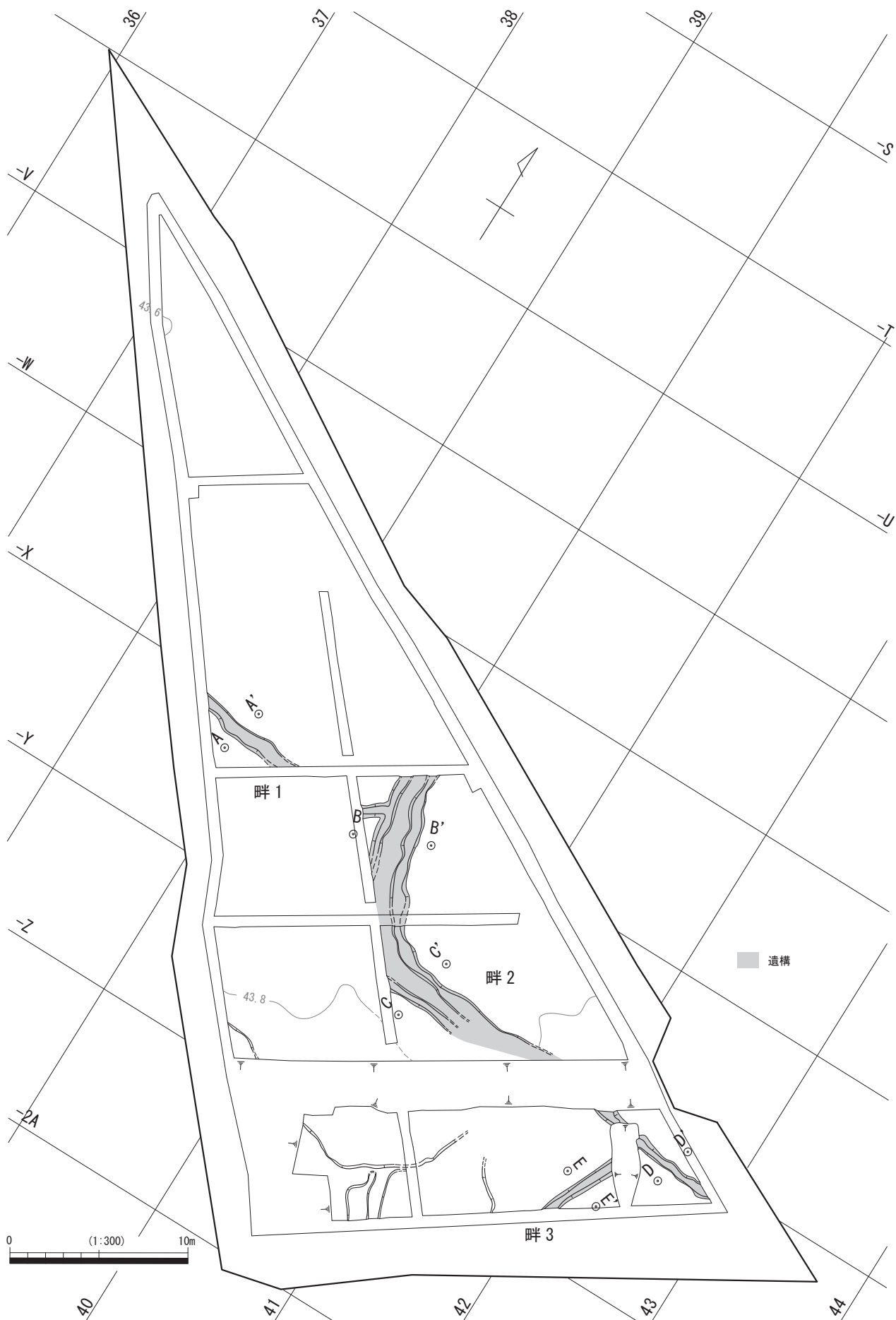
調査区中央において検出した。畦2の北側において、西側へと分岐する。途中で途切れるが、概ね東西方向にのびる。規模は、検出長10.20m、幅0.90m、高さ0.04mであり、断面形は、やや角のとれた台形を呈する。

畦2（第9・10図、PL.1）

調査区南東側において検出した。畦の中心付近において、東西方向から南北方向へと「L」字形に屈曲する。検出長は東西22.50m、南北12.00mであり、幅は東西が2.33m、南北が0.33mと南北が広く、高さは0.05mを測る。断面形は概ね台形を呈するが、北側では畦の中心が皿状に窪む。

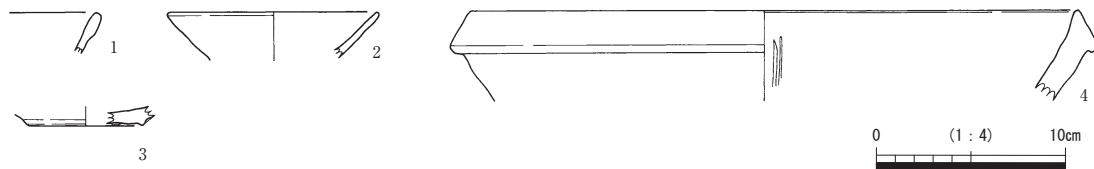
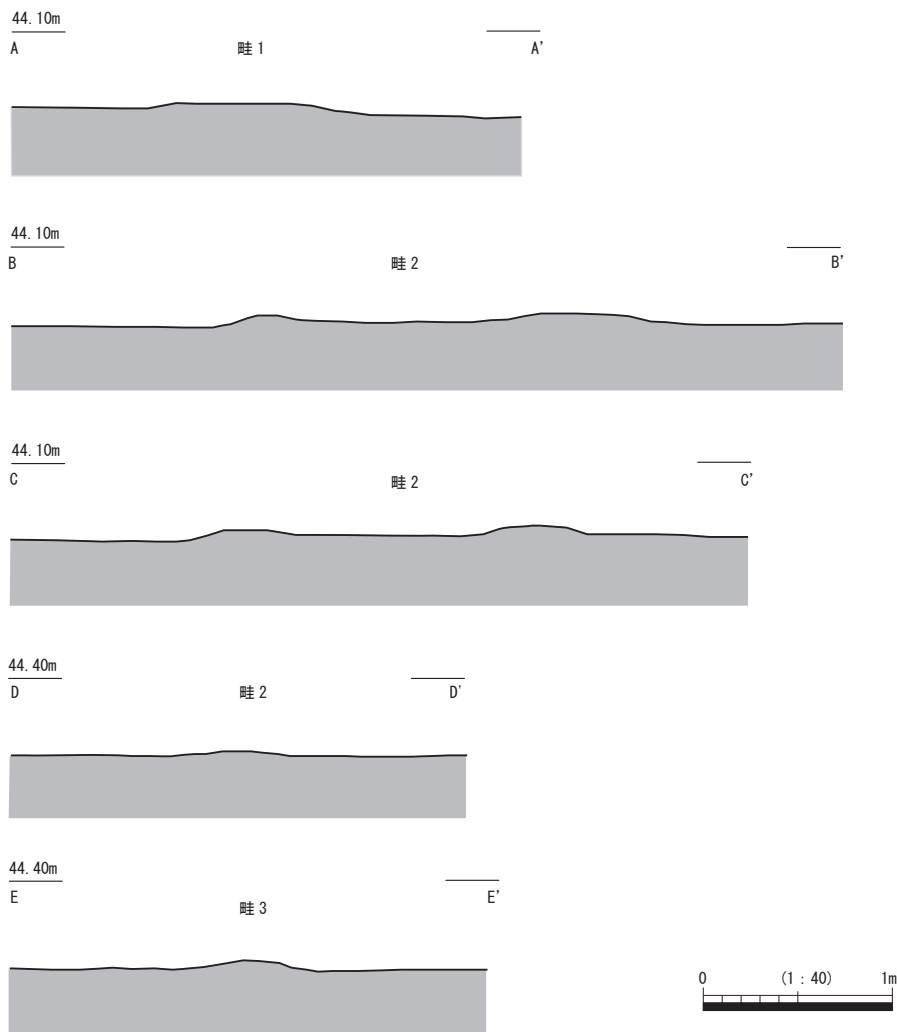


写真1 第1遺構面全景



第9図 第1遺構面遺構配置図

第3章 坂長第7遺跡の調査成果



第10図 哇1～3・出土遺物

第10図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
1	水田1	I層	碗	—	△24	—	内外面：ナデ	オリーブ灰色	青磁
2	水田1	I層	碗	※10.9	△24	—	内外面：ナデ	灰オリーブ色	陶器
3	水田1	I層	皿	—	△1.0	※6.0	内外面：ナデ	灰オリーブ色	瀬戸美濃
4	水田1	I層	播鉢	※33.0	△4.7	—	外面：ナデ、内面：ナデ、スリメ	にぶい赤褐色	備前

哇3 (第9・10図、PL.1)

調査区南東側において検出した。やや東へと傾くものの、概ね南北方向にのびる。北側は哇2とほぼ直角に交わる。規模は、検出長6.20m、幅0.42m、高さ0.04mであり、断面形はやや丸味を帯びた台形を呈する。

出土遺物（第10図）

ここでは畦1～3の検出時に出土した遺物を図示した。1は青磁の碗であり、1は端部が肥厚し、外面に段がみられる。2は陶器の碗であり、灰色の素地にオリブ灰色の釉薬がかかる。3は瀬戸美濃の皿であり、高台が付く。4は備前焼の播鉢であり、IV A期とみられる。これらは中世から近世頃のものと考えられる。

第3節 第2遺構面の調査

第2遺構面はⅢ層上面で調査を行った。Ⅲ層上面は、平成18年度に行われた調査の第1遺構面と対応する。なお、前回の調査では、奈良時代から平安時代と考えられる溝9条、性格不明遺構3基が確認されているほか、坂長第6遺跡との境にあたる長者原台地の南斜面では、8世紀前半頃とみられる段状遺構が1基確認されている。

調査の結果、調査区北側において畦4、南側を中心としSD30～32を確認した。畦4は、両脇に畦をつくる際に掘削したとみられる溝を伴うことから、Ⅱ層を耕作土とした水田の畦の基底部と考えられる。SD30～32については、出土遺物や切り合い関係から、SD31→SD30→SD32の順に形成されたと考えられる。これらの溝は、埋土の状況から概ね自然流路と判断されるが、SD30については人為的に掘削された溝の可能性がある。

出土遺物については、SD30、SD31が8世紀後半頃、SD32が11世紀頃の土器や木製品が出土した。このうちSD30から出土した木簡（W15・16）、なかでもW15については、表面に「河村郡合定貳仟柒佰参拾陸束 久米郡定五千壹百壹拾陸束 相見郡合定伍千陸拾貳束 合三郡定税員一万二千九百十四束」と記されており、伯耆国内における正税に関する木簡として注目される。

畦4（第11・12図、PL.2）

調査区北側にあり、Ⅱ層掘削中に確認した。概ね東西方向にのびており、西側においてやや南側に屈曲する。規模は検出長1.00m、幅1.20m、高さ0.10mであり、断面形は角のとれた台形を呈する。畦の稜脇には浅い溝が認められ、その規模は東側が幅0.69m、深さ0.10m、西側が幅0.93m、深さ0.04mを測り、底面には凹凸が顕著に認められる。

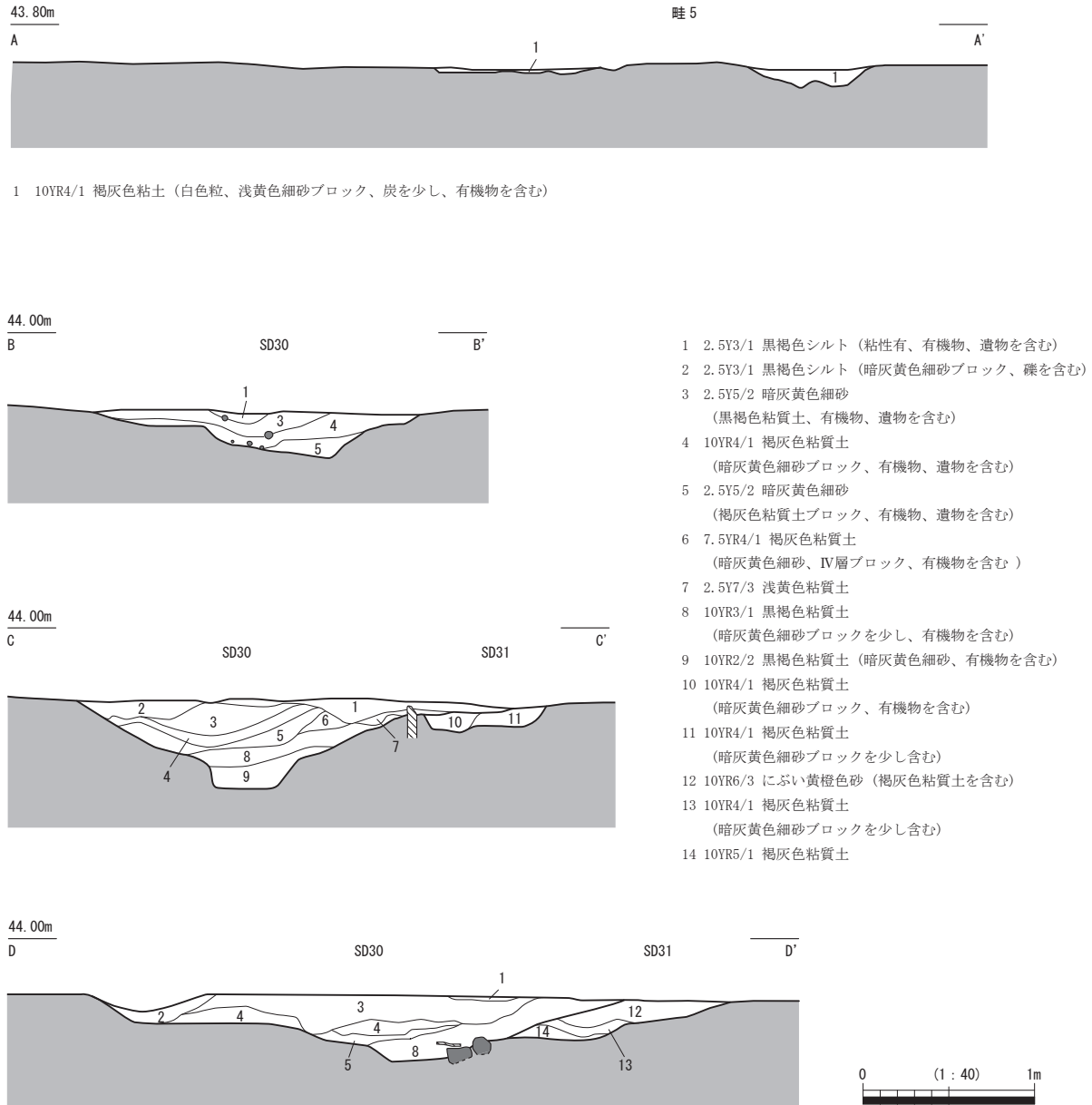
この畦の性格についてであるが、両脇にある浅い溝は、底面において凹凸が顕著に認められ、鍬や鋤などの掘削の痕跡と考えられることから、Ⅱ層を耕作土とした水田の畦の基底部と思われる。この時期については、第2遺構面の中で最も新しい遺構であるSD32の年代が11世紀頃、Ⅱ層の年代が出土遺物から15世紀頃と考えられることから、11世紀から15世紀の間のいずれかの時期に形成されたものと思われる。

SD30（第11～15図、PL.1・2・7～12）

調査区東側にあり、南東から北西方向にかけて弧を描くようにしてのびる。SD31と重複しており、これを切ることから本遺構が新しい。規模は検出長38.00m、幅1.86～3.12mを測り、深さは北側（B-B'）で0.28mとやや浅く、中央付近（C-C'、D-D'）では0.40～0.52mとやや深い。断面形は中段付近に段



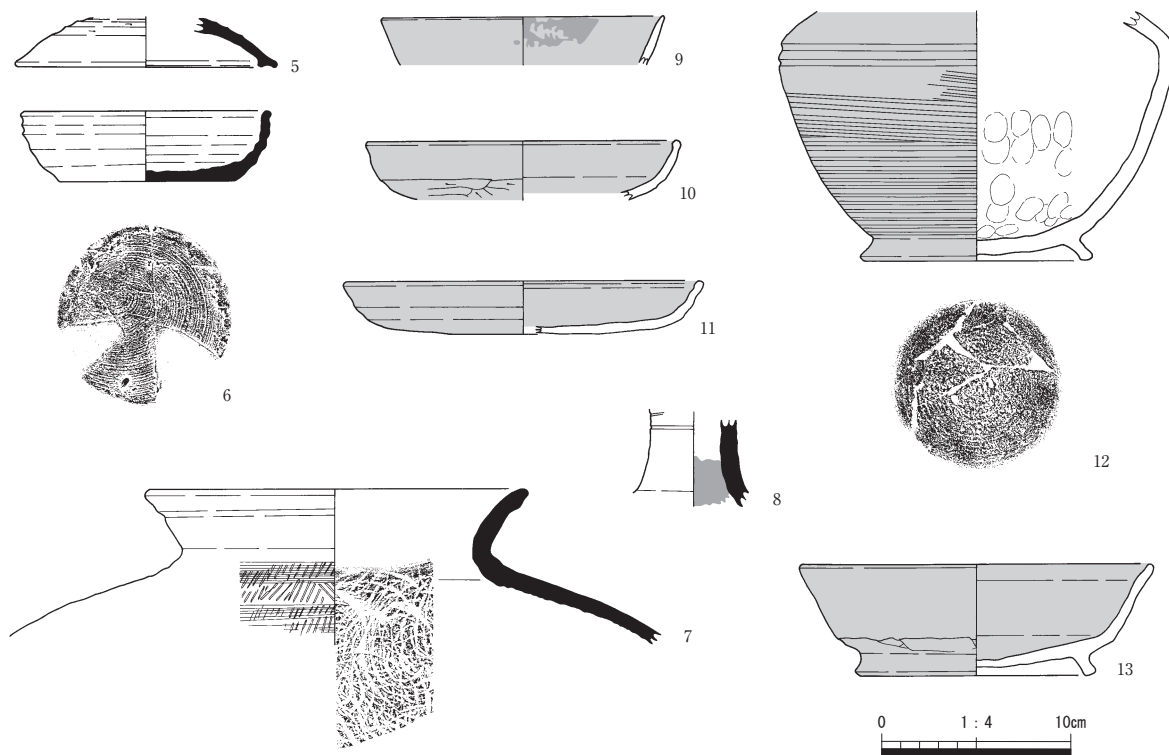
第11図 第2遺構面遺構配置図



第12図 畦4・SD30・31

がみられ、それを境として上段はすり鉢状、下段は逆台形または箱形を呈する。埋土は下層に粘質土層が堆積し、上層では砂層やシルト層が堆積する。このため、下層は水の流れが少ない状態、上層は水の流れがある状態で堆積したものと思われ、堆積環境の違いが認められる。

遺物は、主に下層の粘質土層から須恵器、土師器、木製品が出土した。5～8は須恵器であり、5は返りの付く杯蓋、6は底部を回転糸切りによる杯身、7は甕、8は内面に漆が付着した長頸壺である。9～12は土師器であり、9・10は杯、11は皿である。このうち9の内面には漆が付着する。12は高台付の壺で、外面に沈線やカキメを施す。W1～6は曲物であり、W1～5の縁には側板を固定するための紐を通す孔が認められ、W1～4には、紐に用いられた樹皮や側板を配置する際の目印の線刻が残る。W7は蓋、W8は糸車の横木、W13は皿である。W9は片方の端部を丸く加工した棒状木製品であり、



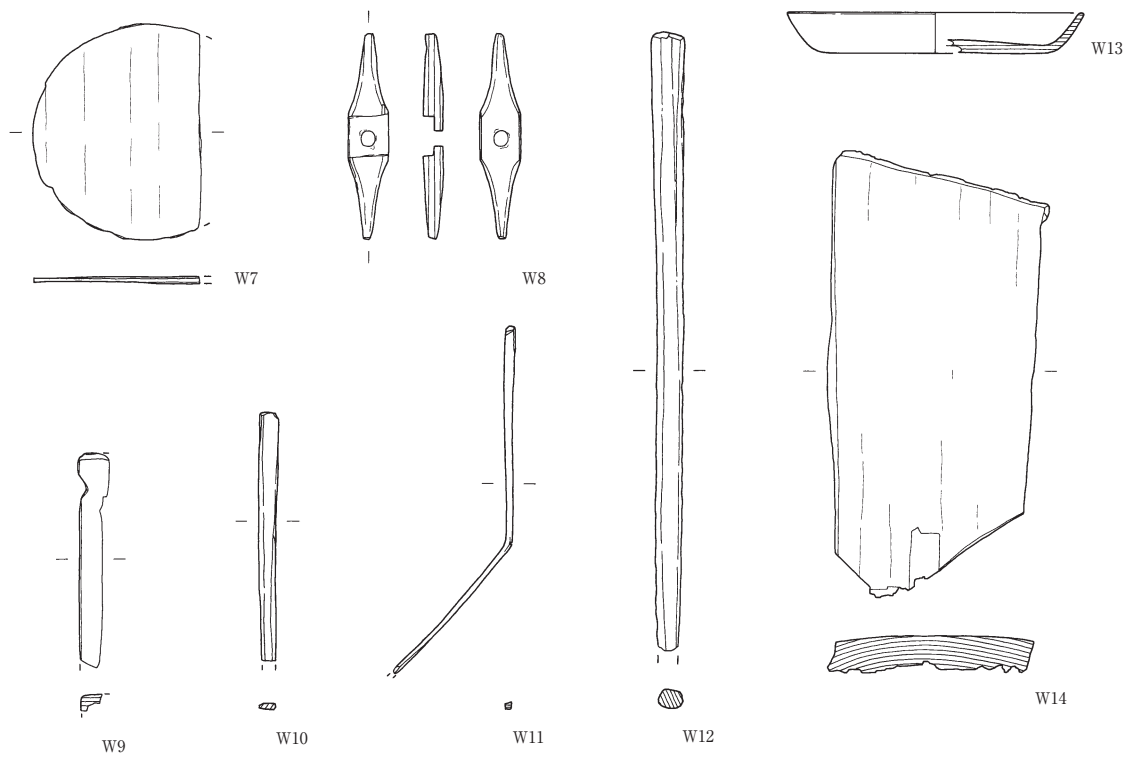
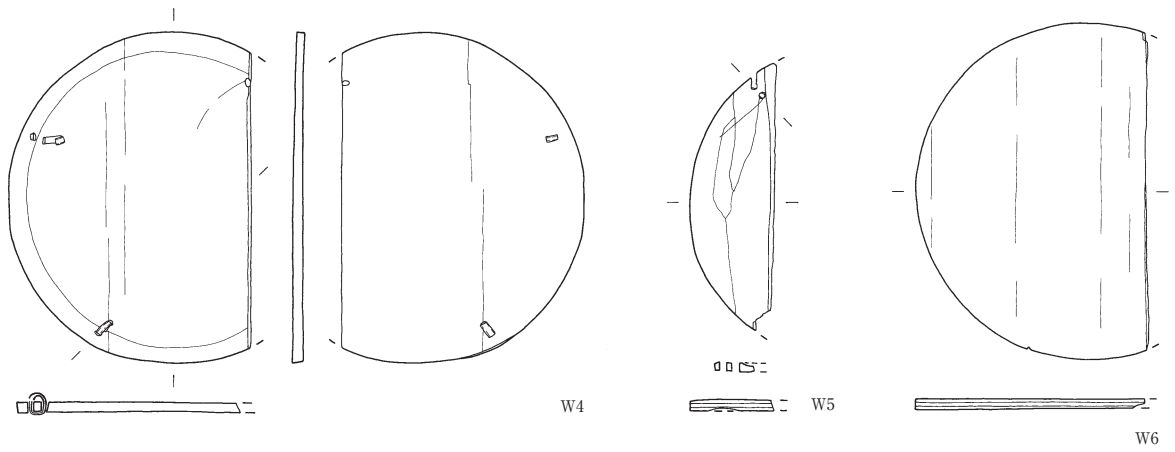
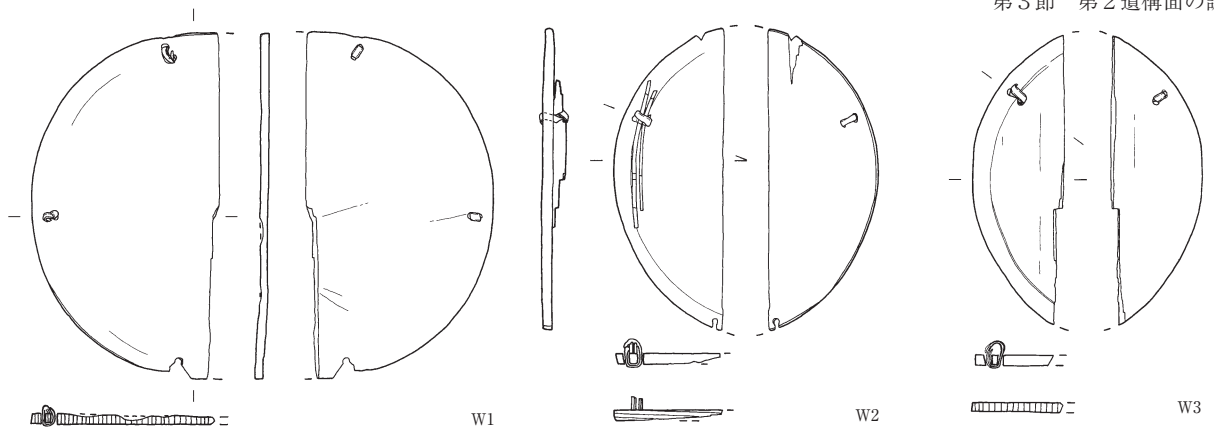
第13図 SD30・31出土遺物①

第13図 土器観察表

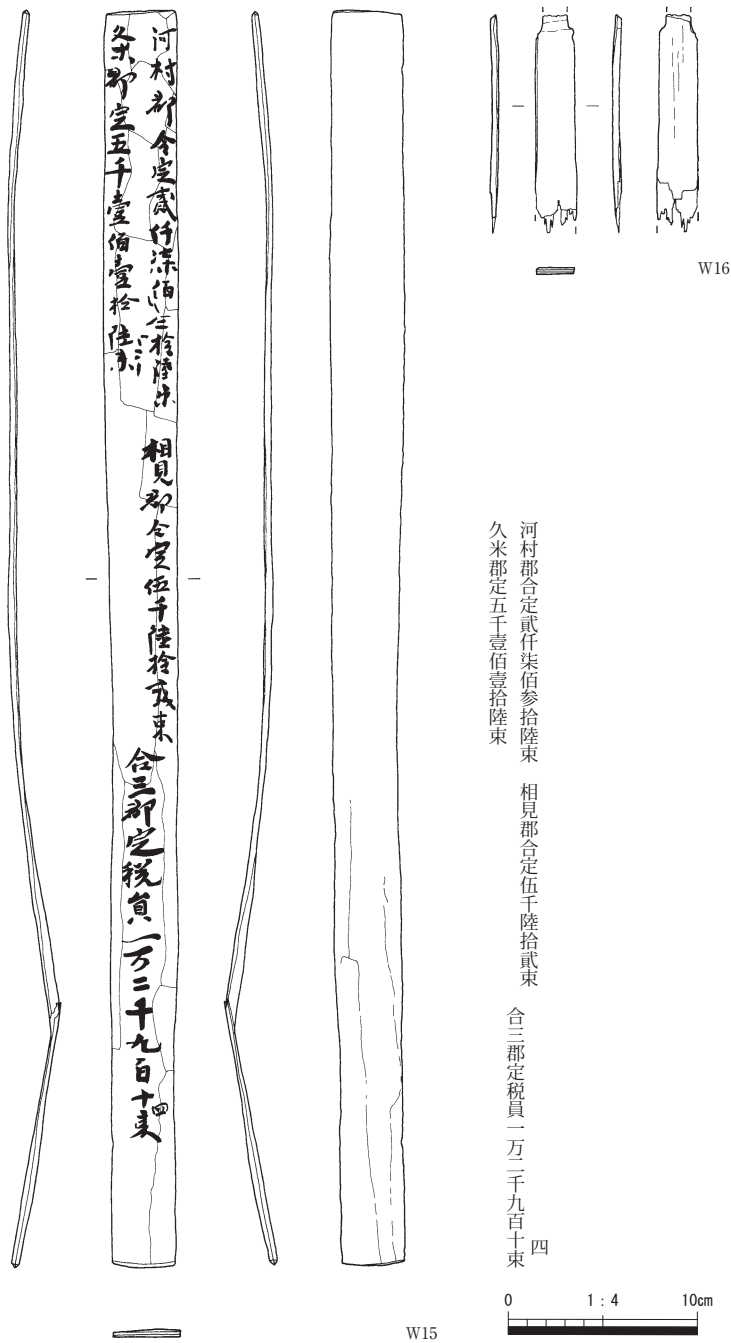
遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
5	SD30	埋土	杯蓋	※12.0	△ 3.1	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰白色	須恵器
6	SD30	埋土	杯身	※12.7	3.6	※ 9.2	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	褐灰色	須恵器
7	SD30	埋土	甕	※19.6	△ 8.7	—	外面：タタキ後カキメ、内面：当具痕	黄灰色	須恵器、自然袖付着
8	SD30	埋土	壺	—	△ 4.6	—	外面：ヨコナデ、沈線1条、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器、漆付着
9	SD30	埋土	杯	※14.8	△ 2.5	—	内外面：ナデ	赤褐色	土師器、赤彩、漆付着
10	SD30	埋土	杯	※16.3	△ 3.1	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	橙色	土師器、赤彩
11	SD30	埋土	皿	※18.6	2.8	—	内外面：ナデ	橙色	土師器、赤彩
12	SD30	埋土	壺	—	△13.1	※11.3	外面：ナデ、カキメ、内面：ナデ	赤褐色	土師器、赤彩
13	SD31	埋土	高台付杯	18.2	5.9	11.7	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	明赤褐色	土師器、赤彩

第14・15図 木製品観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量 (cm)	備考
W1	SD30	埋土	曲物	直径：18.1、厚さ：0.6	
W2	SD30	埋土	曲物	直径：※16.1、厚さ：0.6	
W3	SD30	埋土	曲物	直径：※17.2、厚さ：0.6	
W4	SD30	埋土	曲物	直径：17.5、厚さ：0.6	
W5	SD30	埋土	曲物	直径：※17.5、厚さ：△0.6	
W6	SD30	埋土	曲物	直径：17.7、厚さ：0.6	
W7	SD30	埋土	蓋	直径：11.5、厚さ：0.4	
W8	SD30	埋土	糸車	最大長：10.9、最大幅：2.2、最大厚：1.1	
W9	SD30	埋土	棒状木製品	最大長：△11.3、最大幅：△1.7、最大厚：△0.9	
W10	SD30	埋土	棒状木製品	最大長：△13.2、最大幅：1.2、最大厚：0.4	
W11	SD30	埋土	棒状木製品	最大長：△20.8、最大幅：0.7、最大厚：0.5	
W12	SD30	埋土	棒状木製品	最大長：△32.8、最大幅：1.8、最大厚：1.1	
W13	SD30	埋土	皿	口径：※14.4、器高：2.2	
W14	SD30	埋土	板状木製品	最大長：※23.7、最大幅：11.7、最大厚：1.9	
W15	SD30	埋土	木筒	最大長：66.3、最大幅：4.0、最大厚：0.5	ヒノキ科、板目、上下・左右両端ケズリ、「河村郡合定貳仟柒佰參拾陸束 久米郡定五千壹佰壹拾陸束 相見郡合定伍千陸拾貳束 合三郡定税員一万二千九百十四束」、別筆の可能性有、ケズリ残しの墨痕有、011型式
W16	SD30	埋土	木筒状木製品	最大長：△11.5、最大幅：2.3、最大厚：0.4	ヒノキ科、板目、上端切断、左右両端ケズリ、「<、039型式



第14図 SD30出土遺物②



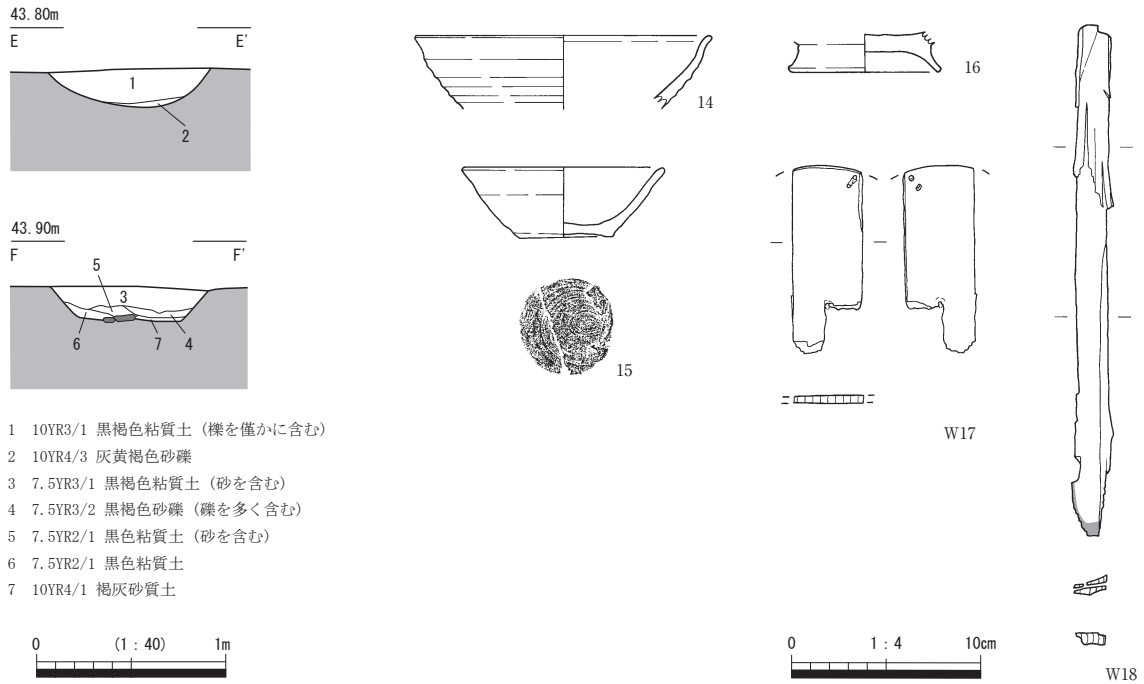
第15図 SD30出土遺物③

SD31 (第11~13図、PL.1・13)

調査区東側において、SD30に切られた状態で検出した。検出長は32.70m、幅はSD30に切られるため定かでないが1.25m以上、深さ0.24mを測る。断面形は逆台形ないしは皿状を呈する。埋土には砂粒が含まれており、比較的水の流れのある状態で堆積したものと考えられる。遺物は埋土上層から13が出土した。13は土師器の杯であり、内外面に赤色顔料が塗布され、底部には高台が付く。時期は出土遺物から8世紀後半頃と考えられる。

平成18年度の坂長第7遺跡や平成22年度の坂長第8遺跡の調査においても出土している。W10~12は先端がヘラ状または尖る棒状木製品であり、このうちW11は中程で折られている。W14は板状木製品であり、端部が斜めに加工される。W15は木筒であり、両側面および端部にケズリが施され、表面に「河村郡合定貳仟柒佰參拾陸東 久米郡定五千壹佰壹拾陸東 相見郡合定伍千陸拾貳東 合三郡定稅員一万二千九百十四東」と記されている。また、表面にはケズリの痕跡が顕著に見られ、墨痕が残る。このため、何回か同じ目的で使用された可能性がある。W16は木筒状の木製品である。

溝の性格については、断面形や埋土下層の堆積状況を見ると、水流により自然に形成された水路とは考えにくく、人為的に掘削された溝と思われる。時期は、出土した須恵器や土師器の特徴から、8世紀後半頃と考えられる。



- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土（礫を僅かに含む）
- 2 10YR4/3 灰黄褐色砂礫
- 3 7.5YR3/1 黒褐色粘質土（砂を含む）
- 4 7.5YR3/2 黒褐色砂礫（礫を多く含む）
- 5 7.5YR2/1 黒色粘質土（砂を含む）
- 6 7.5YR2/1 黒色粘質土
- 7 10YR4/1 褐灰砂質土

第16図 SD32・出土遺物

第16図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
14	SD32	埋土	杯	※15.3	△3.9	—	内外面：ヨコナデ	にぶい黄橙色	土師器
15	SD32	埋土	杯	※10.4	3.7	5.0	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	にぶい黄橙色	土師器
16	SD32	埋土	高台付杯	—	△2.2	※7.6	内外面：ナデ	橙色	土師器

第16図 木製品観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm)	備考
W17	SD32	埋土	曲物	直径：※15.0、厚さ0.4	
W18	SD32	埋土	棒状木製品	最大長：27.1、最大幅：2.2、最大厚：0.7	端部炭化

SD32（第11・16図、PL.13）

調査区南側で検出した。南東から西方向にかけてやや蛇行しながらのびる。規模は検出長27.00m、幅0.83m、深さ0.21mを測る。断面形は皿状ないし逆台形を呈する。埋土は下層に砂礫層や砂層、粘質土層が堆積し、上層には粘質土層が堆積する。このため、上層と下層では堆積環境が異なっていたと考えられる。

遺物は埋土中から土師器、木製品が出土した。14～16は土師器の杯であり、15の底面には回転糸切りの痕跡が残り、16には高台が付く。W17は曲物、W18は木材を割り成形した棒状木製品であり、調整痕跡の認められず、先端が炭化する。時期は、14、15の特徴から11世紀頃と考えられる。

第4節 第3遺構面の調査

第3遺構面の調査は、IV層上面で行った。IV層上面は、平成18年度に行われた調査の第2遺構面にあたり、そこでは弥生時代から古墳時代にかけての溝9条が検出された。これらの溝は、人為的に掘り込まれたと考えられるものは少なく、自然流路が大半を占めている。

調査の結果、古墳時代から古代にかけての溝19条を確認した。溝は前回と同様、大半が自然流路であり、人為的に掘り込まれた可能性のあるものはSD33と僅かである。また、これらの溝の多くは調査区東側にあることから、長期にわたりほぼ同じ位置に流路が存在していたと考えられ、調査地周辺は比較的湿潤な環境であったと思われる。

ところで、確認した溝のうち、SD33の埋土がIV層中に入り込むなど、形状が変形していた。また、この付近の土層断面（第7図、A-A'断面）において、III層とIV層の境が波打っており、IV層が火炎状にIII層に入り込む状況が観察できた。これは地震による変形と考えられ、SD33の埋没後からIII層が堆積する間、すなわち古墳時代中期から古代の間において、地震があったと思われる。



写真2 SD33断面

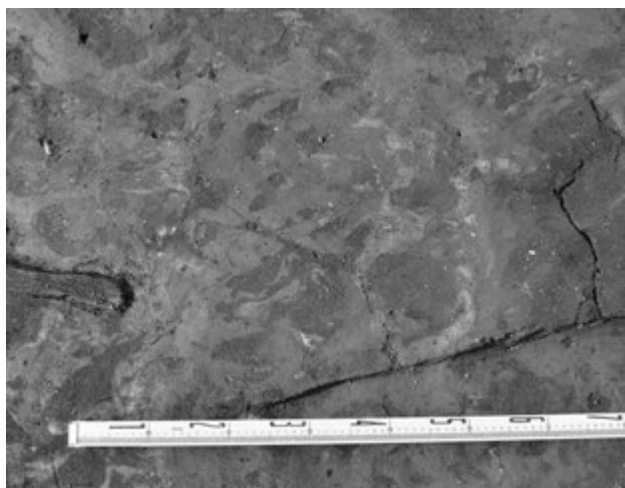


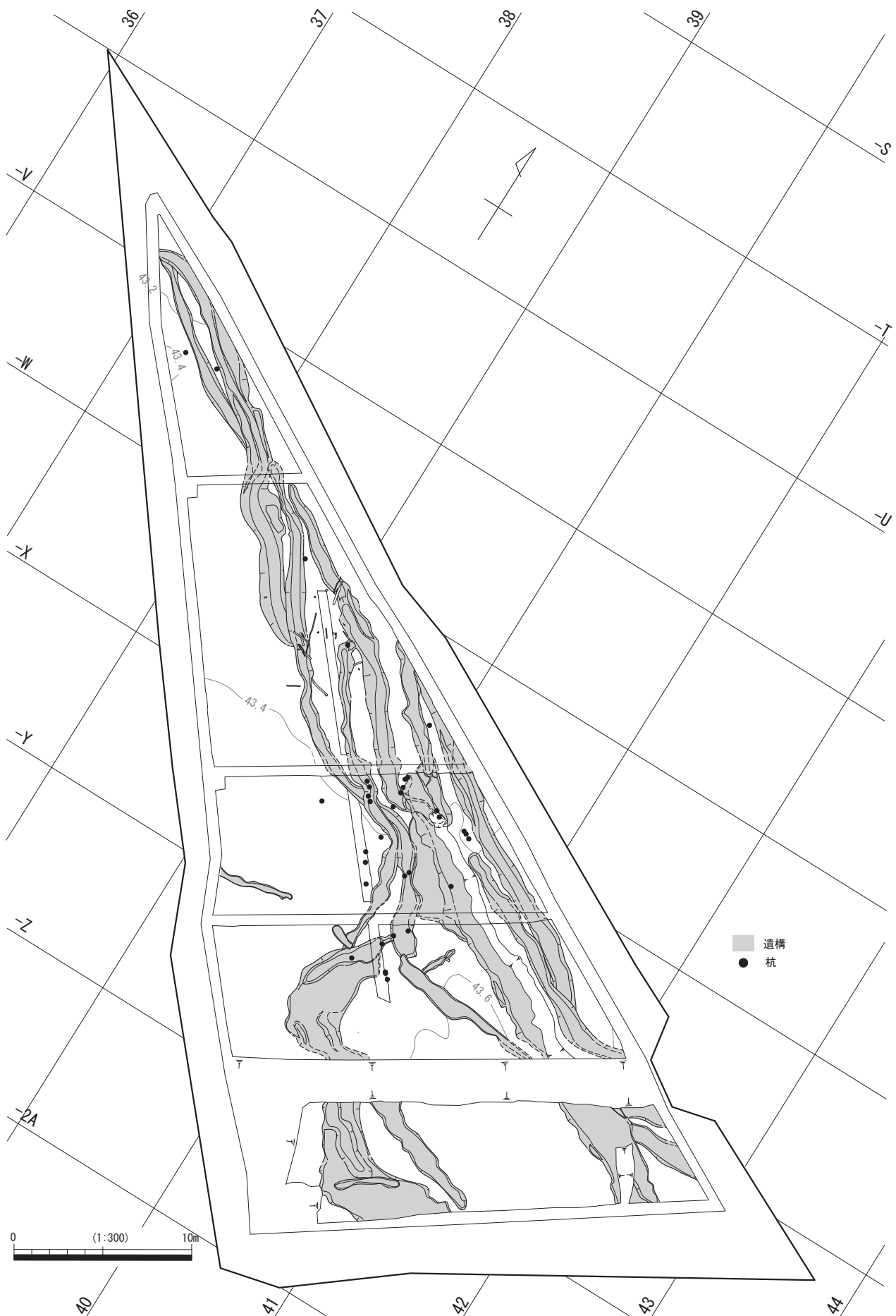
写真3 地震痕跡

SD33（第17～21図、PL.3・13～15・25）

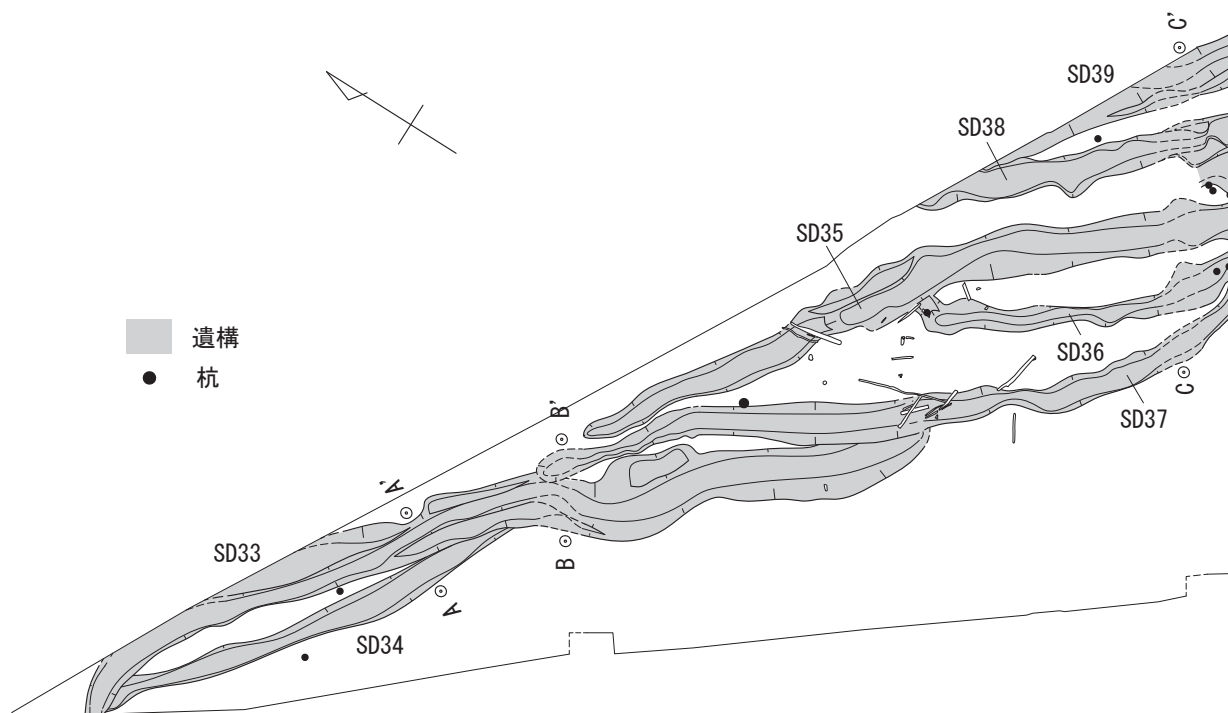
調査区北側において検出した。南東から北西方向にかけてのびており、調査区外へと続く。南東側はSD37によって切られ、北西側はSD34を切る。概ね直線的にのびるが、北西端は西側に屈曲する。規模は検出長23.40m、幅1.33m、深さ0.52mを測る。断面形は逆台形を呈し、前述したとおり、埋土がIV層中に入り込むなど変形する。埋土は下層に粘質土層が堆積しており、これらは比較的水の流れの少ない状態で堆積したものと思われる。

遺物は埋土中から土師器、石器、木製品が出土した。17、18は複合口縁の甕、19は内面に暗文風のヘラミガキを施す高杯であり、古墳時代前期頃とみられる。20は小型丸底壺、21は壺、22～28は甕であり、概ね古墳時代中期後半頃のものと考えられる。S1は流紋岩製の砥石であり、W19は鍬、W20・21は板状木製品である。

遺構の性格は、溝の断面形から人為的に掘り込まれた溝の可能性が高い。時期については中期後葉頃の遺物が多く含まれることから、この頃に埋没したものと考えられる。



第17図 第3遺構面遺構配置図①



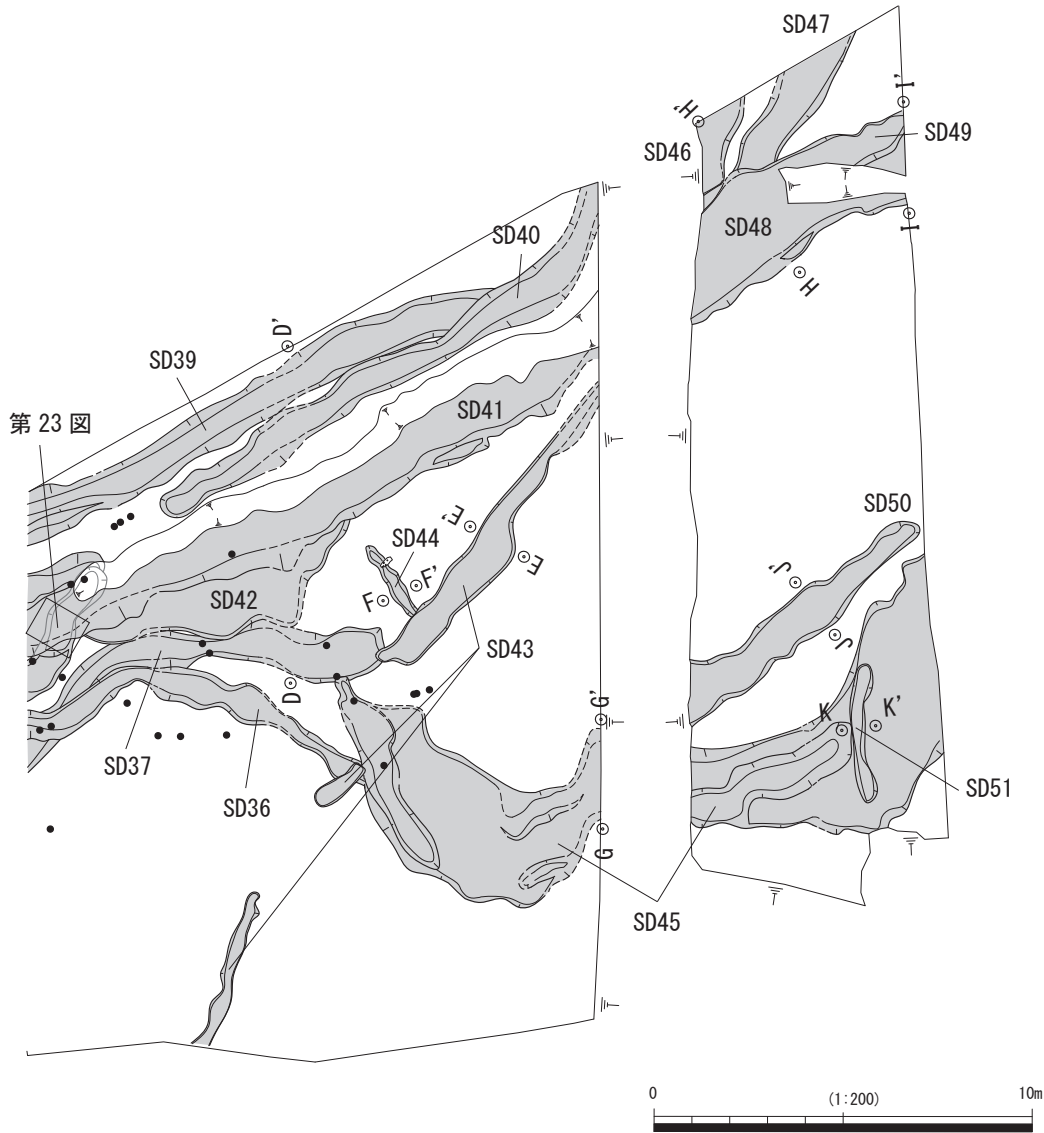
第18図 第3遺構面遺構配置図②

SD34 (第17～19図、PL.3)

調査区北側において検出した。南東から北西方向にのびており、その両端はSD33によって切られる。規模は検出長17.50m、幅0.69m、深さ0.07mを測り、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

SD35 (第17～19・22・23図、PL.3・15・16)

調査区東側において検出した。南東から北西方向にかけて蛇行しながらのびる。南東側ではSD41に切れ、SD38を切る。規模は検出長21.00m、幅1.25m、深さ0.25mを測る。断面形は皿状を呈して

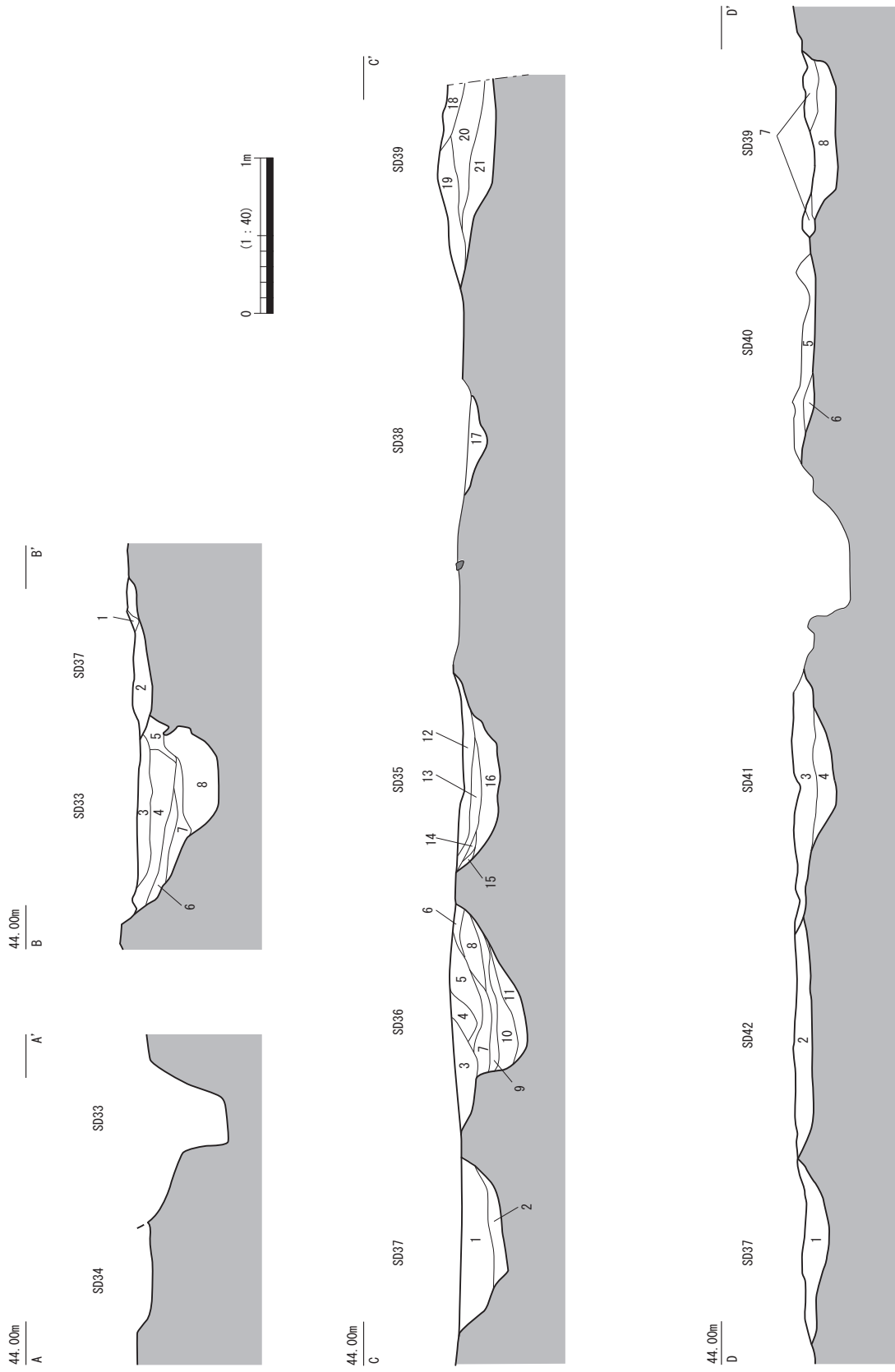


おり、底面には水の流れによって形成されたとみられる落ち込みが幾つか認められる。埋土は概ね砂層が堆積する。

遺物は北東隅の底面において29～31がまとまった状態で出土した。29は壺であり、口縁部を下にして潰れた状態、30、31は甕であり、横たわった状態で出土した。このほか、埋土中から32、33が出土した。時期は29～31の特徴から、古墳時代前期後半頃と考えられる。

SD36 (第17～19・22図、PL.3・16・17)

調査区東側において検出した。南東から北西方向にかけて蛇行しながらのび、南東側ではSD37を切り、SD43・45によって切られる。規模は検出長17.00m、幅1.47m、深さ0.49mを測る。断面形は歪



第19図 SD33~42

な逆台形を呈し、埋土は砂層と粘質土層が交互に堆積する。

遺物は埋土中から34～36が出土した。34は壺、35は甕、36は高杯の脚部である。時期は古墳時代中期と考えられる。

SD37 (第17～19・22図、PL.3)

調査区の中程で検出した。南東から北西方向にかけて蛇行しながらのびる。北西側ではSD34を切り、南東側ではSD36・42・43によって切られる。規模は、検出長28.80m、幅1.18m、深さ0.28mを測る。断面形は歪な皿状から逆台形を呈し、埋土は下層に砂層、上層に粘質土層が堆積する。

遺物は埋土中から土師器の甕である37が出土した。時期は古墳時代中期後半頃と考えられる。

SD38 (第17～19図、PL.3)

調査区東側で検出した。南東から北東方向にかけてのびており、SD35・39・41によって切られる。規模は検出長10.50m、幅0.63m、深さ0.13mを測る。断面形は歪な皿状を呈し、埋土はシルト層が堆積する。埋土中から遺物は出土しなかった。時期はSD35に切られることから、古墳時代前期以前と考えられる。

SD39 (第17～19・22図、PL.3・14・16)

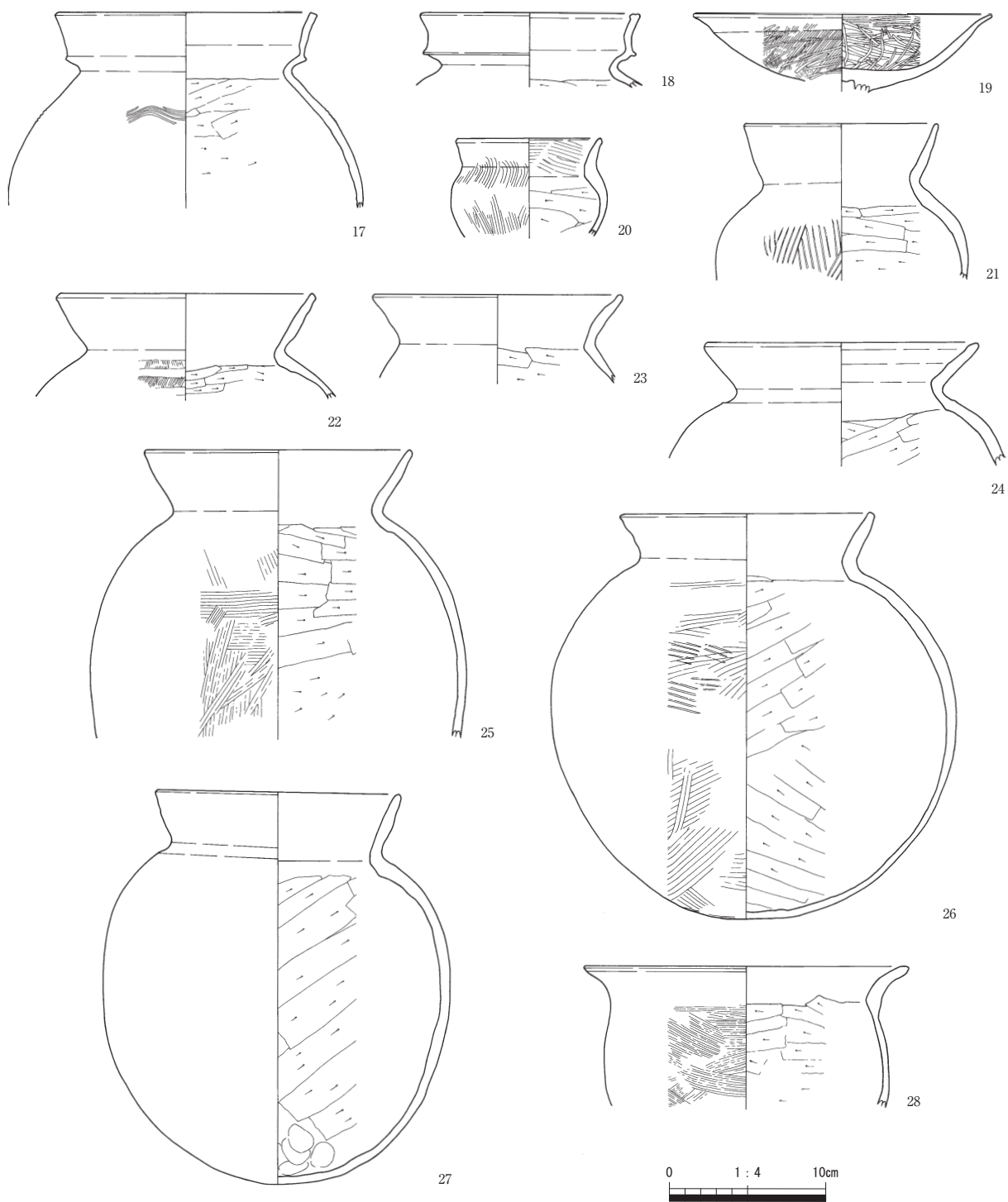
調査区東側で検出した。北東から南西方向にかけてのびる。北西側ではSD38を切り、南東側ではSD40によって切られる。規模は検出長21.00m、幅1.30m、深さ0.19mを測る。断面形は歪な逆台形を呈し、埋土は概ね砂層やシルト層が堆積する。

遺物は埋土中から38、W22が出土した。38は高台の付く須恵器の杯身であり、底部の切り離しはヘラ切りによる。W22は棒状木製品であり、先端が尖る。時期は8世紀前半頃と考えられる。

SD40 (第17～19・22図、PL.3・17)

調査区南東側で検出した。北東から南西方向にのびており、SD39を切る。南東側は攪乱や調査区外のため、

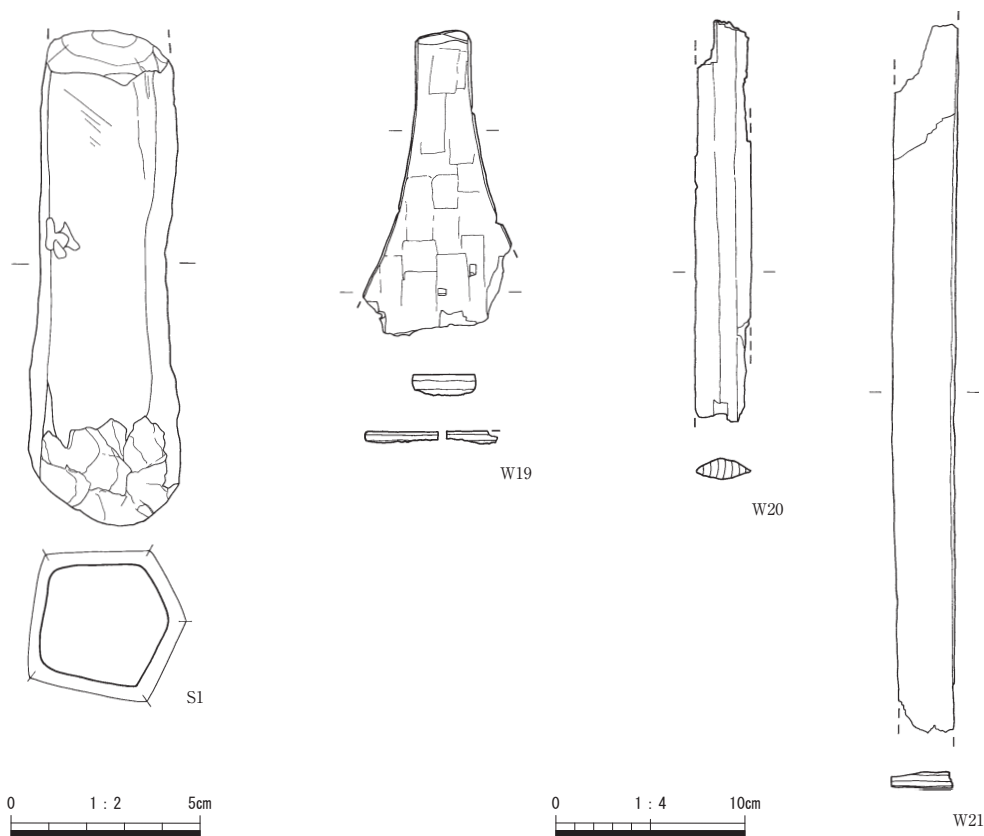
- | | | |
|---|--|---|
| <p>B-B'</p> <p>SD37</p> <p>1 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂 (黒褐色粘質土を少し含む)</p> <p>2 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性有、白色粒、赤褐色礫)</p> <p>SD38</p> <p>3 10YR4/1 褐灰色シルト (灰黄褐色砂を多く含む)</p> <p>4 10YR3/1 黒褐色シルト (灰黄褐色砂を多く含む)</p> <p>5 10YR3/1 黒褐色粘質土 (灰黄褐色砂、IV層ブロックを少し含む)</p> <p>6 10YR3/1 黒褐色シルト</p> <p>7 10YR3/1 にぶい黄橙色砂</p> <p>8 10YR3/1 黒褐色粘質土</p> <p>C-C'</p> <p>SD37</p> <p>1 10YR4/1 褐灰色粘質土</p> <p>2 10YR5/2 灰黄褐色砂 (白色細砂がラミナ状に堆積、礫を含む)</p> <p>SD36</p> <p>3 7.5YR4/1 褐灰色シルト (灰、礫を少し含む)</p> | <p>4 10YR4/1 褐灰色粘質土 (砂を少し含む)</p> <p>5 10YR5/2 灰黄褐色砂</p> <p>6 10YR7/2 灰黄色砂</p> <p>7 10YR4/1 褐灰色粘質土</p> <p>8 7.5YR5/2 灰褐色シルト (粘性有)</p> <p>9 10YR5/2 灰黄褐色砂</p> <p>10 10YR4/1 褐灰色粘質土</p> <p>11 10YR5/2 灰褐色砂礫層 (下層に礫を多く含む)</p> <p>SD35</p> <p>12 10YR4/2 灰黄褐色砂 (礫を少し含む)</p> <p>13 7.5YR4/1 褐灰色粘質土</p> <p>14 10YR5/1 褐灰色シルト (砂がラミナ状に堆積)</p> <p>15 10YR5/3 にぶい黄褐色砂</p> <p>16 10YR5/2 灰黄褐色砂 (褐灰色シルトを含む)</p> <p>SD38</p> <p>17 10YR4/1 褐灰色シルト (砂がラミナ状に堆積、炭を含む)</p> <p>SD39</p> <p>18 10YR3/1 黒褐色粘質土</p> | <p>19 10YR4/1 褐灰色シルト (砂がラミナ状に堆積、炭を少し含む)</p> <p>20 10YR4/2 灰黄褐色砂 (黒褐色粘質土、灰、礫を含む)</p> <p>21 10YR3/1 黒褐色シルト (礫を含む)</p> <p>D-D'</p> <p>SD37</p> <p>1 10YR4/2 灰黄褐色シルト (砂、褐灰色粘質土、灰褐色粘質土、炭を含む)</p> <p>SD42</p> <p>2 10YR4/1 褐灰色シルト (有機物、鉄分を含む)</p> <p>SD41</p> <p>3 10YR4/2 灰黄褐色シルト (灰黄褐色砂がラミナ状に堆積、灰色砂質土、礫を含む)</p> <p>4 10YR4/2 灰黄褐色砂</p> <p>SD40</p> <p>5 10YR3/1 黒褐色粘質土 (礫を多く、明黄褐色粒を含む)</p> <p>6 10YR4/1 褐灰色シルト (砂がラミナ状に堆積)</p> <p>SD39</p> <p>7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (有機物を含む)</p> <p>8 10YR4/1 褐灰色粘質土 (砂がラミナ状に堆積、礫、炭、有機物を含む)</p> |
|---|--|---|



第20図 SD33出土遺物①

詳細は不明である。規模は、検出長14.40m、幅1.01m、深さ0.11mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は砂粒を含むシルト層、粘質土層の順に堆積する。

遺物は埋土中から39が出土した。39は甑の把手とみられる。時期はSD39との切り合いから8世紀前半頃と考えられる。



第21図 SD33出土遺物②

第20図 土器観察表

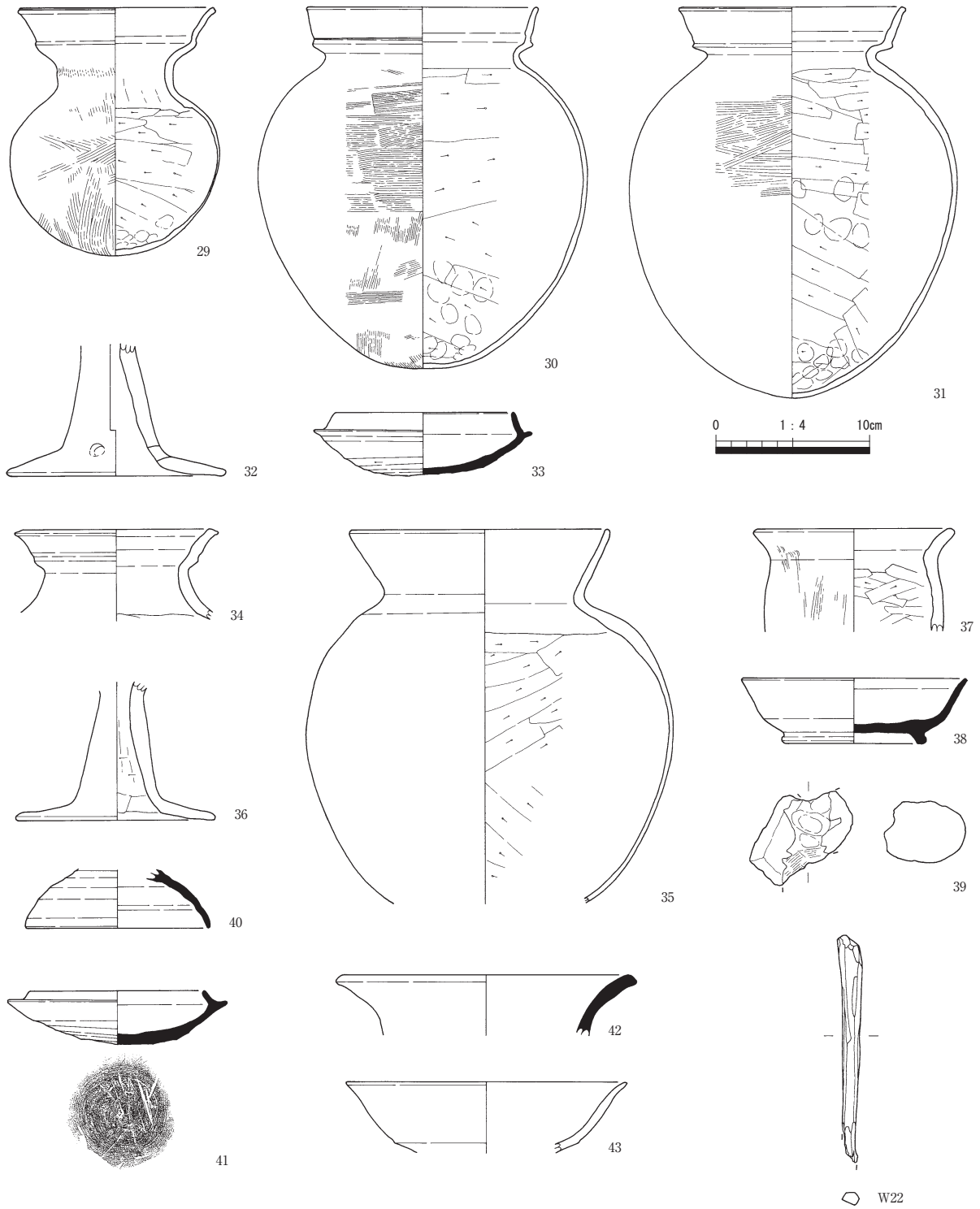
遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
17	SD33	埋土	甕	※15.9	△12.4	—	外面：ナデ、肩部波状文、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、胴部煤附着
18	SD33	埋土	甕	※12.9	△ 4.7	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	浅黄橙色	土師器
19	SD33	埋土	高杯	18.9	△ 5.0	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ、内面：ハケメ、ヘラミガキ、暗文風ヘラミガキ	黒色	土師器
20	SD33	埋土	小型丸底壺	※ 9.1	△ 6.2	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ハケメ、ヘラケズリ	暗灰黄色	土師器
21	SD33	埋土	壺	12.2	△ 9.9	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤附着
22	SD33	埋土	甕	※16.0	△ 6.6	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤附着
23	SD33	埋土	甕	※15.6	△ 5.7	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤附着
24	SD33	埋土	甕	17.2	△ 8.0	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄褐色	土師器、煤附着
25	SD33	埋土	甕	※16.8	△18.4	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄色	土師器、煤附着
26	SD33	埋土	甕	15.7	26.1	—	外面：ナデ、タタキ後ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄褐色	土師器、煤附着
27	SD33	埋土	甕	15.4	25.2	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄色	土師器、黒斑有
28	SD33	埋土	甕	20.3	△ 9.0	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄褐色	土師器、煤附着

第21図 石器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
S1	SD33	埋土	砥石	最大長：13.1、最大幅：4.0、最大厚：3.2、重量：224.8	流紋岩

第21図 木製品観察表

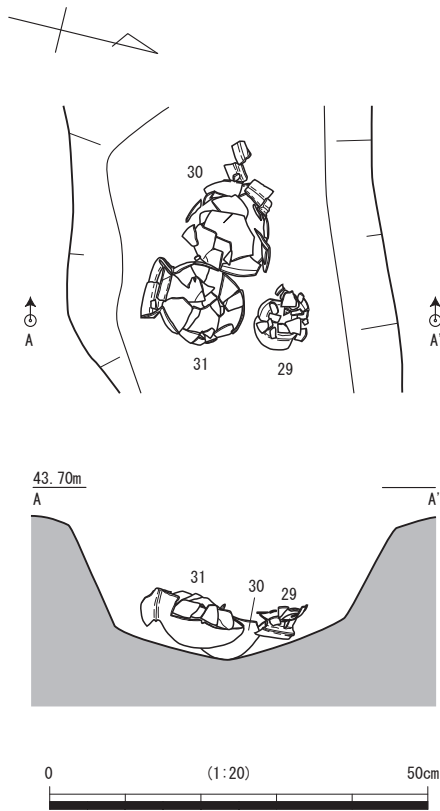
遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm)	備考
W19	SD33	埋土	鍬	最大長：△16.1、最大幅：△7.8、最大厚：△1.2	3ヶ所に穿孔
W20	SD33	埋土	板状木製品	最大長：△21.2、最大幅：3.0、最大厚：1.1	断面菱形
W21	SD33	埋土	板状木製品	最大長：△37.5、最大幅：3.5、最大厚：0.9	



第22図 SD35～37・39・41・42出土遺物

SD41 (第17～19・22図、PL.3・16・17)

調査区南東側で検出した。北東から南西方向にかけてのび、SD35・38を切り、SD42に切られる。また、第2遺構面のSD30によって半分近くが失われている。規模は検出長17.70m、幅1.27m、深さ0.21mを測り、断面形は歪な逆台形を呈する。埋土は砂層やシルト層が堆積する。



第23図 SD35遺物出土状況



写真4 SD35遺物出土状況

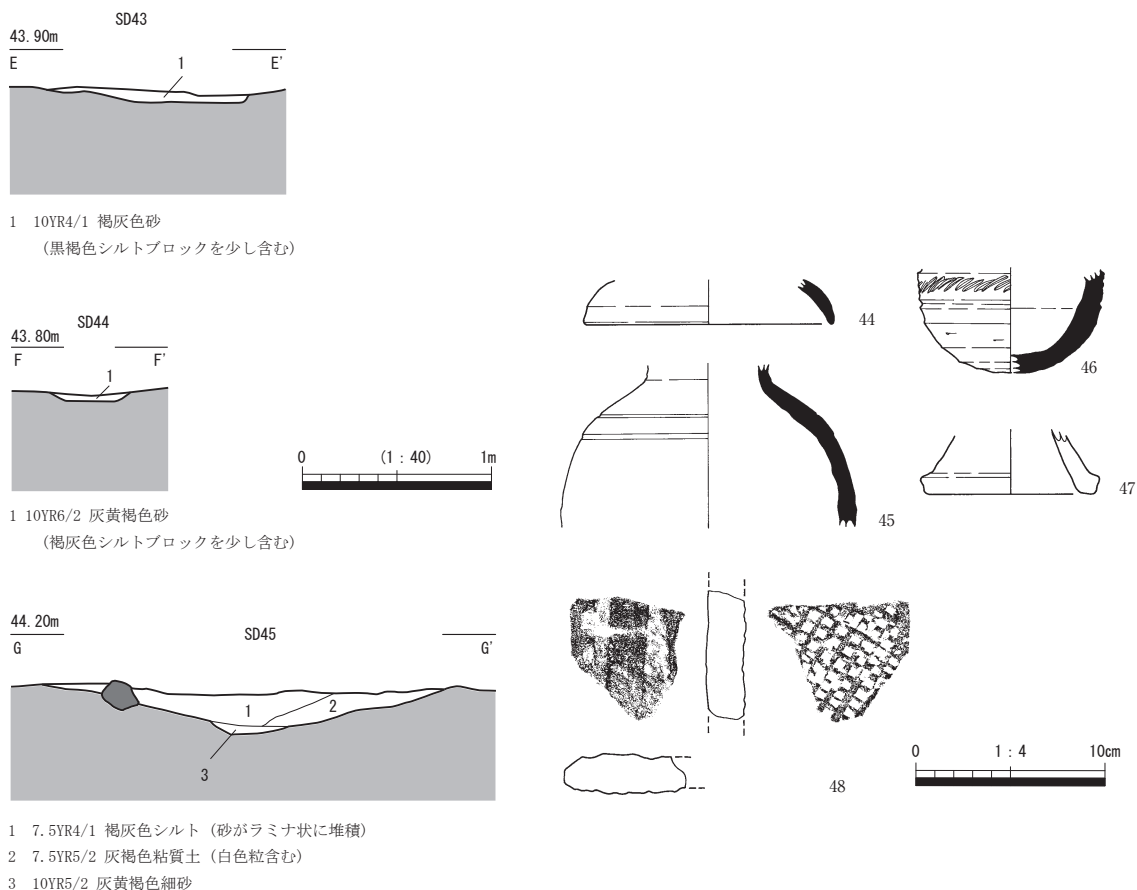
遺物は埋土中から40～42が出土した。40は須恵器の杯蓋であり、天井部に回転ヘラケズリを施す。41は須恵器の杯身であり、底部に回転ヘラケズリを施すが、中心部分までは行われず、ヘラ切りの痕跡が残る。また、ここには板目の痕跡が残る。42は須恵器の甕である。時期は出土遺物から古墳時代後期以降と考えられる。

SD42 (第17～19図、PL.3・17)

調査区南側で検出した。SD37を切り、SD41により大半が失われている。規模は検出長7.60m、幅1.14m以上、深さ0.09mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土はシルト層が堆積する。遺物は埋土中から43が出土した。43は土師器の高杯であり、口縁部との境に鈍い稜が認められる。時期は古墳時代中期後半頃と考えられる。

SD43 (第17・18・24図、PL.3)

調査区南側で検出した。東から西方向にかけてのびており、他の溝とやや方向が異なる。途中2ヶ所で途切れており、中程でSD36・37・44・45を切る。規模は検出長20.60m、幅1.04m、深さ0.07mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルトブロックを含む砂層が堆積する。遺物は出土しなかった。時期は、遺構の切り合い関係などから7世紀後半から8世紀前半頃と考えられる。



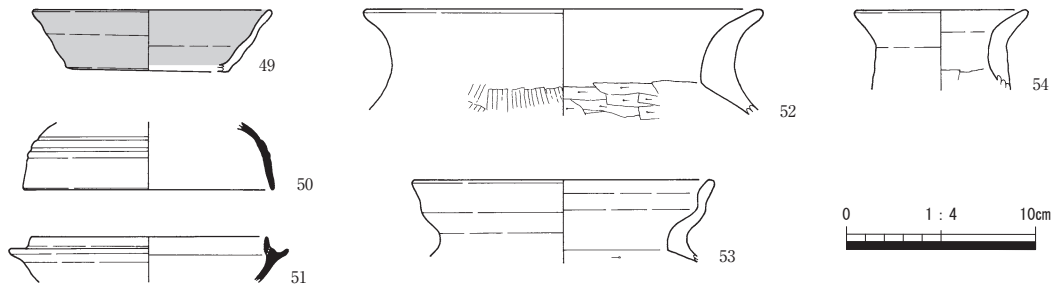
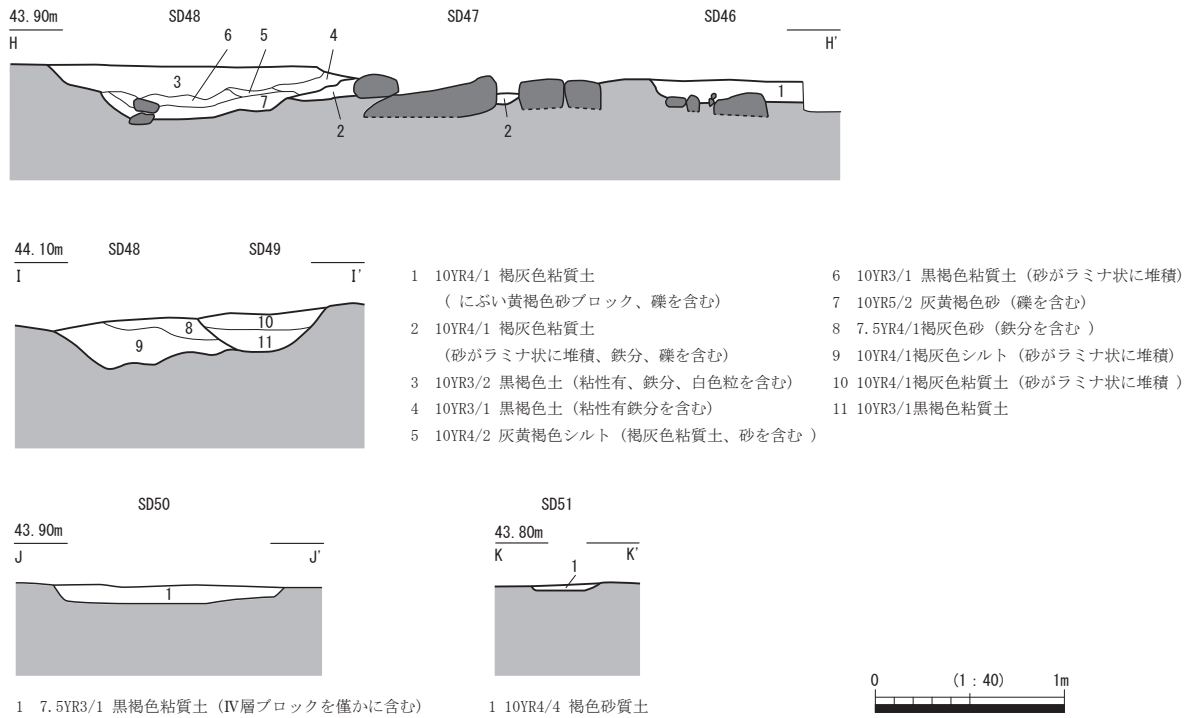
第24図 SD43～45・SD45出土遺物

第22・24図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
29	SD35	埋土	壺	※12.5	16.1	—	外面：ナデ、ハケメ後ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄色	土師器、黒斑有
30	SD35	埋土	甕	15.9	23.5	—	外面：ナデ、ハケメ後ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、黒斑有
31	SD35	埋土	甕	14.3	25.4	—	外面：ナデ、ハケメ後ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄色	土師器、黒斑有
32	SD35	埋土	高杯	—	△ 8.6	※13.7	外面：ナデ、内面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器、3方向に透かし穴
33	SD35	埋土	杯身	11.6	△ 4.2	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
34	SD36	埋土	壺	※12.0	△ 5.9	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器
35	SD36	埋土	甕	※16.7	△24.3	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄色	土師器、煤付着、黒斑有
36	SD36	埋土	高杯	—	△ 9.0	※12.8	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
37	SD37	埋土	甕	※12.5	△ 6.6	—	外面：ナデ、ハケメ後ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	褐色	土師器、黒斑有
38	SD39	埋土	杯身	※14.4	4.3	9.1	外面：ヨコナデ、ヘラ切り、内面：ヨコナデ、ナデ	灰色	須恵器
39	SD40	埋土	把手	—	—	—	外面：ナデ、ハケメ	にぶい黄橙色	土師器
40	SD41	埋土	杯蓋	※11.8	△ 3.9	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
41	SD41	埋土	杯身	※11.3	3.5	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器、底部板目痕有
42	SD41	埋土	甕	※18.3	△ 4.0	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器、自然釉付着
43	SD42	埋土	高杯	※18.1	△ 4.7	—	調整不明	にぶい橙色	土師器
44	SD45	埋土	杯蓋	※13.0	△ 2.3	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器
45	SD45	埋土	壺	—	△ 8.5	—	外面：ヨコナデ、沈線2条、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
46	SD45	埋土	甕	—	△ 5.4	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ、沈線、刺突文、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
47	SD45	埋土	脚部	—	△ 3.5	※ 8.3	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器
48	SD45	埋土	平瓦	—	—	—	外面：布目、外面：格子タタキ	淡黄色	

第22図 木製品観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
W22	SD39	埋土	棒状木製品	最大長：△14.8、最大幅：1.7、最大厚：0.9	



第25図 SD47~51・SD47~50出土遺物

第25図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
49	SD47	埋土	杯	※12.7	3.3	8.6	内外面：ナデ	橙色	土師器、赤彩
50	SD48	埋土	杯蓋	※13.1	△3.6	—	外面：ヨコナデ、沈線2条、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
51	SD48	埋土	杯身	※12.5	△2.5	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器
52	SD49	埋土	甕	※20.8	△5.6	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、黒斑有
53	SD50	埋土	甕	※15.3	△4.4	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、黒斑有
54	SD50	埋土	甕	※ 8.9	△4.3	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器

SD44 (第17・18・24図、PL.3)

調査区南側で検出した。南西から北東方向にかけてのびる。南西側はSD43によって切られる。規模は検出長2.20m、幅0.40m、深さ0.05mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土はシルトブロックを含む砂層が堆積する。遺物は出土しなかった。

SD45 (第17・18・24図、PL.3・17)

調査区南西側で検出した。南から北方向へと蛇行しながらのびる。南側はSD51によって切られ、北側はSD36を切り、SD43によって切られる。規模は検出長15.80m、幅2.08m、深さ0.21mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は下層から砂層、粘質土層、シルト層の順に堆積する。遺物は44～48が出土した。時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

SD46 (第17・18・25図、PL.3)

調査区南東隅で検出した。北側はSD47に切られる。溝の一部を確認したのみで詳細は不明である。遺物は出土しなかった。

SD47 (第17・18・25図、PL.3・16)

調査区南東隅で検出した。SD46を切り、SD48に切られる。規模は検出長2.10m、幅1.32m、深さ0.06mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土には砂粒がラミナ状に入る粘質土層が堆積する。遺物は埋土中から49が出土した。49は土師器杯であり、9世紀頃の特徴をもつ。このため、上層から混入したものとみられる。

SD48 (第17・18・25図、PL.3・17)

調査区南東隅で検出した。南東から北西方向にのびる。SD47を切り、SD49に切られる。規模は検出長6.50m、幅1.56m、深さ0.28mを測る。断面形は歪な逆台形を呈し、埋土は底面付近において砂層や砂粒を含むシルト層が堆積し、その上に砂層、粘質土層が堆積する。

遺物は埋土中から50、51が出土した。50は須恵器の杯蓋、51は須恵器の杯身である。時期は古墳時代後期頃と考えられる。

SD49 (第17・18・25図、PL.3・17)

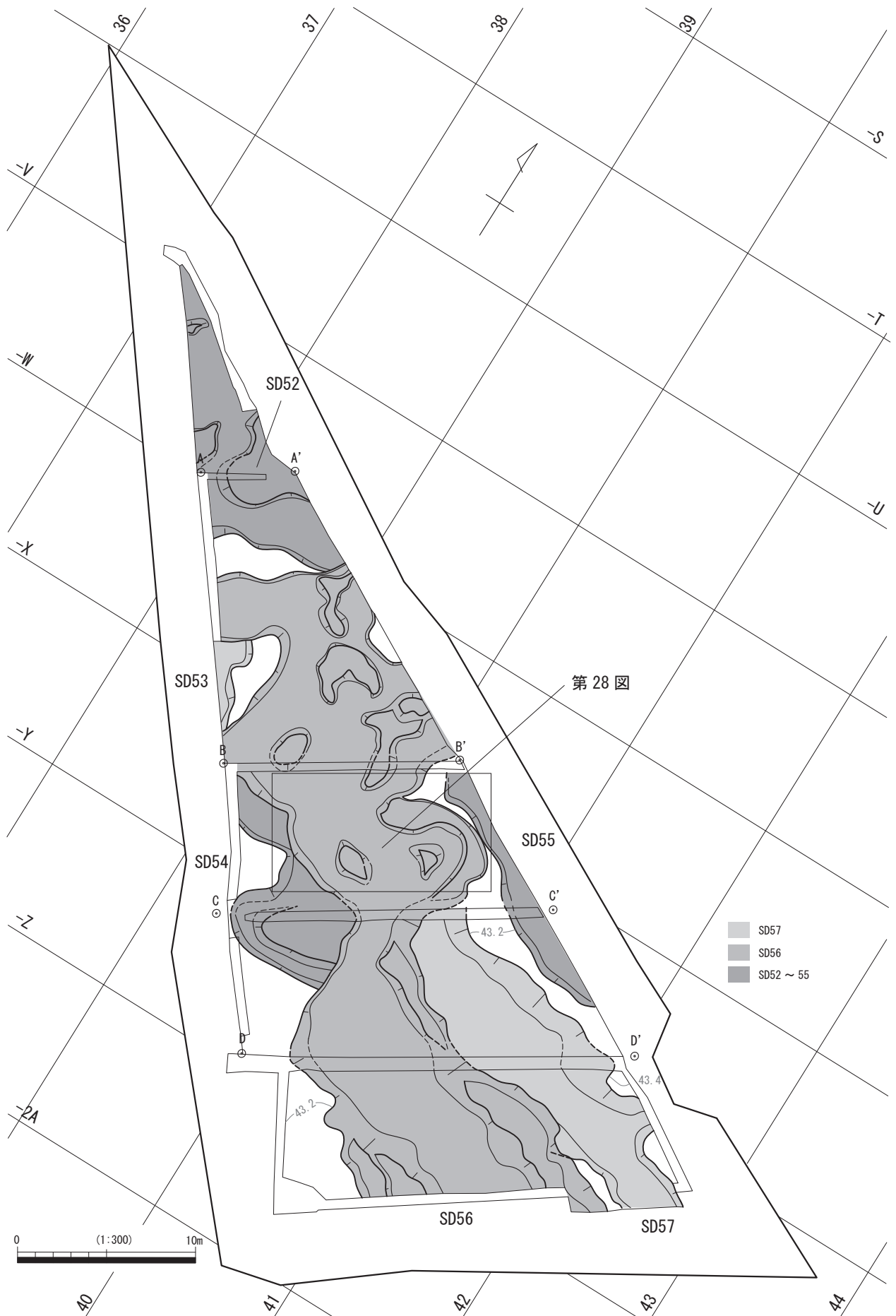
調査区南東側で検出した。SD48を切る。部分的に検出したため詳細は不明である。断面形はすり鉢状を呈し、埋土は粘質土層が堆積する。遺物は埋土中から土師器の甕である52が出土した。時期は古墳時代後期頃と考えられる。

SD50 (第17・18・25図、PL.3・17)

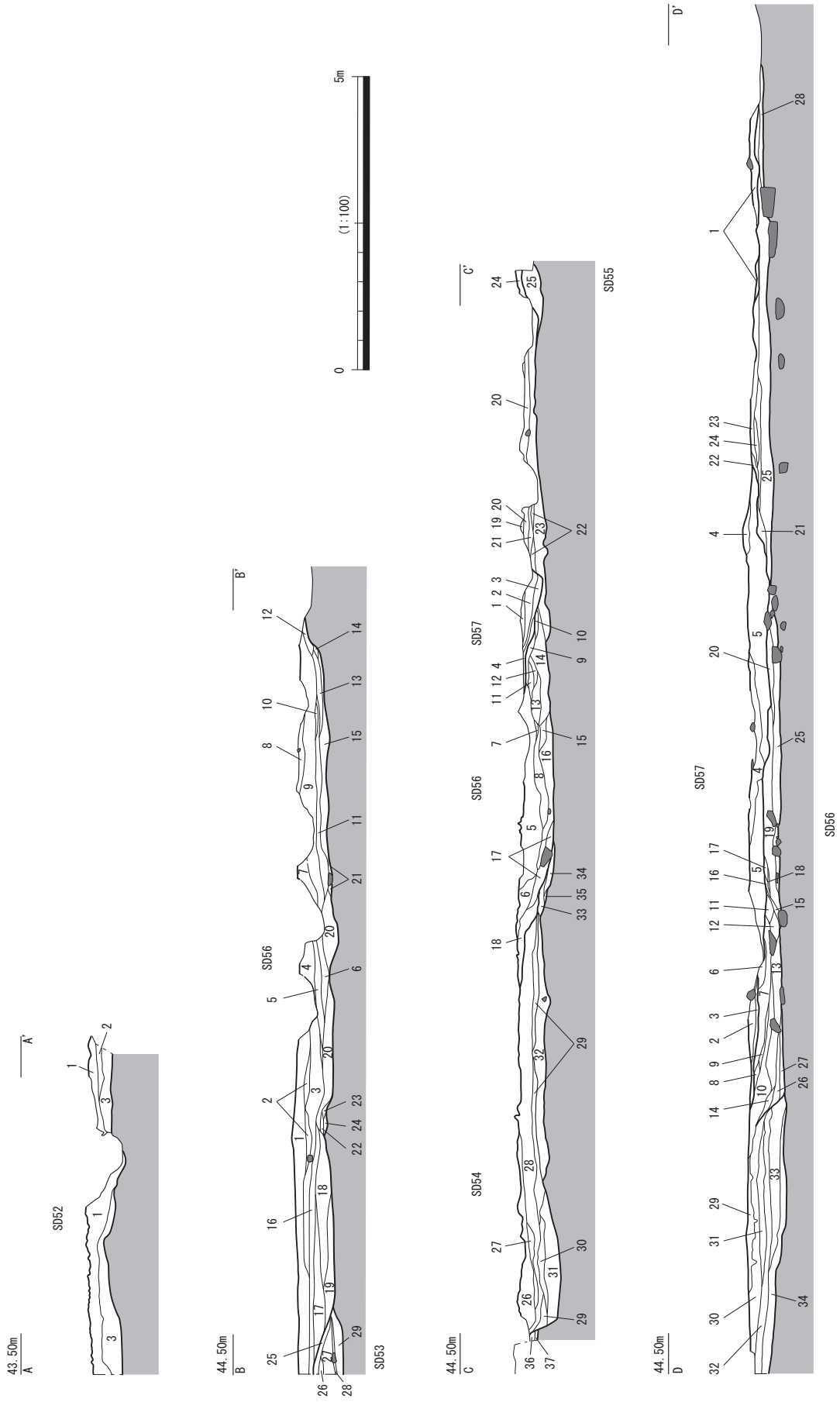
調査区南側において検出した。南東から北西方向にかけてほぼ直線的にのびる。規模は検出長7.90m、幅0.60m、深さ0.05mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は砂がラミナ状に入る粘質土層が堆積する。遺物は埋土中から土師器の甕である53、54が出土した。時期は古墳時代中期後葉頃と考えられる。

SD51 (第17・18・25図、PL.3)

調査区南西側で検出し、SD45を切る。北東から南西方向にのびており、規模は検出長3.60m、幅0.35m、深さ0.04mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土には粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。時期はSD45との関係から、古墳時代後期以降と考えられる。



第26図 第4遺構面遺構配置図



第27図 SD52~57

A-B' 断面	C-C' 断面	D-D' 断面
SD52	SD57	SD57
1 7.5YR7/3 にぶい橙色粘質土	1 10YR4/2 灰黄褐色砂 (炭を少し含む)	1 7.5YR4/1 褐灰色シルト (粘性有、鉄分を含む)
2 10YR7/3 にぶい黄褐色砂 (礫を含む)	2 10YR4/1 褐灰色砂礫層 (礫を多く含む)	2 10YR6/2 灰黄褐色砂 (礫を多く含む)
3 7.5YR7/2 明褐灰色シルト (粘性有)	3 7.5YR4/1 褐灰色シルト (粘性有、礫を含む)	3 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性有、炭を多く含む)
	4 7.5YR4/1 褐灰色シルト	4 10YR4/1 暗赤灰色砂質土
	SD56	5 5YR6/4 にぶい橙色粘質土 (鉄分を含む)
B-B' 断面	5 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 (シルトを少し、白色粒、炭、有機物を含む)	SD56
SD56	6 10YR5/2 灰黄褐色シルト (白色粒、炭を含む)	6 10YR5/2 灰黄褐色砂
1 10YR4/1 褐灰色シルト (炭、白色粒を多く含む)	7 10YR5/2 灰黄褐色砂 (炭を含む)	7 10YR4/2 灰黄褐色砂 (礫を多く含む)
2 10YR4/2 灰黄褐色細砂 (礫を含む)	8 10YR4/1 褐灰色シルト	8 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性有)
3 10YR4/1 褐灰色粘質土 (下層に礫を含む)	(褐灰色粘質土、にぶい黄褐色砂がラミナ状に堆積、炭、有機物を多く含む)	9 10YR5/2 灰黄褐色砂 (粘性有)
4 10YR5/2 灰黄褐色シルト (灰色粒を多く含む)	9 10YR2/1 黒色粗砂	10 10R4/2 暗赤灰色粘質土
5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (礫を含む)	(褐灰色粘質土、にぶい黄褐色砂がラミナ状に堆積、炭、有機物を多く含む)	11 5YR4/1 褐灰色シルト
6 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 (上層に砂が薄く堆積)	10 5YR5/1 褐灰色砂礫 (礫を含む)	12 7.5YR4/2 灰褐色シルト (砂を多く含む)
7 7.5YR4/1 褐灰色粘質土	11 10YR5/1 褐灰色粘質土 (粗砂が多く、有機物を多く含む)	13 10YR5/2 灰黄褐色砂 (礫を含む)
8 7.5YR4/2 灰褐色粘質土	12 10YR5/1 褐灰色砂礫 (礫を多く含む)	14 10R4/1 暗赤灰色砂質土
9 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土 (鉄分を少し含む)	13 10YR5/2 灰黄褐色砂 (炭、有機物を多く含む)	(にぶい橙色粘質土ブロックを少し含む)
10 7.5YR5/2 灰褐色シルト	14 7.5YR4/1 褐灰色砂礫 (礫を多く含む)	15 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
11 7.5YR4/1 褐灰色粘質土	15 10YR4/1 褐灰色砂 (炭、有機物を多く含む)	16 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
12 10YR4/2 灰黄褐色シルト (礫を多く含む)	16 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 (炭、鉄分、礫を含む)	17 10YR4/1 褐灰色シルト
13 10YR4/1 褐灰色粘質土 (有機物、炭を含む)	17 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (砂、炭を含む)	18 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
14 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト	18 7.5YR4/2 灰褐色粘質土	19 5P4/1 暗青灰粘質土
15 10YR4/1 褐灰色砂礫 (赤褐色、黄色礫を多く含む)	19 7.5YR6/2 灰褐色粘質土	20 5YR4/1 暗青灰粘質土
16 10YR4/1 褐灰色シルト	20 7.5YR6/2 灰褐色粘質土	21 10YR5/2 灰黄褐色シルト (炭を含む)
(粘性有、礫、炭、有機物を含む、砂がラミナ状に堆積)	21 7.5YR5/1 褐灰色シルト	22 7.5YR4/1 灰褐色粘質土 (鉄分を含む)
17 7.5YR4/1 褐灰色粘質土	22 7.5YR6/1 褐灰色砂礫 (礫を含む)	23 7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土
(礫、炭、有機物を含む、砂礫がラミナ状に堆積)	23 7.5YR6/2 灰褐色砂礫 (礫を多く含む)	24 7.5YR6/2 灰褐色シルト (白色粒、鉄分、炭を含む)
18 10YR4/1 褐灰色砂 (礫、炭、有機物を含む、粘質土が水平に堆積)	24 7.5YR6/3 にぶい褐色粘質土 (白色粒を含む)	25 7.5YR4/1 灰褐色砂礫 (礫を多く含む)
19 10YR4/1 黄褐色砂礫層 (礫を多く含む)	SD55	26 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (炭を少し含む)
20 10YR4/1 褐灰色砂礫層 (礫を多く含む)	25 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 (炭、礫を含む)	27 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (炭を少し含む)
21 10YR3/1 黒褐色粘質土 (炭、砂を少し含む)	SD54	28 5YR7/3 にぶい橙色粘質土 (明黄褐色、暗褐色礫を多く含む)
22 10YR4/1 褐灰色砂礫層 (礫を多く含む)	26 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (鉄分を多く含む)	その他
23 10YR4/1 褐灰色粘質土	27 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土 (鉄分を多く含む)	29 10R4/1 暗赤灰色粘質土
24 10YR4/2 灰黄褐色砂	28 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (炭を含む)	30 5YR6/4 にぶい橙色粘質土 (鉄分を多く含む)
SD53	29 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 (炭、有機物を少し含む)	31 5YR6/2 灰褐色シルト (鉄分を含む)
25 10YR4/2 灰黄褐色砂 (炭、有機物、灰黄褐色粘質土を含む)	30 7.5YR5/1 褐灰色シルト (砂礫を多く、炭を少し含む)	32 7.5YR4/2 灰褐色砂 (赤色、淡黄色礫、鉄分を含む)
26 10YR4/1 褐灰色シルト	31 10YR5/1 灰黄褐色砂 (炭を少し含む)	33 5YR7/3 にぶい橙色粘質土 (鉄分を含む)
(礫を含む、砂礫や有機物の層がラミナ状に堆積)	32 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 (礫を多く、炭を少し含む)	34 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫 (赤色、青灰色礫を含む)
27 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭を少し含む)	33 10YR4/1 褐灰色粘質土	
28 10YR4/1 褐灰色砂礫 (礫、有機物を含む)	34 10YR4/2 灰黄褐色砂 (砂、有機物を含む)	
29 7.5YR4/1 褐灰色粘質土	35 10YR4/1 褐灰色粘質土 (砂を少し含む)	
	その他	
	36 7.5YR5/1 褐灰色シルト (粘性有、砂を含む)	
	37 7.5YR4/1 褐灰色砂 (にぶい褐色粘質土ブロックを含む)	

第5節 第4遺構面の調査

IV層は土層観察や出土した遺物の状況から、遺物を含む河川堆積物と考えられた。このため、包含層として扱い、この下に堆積する土石流堆積物と考えられる浅黄色砂礫層、にぶい橙色シルト層、にぶい橙色砂礫層を地山と考え、そこで遺構の確認を行うこととした。

調査の結果、自然流路6条（SD52～57）を確認した。ただし、これらの多くはIV層上面まで流路の肩がみられることから、本来の検出面はIV層上面と考えられる。このため、検出した流路は断片的であり、検出できなかった流路も幾つか存在したと思われる。なお、平成18年度の調査ではIV層を無遺物層と判断しており、この遺構面の調査は行っていない。

さて、確認した流路であるが、第2、第3遺構面で検出したものよりも規模が大きく、水量が豊富であったと思われる。これらの溝は切り合い関係から、SD52・54・55→SD56→SD53・57の順に形成されたとみられ、その時期については、IV層から出土した遺物を含めて考えると、縄文時代後期から弥生時代の間と考えられる。

SD52（第26・27図、PL.3）

調査区北西隅において検出した。SD56によって切られる。部分的に確認したため詳細は不明であるが、東西方向にのびると考えられる。規模は検出長19.10m、幅5.80m以上、深さ0.50mを測る。埋土は下層にシルト層や砂層が堆積し、上層に粘質土層が堆積する。埋土中から遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

SD53（第8・26・27図、PL.3）

調査区西側において検出した。部分的な検出のため全体の状況は不明である。規模は検出長5.10m、幅1.40m以上、深さ0.60mを測る。埋土は下層に砂粒を多く含む層が堆積し、上層には粘質土層が堆積する（第8図、E-E'断面6～14層）。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SD54（第26・27・29図・PL.3・17・24）

調査区西側において検出した。東西方向へと蛇行しながらのびる。SD56によって大半が失われており、詳細は不明である。規模は検出長12.20m、幅8.40m以上、深さ0.70mを測る。埋土は、下層に砂層、砂礫層、シルト層と砂粒を含む層が堆積し、上層には粘質土層が堆積する。

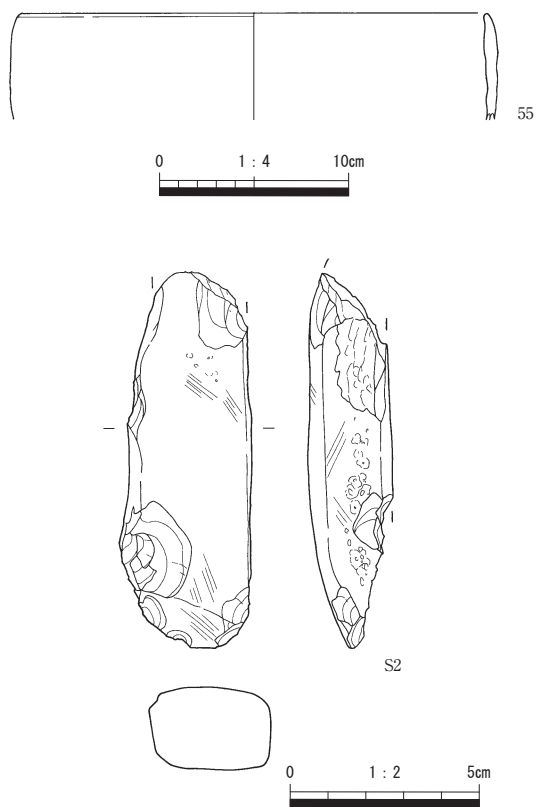
遺物は埋土中から55、S2が出土した。55は深鉢であり、S2は石斧である。時期は縄文時代後期から晩期頃と考えられる。

SD55（第26・27図、PL.3）

調査区東側において検出した。南東から北西方向へと伸びる。SD56によって切られ、大半が調査区外にあることから、詳細は不明である。規模は検出長15.30m、幅0.90m以上、深さ0.30mを測る。埋土には砂層が堆積する。時期は、遺物が出土しておらず不明である。



第28図 SD56堰検出状況



第29図 SD54出土遺物

SD56 (第26～28図、PL.3・4)

調査区の大半を占める。東から北西方向へと蛇行しながらのびる。規模は検出長35.90m、幅12.00m以上、深さ0.60mを測る。底面は水の流れてによって形成されたと考えられる凹凸がみられる。流路の中心には、木材がまとまった状態で出土した。これらの木材は、水の流れを堰止めるなど、流れの方向を制御する機能を有していたとみられ、人為的に配置された堰と考えられる。なお、この付近にはトチノミなどの堅果類がまとまった状態で出土したことから、堅果類のアク抜き施設としても利用されていたと考えられる。この木材には、自然の木を割ったもののほか、建築部材とみられるものがある。埋土中から遺物は出土しなかった。時期はSD54との関係から縄文時代後期以降と考えられる。

第29図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
55	SD54	埋土	深鉢	※24.5	△5.6	—	内外面：ナデ	にぶい黄色	縄文土器、煤付着

第29図 石器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
S2	SD54	埋土	石斧	最大長：※10.0、最大幅：3.4、最大厚：2.2、重量：104.4	粘板岩

SD57 (第26・27図、PL.3)

調査区南東側で検出した。南東から北西方向にかけてのびており、西側ではSD56を切る。規模は検出長20.10m、幅10.50m、深さ0.30mを測る。断面形は皿状または歪なすり鉢状を呈する。埋土は粘質土層、シルト層、砂層、砂礫層が堆積する。時期は、遺物が出土していないため詳細は不明だが、SD56との関係から縄文時代晩期以降と考えられる。

第6節 遺構に伴わない遺物

ここでは包含層から出土した遺物のほか、明らかに遺構の時期とは異なる遺物について掲載した。これらは概ね、Ⅰ層が中世から近世、Ⅱ層が古代から中世、Ⅲ層が古墳時代から古代、Ⅳ層が縄文時代から弥生時代の遺物が出土している。

土器・瓦（第30～35図、PL.18～23）

土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器が出土した。

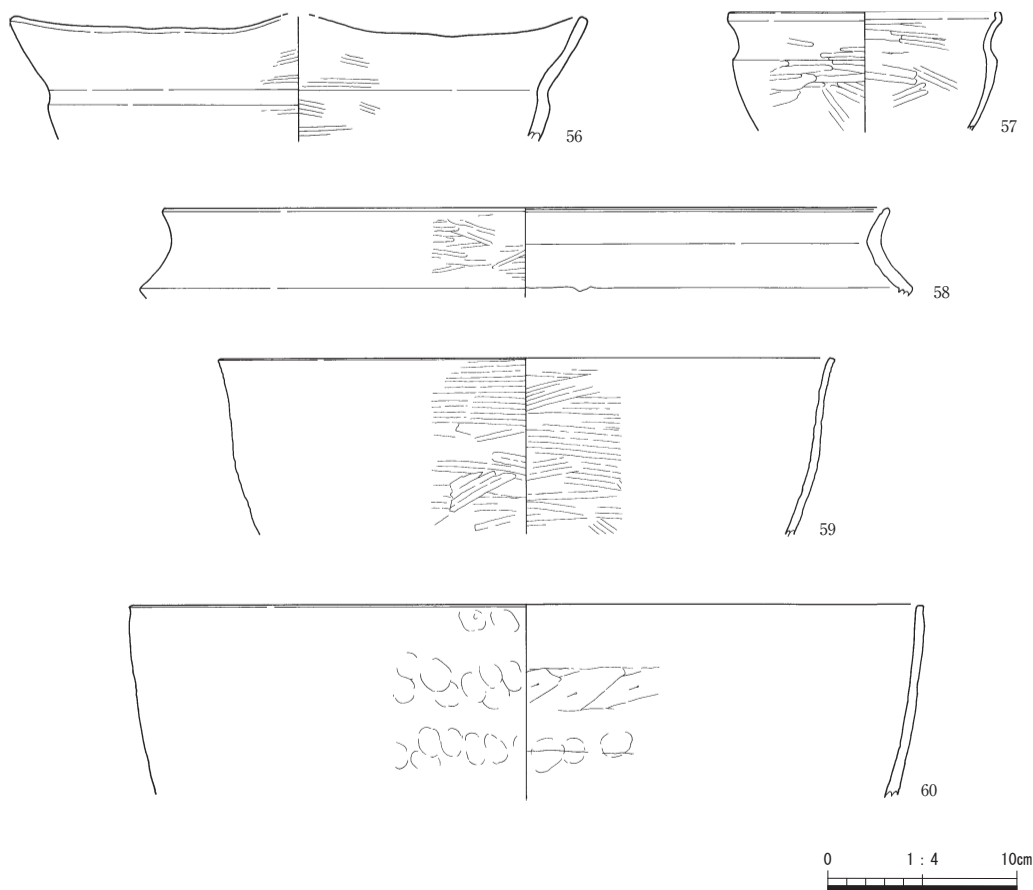
56～65は縄文土器である。主にⅣ層から出土している。粗製の深鉢が大半を占めており、精製品は少なく、浅鉢で若干認められる程度である。56～58は浅鉢である。56の器面には二枚貝による条痕が認められる。57、58は精製土器であり、57や58の器面にはヘラミガキが施される。59、60は深鉢であり、59は口縁部がやや外反し、60は口縁部がやや内湾する。ともに粗製土器であり、59の器面には二枚貝による貝殻条痕がみられる。61～65は口縁端部に貼付突帯文のある深鉢であり、このうち61、62、64、65には刻目が付く。

66～76は弥生土器であり、主にⅣ層から出土している。前期から中期のものが認められるが、出土量は少ない。66～69は壺である。66は口縁部が折り曲げられ、その下端部に刻目が付く。67～69は広口壺であり、67、68の端部には格子状の文様が施され、68、69には穿孔が認められる。70～73は甕であり、70～72は口縁部が「L」字形に屈曲する。72の頸部には刻目が付く。73は口縁部が「く」の字形に屈曲する甕であり、外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが施される。74は鉢、75は壺の底部である。76は甕の底部であり、この底面には穿孔が認められる。

77～89は古墳時代の土師器である。前期から後期のものが認められるが、中期のものが多。主にⅢ層から出土している。77、78は壺であり、77の頸部には刺突文が施される。78は口径27.7cmと大型であり、口縁部端部が外側に屈曲する。79～88は甕である。79、80は複合口縁の甕であり、79の口縁端部は外側にわずかに屈曲し、口縁部下端は突出する。80は口縁端部が平坦であり、口縁部下端にはわずかに稜が認められる。81～88は、口縁部が「く」の字形に屈曲する甕である。89は高杯であり、口縁部との境ににぶい稜が認められる。

90～114は須恵器であり、主にⅢ層から出土している。90～95は古墳時代の蓋杯である。90～92は杯蓋であり、90の口縁部と天井部の境に沈線が認められる。91の天井部には回転ヘラケズリが施されるが、その中心まで行われずヘラ切りの痕跡が残る。また、そこには板目の痕跡が認められる。93～95は杯身である。93の底部には回転ヘラケズリ、95にはナデが施されるが、94はヘラ切りの痕跡が残る。96は7世紀代の杯身であり、外面にはロクロによるヒダが顕著にみられる。97～101は古代の蓋杯である。97、98は杯蓋であり、97には輪状つまみが付く。99～101は杯身であり、99の底部には回転糸切り、101の底面には静止糸切りの痕跡が認められる。なお、101の底部には高台が付く。102は瓶類の底部、103～105は高杯である。106は長頸壺の肩部とみられ、内面に漆が付着する。108～114は甕であり、111、113の内面には車輪文が認められ、114の外面には格子状のタタキメが認められる。

115～122は古代の土師器であり、概ねⅢ層から出土している。115～119は杯であり、117の底部には高台が付く。120は高台付の杯である。121、122は皿であり、122の底部には高台が付く。また、内



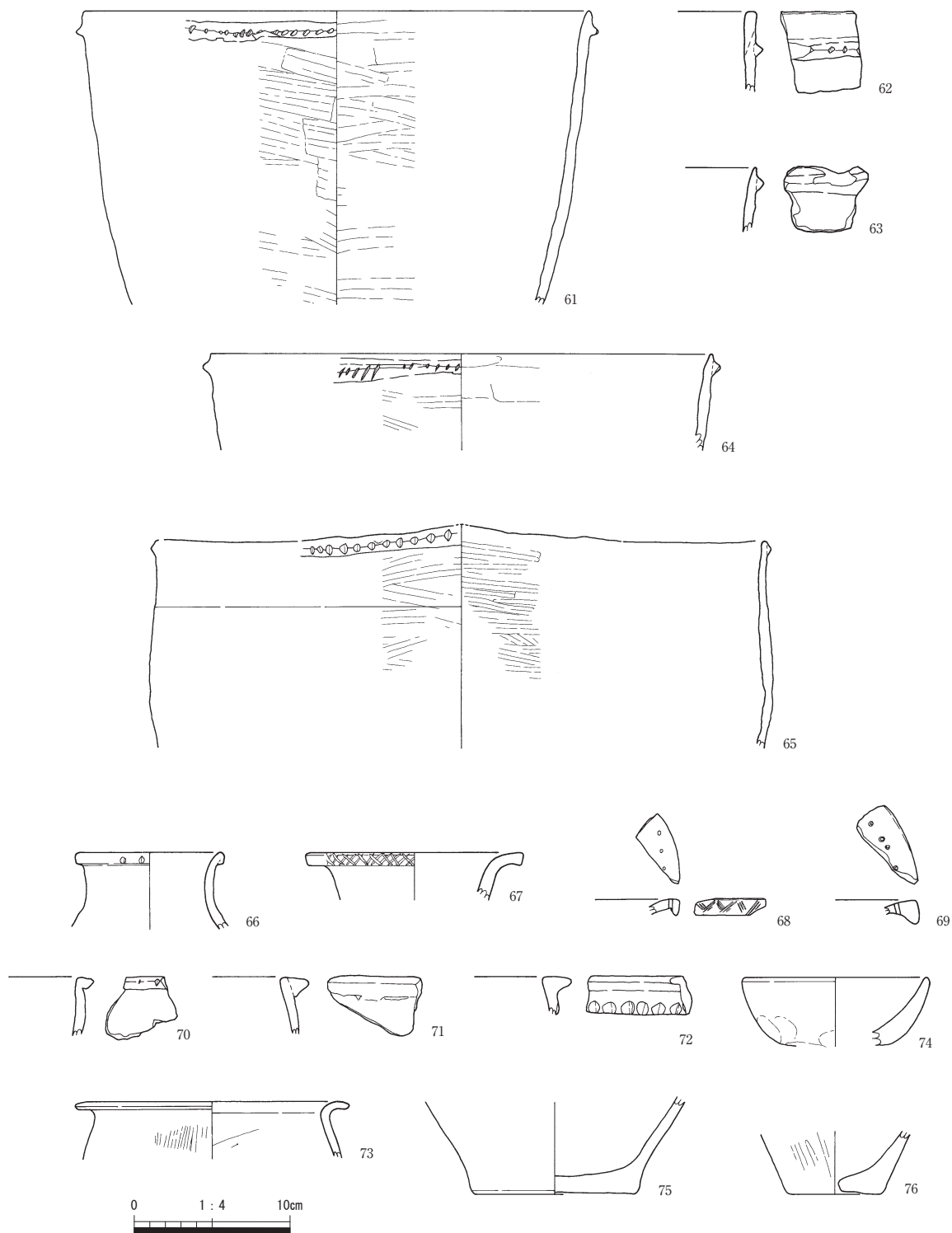
第30図 遺構に伴わない遺物①

第30・31図 土器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
56	-Y41	IV下	浅鉢	※30.4	△ 6.8	—	内外面：貝殻条婚	にぶい黄褐色	縄文土器、煤付着
57	-X40	IV下	浅鉢	※14.0	△ 6.4	—	内外面：ヘラミガキ	灰黄褐色	縄文土器
58	-Y41・42	IV下	浅鉢	※38.2	△ 4.7	—	外面：ヘラミガキ、内面：ナデ、端部沈線	灰黄褐色	縄文土器
59	-X41	IV下	深鉢	※32.1	△ 9.3	—	内外面：貝殻条婚	にぶい黄褐色	縄文土器、煤付着
60	-Y41・42	IV下	深鉢	※41.6	△10.2	—	外面：ナデ、内面：ケズリ後ナデ	にぶい黄褐色	縄文土器、煤付着
61	—	—	深鉢	※38.8	△14.3	—	外面：貝殻条婚、刻目突帯、内面：貝殻条婚	浅黄色	縄文土器、煤付着
62	—	—	深鉢	—	△ 5.3	—	外面：ナデ、刻目突帯、内面：ナデ	にぶい黄褐色	縄文土器、黒斑有
63	-Y42	IV	深鉢	—	△ 4.2	—	外面：ナデ、無刻目突帯、内面：ナデ	にぶい黄褐色	縄文土器、黒斑有
64	-X41	IV	深鉢	※32.1	△ 6.2	—	外面：貝殻条婚、刻目突帯、内面：ナデ	にぶい黄褐色	縄文土器、黒斑有
65	—	—	深鉢	※32.2	△18.9	—	外面：貝殻条婚、刻目突帯、内面：貝殻条婚	にぶい黄褐色	縄文土器、黒斑有
66	—	IV	壺	※ 9.0	△ 5.0	—	外面：ナデ、端部刻目、内面：ナデ	黒褐色	弥生土器
67	—	—	壺	※13.4	△ 3.1	—	外面：ナデ、端部格子状刻目、内面：ナデ	にぶい黄褐色	弥生土器
68	-Y42	IV	壺	—	△ 1.1	—	外面：斜格子文、内面：ナデ	にぶい黄褐色	弥生土器、穿孔有
69	—	—	壺	—	△ 1.6	—	調整不明	にぶい黄褐色	弥生土器、穿孔有
70	-Y42	IV	甕	—	△ 3.9	—	外面：ナデ、端部刻目、内面：ナデ	褐色	弥生土器
71	-Z41	IV	甕	—	△ 3.9	—	内外面：ナデ	にぶい黄褐色	弥生土器
72	-Y42	IV	甕	—	△ 2.5	—	外面：ナデ、頸部刻目、内面：ナデ	にぶい黄褐色	弥生土器
73	—	—	甕	※16.0	△ 3.7	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ	にぶい黄褐色	弥生土器
74	—	—	鉢	※11.6	△ 4.4	—	内外面：ナデ	浅黄褐色	弥生土器
75	—	—	壺	—	△ 6.2	※10.1	内外面：ナデ	にぶい黄褐色	弥生土器
76	—	—	甕	—	△ 4.2	※ 5.3	外面：ヘラミガキ、内面：ナデ	にぶい黄褐色	弥生土器、焼成後穿孔

面には暗文が施される。

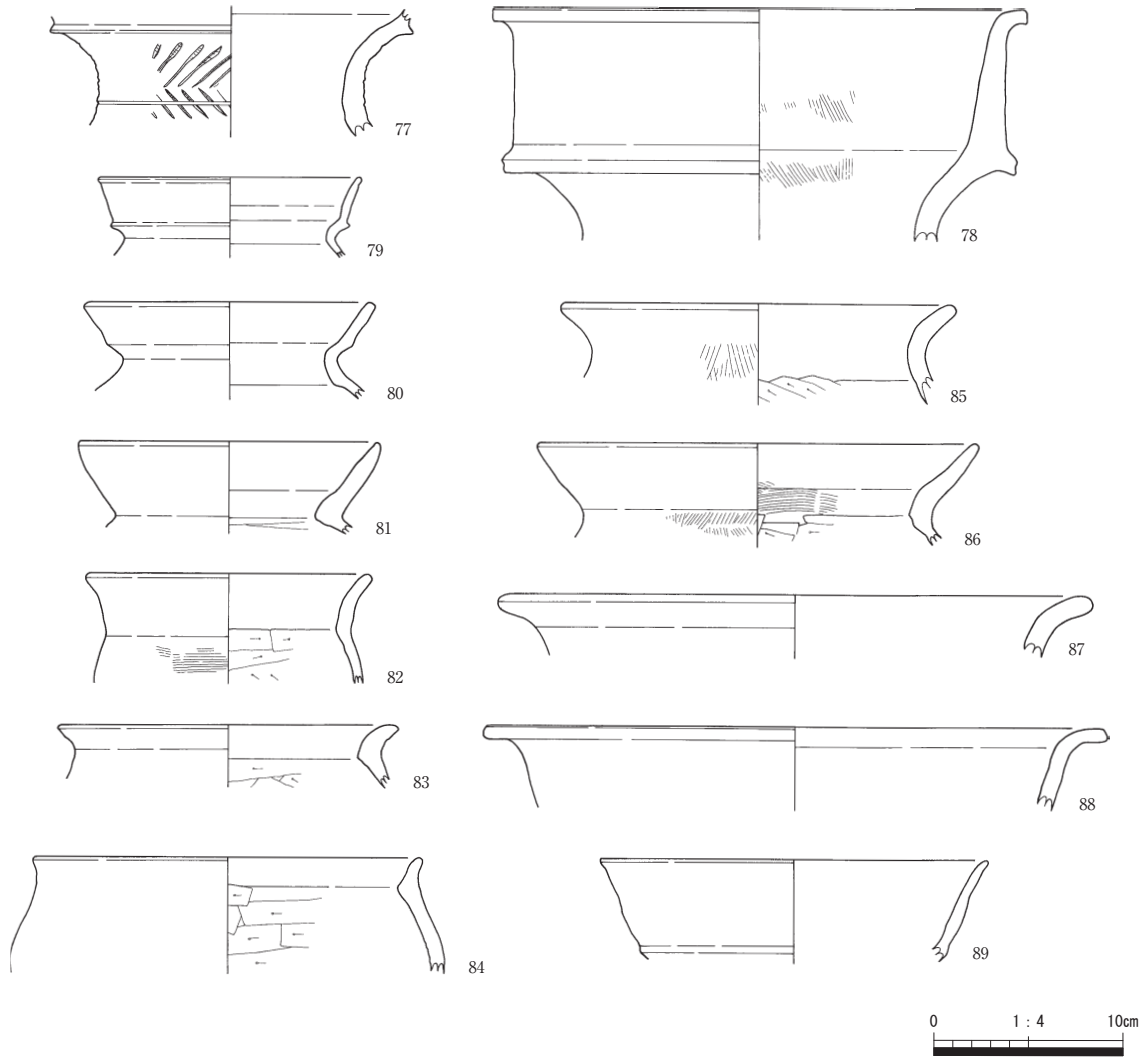
123~132は中世の土師器であり、概ねⅡ層から出土している。123~131は中世前期頃の杯であり、



第31図 遺構に伴わない遺物②

123、125～130の底部には回転糸切り、131にはヘラ切りの痕跡が認められる。132は土師質の鍋であり、口縁部が受け口状になる。

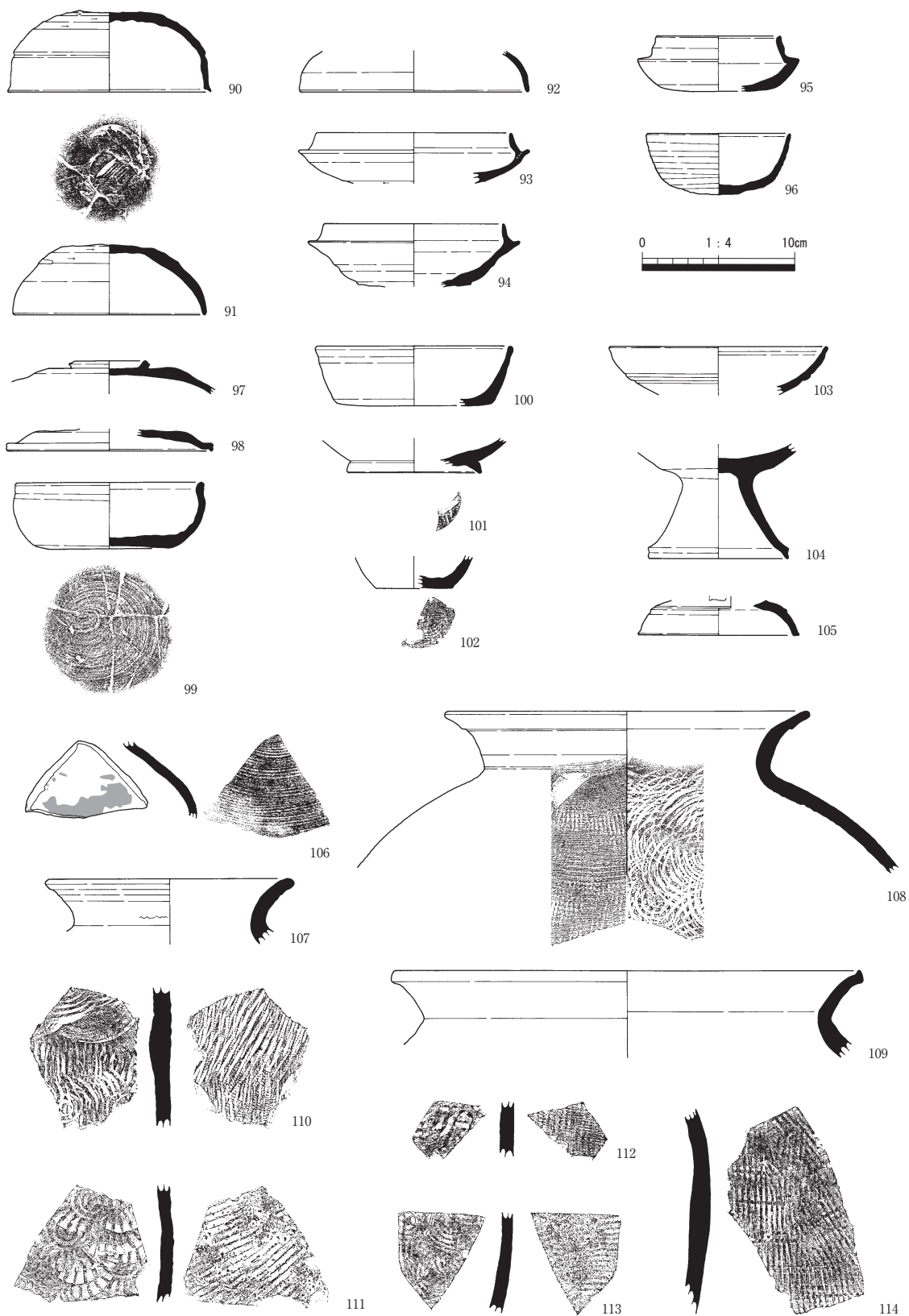
133～135はミニチュア土器である。136は甌の把手とみられ、端部の上面には刺突による穴が認められる。



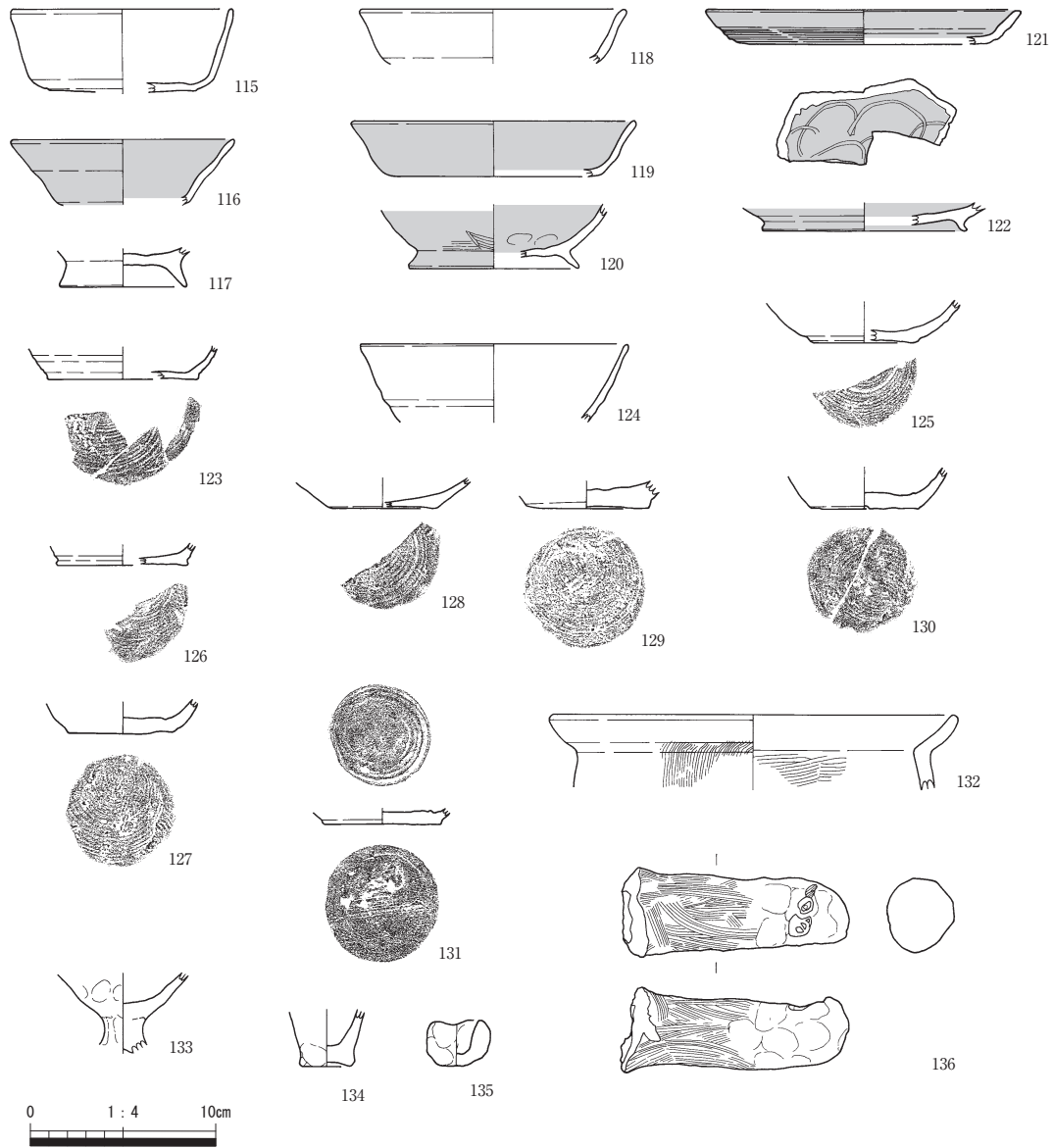
第32図 遺構に伴わない遺物③

第32・33図 土器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
77	-X41・42	Ⅲ	壺	—	△ 6.7	—	外面：ナデ、刺突文、沈線、内面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器
78	-Y41	Ⅲ	壺	※27.7	△12.2	—	外面：ナデ、内面：ハケメ後ナデ	にぶい黄橙色	土師器
79	-Y42	Ⅲ	甕	※13.6	△ 4.3	—	内外面：ナデ	にぶい橙色	土師器、黒斑有
80	-W40	Ⅳ	甕	※14.7	△ 5.1	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄褐色	土師器、煤附着
81	-Y・Z42	Ⅳ	甕	※15.7	△ 4.9	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器
82	-V38	Ⅲ	甕	※14.6	△ 5.8	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤附着
83	-Y42・43	Ⅲ	甕	※16.4	△ 3.3	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	明黄褐色	土師器、黒斑有
84	-V38	Ⅲ	甕	※20.2	△ 6.2	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤附着
85	-W39	Ⅲ	甕	※20.3	△ 5.3	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	灰黄褐色	土師器
86	-X41・42	Ⅲ	甕	※22.9	△ 5.0	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤附着
87	-U37	Ⅲ	甕	※29.6	△ 3.3	—	内外面：ナデ	浅黄色	土師器
88	-X42	Ⅳ	甕	※30.4	△ 4.4	—	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器
89	-Y43	Ⅳ	高杯	※20.3	△ 5.3	—	内外面：ナデ	にぶい橙色	土師器
90	—	—	杯蓋	※13.3	5.3	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰白色	須恵器、焼成不良
91	—	—	杯蓋	12.6	4.6	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器、天井部板目痕有
92	-Y42	Ⅲ	杯蓋	※14.8	△ 2.8	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器
93	-Y43	Ⅲ	杯身	※12.7	△ 3.4	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰黄色	須恵器
94	-Y40	Ⅲ	杯身	※11.7	△ 4.2	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器、底部未調整
95	—	—	杯身	※ 8.1	△ 3.7	—	外面：ヨコナデ、ナデ、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
96	-Y42	Ⅲ	杯身	※ 9.4	△ 4.1	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰白色	須恵器
97	-X41・42	Ⅲ	杯蓋	—	△ 2.2	—	外面：ヨコナデ、内面：ヨコナデ、ナデ	灰色	須恵器、輪状つまみ



第33図 遺構に伴わない遺物④



第34図 遺構に伴わない遺物⑤

第33図 土器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
98	—	—	杯蓋	※13.3	△ 1.5	—	内外面：ヨコナデ	灰白色	須恵器
99	-V38	Ⅲ	杯身	12.1	4.5	8.1	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ、ナデ	黄灰色	須恵器
100	-X42	Ⅱ	杯身	※12.6	5.0	※10.0	内外面：ヨコナデ	灰黄色	須恵器
101	-Y10	Ⅲ	杯身	—	△ 2.3	※8・6	外面：ヨコナデ、糸切り、内面：ナデ	灰色	須恵器
102	-X・Z42	Ⅲ	瓶類	—	△ 2.1	※ 5.1	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器、内面自然釉付着
103	—	—	高杯	※14.3	△ 3.2	—	外面：ヨコナデ、沈線2条、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
104	-V38	Ⅲ	高杯	—	△ 7.5	※ 9.1	外面：ヨコナデ、内面：ヨコナデ、ナデ	灰色	須恵器
105	-X41・42	Ⅲ	高杯	—	△ 2.6	※ 9.8	内外面：ヨコナデ	浅黄橙色	須恵器、焼成不良
106	-Y40	Ⅲ	壺	—	△ 5.0	—	外面：カキメ、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器、漆付着
107	-X41・42	Ⅲ	甕	※15.9	△ 4.3	—	内外面：ヨコナデ	黄灰色	須恵器、自然釉付着
108	-W40	Ⅲ	甕	※23.5	△10.7	—	外面：ヨコナデ、平行タタキ後カキメ、内面：当具痕	灰色	須恵器
109	-W40	Ⅲ	甕	※30.5	△ 5.8	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器、自然釉付着
110	—	—	甕	—	△ 9.0	—	外面：平行タタキ、内面：当具痕	灰色	須恵器
111	-W39	Ⅲ	甕	—	△ 7.5	—	外面：平行タタキ、内面：当具痕（車輪文）	灰色	須恵器
112	-Z41	Ⅱ	甕	—	△ 3.5	—	外面：平行タタキ、内面：当具痕	黄灰色	須恵器
113	-Y43	Ⅱ	甕	—	△ 6.6	—	外面：平行タタキ、内面：当具痕（車輪文）	黄灰色	須恵器
114	-Y41	Ⅱ	甕	—	△13.4	—	外面：格子タタキ、内面：ナデ	灰色	須恵器

第34図 土器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
115	-X41・42	Ⅲ	杯	※11.9	4.5	※7.9	外面：ナデ、ヘラ切り後ナデ、内面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器
116	-Y43	Ⅲ	杯	※11.8	△3.5	※7.2	内外面：ナデ	明赤褐色	土師器、赤彩
117	-X41・42	Ⅲ	高台付杯	—	△2.2	※6.7	内外面：ナデ	浅黄色	土師器
118	—	—	杯	※14.1	△3.0	—	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器、煤付着、赤彩
119	-Y42・43	Ⅲ	杯	※15.1	△3.0	※11.5	内外面：ナデ	明赤褐色	土師器、赤彩
120	—	Ⅱ	高台付杯	—	△3.6	※9.1	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器、赤彩
121	—	—	皿	※16.7	△1.8	※12.8	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器、赤彩
122	—	—	高台付杯	—	△1.5	※10.8	外面：ナデ、内面：ナデ、螺旋状暗文	明赤褐色	土師器、赤彩
123	-W40	Ⅲ	杯	—	△1.8	※7.9	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	浅黄色	土師器
124	-W39	Ⅱ	杯	14.3	△4.2	—	外面：ヨコナデ	灰白色	土師器、煤付着
125	-X41	Ⅲ	杯	—	△2.3	※5.4	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	にぶい黄橙色	土師器
126	-Y43	Ⅳ	杯	—	△1.1	※6.8	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙色	土師器
127	—	—	杯	—	△2.0	※5.7	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	浅黄褐色	土師器
128	-W・X41	Ⅱ	杯	—	△1.7	※5.5	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	にぶい黄褐色	土師器
129	—	—	杯	—	△1.5	※6.6	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	橙色	土師器
130	—	—	杯	—	△2.2	※5.9	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	橙色	土師器
131	-Y42	Ⅲ	杯	—	△0.9	6.3	外面：ヨコナデ、ヘラ切り、内面：ヨコナデ	灰黄褐色	土師器、底部板目痕
132	-W・X41	Ⅱ	鍋	※21.5	△4.0	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ハケメ	浅黄褐色	土師器
133	—	—	ミニチュア土器	—	△4.2	—	内外面：ナデ	にぶい黄褐色	土師器
134	—	—	ミニチュア土器	—	△3.0	2.6	内外面：ナデ	にぶい黄褐色	土師器
135	—	—	ミニチュア土器	24	25	1.2	内外面：ナデ	にぶい黄色	土師器
136	—	—	把手	—	—	—	外面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器、黒斑有

137～139、151は施釉陶器であり、Ⅰ層から出土している。137は天目茶碗、138は瀬戸美濃の皿、139は唐津の皿、151は陶器の碗である。140は中世須恵器の鉢であり、口縁部が玉縁状に膨らむ。141はやや軟質の須恵質の播鉢であり、播目がつく。142、143は外面に格子状の叩きの痕跡が認められる甕であり、142は瓦質、143は土師質で内面にハケメを施す。144は瓦質の火鉢とみられ、外面に菱形のスタンプが押される。145は瓦質の鉢である。

146、147は白磁であり、146の口縁部は外側に折れ、147の内面には沈線が認められる。138～150は青磁の碗であり、148は外面に鎬連弁文のあるB-I類、149は口縁端部がやや外反するD類、150はE類とみられる。

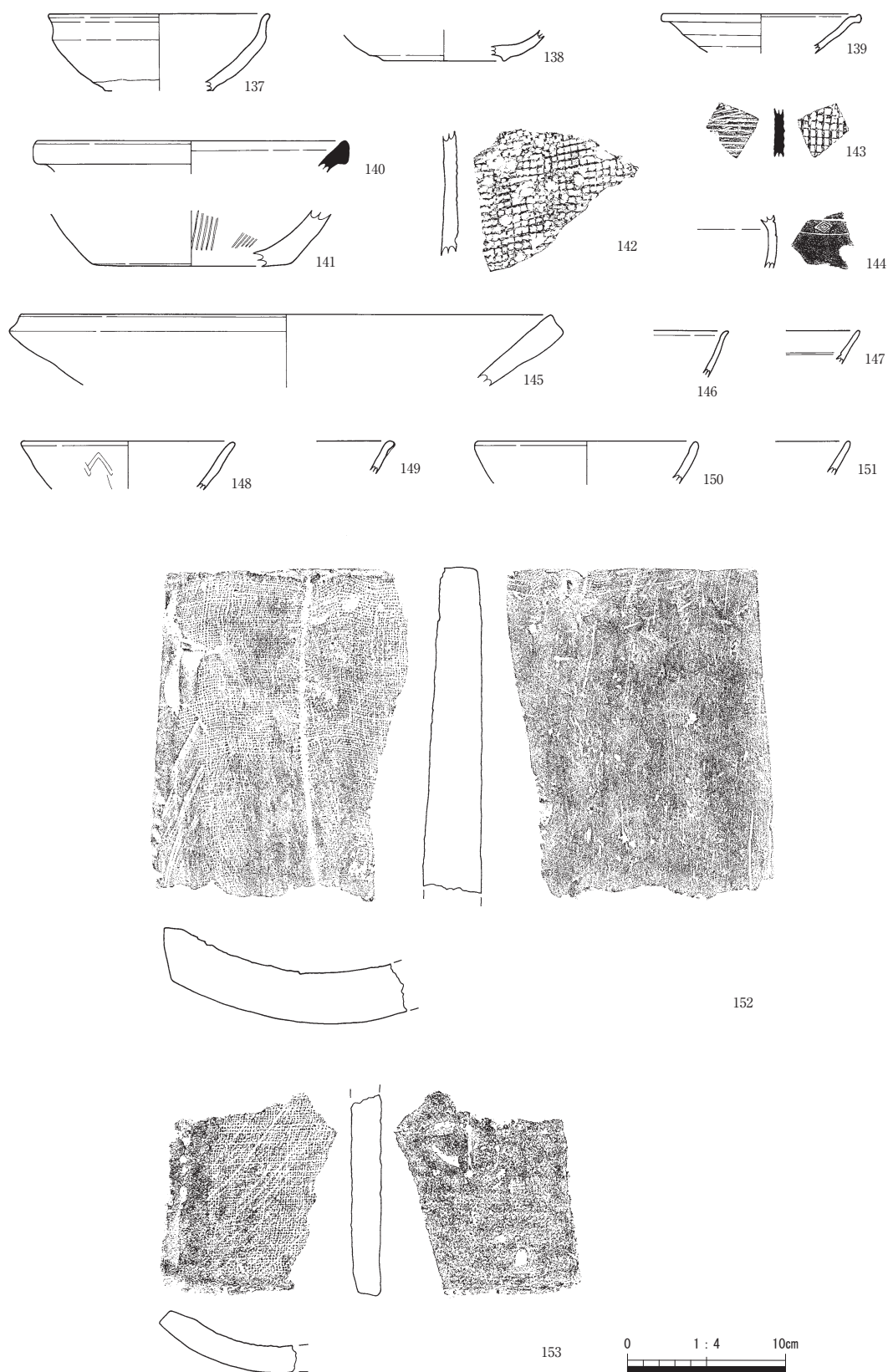
152、153は瓦であり、凸面はヘラケズリやナデが施され、凹面には布目の痕跡が残る。

石器・玉類（第36～39図・PL. 24・25）

石器はⅢ層、Ⅳ層から石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、石庖丁、磨製石斧、敲石、凹石、砥石、石鋏、管玉の素材片、管玉が出土した。

S3～6は石鏃である。S3・4は凹基式の石鏃、S5は有茎式の石鏃、S6は平基式の石鏃であり、S3は黒曜石製、それ以外はサヌカイト製である。S7はサヌカイト製の石錐、S8は黒曜石製の石匙、S9は玉髓製の楔形石器、S10・11はサヌカイト製のスクレイパーである。

S12は石包丁であり、おおよそ半分を欠く。楕円形を呈し、背部には紐を通すための孔を両面から穿つ。S13は扁平片刃石斧であり、片側の側面を欠く。S14～16は両刃の石斧であり、S14は刃部がつぶれ平坦となる。S15は基部に敲打の痕跡がある。S16は柄と固定するためと思われる窪みが4面で認められる。



第35図 遺構に伴わない遺物⑥

S17・19は敲石であり、歪な円柱状の石の先端に敲打の痕跡が残る。S18・20は凹石である。側面や上面、下面の中央に敲打の痕跡があり、中央は窪む。S21・22は砥石である。S23・24は石鋏であり、S23は撥形を呈し、刃部の先端を欠く。S24は基部側を細くした有肩形をしており、基部と刃部の一

第35図 土器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
137	-Y41	I	天目茶碗	※13.8	△4.8	—	内外面：ナデ	黒褐色	陶器
138	-Y42	I	碗	—	△2.0	—	内外面：ナデ	浅黄色	瀬戸・美濃
139	-Y41	I	皿	※12.4	△2.4	—	内外面：ナデ	灰白色	唐津
140	-Y42	IV	鉢	※19.5	△2.0	—	内外面：ナデ	灰色	須恵器
141	-Y41	II・III	播鉢	—	△3.5	※12.3	内外面：ナデ	灰白色	瓦質土器
142	-V37	—	甕	—	△9.1	—	外面：格子タタキ、内面：ナデ	にぶい黄橙色	瓦質土器
143	—	II	甕	—	△3.1	—	外面：格子タタキ、内面：ハケメ	浅黄橙色	
144	-X39	III	火鉢	—	△3.3	—	外面：ナデ、スタンプ文、沈線、内面：ナデ	暗灰黄色	瓦質土器、断面漆付着
145	-W39	II	鉢	※33.4	△4.5	—	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	瓦質土器
146	—	—	碗	—	△2.9	—	内外面：ナデ	灰白色	白磁
147	-Y42	II	碗	—	△2.1	—	内外面：ナデ	灰白色	白磁
148	-Y・Z42	I	碗	※13.2	△3.0	—	外面：ナデ、鑄蓮弁文、内面：ナデ	オリーブ色	青磁
149	-Y41	I	碗	—	△2.1	—	内外面：ナデ	灰オリーブ色	青磁
150	—	II	碗	※13.8	△2.7	—	内外面：ナデ	灰オリーブ色	青磁
151	—	—	碗	—	△2.2	—	内外面：ナデ	灰色	陶器
152	-X41	II	瓦	—	—	—	外面：布目、内面：ケズリ	灰色	
153	—	—	瓦	—	—	—	外面：布目、ケズリ、内面：ナデ	灰色	

部を欠く。

S25は管玉の素材片とみられる。側面には溝が認められることから、施溝分割によるものと考えられる。表面には一方から磨かれたと思われる筋状の痕跡が残る。このためA技法によるものとみられる。材質は緑色凝灰岩である。

J1は管玉であり、半分以上が欠損している。両面穿孔により孔をあける。

鉄器 (第40図、PL.25)

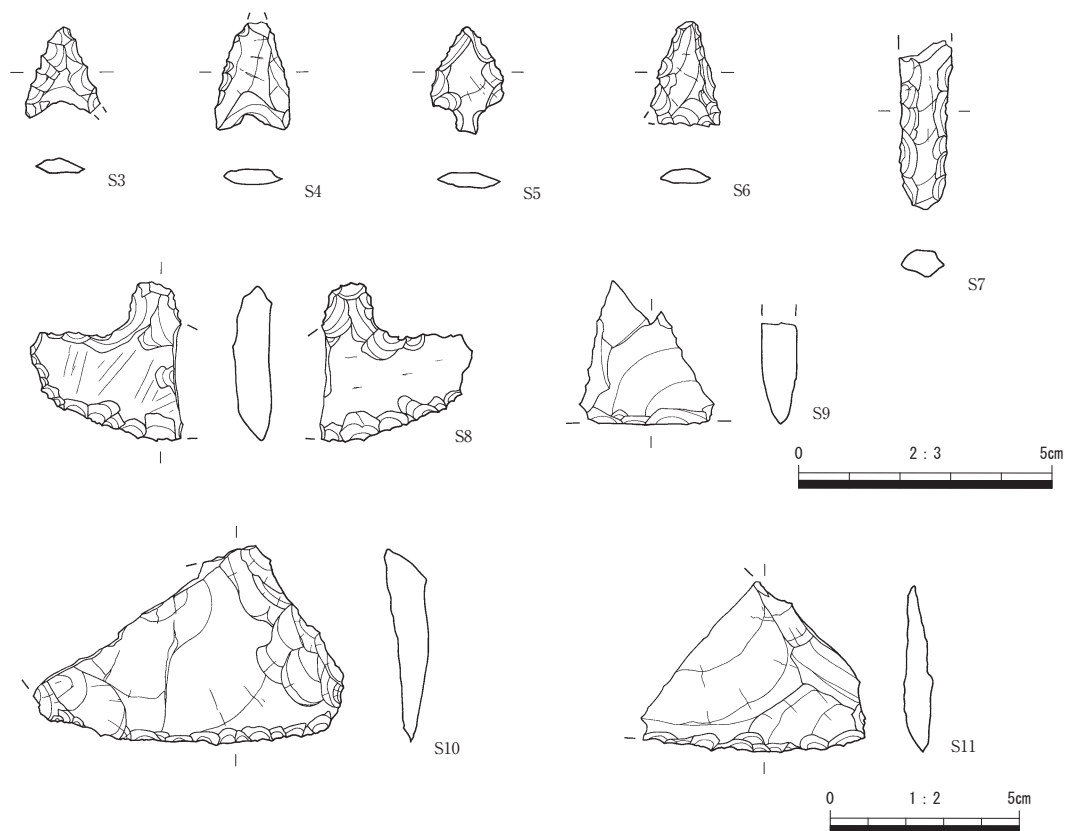
鉄器はII・III層から摘鎌、鍬、馬鍬が出土しているが、出土量は少ない。

F1は摘鎌であり、金属製の刃に木製の柄が装着された状態で出土した。刃部は厚さ1mmほどの鉄板を使用しており、柄を固定するために両端を折り曲げる。また中心部では、同じく柄を固定するため、幅2～3mmほどの鉄釘が打たれる。刃先は使用のためか、中心部が若干内側に湾曲する。柄は厚さ5mmの広葉樹（アカガシ亜属）の板を用いており、中心部には紐を通すための円形の孔が2つ穿たれる。F2は有茎式の鍬とみられ、前回の調査においても若干出土している。先端部は細く尖り、断面形は円形をなす。また、茎の断面形は方形を呈する。F3は馬鍬の一部と考えられ、基部との接続部分で折れている。断面形は方形をなし、先端部にかけて細くなる。馬鍬についても前回の調査で出土している。

木製品 (第40～42図、PL.7～9・26・27)

木製品はII層、III層で出土しており、田下駄、棒状木製品、斎串、漆器椀、桶、曲物、木簡などが出土している。その大半が加工痕跡のある板状や棒状をなす不明品である。このほか、前回の調査でも指摘されているが、木材を棒状に割り、その先端部が炭化する棒状木製品が多く出土しており、今回の調査では161点と、かなりの数となる。

W23は田下駄であり、割れや腐食のため側面や端部は失われる。厚さ2.8cmの板材を使用しており、



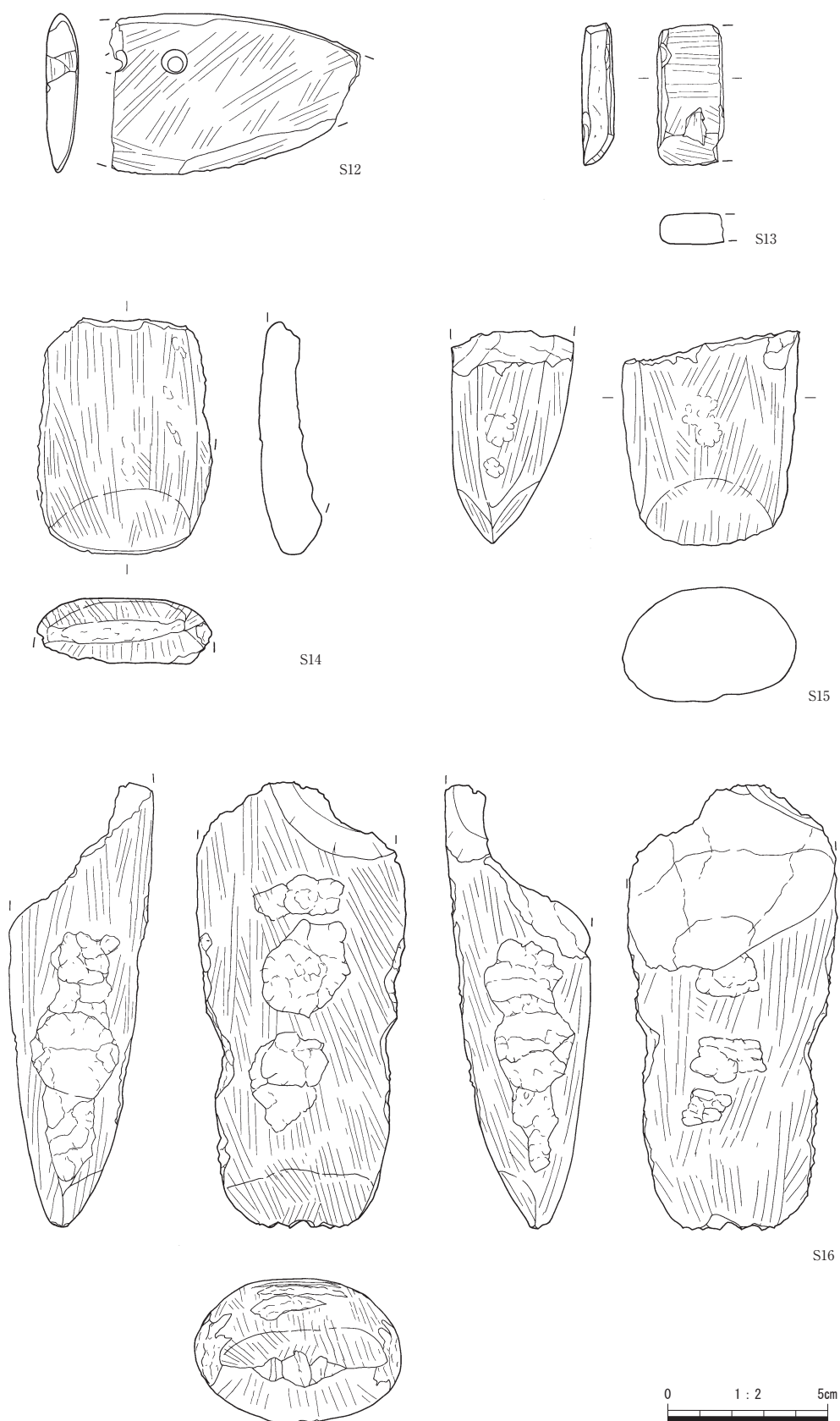
第36図 遺構に伴わない遺物⑦

第36図 石器観察表

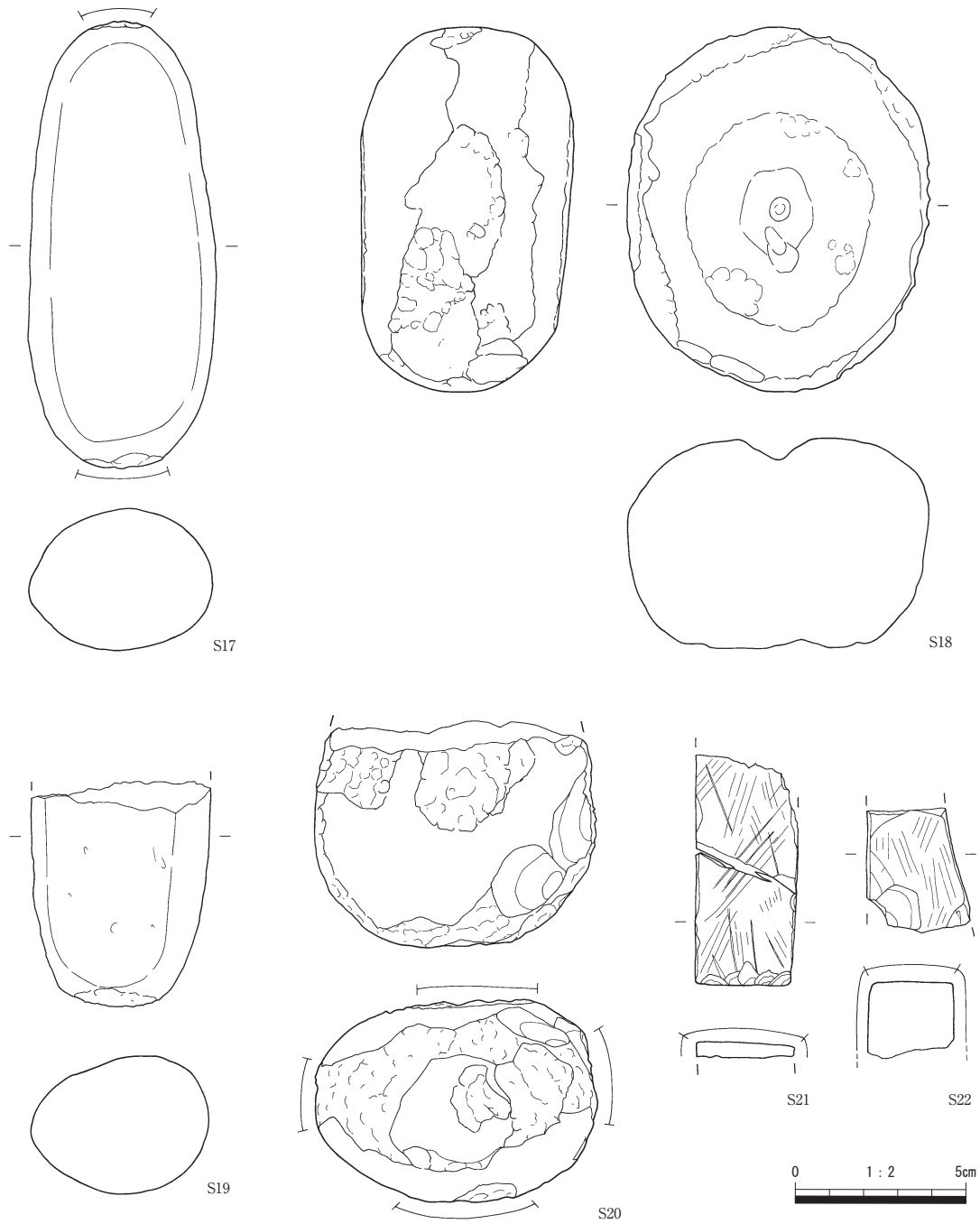
遺物番号	グリッド名	層位	器種	法量 (cm・g)	備考
S3	-Y42	IV下	石鏃	最大長：1.8、最大幅：1.5、最大厚：0.3、重量：0.6	黒曜石、凹基式
S4	-X41	IV	石鏃	最大長：2.2、最大幅：1.5、最大厚：0.3、重量：1.0	サヌカイト、凹基式
S5	-X42	III	石鏃	最大長：2.1、最大幅：1.5、最大厚：0.3、重量：0.9	サヌカイト
S6	-X40	III	石鏃	最大長：2.1、最大幅：1.4、最大厚：0.3、重量：0.7	サヌカイト、平基式
S7	-X41	—	石錐	最大長：△3.4、最大幅：1.0、最大厚：0.5、重量：△2.2	サヌカイト
S8	-X41	—	石匙	最大長：3.2、最大幅：△2.9、最大厚：0.7、重量：△6.5	黒曜石
S9	—	—	楔	最大長：△2.9、最大幅：△2.7、最大厚：0.7、重量：△4.6	玉髄
S10	-X42	IV	スクレイパー	最大長：5.2、最大幅：8.1、最大厚：0.9、重量：△42.7	サヌカイト
S11	—	II	スクレイパー	最大長：△4.5、最大幅：△5.9、最大厚：0.8、重量：△22.5	サヌカイト
S12	—	III	石包丁	最大長：5.0、最大幅：△7.7、最大厚：0.9、重量：△54.2	
S13	-Y43	IV下	扁平片刃石斧	最大長：4.3、最大幅：△2.0、最大厚：1.0、重量：△17.2	
S14	-X40	IV	石斧	最大長：△7.3、最大幅：△5.5、最大厚：△2.0、重量：△108.5	敲打により刃部が平坦
S15	—	—	石斧	最大長：△6.7、最大幅：5.5、最大厚：3.6、重量：△207.0	
S16	-Y43	IV	石斧	最大長：△13.9、最大幅：6.5、最大厚：4.5、重量：△500.0	4面を敲打又は打ち欠く

中心部分には、一辺2.2cmほどの歪な方形を呈する孔が3ヶ所で認められる。

W24～36は棒状の木製品であり、W24は木材を棒状に割ったものであり、先端が炭化する。W26～30は表面をケズリで調整しており、W25～27・30のように先端部を尖らせたもの、W28のようにヘラ状に加工したものなどがある。W31は湾曲しており、端部が炭化する。W32は箸とみられ、先端が細くなり、表面にはケズリが施される。W33は先端にかけて細くなり、端部付近で段をなす。W34・35は片方の端部をまるく加工するものであり、SD30のほか、前回の調査や平成22年度に実施した坂長第8遺跡からも出土している。W36は端部の両側面に切れ込みが認められる。



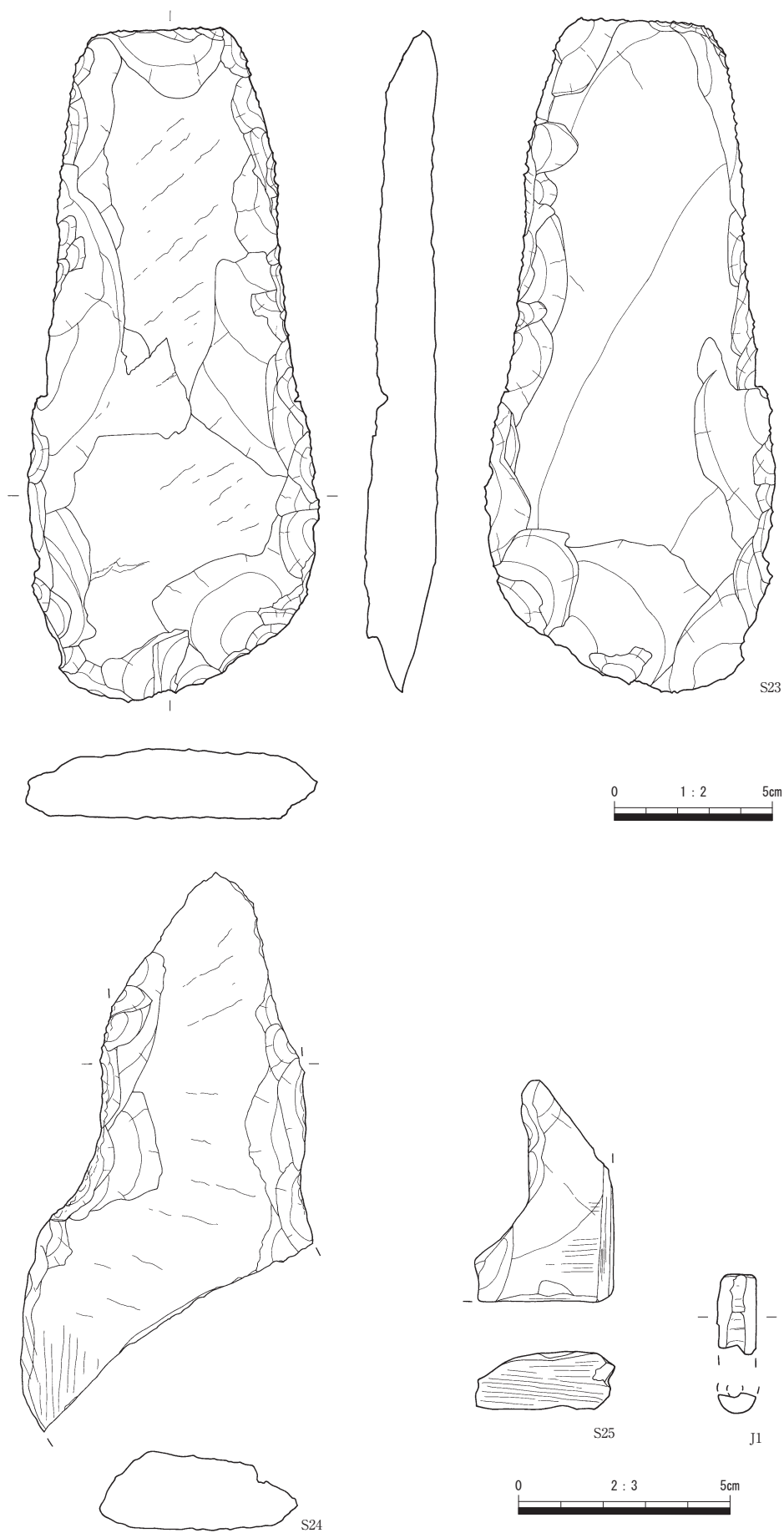
第37図 遺構に伴わない遺物⑧



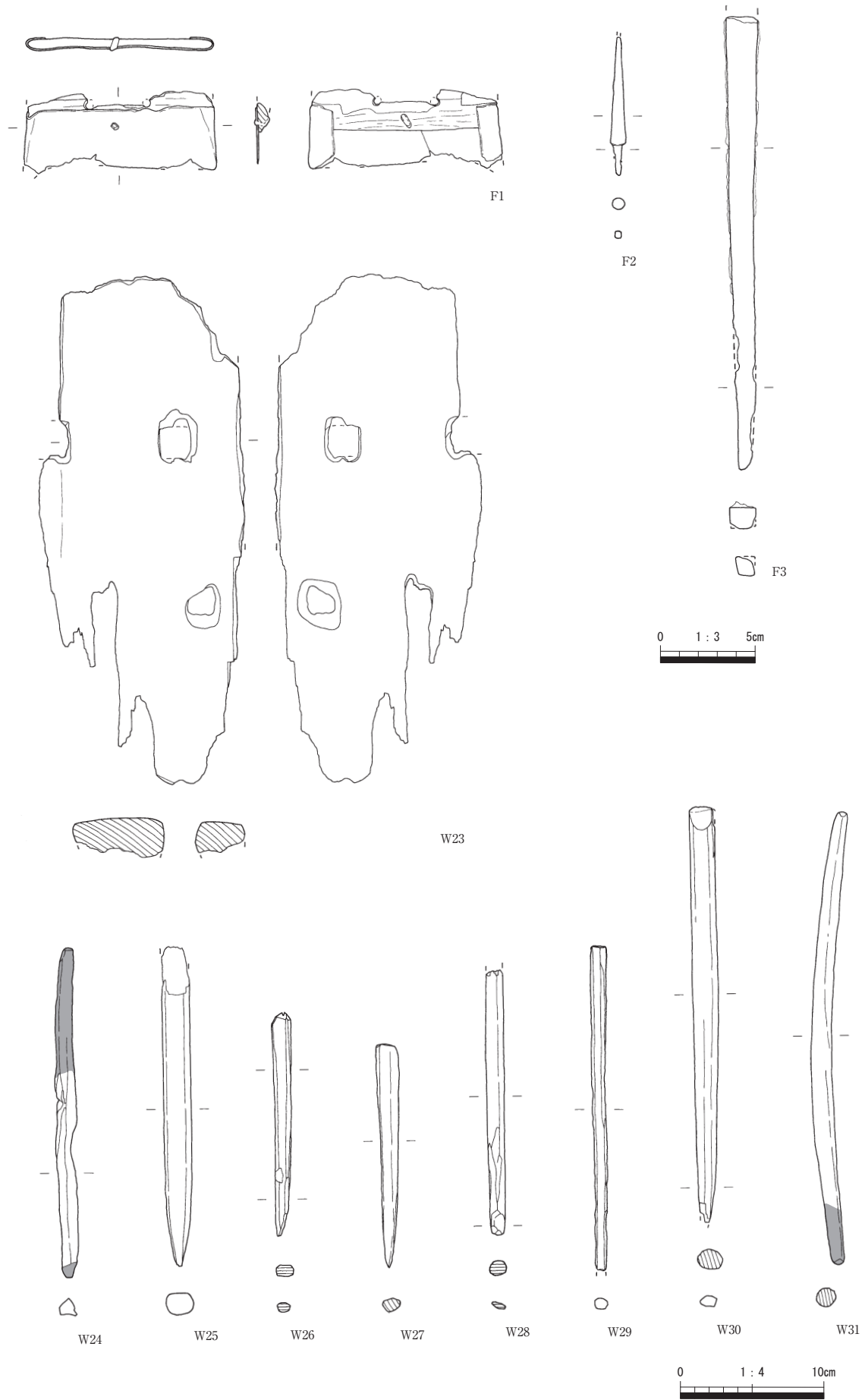
第38図 遺構に伴わない遺物⑨

第38・39図 石器・玉類観察表

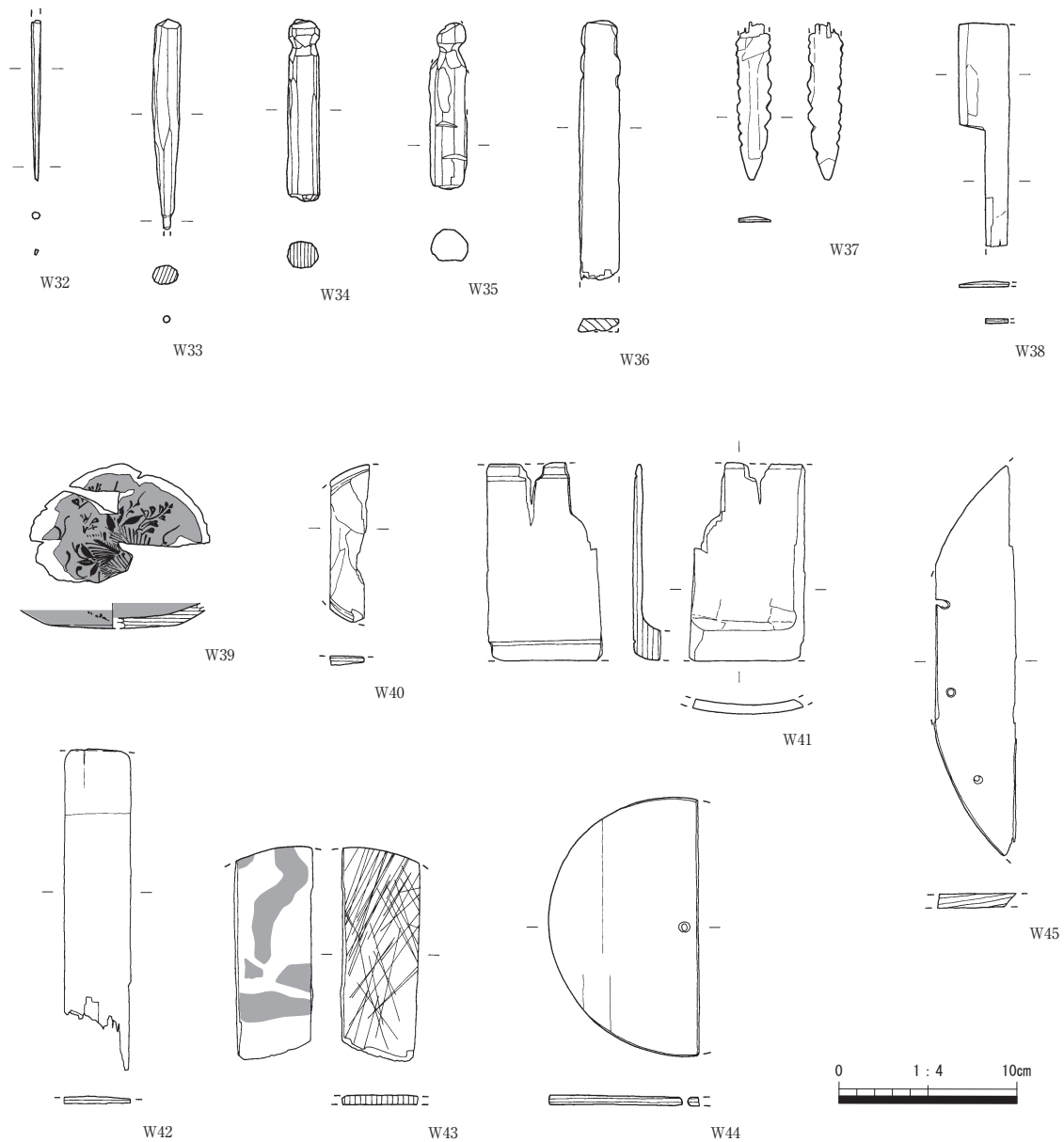
遺物番号	グリッド名	層位	器種	法量 (cm・g)	備考
S17	—	—	敲石	最大長：13.1、最大幅：5.5、最大厚：4.2、重量：415.0	
S18	—	—	凹石	最大長：10.7、最大幅：8.8、最大厚：6.1、重量：750.6	
S19	-Y40	Ⅲ	敲石	最大長：△6.6、最大幅：5.3、最大厚：4.1、重量：△193.6	
S20	—	—	凹石	最大長：△6.6、最大幅：8.3、最大厚：5.9、重量：△500.0	
S21	—	—	砥石	最大長：△3.8、最大幅：2.9、最大厚：△0.5、重量：△13.3	
S22	—	—	砥石	最大長：△3.6、最大幅：3.0、最大厚：△2.2、重量：△33.4	
S23	-X41	Ⅳ	石鍬	最大長：21.3、最大幅：9.2、最大厚：2.2、重量：570.0	
S24	-Y・Z41	Ⅲ	石鍬	最大長：19.7、最大幅：8.8、最大厚：2.4、重量：355.4	
S25	—	—	玉素材	最大長：△5.3、最大幅：3.3、最大厚：1.4、重量：△18.6	緑色凝灰岩、A技法
J1	—	—	管玉	最大長：△1.9、最大幅：0.9、最大厚：0.5、重量：△0.9	緑色凝灰岩



第39図 遺構に伴わない遺物⑩



第40図 遺構に伴わない遺物⑪



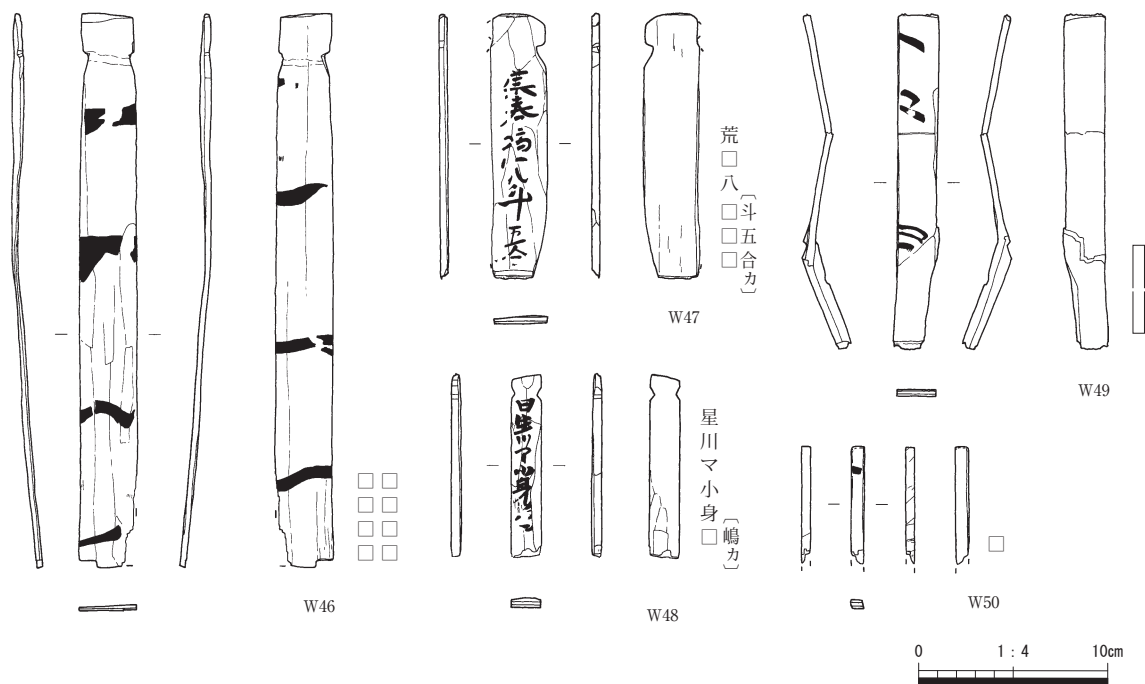
第41図 遺構に伴わない遺物⑫

第40図 鉄製品観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
F1	-U37	II	摘鎌	最大長：△4.2、最大幅：10.2、最大厚：0.7（刃部：0.1）、重量：31.4	木質残（アカガシ亜属）、鉄釘で固定
F2	-Y41	III	鎌	最大長：△23.7、最大幅：1.7、最大厚：1.1、重量：177.7	馬銜か
F3	-V39	II	馬銜	最大長：7.2、最大幅：0.8、最大厚：0.7、重量：8・6	

第40・41図 木製品観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	法量(cm)	備考
W23	-X41	II	田下駄	最大長：△35.4、最大幅：△14.4、最大厚：△2.8	
W24	-X41	II	棒状木製品	最大長：23.0、最大幅：1.6、最大厚：1.2	端部炭化
W25	-W39・40	II	棒状木製品	最大長：△22.3、最大幅：2.1、最大厚：1.6	
W26	-W39・40	III	棒状木製品	最大長：15.6、最大幅：1.4、最大厚：0.8	
W27	-W39・40	III	棒状木製品	最大長：15.6、最大幅：1.7、最大厚：1.0	
W28	-X39・40	III	棒状木製品	最大長：△18.5、最大幅：1.4、最大厚：1.1	
W29	-W・X41	II	棒状木製品	最大長：22.6、最大幅：1.2、最大厚：0.8	
W30	-W40	III	棒状木製品	最大長：29.1、最大幅：1.8、最大厚：1.5	
W31	-X41	III	棒状木製品	最大長：31.6、最大幅：1.5、最大厚：1.3	一方の端部炭化
W32	-V39	II	箸	最大長：△9.0、最大幅：0.6、最大厚：0.5	



第42図 遺構に伴わない遺物⑬

第41・42図 木製品観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	法量(cm)	備考
W33	-V37	—	棒状木製品	最大長：△11.8、最大幅：1.6、最大厚：1.2	
W34	-U37	—	棒状木製品	最大長：10.2、最大幅：1.9、最大厚：1.6	
W35	-X40	II	棒状木製品	最大長：9.4、最大幅：2.2、最大厚：1.8	
W36	-W39	II	棒状木製品	最大長：△14.6、最大幅：2.3、最大厚：0.8	両側面に切れ込み
W37	-V38	III	斎串	最大長：△8.9、最大幅：2.1、最大厚：0.3	
W38	-U37	—	板状木製品	最大長：△12.6、最大幅：2.9、最大厚：0.4	片方に切れ込み
W39	-W39	II	椀	口径：一、器高：△1.5、底径：※7.6	内外面に黒地に明赤褐色の絵付
W40	-Z41	II	桶	直径：※9.0、最大厚：0.6	幅0.4cm、深さ0.1cmの溝が巡る
W41	-X40	—	桶	直径：※23.0、器高：11.1	外面に幅0.2cm、深さ0.1cmの溝2条
W42	-X41	III	曲物	直径：※18.0、最大厚：0.5	
W43	-W40	III	曲物	直径：※17.0、最大厚：0.6	外面に漆を塗布、内面に線状の痕跡
W44	-W40	III	曲物	直径：14.5、最大厚：0.6	中央に穿孔、蓋
W45	-W39	III	曲物	直径：※21.9、最大厚：0.8	周囲に穿孔
W46	-V38	III	木筒	最大長：29.4、最大幅：3.1、最大厚：0.3	ヒノキ科、板目、上端・左右両端ケズリ、下端ケズリ、一部折れ、切れ込み部に紐の痕跡、表「<□□□□」、裏「<□□□□」、この形状に加工される以前の板に記された文字の一部が文字でない可能性有、032型式
W47	-W39	III	木筒	最大長：14.1、最大幅：△3.1、最大厚：0.4	ヒノキ科、板目、上下端切断、右端ケズリ、「<荒□□八□□□(斗五合カ)」、二文字目「春、春」の可能性有、五文字目の字の形は「斗」だが、数量として「升」の可能性有、032型式
W48	-V38	II	木筒	最大長：9.7、最大幅：1.7、最大厚：0.6	ヒノキ科、板目、上下端切断、左右両端ケズリ、「<星川マ小身□(嶋カ)」、032型式
W49	-W39	II	不明	最大長：△17.8、最大幅：2.5、最大厚：0.4	スギ、板目、上端切断、下端折れ、左右両端ケズリ、「□□□□」、この形状に加工される以前の板に記された文字の一部が文字でない可能性有、019型式
W50	-W39・40	II	不明	最大長：△6.2、最大幅：0.8、最大厚：0.4	ヒノキ科、板目、上端・右端ケズリ、左端二次的ケズリ、下端折れ、「□」、019型式

W37は斎串であり、厚さ3mmほどの薄い板を用い、先端を尖らせ、両側面に切れ込みが多数入れられる。W38は板状木製品であり、片側には「L」字形の切れ込みがみられる。W39は漆塗りの椀であり、底部を除く内外面に黒漆が塗布され、その上に赤漆で植物が描かれている。W40は桶の底板とみられ、周りに幅4mmの浅い溝が巡る。W41は桶の側板であり、内面には鑿などによる加工の痕跡が認められ、外面の上下端には幅2mmの浅い溝がつく。

W42～45は曲物であり、W42の内面には側板を配置する際の目印の線刻が認められる。W43の片面には漆が塗布され、もう片面には使用の痕跡とみられる筋状の傷が多数認められる。W44の中心には円形の孔が穿たれており、蓋板とみられる。W45縁には側板を固定するための紐を通す孔が3ヶ所で認められる。

W46～48は木簡、W49・50は墨痕の認められる板状ないしは棒状の木製品である。W46は切れ込み部分に紐の痕跡が残る。表面に「□□□□」、裏面に「□□□□」とそれぞれ4ヶ所で墨痕が認められるが、それらは、この形状に加工される以前の板に記された文字の一部か、文字でない可能性がある。W47は表面に「荒□□八□□□」とあり、二文字目は「春」、三文字目は「春」、五文字目は「斗」、六文字目は「升」、七文字目は「五」、八文字目は「合」の可能性が考えられる。W48は「星川マ小身□」とあり、六文字目は「嶋」の可能性はある。W49は板状の木製品であり、2ヶ所に切れ目を入れ折っている。表面に墨痕が認められるが、W46と同様、この形状になる以前の板に記された文字の一部か、文字でない可能性がある。W50は棒状の木製品であり、表面に墨痕が認められる。

第4章 坂長第8遺跡の調査成果

第1節 調査の概要と層序

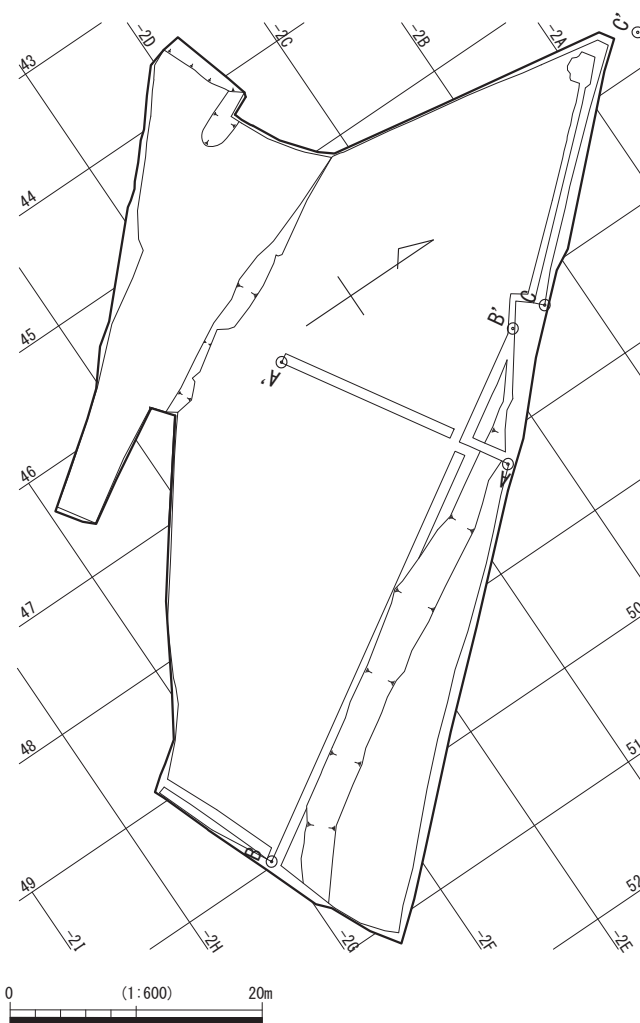
1. 調査の概要

坂長第8遺跡は、標高226mの越敷山から北へ派生する丘陵の先端部に位置する。調査地は2つの尾根に挟まれた北西方向に開く谷の下手にあり、南東から北西方向にかけて緩やかに下る地形となる。遺跡のすぐ北側には幅80mほどの谷があり、そこには坂長第7遺跡がある。さらに北側には標高55mほどの長者原台地が広がっており、そこには古墳時代後期頃の長者原古墳群のほか、坂中廃寺、長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡、大殿下ノ原遺跡、坂長第6遺跡といった古代の寺院跡や相見郡衙との関連性がうかがわれる遺跡が所在する。

ここは、平成18年度と平成22年度において発掘調査が行われており、平成18年度では古墳時代中期中葉から後期前葉頃の竪穴建物や時期不明の段状遺構、土坑、ピット、平成22年度には弥生時代中期頃の溝が確認されている。

今回の調査地は、平成18年度の調査地の西側、平成22年度の調査地の南側に位置する。調査地の中心部には、幅15mほどの南東から北西方向にのびる谷があり、そこに斜面上部から流れ込んだとみられる堆積物が充填している。ここでは包含層を2層確認し、その上面や下層において遺構面を確認した。谷部以外の丘陵部については、後世の耕作などによって包含層は失われており、表土および客土の下は地山となる。

遺構面は、谷部を除く丘陵部分では1面であるが、谷部ではさらに2面存在することから、部分的なものを含めて全部で3面ある。第1遺構面では竪穴建物、掘立柱建物、柵列、土坑、溝、ピットを確認した。これらは古代のものや時期不明なものもあるが、概ね古墳時代中期後葉から後期前葉頃を中心としたものと考えられる。つづく第2遺構面では、縄文時代から弥生時代と考えられる土坑、溝、ピット、第3遺構面では縄文時代以前と考えられる土石流の痕



第43図 調査区土層断面位置図

跡とみられる溝を確認した。

これらの遺構や遺物の詳細については、第2節以降に報告する。

2. 層序

調査区内の堆積状況は、丘陵と谷部で様相が異なる。丘陵については後世の削平が及んでおり、客土や表土の除去後はすぐに地山となる。谷部については、土石流など斜面上方から流れ込んだとみられる土砂が厚く堆積しており、堆積状況が複雑である。以下、包含層を中心に述べていく。

表土・客土

調査前には平成18年度の廃土や仮設道路が設置されており、これらも含めると、調査区内では北側を中心に1mほどの客土が盛られる。その下に表土とした10～70cmほど現代の耕作土が堆積する。

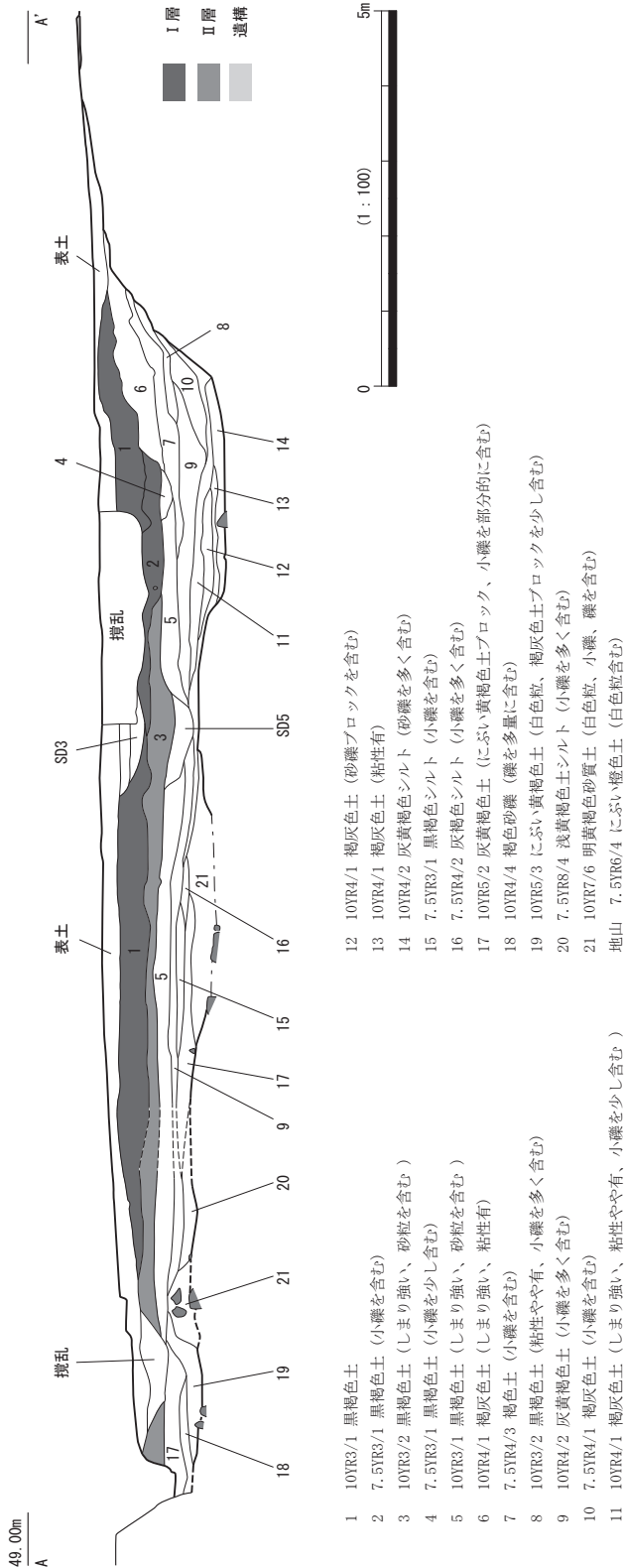
I 層

縄文時代から古墳時代の遺物を包含するが、出土量は少ない。上面は第1遺構面の遺構検出面であり、古墳時代や古代の遺構を確認している。色調は黒褐色を呈し、白色の砂粒を含む。しまりが弱く、土壤発達した層とみられる。谷部を中心に30cmほど堆積する。前回の調査の3層に相当する。

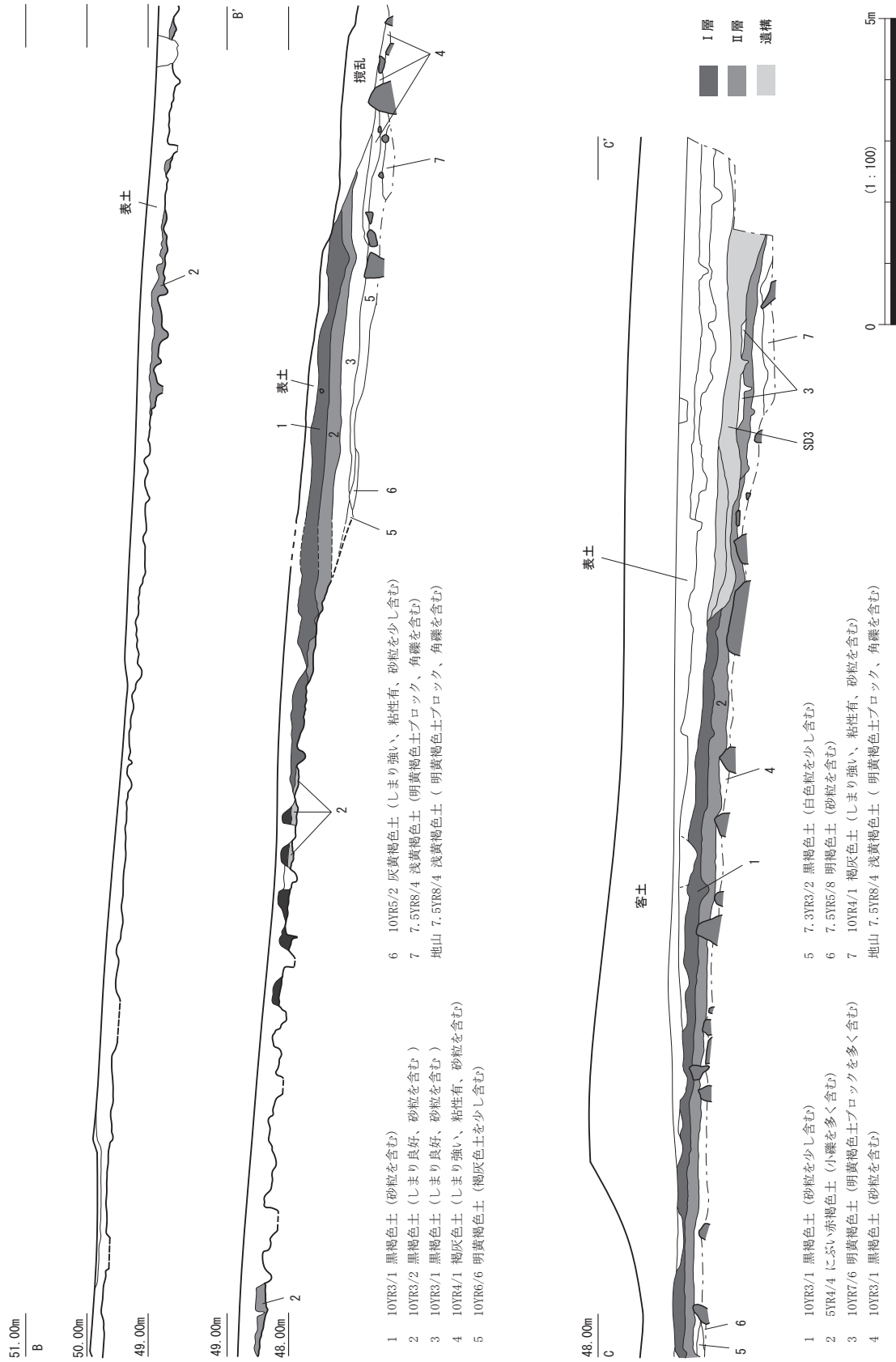
II 層

前回の調査では尖頭器が1点出土しているが、今回の調査では、その時期に属する遺物は認められなかった。弥生時代の遺物がわずかに出土したが、上層からの混入と思われる。

この上面は第2遺構面の遺構検出面であり、縄文時代から弥生時代の遺構を確認している。色調は黒褐色からにぶい赤



第44図 土層断面図①



第45図 土層断面図②

褐色を呈し、I層と比べると赤味が強い。また、I層と同様、白色の砂粒や小礫を含む。斜面上方からの流入土とみられ、谷部を中心に20cmほど堆積する。前回の調査の4層に相当する。

この他、谷部ではII層の下に土石流など斜面上方からの流入土が堆積している。無遺物層であり、縄文時代以前に堆積したものと考えられる。この谷部の堆積物の下には礫を含む層が堆積しており、谷部が埋没する当初は土石流が頻繁に起こるなど、土砂の流入が激かったとみられる。また、上層では堆積物の中に土壌発達したとみられる黒褐色を呈する層が認められることから、土砂の流入が比較的緩やかとなり、土壌発達する期間を挟みながら堆積していったものと考えられる。

なお、第3遺構面の検出面は、これらの層の上面となる。

第2節 第1遺構面の調査

第1遺構面の調査は、道路や後世の耕作などによって地山まで掘削されている調査区西側や南東側は地山上面、I層の堆積がみられる調査区中央の谷部についてはI層上面で遺構の確認を行った。なお、平成18年度の調査では、この遺構面において古墳時代中期の竪穴建物のほか、時期不明の土坑、ピットなどが確認されている。

調査の結果、竪穴建物9棟、掘立柱建物1棟、柵列4基、土坑6基、溝1条、造成面1基、焼土1基、ピット17基を確認した。これらは古代のものが若干含まれるが、概ね古墳時代のものと考えられる。このうち、竪穴建物は3ヶ所で確認しており、それぞれ3棟が重複している。これらの間隔は10mほどであり、時期は古墳時代中期後葉から後期前葉頃のものである。なお、先にも述べたが、前回の調査でも古墳時代中期中葉から後期前葉頃の竪穴建物を3棟確認しており、今回の調査と同様、ほぼ同じ場所に建てられている。これらの竪穴建物は、時期や建て替えの状況などが概ね共通しており、1つの集落を形成していたと思われる。

造成面・焼土1（第47図）

調査区北東隅で検出した。ここは、南へと下る緩斜面であり、北側は後世の掘削によって崖となり、遺構の大半は失われている。周囲にはSI4～6、SA1があり、このうちSI4～6を切る。

造成面は、東西2.73m、南北2.50mの範囲で確認した。西側は調査区外へと伸びていることから、さらに広がると思われる。造成面は、黒褐色土と黄橙色ブロックの混合土からなり、その厚さは10cmを測る。この東側では焼土1を確認した。

焼土1は、北東方向が広く、南西方向が狭い隅丸台形の浅い落ち込みとなっており、その全体にわたり被熱が認められる。被熱範囲は明褐色に変色している。規模は長軸67cm、短軸59cm、深さ7cmを測る。

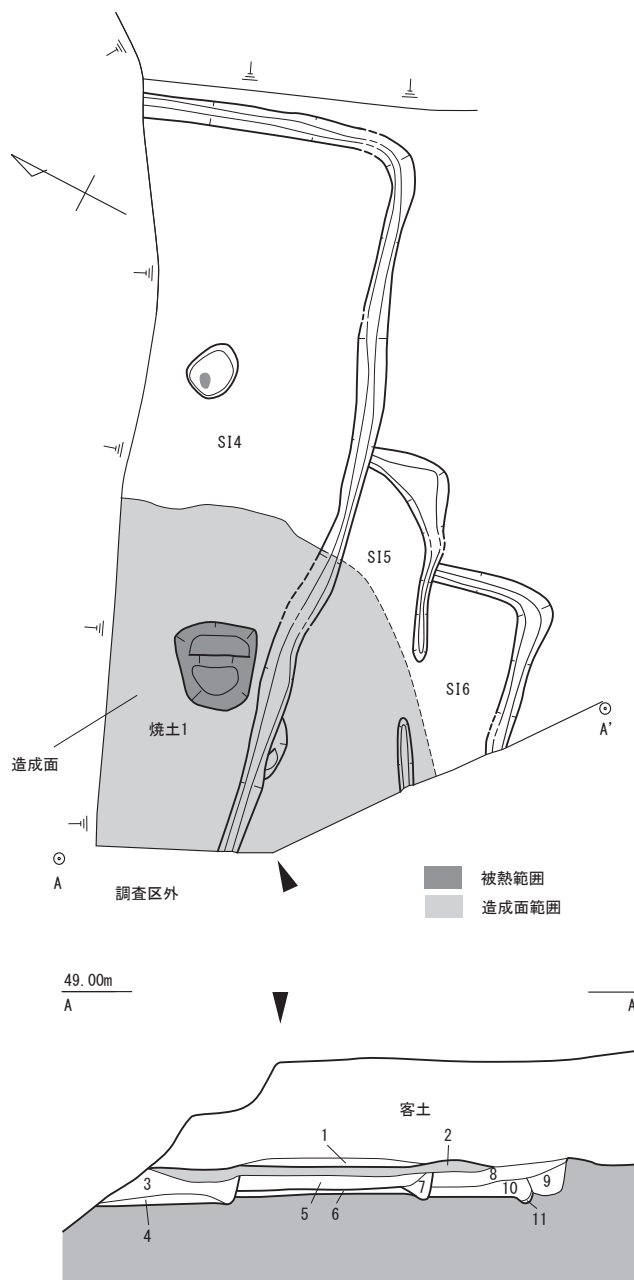
造成面と焼土1から遺物は出土しておらず、時期の詳細は不明であるが、SI4～6との関係から古墳時代後期以降と考えられる。

SI4（第48図、PL.29・36）

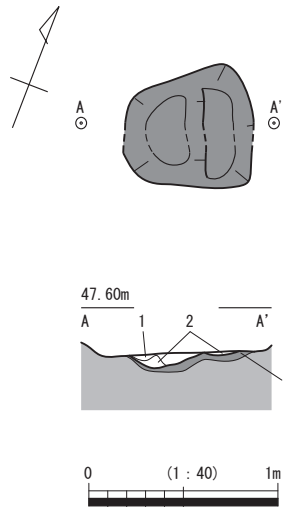
調査区北西隅において検出した。SI5・6と重複しており、これらの竪穴建物の中では最も新しい。



第46図 第1遺構面遺構配置図

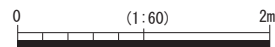


焼土1



- 1 10YR3/2 黒褐色土
(焼土、橙色土ブロックを少し含む)
- 2 5YR6/6 橙色土ブロックと10YR3/2 黒褐色土の混合土
- 3 7.5YR5/6 明褐色土 (被熱範囲)

- 1 7.5YR3/1 黒褐色土 (しまり良い)
- 2 10YR3/1 黒褐色土
(にぶい黄褐色土ブロックを多く含む、造成土)
- 3 7.5YR3/1 黒褐色土
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む)
- 5 7.5YR2/1 黒色土 (にぶい黄褐色土ブロックを含む)
- 6 7.5YR3/1 黒色土 (にぶい黄褐色土ブロックを少し含む)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色土ブロックと
7.5YR3/1 黒褐色土ブロックの混合土 (貼床)
- 8 10YR4/1 褐灰色土 (にぶい黄褐色土ブロックを少し含む)
- 9 7.5YR3/1 黒褐色土
(にぶい黄褐色土ブロックを下層に多く含む、木根)
- 10 10YR3/1 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロックを含む)
- 11 10YR3/1 黒褐色土 (にぶい黄褐色土ブロックを多く含む)



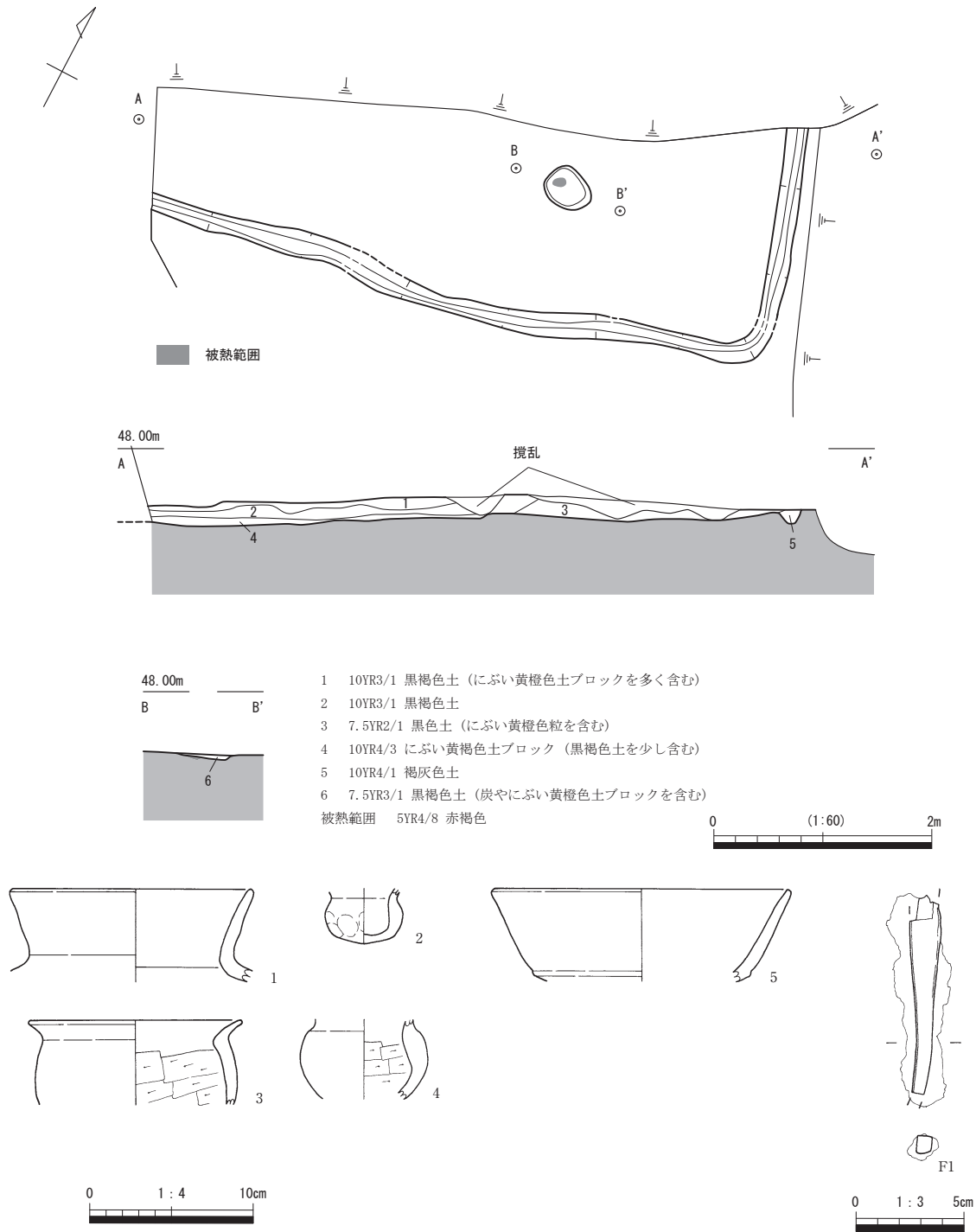
第47図 S14~6・焼土1・造成面

北側は後世の掘削によって大半が失われ、西側は調査区外へと伸びる。また、周辺は後世の掘削が及んでおり、遺構上部は削平されている。

平面形は方形であり、規模は確認できる範囲で長さ5.92m、幅1.90m、深さ0.28mを測る。床面には歪な円形を呈する直径46cm、深さ4cmの浅い落ち込みがあり、その底面には赤褐色に変色した被熱面が認められる。壁際には、幅25cm、深さ13cmの壁溝が巡る。

遺物は埋土中から1、2が出土した。1は甕であり、2は小型丸底壺である。遺物の特徴から、古墳時代中期後葉から後期前葉頃と考えられる。

第4章 坂長第8遺跡の調査成果



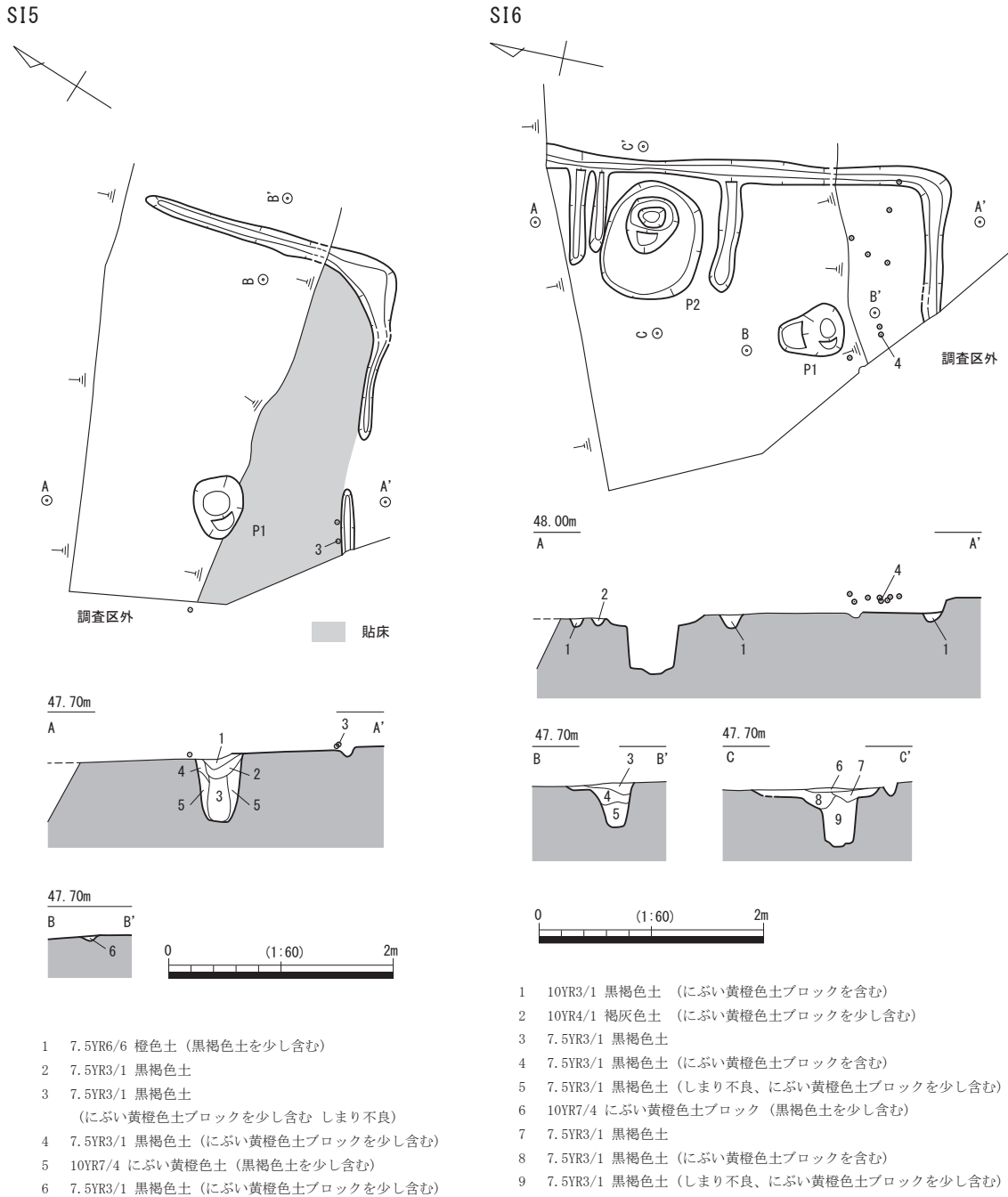
第48図 SI4・SI4~6出土遺物

第48図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
1	SI4	埋土	甕	※14.5	△5.8	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	明赤褐色	土師器、黒斑有
2	SI4	埋土	ミニチュア土器	—	△3.4	—	内外面：ナデ	橙色	土師器
3	SI5	床面	甕	※12.8	△5.0	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
4	SI6	床面	小型丸底壺	—	△4.9	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
5	SI6	埋土	高杯	※17.9	△5.7	—	内外面：調整不明	橙色	土師器

第48図 鉄製品観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量 (cm・g)	備考
F1	SI6	埋土	棒状鉄器	最大長※9.1、最大幅：1.5、最大厚：1.5、重量：57.1	

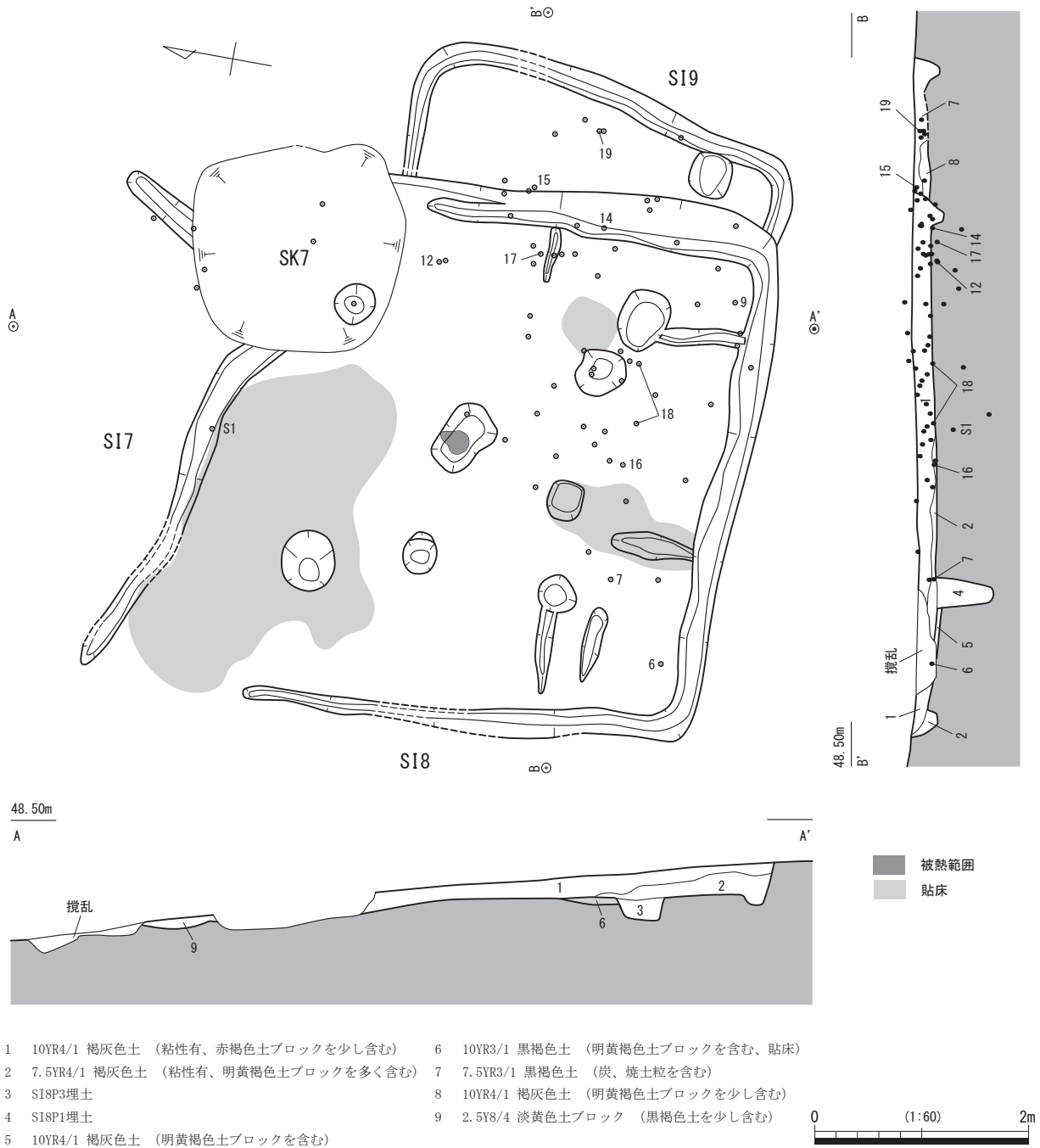


第49図 SI5・6

SI5 (第49図、PL.29・36)

調査区北西隅において検出した。SI4によって切られSI6を切る。北側は後世の掘削により失われており、西側は調査区外へと続く。また、この周辺は後世において掘削がなされており、遺構上部は削平されている。

平面形は方形とみられる。規模は確認できる範囲で長さ3.46m、幅2.54m、深さ0.15mを測る。床面には貼床が貼られ、そこには柱穴と考えられるP1がある。壁際に壁溝が巡る。P1は、平面形が南西側へ張り出す歪な円形を呈し、規模は直軸57cm、短軸46cm、深さ42cmを測る。断面には、直径17cmの柱痕跡が認められる。壁溝は幅8～39cmと南東側の隅で幅広となり、南側で一部途切れる。深さは5



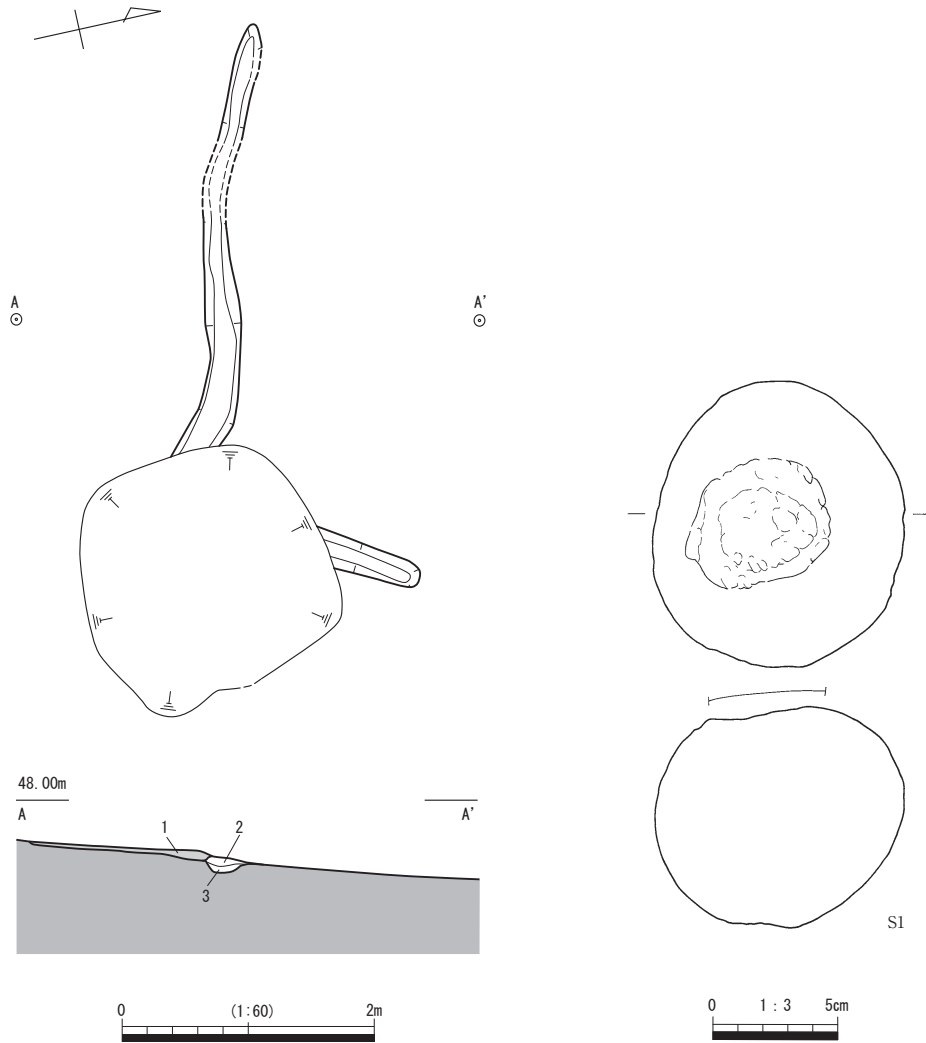
第50図 SI7~8

cmである。

遺物は埋土中から土師器が出土しているが、このうち3を図化した。3は甕である。時期は古墳時代中期後葉から後期前葉頃と考えられる。

SI6 (第47・49図、PL.29・36)

調査区北西隅において検出した。SI4・5によって切られる。北側は後世の削平により失われており、



- 1 10YR3/1 黒褐色土 (しまり良、明黄褐色土ブロックを含む、SI8貼床)
- 2 10YR3/1 黒褐色土 (しまり良、炭や焼土を含む)
- 3 10YR5/2 褐灰色土 (明黄褐色土や黒褐色土ブロックを含む)

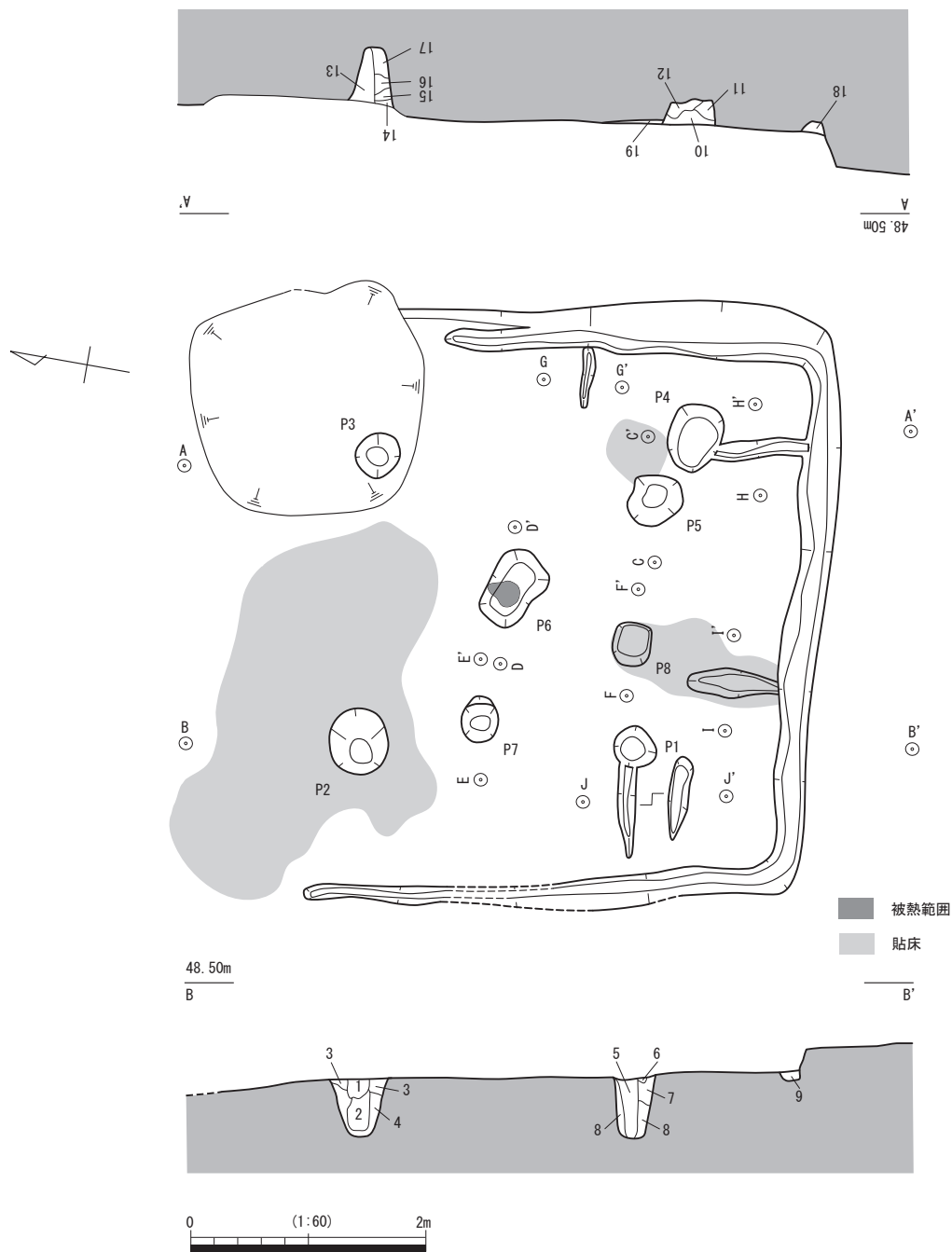
第51図 SI7・出土遺物

第51図 石器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
S1	SI7	埋土	凹石	最大長※7.6、最大幅：6.6、最大厚：5.8、重量：349.2	デイサイト

西側は調査区外へと続く。この周辺は、後世に掘削が行われており、遺構上部は削平されている。

平面形は方形を呈し、規模は確認できる範囲で長さ2.91m、幅3.57m、深さ0.18mを測る。床面にはP1・2があり、壁際には壁溝が巡る。また、東側の壁溝からはP2を挟むようにして3条の仕切り溝がのびる。P1は柱穴と考えられ、平面形は北側へ張り出す歪な楕円形を呈し、規模は直軸57cm、短軸46cm、深さ42cmを測る。P2は特殊ピットと考えられ、長軸105cm、短軸96cm、深さ10cmの楕円形の浅い掘り方の下に、直径45cm、深さ52cmの歪な円形を呈するピットが掘り込まれる。壁溝は幅23cm、

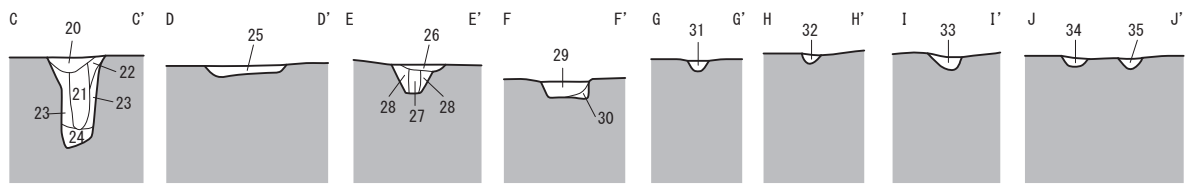


第52図 S18①

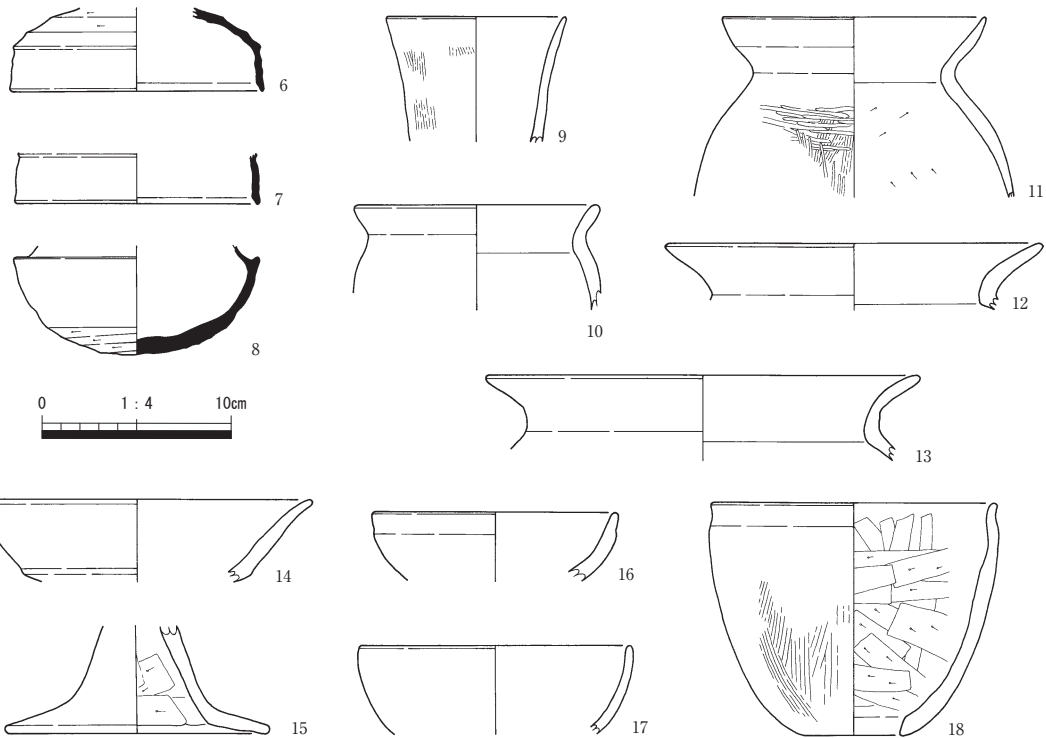
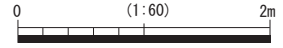
深さ8cm、仕切り溝は幅9～16cm、深さ8～13cmを測る。

遺物は埋土中から4、5、F1が出土した。4は小型丸底壺である。5は高杯であり、口縁部との境に鈍い段が認められる。F1は棒状鉄器であり、先端がやや屈曲する。時期は古墳時代中期後葉頃と考えられる。

48. 20m



- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 10YR4/1 褐灰色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 19 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを含む、貼床) |
| 2 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 20 10YR4/1 褐灰色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) |
| 3 10YR4/1 褐灰色土 | 21 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) |
| 4 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む) | 22 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを含む) |
| 5 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 23 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む) |
| 6 10YR4/1 褐灰色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 24 10YR7/6 明黄褐色土 (黒褐色土を少し含む) |
| 7 10YR7/6 明黄褐色土 | 25 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土や焼土を少し含む) |
| 8 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを含む) | 26 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む) |
| 9 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 27 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを含む) |
| 10 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 28 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む) |
| 11 10YR7/6 明黄褐色土 (黒褐色土を含む) | 29 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) |
| 12 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む) | 30 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む) |
| 13 10YR4/1 褐灰色土 | 31 10YR4/1 褐灰色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) |
| 14 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を含む) | 32 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを多く含む) |
| 15 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 33 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを多く含む) |
| 16 10YR7/6 明黄褐色土ブロック (黒褐色土を少し含む) | 34 10YR3/1 黒褐色土と |
| 17 7.5YR3/1 黒褐色土 (炭、焼土粒を含む) | 10YR7/6 明黄褐色土ブロック土の混合土 |
| 18 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) | 35 10YR4/1 褐灰色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む) |



第53図 SI8②・出土遺物

SI7 (第50・51図、PL.29)

調査区北側の南側へと下る緩斜面において検出した。周辺にはSI8・9、SK7があり、このうち

第53・54図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
6	SI8	埋土	杯蓋	※13.2	△ 4.5	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰黄色	須恵器
7	SI8	床面	杯蓋	※12.7	△ 2.7	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器、自然釉付着
8	SI8	埋土	杯身	—	△ 5.8	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
9	SI8	埋土	長頸壺	※ 9.4	△ 6.7	—	外面：ハケメ後ナデ、内面：ナデ	橙色	土師器
10	SI8	埋土	甕	※12.6	△ 5.6	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
11	SI8	埋土	甕	※13.8	△ 9.7	—	外面：ナデ、ハケメ後ヘラミガキ、内面：ナデ、ヘラミガキ	明黄褐色	土師器、黒斑有
12	SI8	埋土	甕	※19.5	△ 3.6	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラミガキ	にぶい黄橙色	土師器
13	SI8	埋土	甕	※22.6	△ 4.6	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤付着
14	SI8	埋土	高杯	※18.3	△ 4.4	—	内外面：ナデ	橙色	土師器
15	SI8	埋土	高杯	—	△ 5.9	※13.5	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、黒斑有
16	SI8	床面	高杯	※12.7	△ 3.7	—	内外面：ナデ	にぶい橙色	土師器
17	SI8	埋土	椀	※14.2	△ 4.8	—	内外面：ナデ	橙色	土師器
18	SI8	床面	甌	※14.8	△12.4	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ヘラケズリ	橙色	土師器
19	SI9	埋土	甕	※13.5	△14.0	—	内外面：ナデ	黄橙色	土師器、黒斑有
20	SI9	埋土	小型丸底壺	※ 9.6	△ 9.8	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
21	SI9	埋土	小型丸底壺	※ 9.1	△ 7.0	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	黄橙色	土師器、黒斑有

SI8、SK7に切られる。遺構の大部分は土砂の流出によって失われており、壁溝の一部を確認したのみである。

平面形は方形とみらる。規模は確認できる範囲で長さ4.15m、幅2.13mを測る。壁際に幅29cm、深さ11cmの壁溝が巡る。なお、南側の壁溝の一部はSI8の貼床によって覆われている。

遺物は埋土中からS1が出土した。S1は凹石であり、両面に敲打による窪みが認められる。時期はSI8との切り合い関係から古墳時代後期前葉以前と考えられる。

SI8 (第50・52・53図、PL.29・36・37)

調査区北側において検出した。SI7・9を切り、SK7によって切られる。遺構の北側は土砂の流出によって失われている。

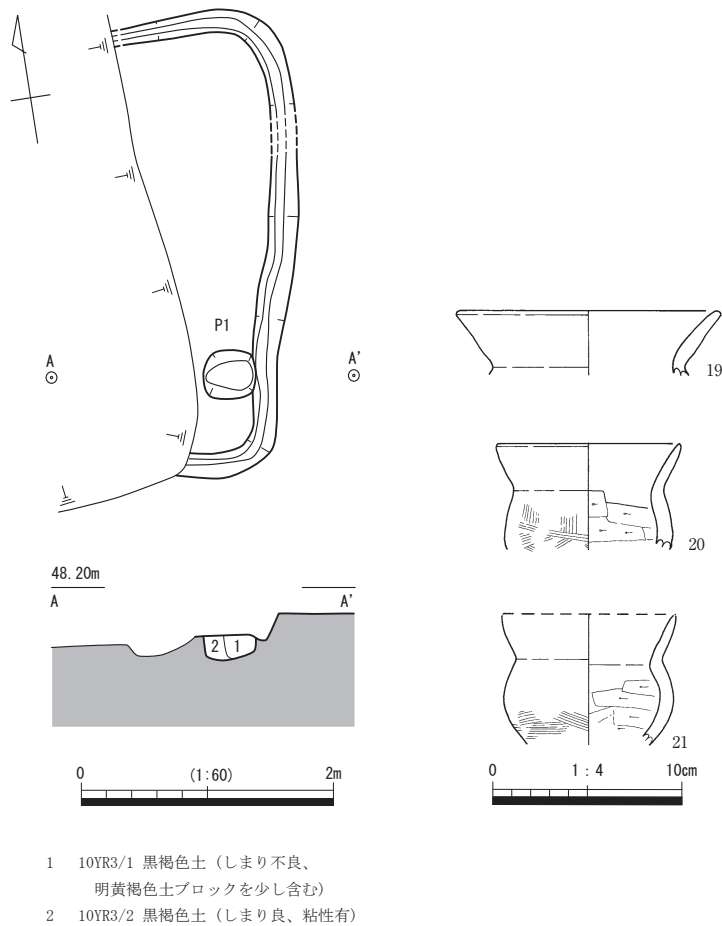
平面形は方形を呈する。規模は長軸5.20m以上、短軸5.13m、深さ0.28mを測る。床面には部分的に貼床が貼られる。また、床面にはP1～8、仕切り溝5条があり、このうち、P8と仕切り溝1条は貼床除去後に確認した。

確認したピットのうち、P1～3・5は柱穴と考えられ、これらの間隔はP1から時計回りに2.30m、2.49m、2.39m、2.10mとなる。平面形は円形を呈しており、規模はP1が直径37cm、深さ51cm、P2が直径53cm、深さ49cm、P3が直39cm、深さ49cm、P5が直径43cm、深さ70cmを測る。また、これらのピットには柱痕跡が認められ、P1からそれぞれ直径13cm、18cm、16cm、14cmを測る。

残るピットのうちP4・7・8は平面形が歪な円形を呈し、規模はP4が直径57cm、深さ19cm、P7が直径31cm、深さ24cm、P8が直径26cm、深さ13cmを測る。P6は中央にあり、平面形は歪な長方形を呈し、規模は長軸67cm、短軸41cm、深さ7cmと浅く、底面には被熱面が認められる。

壁溝は幅35cm、深さ10cmを測り、北東側は途切れる。仕切り溝は壁溝に対して直角に掘り込まれており、壁溝や柱穴、ピットと繋がるものがある。規模は幅10～16cm、深さ10cmを測る。

遺物は主に埋土上層から須恵器や土師器が出土した。6～8は須恵器の蓋杯である。このうち6、7は杯蓋で口唇部に段が付く。8は杯身であり、受部から底部にかけて丸味を持つ。また、底部の



第54図 SI9・出土遺物

1/3ほどに回転ヘラケズリを施す。9～18は土師器である。9は長頸壺、10～13は甕、14～16は高杯、17は椀、18は甑である。時期は、遺物の特徴から古墳時代中期後葉から後期前葉頃と考えられる。

SI9 (第50・54図、PL.29・36)

調査区北側において検出した。西側の大部分はSI8によって切られており、失われている。

平面形は方形を呈し、規模は確認できる範囲で長さ3.72m、幅1.31m、深さ0.17mを測る。壁際には幅27cm、深さ7cmの壁溝が巡る。また南側には壁溝の一部と重複する形でP1が掘り込まれる。P1の平面形は歪な円形を呈し、

規模は直径38cm、深さ19cmを測る。

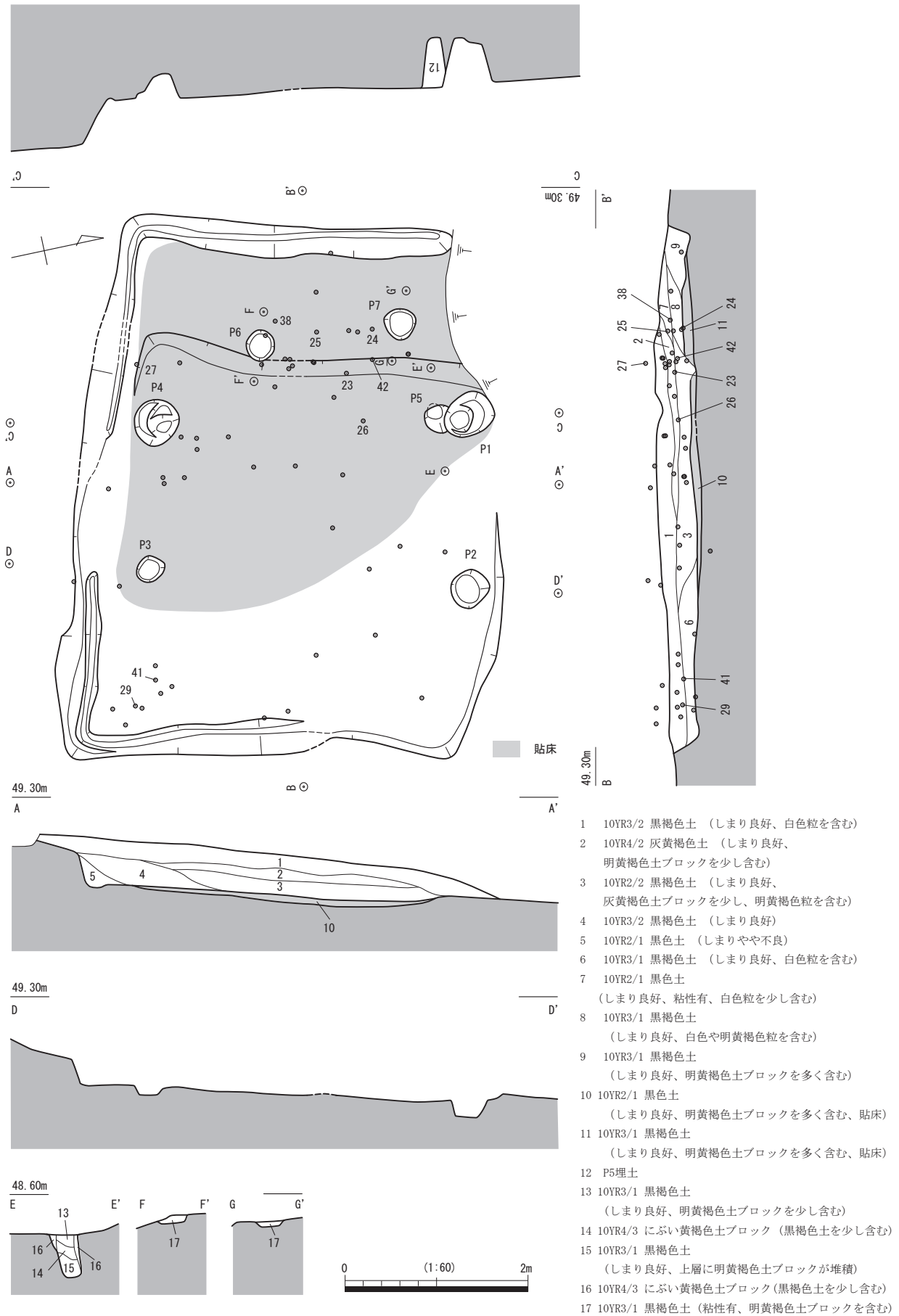
遺物は埋土中から土師器が出土しており、このうち19～21を図化した。19は甕、20、21は小型丸底壺である。時期は、出土遺物から古墳時代中期後葉から後期前葉頃と考えられる。

SI10 (第55・56図、PL.30・38・39)

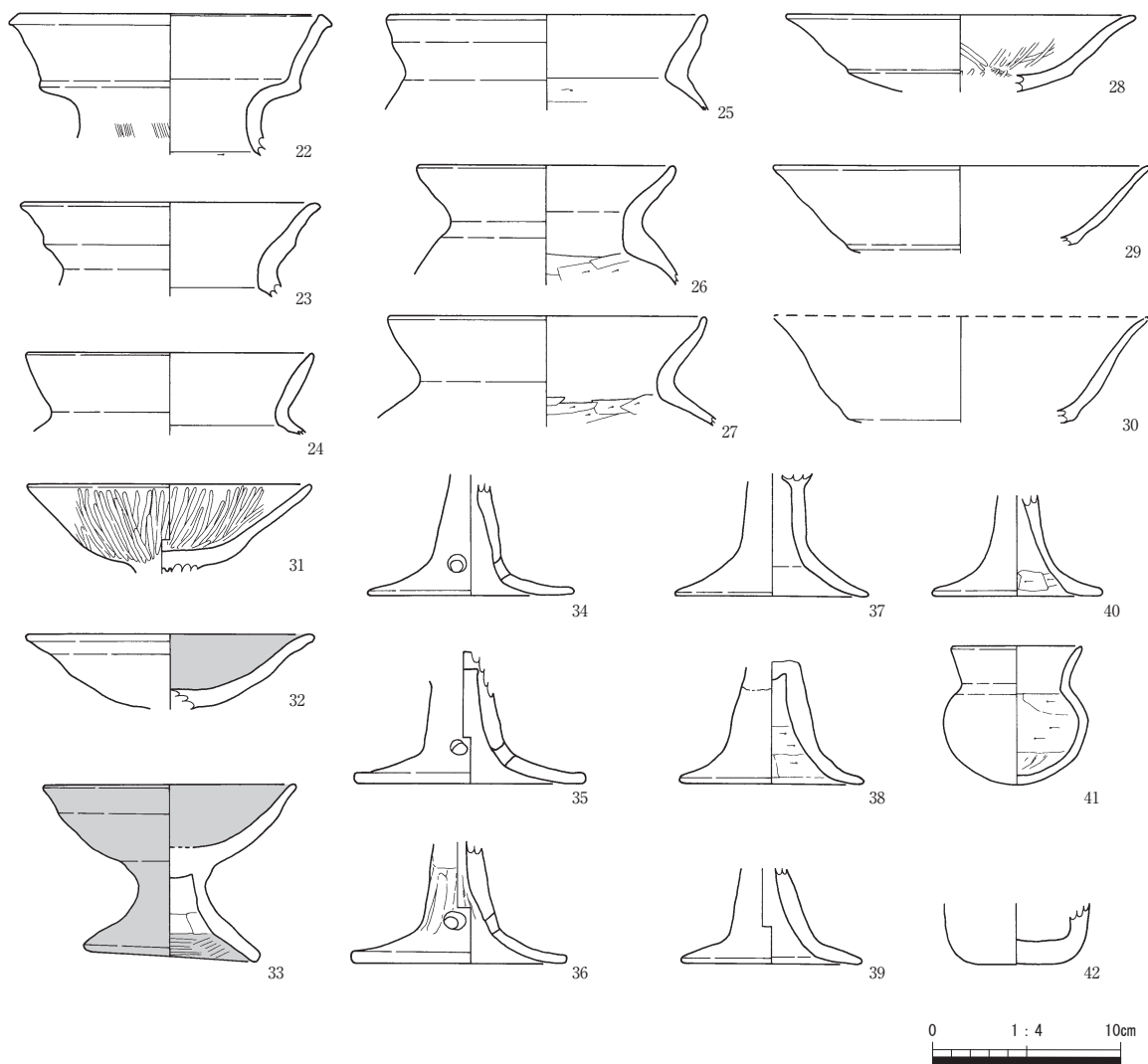
調査区の中央において検出した。ここは南から北へと下る緩斜面にあたる。SI11・12と重複しており、これらの竪穴建物の中で本遺構が最も新しい。

北西隅の一部が後世の掘削により失われている。平面形は東西方向に長い長方形を呈しており、規模は長軸5.83m、短軸4.63m、深さ0.50mを測る。床面には貼床が施されるが、全体には認められず、西側の半分程度しか貼られていない。また、西側には幅1.35mを測るベッド状遺構があり、床面から5cmほど高くなる。

床面からはピット7基を確認した。このうちP1～5はその位置関係から柱穴と考えられる。なお、P1・5については、重複することから、建て替えがあったとみられ、P1が最終段階、P5が建て替え前の柱穴と考えられる。P1～4の間隔は、P1から時計回りに1.78m、3.40m、1.54m、3.25mとなる。平面形は円形や歪な円形を呈しており、規模はP1が直径55cm、深さ53cm、P2が直径41cm、深さ20cm、P3が直径32cm、深さ11cm、P4が直径50cm、深さ28cm、P5が直径28cm、深さ56cmを測る。



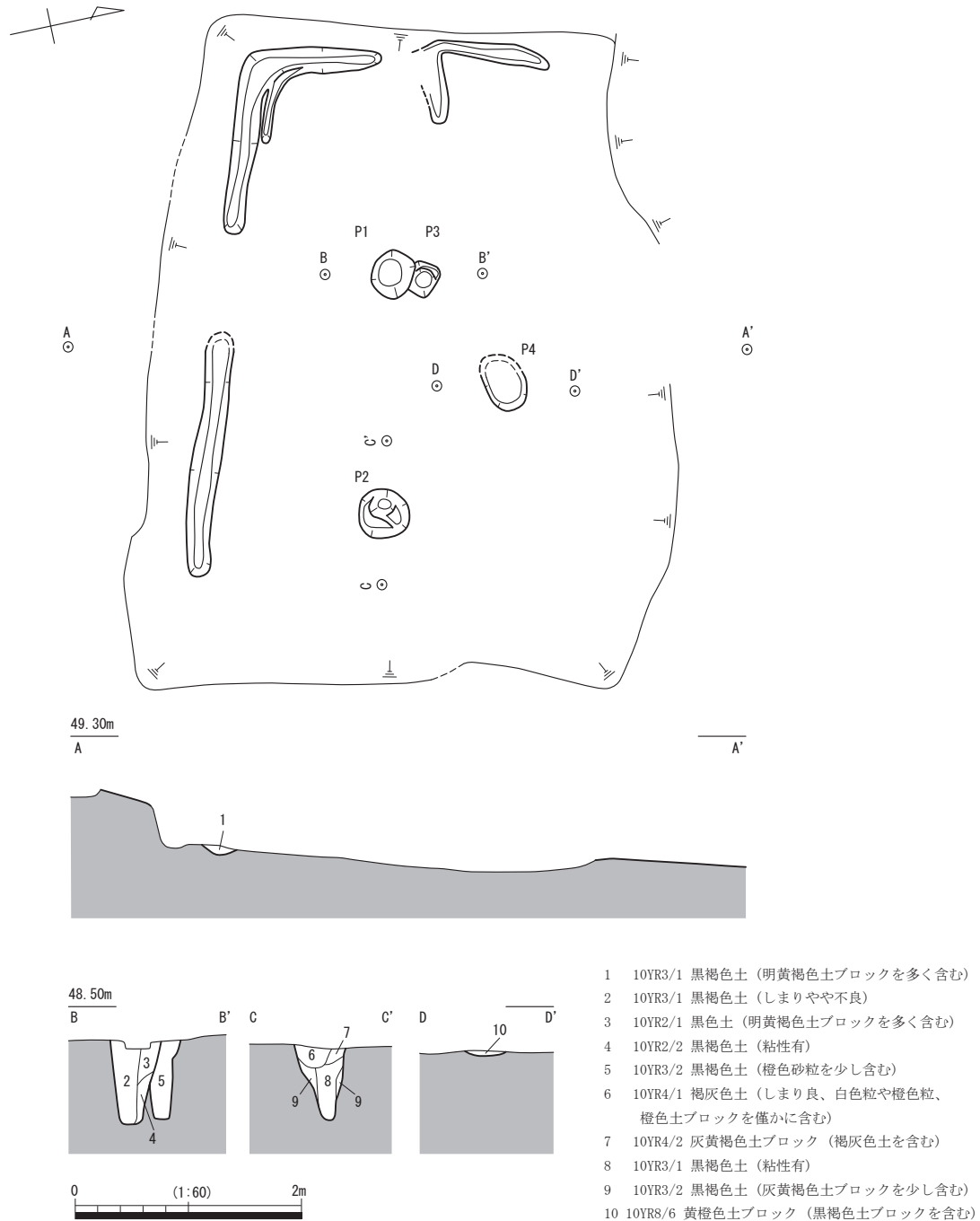
第55図 S110



第56図 SI10出土遺物

第56図 土器観察表

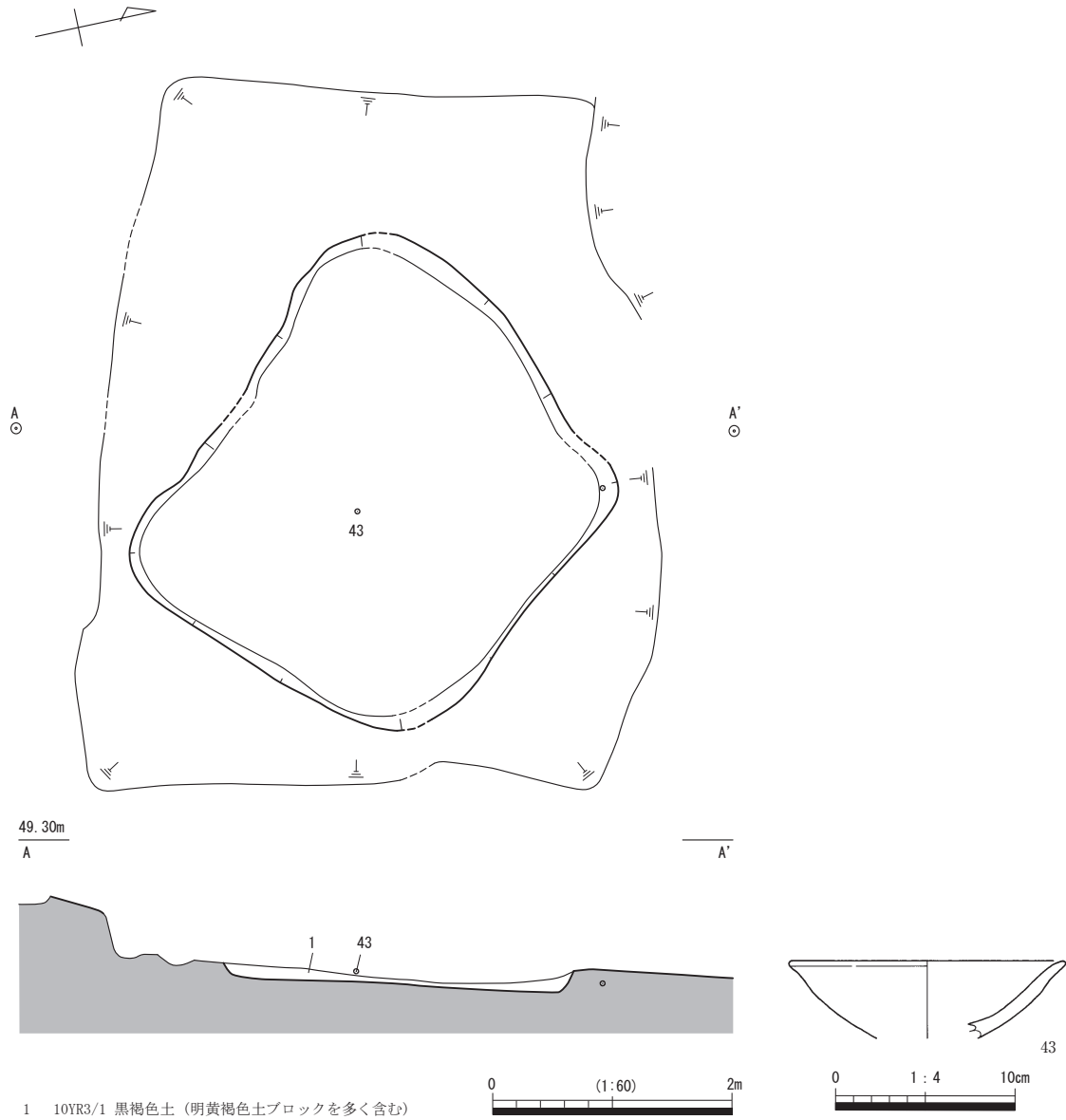
遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
22	SI10	埋土	壺	※17.2	△7.5	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
23	SI10	埋土	壺	※15.5	△5.5	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器
24	SI10	埋土	甕	※15.1	△4.4	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ナデ、ヘラケズリ	明黄褐色	土師器
25	SI10	埋土	甕	※16.7	△5.2	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	浅黄色	土師器
26	SI10	埋土	甕	※13.4	△5.9	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器
27	SI10	埋土	甕	※16.7	△5.9	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
28	SI10	埋土	高杯	※18.4	△4.1	—	外面：ナデ、内面：ハケメ後ヘラミガキ	明赤褐色	土師器、赤彩
29	SI10	埋土	高杯	※10.1	△4.7	—	内外面：調整不明	橙色	土師器
30	SI10	埋土	高杯	※19.6	△5.6	—	内外面：調整不明	橙色	土師器
31	SI10	埋土	高杯	※14.7	△4.6	—	内外面：ヘラミガキ	明黄褐色	土師器、黒斑有
32	SI10	埋土	高杯	※14.9	△4.0	—	内外面：ナデ	明黄褐色	土師器、赤彩
33	SI10	埋土	高杯	13.1	9.5	8.7	外面：ナデ、内面：ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器赤彩
34	SI10	埋土	高杯	—	△6.5	※10.8	内外面：調整不明	黄橙色	土師器、3方向に透かし穴
35	SI10	埋土	高杯	—	△7.1	※12.0	内外面：調整不明	橙色	土師器、3方向に透かし穴
36	SI10	埋土	高杯	—	△6.5	※11.2	外面：ナデ、一部面取り、内面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器、3方向に透かし穴
37	SI10	埋土	高杯	—	△6.6	※10.0	内外面：調整不明	浅黄褐色	土師器
38	SI10	埋土	高杯	—	△6.6	※9.0	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐色	土師器
39	SI10	埋土	高杯	—	△5.1	※9.1	内外面：ナデ	にぶい黄褐色	土師器
40	SI10	埋土	高杯	—	△5.4	※8.8	外面：調整不明、内面：ナデ、ヘラケズリ	淡黄色	土師器
41	SI10	埋土	小型丸底壺	※6.8	7.4	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐色	土師器
42	SI10	埋土	埴	—	△3.3	※4.4	内外面：ナデ	橙色	土師器



第57図 SI11

P6・7はベッド状遺構の上であり、平面形は円形を呈し、規模はP6が直径32cm、深さ8cm、P7が直径32cm、深さ5cmを測る。このほか、壁際において幅28cm、深さ5cmの壁溝を確認した。

遺物は埋土中から土師器が出土した。22、23は壺、24～27は甕、28～40は高杯、41は小型丸底壺、42は埴である。遺構の時期は、古墳時代中期後半頃と考えられる。



第58図 SI12・出土遺物

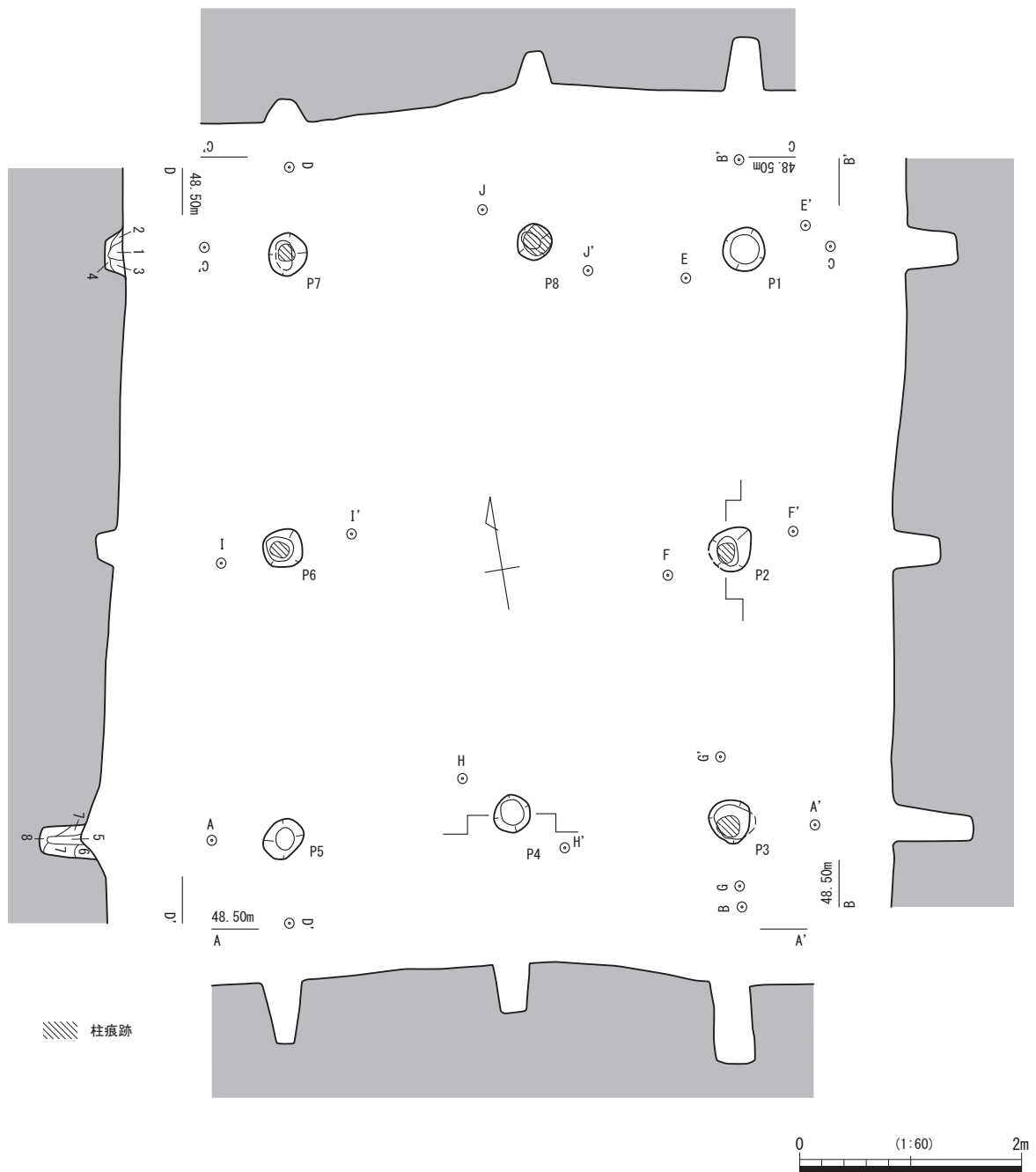
第58図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
43	SI12	埋土	高杯	※15.1	4.3	—	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	土師器

SI11 (第57図、PL.30)

SI10と重複する。SI10の拡張前の竪穴建物と考えられ、大半が失われており、壁溝の一部やピットを確認した。

平面形は方形と考えられ、西側と南側の壁際には幅26cm、深さ7cmの壁溝が巡る。壁溝は南西隅において重複しており、建て替えがあったとみられる。床面にはピットが4基認められ、このうちP1～3は柱穴と考えられる。また、P1・3は重複しており、切り合い関係から、P3が建て替え前、P1



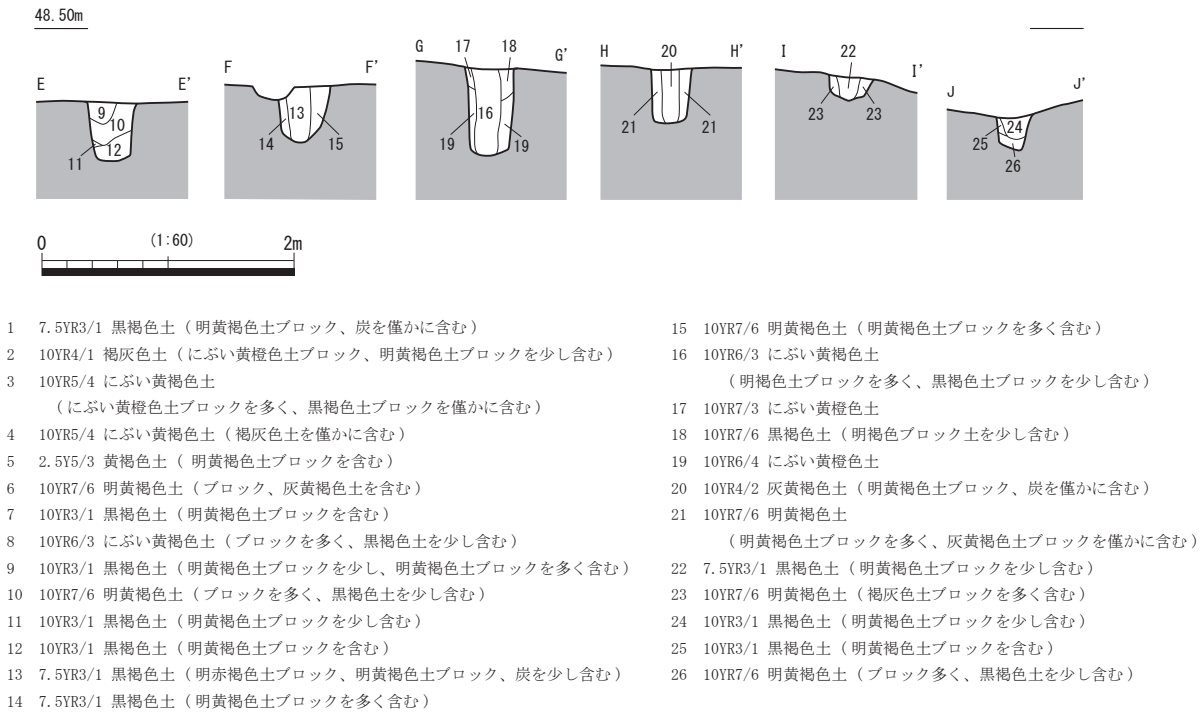
第59図 SB1①

は建て替え後のものとみられる。平面形は円形を呈し、規模はP1が直径42cm、深さ73cm、P2は直径44cm、深さ62cm、P3は直径29cm、深さ68cmを測る。P4は長軸49cm、短軸35cm、深さ5cmの浅い楕円形を呈しており、落ち込みの可能性はある。

埋土中から遺物は出土しなかった。時期は古墳時代中期後半頃と考えられる。

SI12 (第58図、PL.30・38)

SI10・11と重複する。切り合い関係から最も古い。平面形は歪な方形を呈し、規模は長軸3.51m、



第60図 SB1②

短軸2.98m、深さ0.11mを測る。床面には、柱穴や壁溝などは認められない。遺物は埋土中から土師器が僅かに出土しており、このうち43を図化した。43は高杯であり、口縁部が「ハ」の字形に開く。時期は古墳時代中期後半頃と考えられる。

SB1（第59・60図）

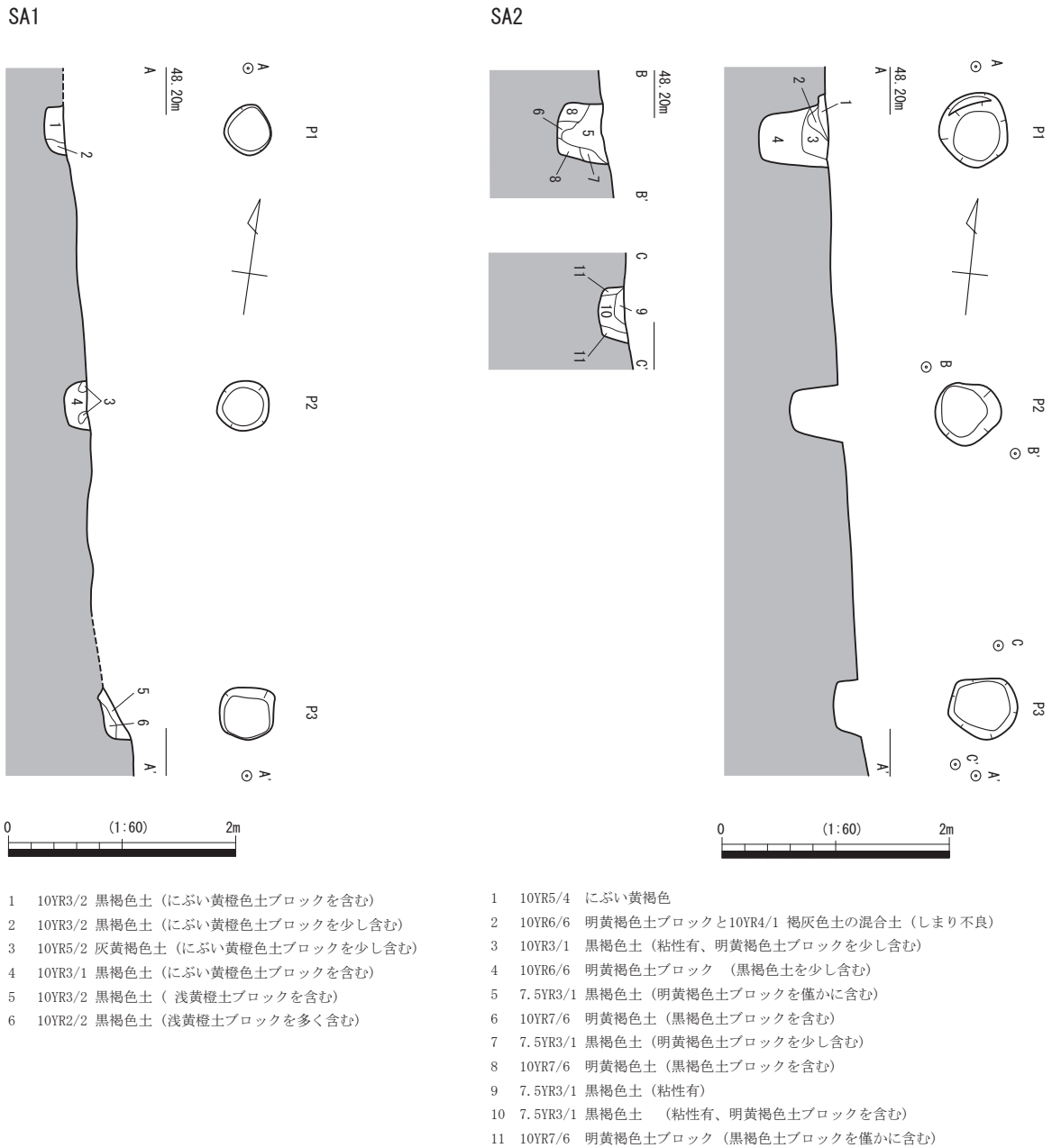
調査区北西側の北へと下る緩斜面上において検出した。SI4～6とSI7～9の間にあり、SA2と重複する。この周辺は後世の削平を受けており、遺構上面は削られている。

2間×2間の掘立柱建物であり、主軸の方向はN-7°-Eとやや東に傾く。規模は桁行5.20～5.26m、梁間4.00～4.14mであり、柱間距離は、P1から時計回りに2.70m、2.50m、2.00m、2.00m、2.61m、2.65m、2.24m、1.90mを測る。平面形は円形を呈し、規模はP1が直径40cm、深さ45cm、P2が直径45cm、深さ42cm、P3が直径40cm、深さ71cm、P4が直径34cm、深さ43cm、P5が直径39cm、深さ56cm、P6が直径41cm、深さ15cm、P7が直径39cm、深さ20cm、P8が直径26cm、深さ28cmを測る。柱痕跡はP2・3・6・7・8で認められ、その規模はそれぞれ、直径20cm、20cm、17cm、16cm、29cmである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SA1（第61図、PL.31）

調査区北西側の北へと下る緩斜面上で検出した。この周辺は後世の削平を受けており、遺構の上部は削られている。付近にはSI4～6、SA2などがあり、このうちSI4と接し、SA2とは5.00mほど離れて

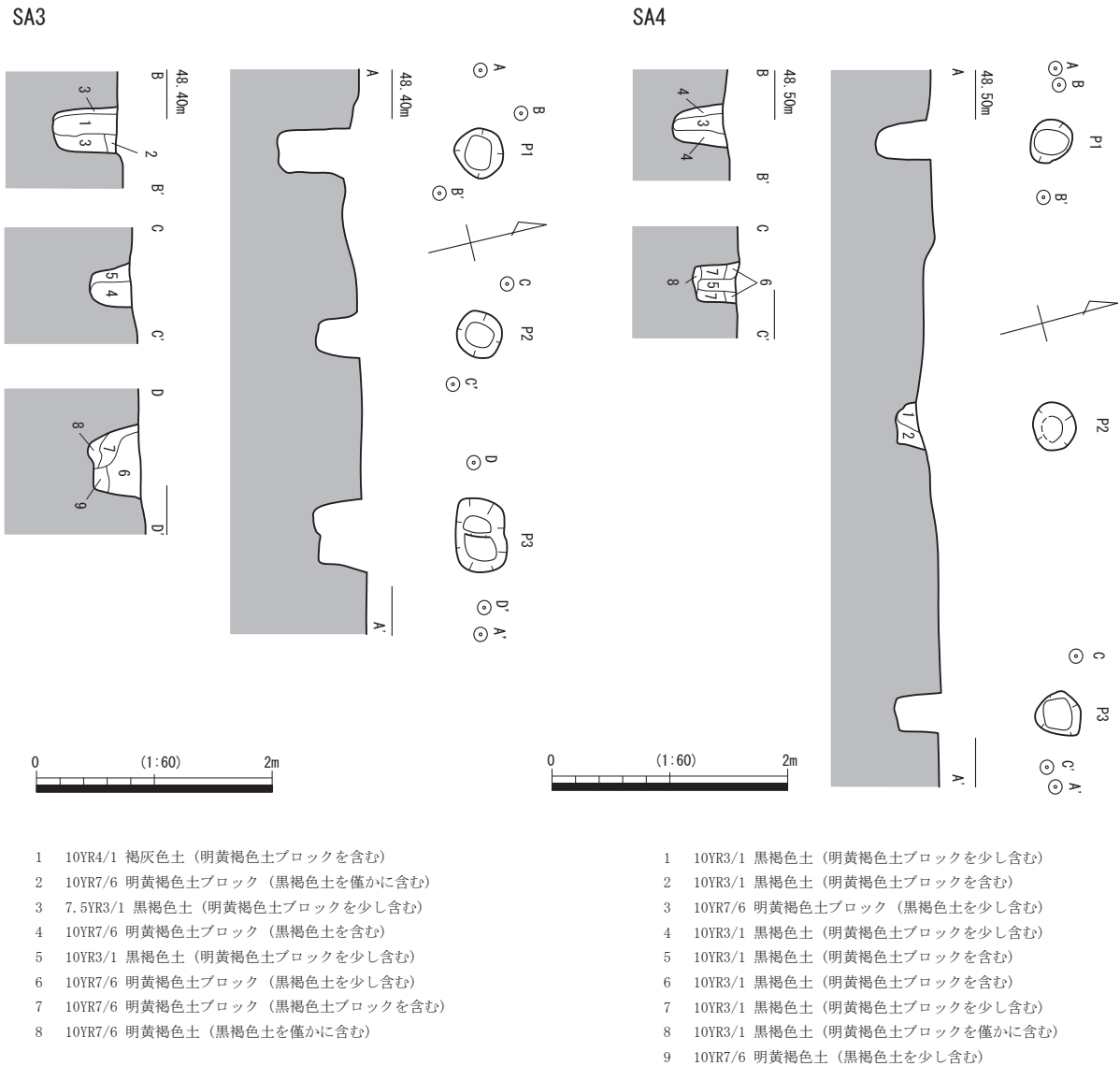


第61図 SA1・2

いる。

本遺構は検出した限りでは3基のピットからなるが、さらに調査区外へと続く可能性がある。ピットの間隔はP1からそれぞれ2.44m、2.71mであり、全体では5.15mである。主軸の方位はN-10°-Wと、僅かに西へ傾く。掘り方は平面形が円形や隅丸方形を呈し、規模は、P1が直径46cm、深さ18cm、P2が直径45cm、深さ16cm、P3が直径47cm、深さ22cmを測る。底面の標高は一定ではなく、傾斜に沿っている。

遺物は図化していないが、埋土中から土師器の破片が出土した。時期は古墳時代と考えられる。



第62図 SA3・4

SA2 (第61図、PL.31)

調査区北西側において検出した。南から北へと緩やかに下る斜面にあり、SA1同様、遺構の上部は削平される。SB1と重複するが、その前後関係は不明である。

SA2はSA1と同様、3基のピットからなり、さらに調査区外へと続く可能性がある。ピット間の距離はP1から2.46m、2.58mであり、全体では5.04mである。主軸の方位はN-7°-WとSA1とほぼ同じ方向を示す。掘り方は平面形が歪な円形を呈し、規模はP1が直径66cm、深さ61cm、P2が直径58cm、深さ43cm、P3が直径60cm、深さ24cmを測る。底面の標高は一定ではなく、傾斜に沿っている。杭の痕跡は、P2・3において認められ、直径15~26cmを測る。

遺物は図化していないが、埋土中から土師器の破片が出土した。時期は古墳時代頃と考えられる。

SA3 (第62図、PL.31)

調査区北側の北へと下る緩斜面上で検出した。その付近にはSI7～9、SB1、SA4があり、このうちSA4と近接する。

3基のピットからなり、その間隔はP1から順に1.55m、1.70mと他の柵列に比べて狭い。全体の規模は3.25mを測る。主軸の方向はW-12°-Nと、概ね東西方向を示す。掘り方は円形ないし隅丸方形を呈し、規模はP1が直径42cm、深さ54cm、P2が直径39cm、深さ36cm、P3が直径62cm、深さ40cmを測る。杭の痕跡はP1～3でみられ、その規模はP1から順に直径17cm、20cm、20cmである。

遺物は図化していないが、埋土中から土師器の破片が出土した。時期は古墳時代頃と考えられる。

SA4 (第62図、PL.31)

調査区北側において検出した。SA3と近接する。3基のピットからなり、ピットの間隔はP1から順に2.43m、2.45mを測る。軸の方向はW-13°-Nであり、SA3とほぼ同じ方向を示す。掘り方は歪な円形を呈し、規模はP1が直径39cm、深さ43cm、P2が直径42cm、深さ21cm、P3が直径39cm、深さ36cmを測る。杭の痕跡はP1・3で認められ、その規模はP1から順に直径14cm、9cmを測る。

遺物は図化していないが、埋土中から土師器の破片が出土した。時期は古墳時代頃と考えられる。

SK5 (第63図)

調査区北西隅で検出した。周辺にはSI4～6、焼土1、造成面があり、このうちSI4を切る。平面形は南東側の幅が広く、北西側が狭い歪な楕円形を呈する。規模は、長軸123cm、短軸61cmを測り、深さは4cmと浅い。断面形は底面にやや凹凸が認められるため、歪な皿状をなす。埋土中には焼土ブロックや炭が含まれており、周辺にある焼土1との関連がうかがわれる。時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、SI4との関係から古墳時代中期以降と考えられる。

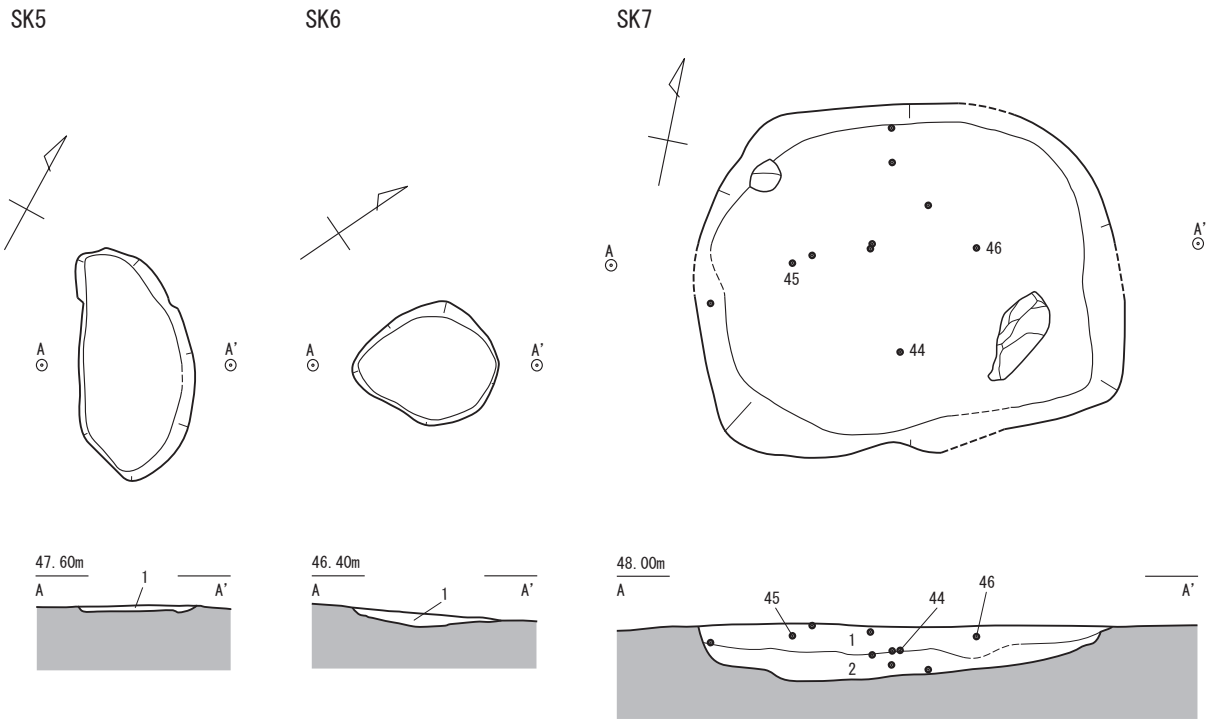
SK6 (第63図、PL.32)

調査区北東隅で検出した。周辺にはSK8、SD3があり、このうちSD3を切る。平面形は北西側がやや突出する歪な円形を呈し、規模は長軸77cm、短軸67cm、深さ7cmを測る。断面形は皿状をなす。埋土中には焼土ブロックや炭の小片が多数含まれるが、遺物は出土していない。時期はSD3との関係から、9世紀後半以降と考えられる。

SK7 (第63図、PL.32・39・40)

調査区北側で検出した。周辺にはSI7～9があり、このうちSI7・8を切る。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸223cm、短軸187cm、深さ28cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は概ね黒褐色土が堆積するが、下層には明黄褐色土のブロックが多量に含まれる。

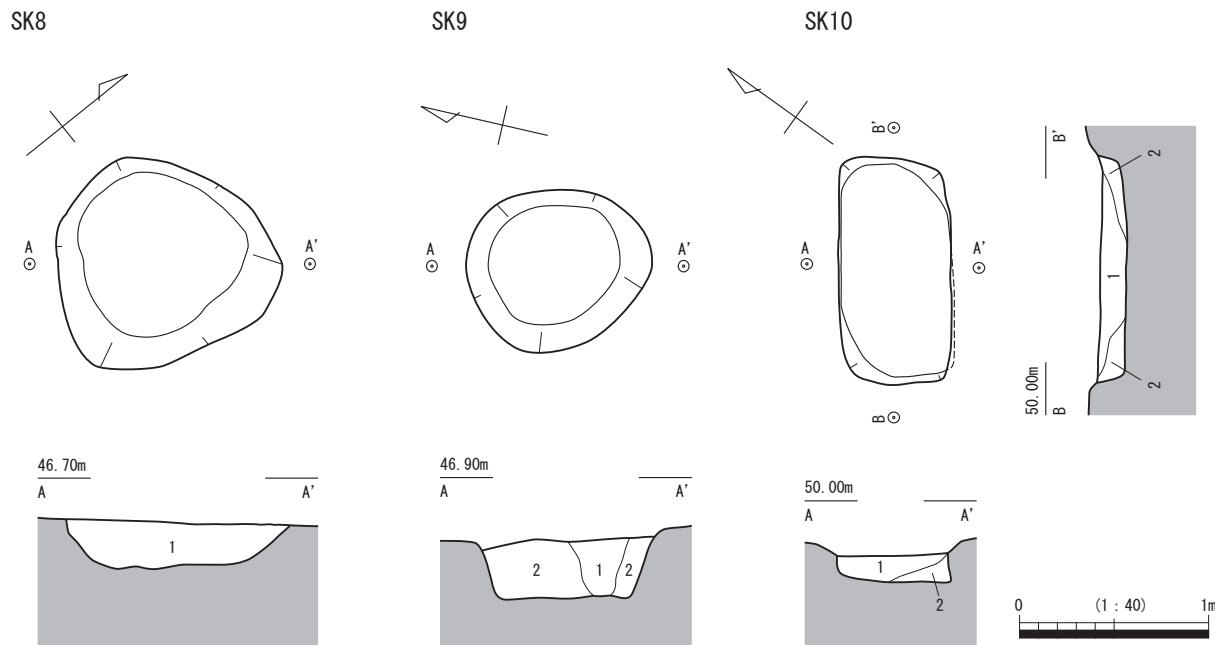
遺物は埋土中から須恵器や土師器が出土しており、このうち44～46を図示した。44は須恵器の杯蓋、45、46は土師器であり、45は甕、46は小型丸底壺である。時期は出土遺物やSI8との関係から、古墳時代後期前葉頃と考えられる。



1 7.5YR4/2 灰褐色土
(焼土ブロックや炭を含む)

1 7.5YR3/2 黒褐色土
(焼土ブロックや炭の小片を多く含む)

1 10YR3/1 黒褐色土
(粘性有、明黄褐色土ブロックを僅か、土器や炭、40cm以下の礫を少し含む)
2 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを多く含む)

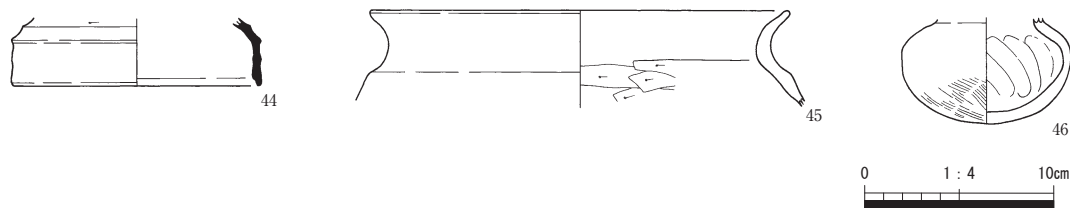


1 7.5YR3/2 黒褐色土 (白色粒を少し、
明赤褐色粒を僅か、黒褐色土ブロックを含む)

1 7.5YR4/2 灰褐色土 (黒褐色土ブロックを含む)
2 7.5YR4/2 灰褐色土 (白色や黄色粒を含む)

1 10YR3/1 黒褐色土 (橙色土ブロックを含む)
2 10YR3/1 黒褐色土 (橙色土ブロックを多く含む)

第63図 SK5~10



第64図 SK7出土遺物

第64図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
44	SK7	埋土	杯蓋	※12.9	△3.6	—	外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ、内面：ヨコナデ	灰オリーブ色	須恵器
45	SK7	埋土	甕	※21.9	△5.1	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器
46	SK7	埋土	小型丸底壺	—	△5.7	—	外面：ハケメ、内面：ナデ	黄橙色	土師器

SK8 (第63図、PL.32)

調査区北東隅で検出した。周辺にはSK6、SD3がある。平面形は歪な円形を呈し、規模は長軸118cm、短軸108cm、深さ21cmを測る。断面形はやや角のとれた逆台形を呈する。埋土は黒褐色土であり、遺物は含まない。時期は不明である。

SK9 (第63図、PL.32)

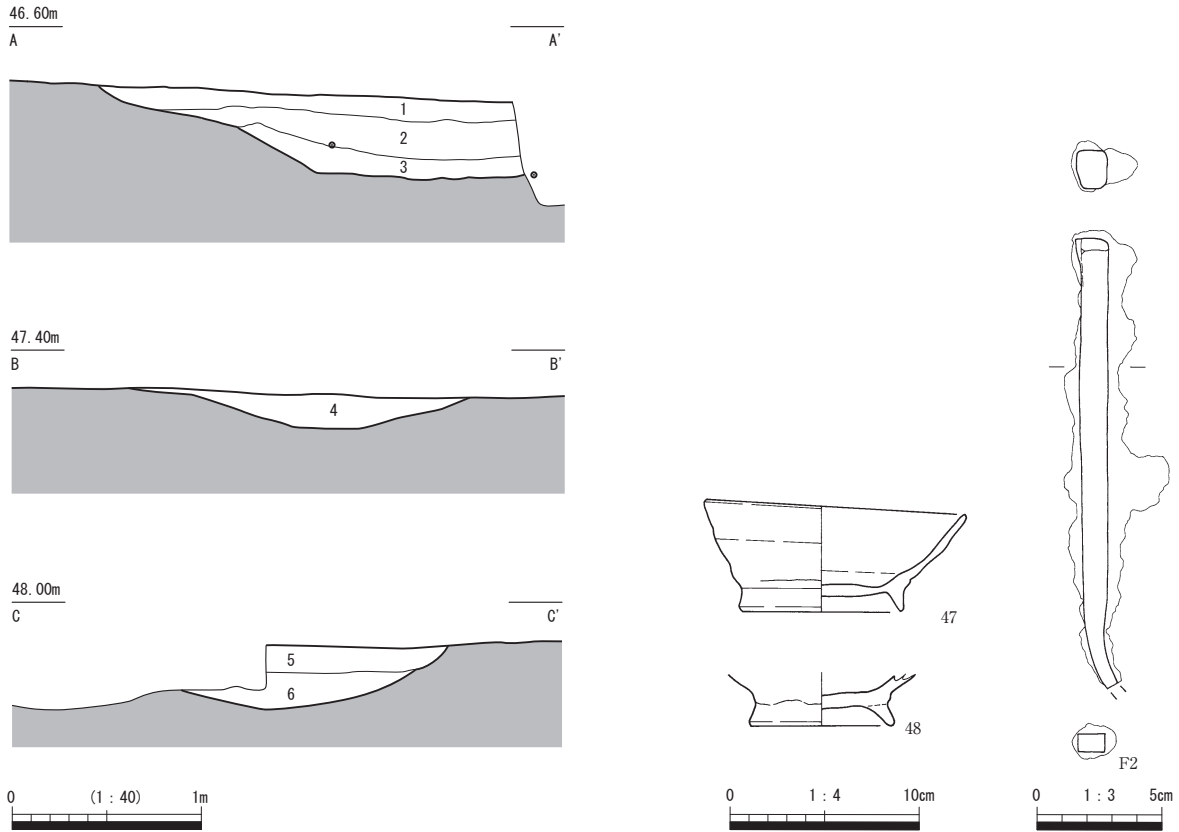
調査区中央で検出した。約7.00m北側にはSI10~12、SD3がある。平面形は南側がやや突出する楕円形を呈し、断面形は台形を呈する。規模は長軸98cm、短軸84cm、深さ32cmを測る。埋土は灰褐色土と、他の遺構埋土に比べてやや明るい色調となる。このため遺構埋没時の環境が異なっていた（例えば草地から森林へと環境が変化し、森林下において形成されたなど）可能性がある。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、埋土の状況から他の遺構に比べて新しくなる可能性がある。

SK10 (第63図、PL.32)

調査区南側で検出した。約23.00m北西側にはSK9がある。平面形はやや隅の丸い長方形を呈する。底面は平坦であり、凹凸は認められない。壁面は南側ではやや内傾するものの、概ね垂直に立ち上がり、断面形は箱形となる。規模は、長軸119cm、短軸59cm、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色土が堆積するが、下層には地山と考えられる橙色土のブロックが多く含まれる。遺物が出土していないため時期は不明である。なお、この土坑の性格については、形状から土坑墓となる可能性がある。

SD3 (第65図、PL.31・40)

調査区東側において検出した。周辺にはSK6・8があり、このうちSK6に切られる。南東から北西方向にかけて直線的にのびており、調査区外へと続く。規模は検出長39.80m、幅3.05m、深さ0.40mを測る。断面形は皿状または逆台形を呈するが、段が認められる部分については、さらに「ハ」の字形に広がる。



- 1 7.5YR3/1 黒褐色土（粘性強、炭を僅かに含む）
- 2 7.5YR2/1 黒色土（遺物を含む）
- 3 2.5Y3/2 黒褐色土（橙色土ブロックを少し含む）
- 4 2.5Y3/2 黒褐色土（橙色土ブロックを少し含む、底面に黄褐色砂がラミナ状に堆積）
- 5 10YR4/1 褐灰色土（白色粒や遺物を含む）
- 6 10YR4/1 褐灰色土（明黄褐色粒がラミナ状に堆積）

第65図 SD3・出土遺物

第65・66図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
47	SD3	埋土	高台付杯	※13.6	6.0	8.3	外面：ヨコナデ、ナデ、内面：ヨコナデ	橙色	土師器
48	SD3	埋土	高台付杯	—	△2.7	※7.4	外面：ヨコナデ、ナデ、内面：ヨコナデ	橙色	土師器
49	P40	埋土	甕	※11.9	△4.7	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	明褐色	土師器
50	P40	埋土	高杯	—	△7.6	11.8	内外面：ナデ	にぶい橙色	土師器

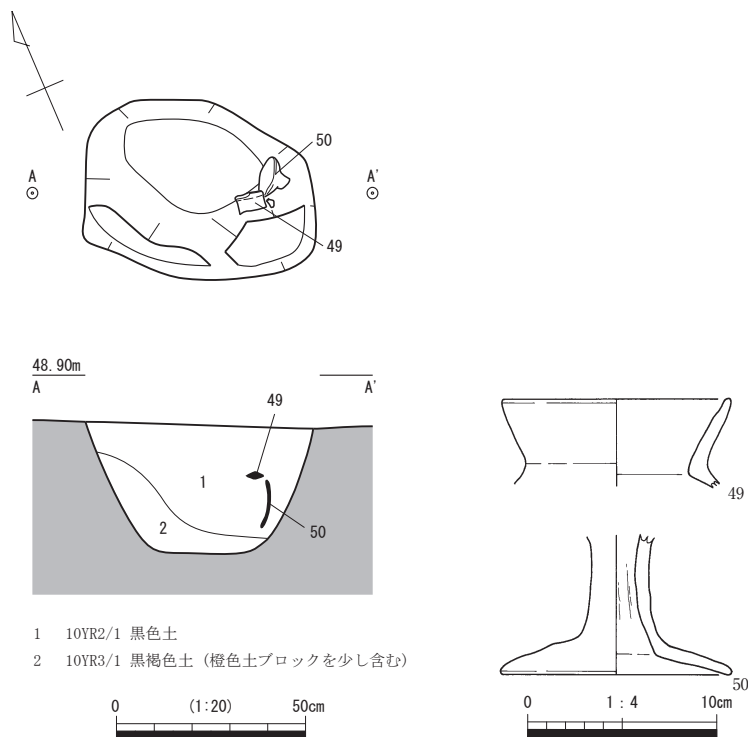
第65図 鉄製品観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
F2	SD3	埋土	棒状鉄器	最大長※17.7、最大幅：1.1、最大厚：0.7、重量：114.8	

遺物は埋土下層から出土した。47、48は高台付きの杯である。F2は棒状鉄器であり、先端が屈曲する。時期は、47、48の特徴から9世紀後半から10世紀前半頃と考えられる。

ピット

ピットはP25～41を確認した。これらは主に調査区北東側に分布する。この中には木の根の可能性



第66図 P40・出土遺物

のあるものも含まれる。本報告では、これらのピットのうち遺物が出土したのについて報告する。なお、そのほかのピットについては第2表に一覧表として掲載しておく。

P40 (第66図、PL.39・40)

調査区中央において検出した。北側はSI10によって切られる。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は長軸62cm、短軸47cm、深さ34cmを測る。

遺物は埋土下層において49、50が出土した。49は土師器の甕、50は土師

第2表 ピット一覧表

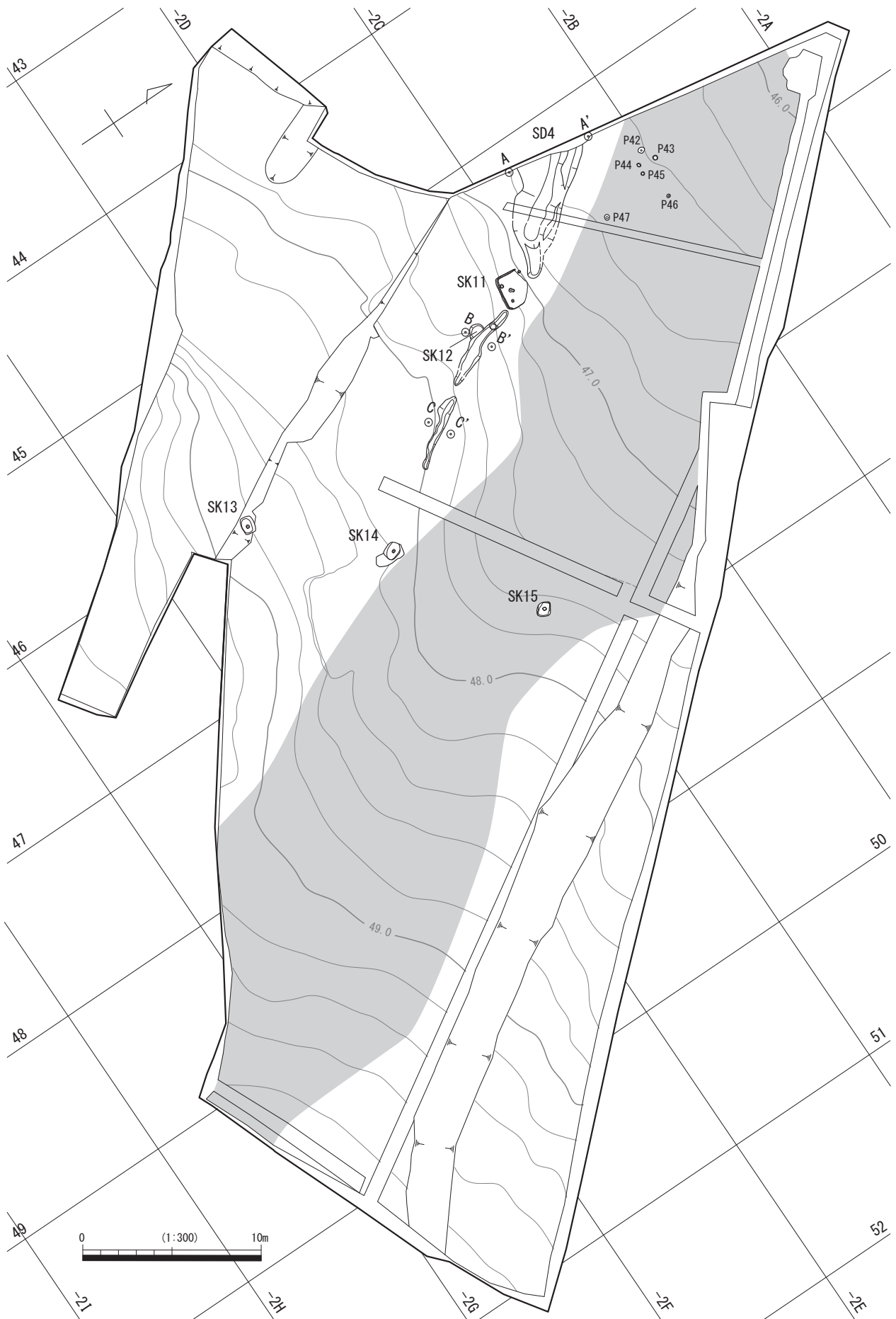
ピット名	規模(cm)	ピット名	規模(cm)
P25	長軸：26、短軸：21、深さ：14	P34	長軸：37、短軸：29、深さ：18
P26	長軸：31、短軸：29、深さ：34	P35	長軸：28、短軸：25、深さ：21
P27	長軸：32、短軸：30、深さ：35	P36	長軸：127、短軸：一、深さ：22
P28	長軸：29、短軸：25、深さ：22	P37	長軸：32、短軸：28、深さ：15
P29	長軸：40、短軸：28、深さ：42	P38	長軸：18、短軸：18、深さ：25
P30	長軸：24、短軸：22、深さ：14	P39	長軸：23、短軸：23、深さ：8
P31	長軸：26、短軸：25、深さ：52	P40	長軸：62、短軸：47、深さ：34
P32	長軸：36、短軸：30、深さ：33	P41	直軸：38、短軸：一、深さ：31
P33	長軸：38、短軸：24、深さ：15		

器の高杯である。時期は遺物の特徴から古墳時代中期後半頃と考えられる。

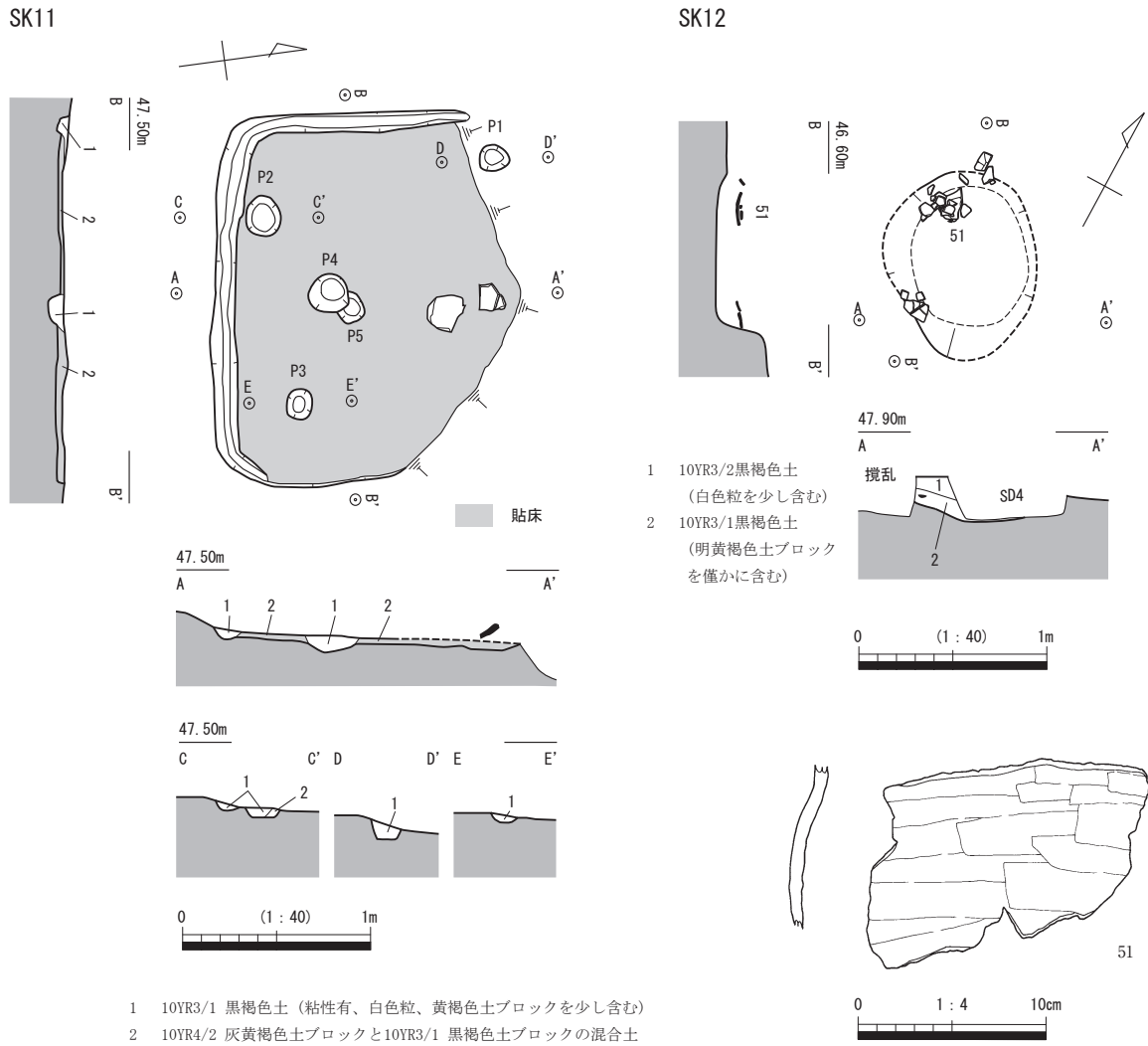
第3節 第2遺構面の調査

第2遺構面の調査は、谷部に堆積するI層除去後のII層上面で行った。平成18年度の調査では、この面において段状遺構1基を確認しているが、その数は少なく遺構密度は希薄であったと思われる。

調査の結果、土坑5基、溝1条、ピットを確認した。確認した遺構のうち、SK11は弥生時代中期、



第67図 第2遺構面遺構配置図



第68図 SK11・12・SK12出土遺物

第68図 土器観察表

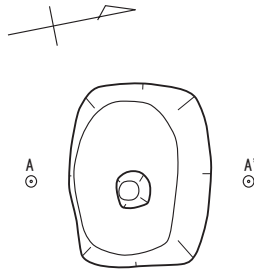
遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
51	SK12	埋土	深鉢	—	△11.1	—	外面：条痕、ナデ、内面：ナデ	明褐色	縄文土器

SK12は縄文時代後期から晩期、落とし穴が縄文時代のものと考えられることから、第3遺構面で確認した遺構は、縄文時代から弥生時代にかけて形成されたと思われる。なお、前回の調査では、縄文時代晩期を中心とする遺物が多量に出土しているが、今回の調査ではあまり出土しなかった。

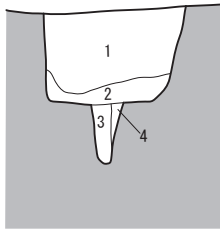
SK11 (第68図、PL.33)

調査区北側で検出した。この周囲には、SK12、SD4がある。削平や土砂の流出などにより遺構の残りが悪く、その北側は失われている。平面形は方形を呈し、規模は長軸198cm、短軸164cm以上を測る。底面には貼床が貼られ、そこにはピットが5基認められる。これらのピットは平面形が円形を呈し、規模はP1が直径15cm、深さ11cm、P2が直径22cm、深さ7cm、P3が直径17cm、深さ7cm、

SK13



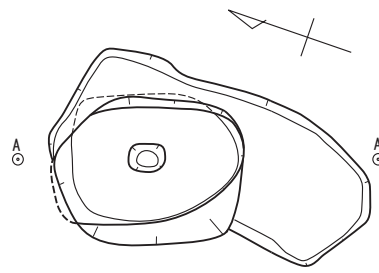
49.00m
A A'



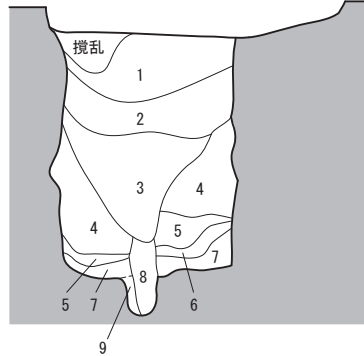
0 (1:40) 1m

- 1 10YR2/1 黒色土
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
(明黄褐色土ブロックを含む)
- 3 10YR2/1 黒色土
- 4 10YR4/1 褐灰色土
(にぶい黄褐色土ブロックを含む)

SK14

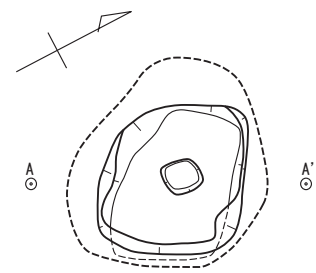


48.40m
A A'

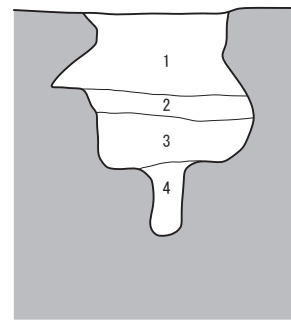


- 1 7.5YR4/1 褐灰色土 (白色や橙色粒を多く含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色粒や橙色粒を少し含む)
- 3 10YR3/1 黒褐色土 (しまり不良)
- 4 10YR2/1 黒色土 (粘性有、明黄褐色土ブロックを少し含む)
- 5 10YR4/2 灰褐色土 (明黄褐色土ブロックを含む)
- 6 10YR4/1 褐灰色土 (明黄褐色土ブロックを少し含む)
- 7 10YR7/6 明黄褐色土ブロックと10YR4/1 褐灰色土の混合土
- 8 10YR4/2 灰黄褐色土 (明黄褐色土ブロックを含む)
- 9 10YR3/1 黒褐色土 (明黄褐色土ブロックを多く含む)

SK15



47.90m
A A'



- 1 10YR3/1 黒褐色土 (白色粒を少し含む)
- 2 10YR2/1 黒色土
(にぶい黄褐色土ブロックを含む)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色土
(明褐色土ブロックを含む)
- 4 10YR4/1 褐灰色土 (明黄褐色粒を含む)

第69図 SK13~15

P4が直径21cm、深さ9cm、P5が直径17cm、深さ8cmを測る。これらのピットは、掘り方が浅いことから、柱穴とは考えにくい。壁際には、壁に沿うようにして幅17cm、深さ6cmの壁溝が巡る。

遺物は図示していないが、北側において弥生時代中期とみられる壺の破片が出土した。時期は出土遺物から弥生時代中期頃と考えられる。

SK12 (第68図、PL.34)

調査区北側で検出した。この付近にはSK11、SD4がある。このうちSD4によって切られており、遺構の残りは悪い。平面形は南東側がやや突出する歪な円形を呈し、規模は長軸198cm、短軸164cmを測る。埋土は断片的にしか残っていないが、概ね黒褐色土が堆積し、地山ブロックや砂粒の入り具合によって2層に分かれる。

遺物は、1層と2層との層界を中心に出土した。このうち51を図示した。51は外面に条痕やナデの痕跡が認められる粗製の深鉢である。時期は、縄文時代後期から晩期のものと考えられる。

SK13 (第69図、PL.34)

調査区の西側において検出した。ここは後世の掘削が及んでおり、遺構の上部は削平されている。SK14・15と谷を横断するようにして直線的に並んでおり、SK14との距離は約7.20mを測る。平面形はやや胴の張る長方形を呈し、規模は長軸96cm、短軸76cm、深さ49cmである。底面の中心部分には直径19cm、深さ31cmのピットがあり、落とし穴と考えられる。埋土は地山と考えられる明黄褐色土のブロックを含む灰黄褐色土が下層に薄く堆積し、その上に黒色土が堆積する。埋土中から遺物は出土しなかった。

SK14 (第69図、PL.34)

調査区中央において検出した。SK13・15と直線的に並んでおり、SK13との距離は約7.20m、SK15との距離は約8.00mである。上面には長軸168cm、幅73cm、深さ13cmの歪な長方形を呈する浅い落ち込みがある。

平面形は北側が突出しており、隅丸五角形をなす。規模は長軸99cm、短軸78cm、深さ135cm（落ち込み部分を除く）を測る。底面の中心部分には直径19cm、深さ23cmのピットがあり、落とし穴と考えられる。ピットの断面には逆茂木とみられる杭の痕跡が観察でき、埋土の下層まで認められる。埋土は、下層において地山とみられる明黄褐色ブロックを含む層が堆積しており、これらは壁面の状況から壁の崩落土と考えられる。上層には黒色土、黒褐色土、褐灰色土が堆積し、徐々に色調が明るくなる。埋土中から遺物は出土しなかった。

SK15 (第69図、PL.34)

調査区東側において検出した。SK13・14と直線的に並び、SK14との距離は約8.00mである。平面形は歪な方形を呈し、規模は長軸79cm、短軸77cm、深さ82cmを測る。底面には直径23cm、深さ38cmのピットがあり、落とし穴と考えられる。壁面はもともと垂直に立ちあがっていたと考えられるが、崩落したために歪となる。なお、埋土の下層から中層にかけて、この崩落度土と考えられる、地山と考えられる明黄褐色土のブロックを含む層が堆積する。埋土中から遺物は出土しなかった。

SD4 (第67・70図、PL.34)

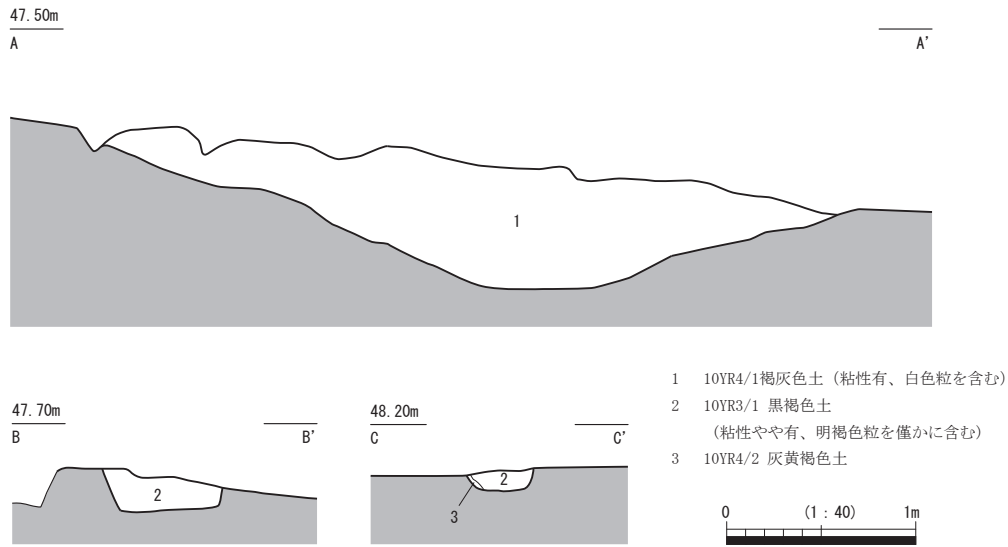
調査区北側において検出した。南東から北西方向へと伸びており、2ヶ所で途切れる。SK11と重複するが、残りが悪く、その切り合い関係は不明である。SK12については本遺構が切る。

南東から北東方向にかけてやや蛇行しながらのびる。規模は検出長19.30m、幅0.34~3.87m、深さ0.12~0.64mを測り、北西側に行くにつれ幅が広く、深くなっていく。断面形は南東側が箱形または逆台形を呈するが、北西側では幅広のすり鉢状を呈する。

遺物は図化できなかったが、埋土中から縄文土器の破片が出土した。時期は出土遺物やSK12との関係から、縄文時代晩期頃と考えられる。なお、遺構の性格については、蛇行することや、その立地状況から、雨水等の水の流れにより形成された自然流路と考えられる。

ピット

ピットはP42~47を確認した。これらは主に調査区北東側に分布する。第1遺構面で確認したもの



第70図 SD4

と同様、この中には木の根の可能性のあるものも含まれる。これらのピットについては、第3表に一覧表として掲載したので参照されたい。

第3表 ピット一覧表

ピット名	規模(cm)
P42	長軸：38、短軸：34、深さ：26
P43	長軸：28、短軸：26、深さ：13
P44	長軸：22、短軸：20、深さ：14
P45	長軸：25、短軸：18、深さ：13
P46	長軸：22、短軸：17、深さ：26
P47	長軸：33、短軸：28、深さ：13

第4節 第3遺構面の調査

第3遺構面は、II層除去後に確認した。第3遺構面の基盤となる層は、土石流など、斜面上方から流れ込んだ堆積物からなり、遺物は含まれない。なお、前回の調査ではII層中から縄文時代早期頃の尖頭器が出土していたが、今回の調査では、弥生土器片が若干出土したのみであり、この時期に属する遺物は出土しなかった。

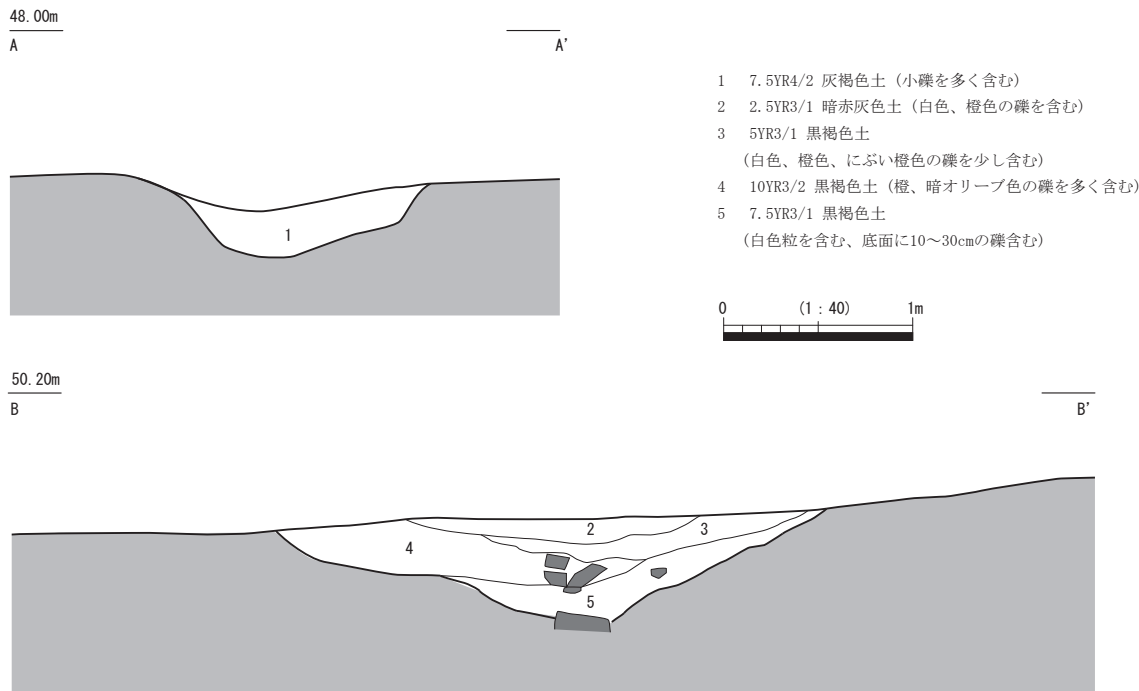
調査の結果、溝1条を確認した。溝は調査区全体を南東から北東方向へと谷に沿って蛇行しながらのびており、また南東や北東側において礫が検出されている。このため、土石流などによって形成された溝と考えられる。

SD5 (第71・72図、PL.35)

調査区東側において検出した。南東から北西方向へと蛇行しながらのびる。規模は検出長59.30m、幅2.70～4.90m、深さ0.26～1.05mを測る。断面形は歪な逆台形またはすり鉢状を呈し、2段に落ち込む場所については、上部が皿状や「ハ」の字形に広がる。



第71図 第3遺構面遺構配置図



第72図 SD5

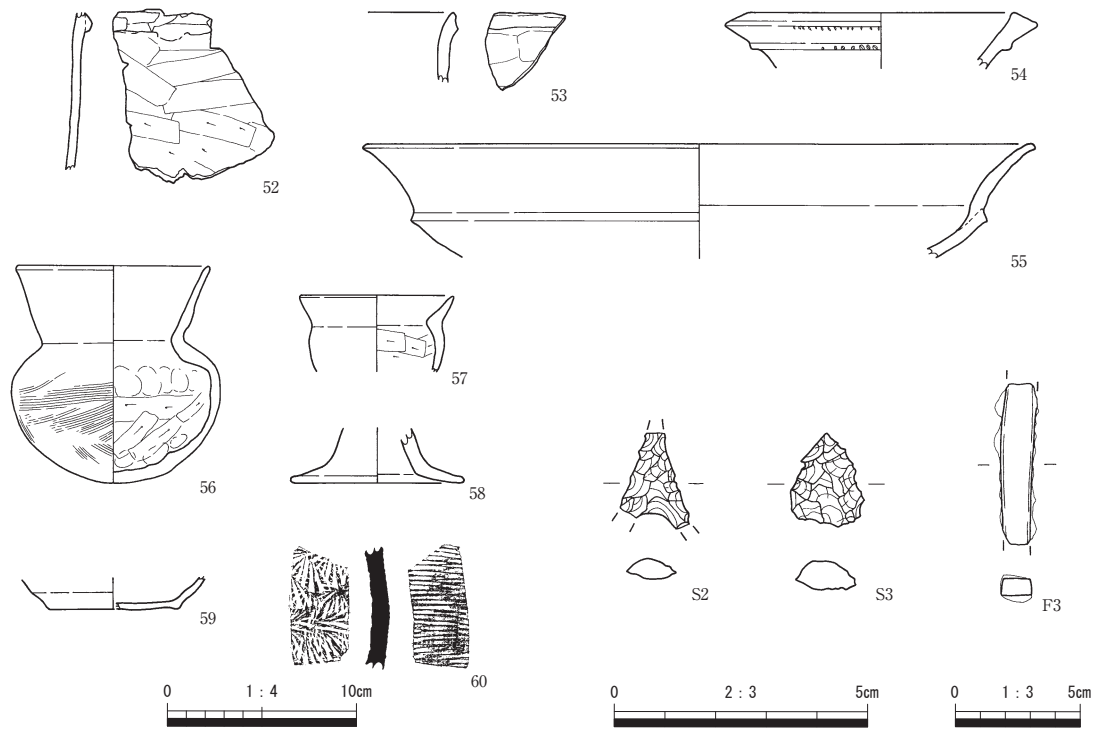
埋土下層には10~30cmほどの礫が南東側と北西側に認められ、特に北西側では顕著にみられる。これらの礫は、土石流の堆積物と考えられる。なお、本調査地の北に隣接する平成22年度の調査地や坂長第7遺跡の南側において同様の礫の広がりを確認しており、坂長第8遺跡の斜面上方から来た土石流が、坂長第7遺跡まで到達したと思われる。

遺物は埋土上層から土器の細片が出土したが、弥生時代のもと考えられ、上層から混入したと思われる。時期は第2遺構面の遺構の年代から、縄文時代以前に形成されたものと考えられる。

第5節 遺構に伴わない遺物

遺物は表土、包含層中から縄文時代から古代の遺物が出土しているが、調査区全体にわたり数が少ない。表土や攪乱、I層から出土したものが大半であり、I層からは主に古墳時代の遺物が出土している。なお、II層からも弥生土器が若干出土しているが、第2遺構面で確認した遺構の年代を考えると、これらは上層からの混入とみられる。ここでは出土した遺物のうち52~60、S2・3、F3を図示した。

52、53は縄文時代晩期頃の深鉢であり、口縁部に貼付突帯が付く。54は弥生時代中期頃の壺であり、口縁部の下に突帯が付き、口縁部下端とともに刻目が施される。55~58は古墳時代の土師器であり、55、58は高杯、56は直口壺、57は小型丸底壺である。59は底部に回転糸切りの認められる土師器の杯であり、中世前期頃のもと考えられる。60は須恵器の甕であり、外面に平行タタキメ、内面に車輪文が認められる。



第73図 遺構に伴わない遺物

第73図 土器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	施文・調整	色調	備考
52	-2C46	—	深鉢	—	△ 9.3	—	外面：ケズリ、無刻目貼付突帯、内面：ナデ	にぶい黄橙色	縄文土器
53	-2C46	I層	深鉢	—	△ 3.7	—	外面：ナデ、無刻目貼付突帯、内面：ナデ	にぶい黄褐色	縄文土器
54	-2C46	—	壺	※13.9	△ 3.0	—	外面：ナデ、刺突文、内面：ナデ	にぶい黄橙色	弥生土器
55	-2C44	—	高杯	※35.2	△ 6.2	—	内外面：ナデ	黄橙色	土師器
56	-2D47	—	小型丸底壺	10.0	11.0	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器、黒斑有
57	-2C46	—	小型丸底壺	※ 8.0	△ 4.1	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器
58	-2F49	I層	高杯	—	△ 3.0	※9.2	内外面：ナデ	橙色	土師器
59	-2B46	表土	杯	—	△ 1.8	※6.8	外面：ヨコナデ、回転糸切り、内面：ヨコナデ	橙色	土師器
60	—	—	甕	—	△ 6.5	—	外面：平行タタキ、内面：当具痕（車輪文）	灰色	須恵器

第73図 石器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	法量 (cm・g)	備考
S2	-2D45	表土	石鏃	最大長：※1.9、最大幅：1.4、最大厚：0.4、重量：0.7	黒曜石
S3	-2C47	—	石鏃	最大長：※1.8、最大幅：1.4、最大厚：0.6、重量：1.4	黒曜石

第73図 鉄器観察表

遺物番号	グリッド名	層位	器種	法量 (cm・g)	備考
F2	-2D48	II層	棒状鉄器	最大長：※6.3、最大幅：1.2、最大厚：0.7、重量：15.5	

S2・3は黒曜石製の石鏃であり、S2は凹基式、S3は平基式である。F3は棒状鉄器であり、両端が失われている。

第5章 坂長第7遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

坂長第7遺跡、坂長第8遺跡は、米子平野南東部の日野川左岸に広がる長者原台地（高位段丘）と呼ばれる台地の南東縁の開析谷に位置する。今回の分析調査では、調査区における縄文時代以降の古環境変遷に関する検討を行うことを目的として、調査区内の堆積物の肉眼・土壌薄片作製鑑定による層相解析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析を実施する。

2. 調査地点

調査は調査区南壁および北壁に設定された4ヶ所の地点について実施する。各調査地点では、堆積層の層相観察および分析用の不攪乱柱状堆積物試料の採取を行った。

各地点の層相および分析層準を第74図に示す。各地点の層相は、肉眼観察結果および土壌薄片鑑定結果と合わせて後述する。

3. 分析方法

（1）層相解析

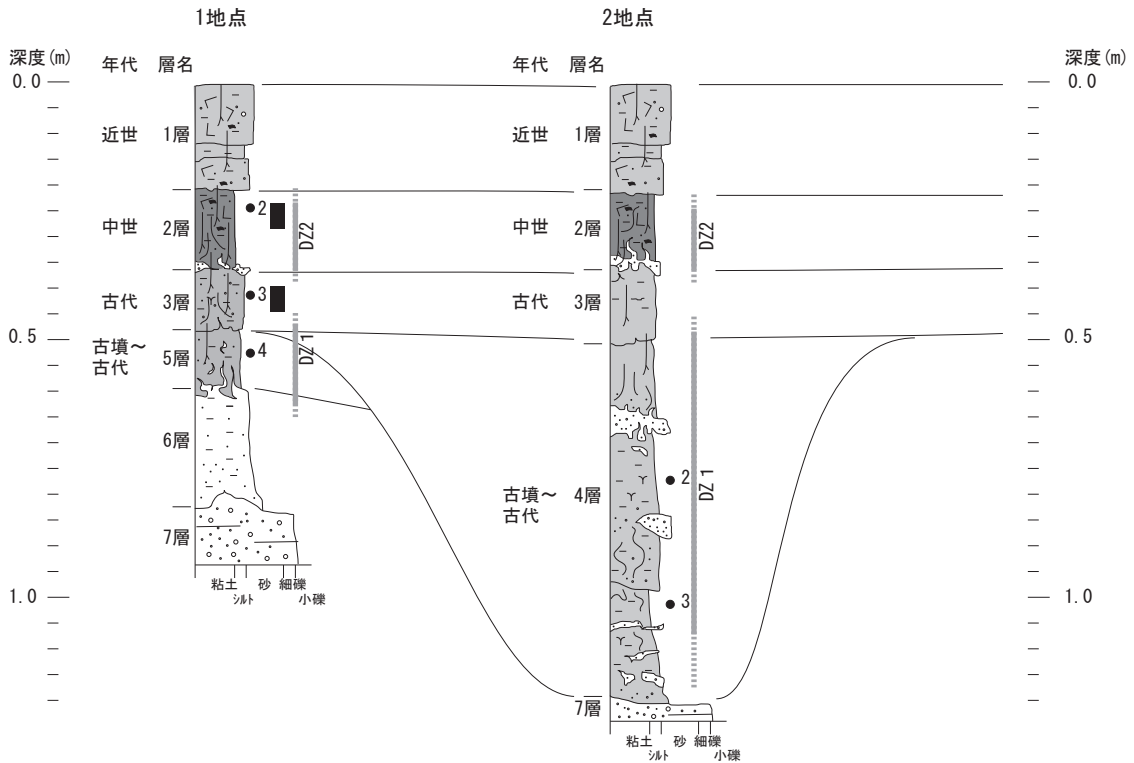
調査は、現地調査と室内分析調査に区分される。現地調査では、堆積物断面の肉眼観察を行い、堆積学・土壌学的記載を行う。また、代表的な層準について室内分析用の不攪乱柱状試料を採取する。室内分析は、採取した不攪乱柱状試料を室内にて、再度、肉眼による層相観察を行い、現地調査成果を補完する。また、堆積物の土壌・堆積構造のメソ・ミクロスケールでの観察記載を行うために、古代および中世の層準については土壌薄片作製鑑定を実施する。

土壌薄片作製は、試料を80℃で1日間乾燥した後、樹脂（ペトロポキシおよびシアノボンド）で固化を行い、片面の研磨を実施した。固化および研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ70 μm 程度まで研磨を行い、カナダバルサムによりカバーガラスを接着した。なお、土壌薄片による層相や構造記載は、久馬・八木久訳監修（1998）の「土壌薄片記載ハンドブック」を参照する。

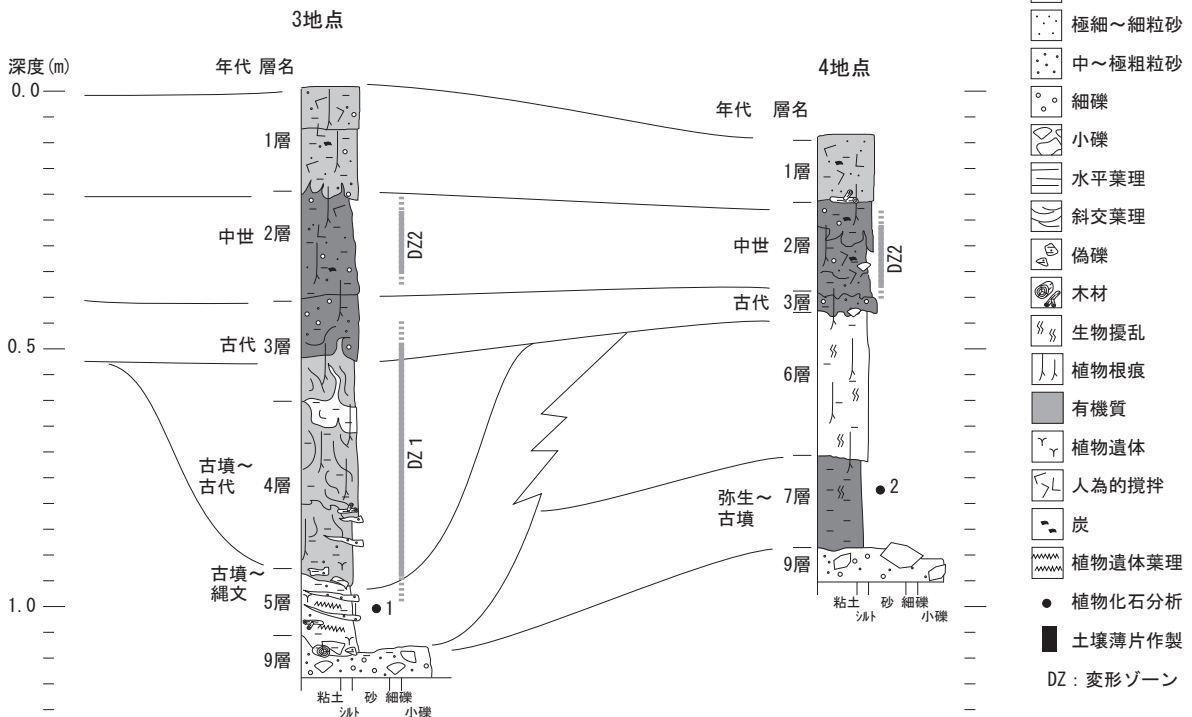
（2）花粉分析

試料約10gについて、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman(1952、1957)、Faegri and Iversen(1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

調査区北壁



調査区南壁



- 凡例
- シルト・粘土(泥)
 - 極細～細粒砂
 - 中～極粗粒砂
 - 細礫
 - 小礫
 - 水平葉理
 - 斜交葉理
 - 偽礫
 - 木材
 - 生物擾乱
 - 植物根痕
 - 有機質
 - 植物遺体
 - 人為的攪拌
 - 炭
 - 植物遺体葉理
 - 植物化石分析
 - 土壌薄片作製
 - DZ: 変形ゾーン

第74図 調査地点の層序および分析層準

結果は同定・計数結果の一覧表および花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態等の情報についても記録する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量を図示する。

(4) 種実分析

試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。大型植物遺体の同定は、現生標本と石川（1994）、中山ほか（2000）等を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。大型植物遺体以外の抽出物は、一覧表の下部にまとめて表示する。分析後は、大型植物遺体を容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸し、保管する。

3. 結果

(1) 層相解析

調査区北壁・南壁断面の堆積層の累重状況を第74図、第75図に示す。各調査区の堆積層は、上位より1層から9層に区分される。以下に各断面の堆積層の層相について記載する。

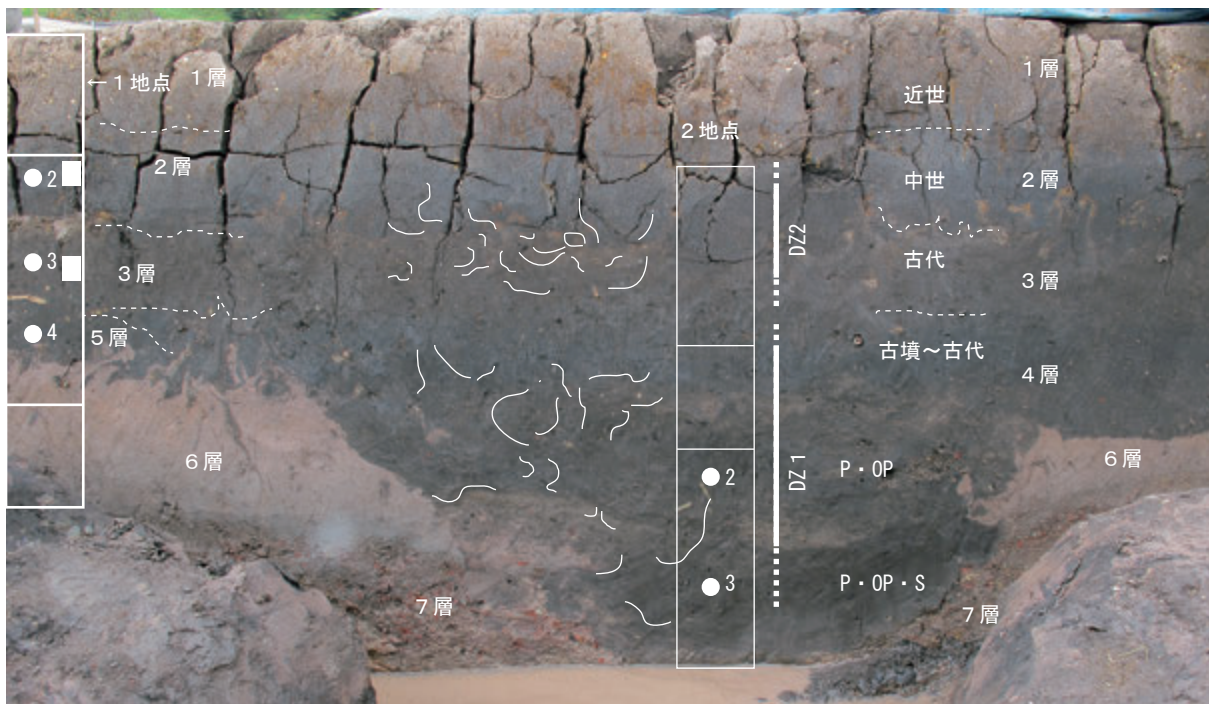
北壁断面

本断面の堆積物は、上位より1層～7層に区分される。

1層は、褐灰～暗灰を呈する、細礫、粗粒砂が多く混じる細粒砂質泥～泥質砂からなる。著しく攪拌されており、初生の堆積構造は不明瞭となっているものの、中部で泥がちな層準を挟在する。3mm以下の炭片が多く混じり、現世の根系、および過去に充填された根系が高密度に分布する。出土遺物から近世と推定される。

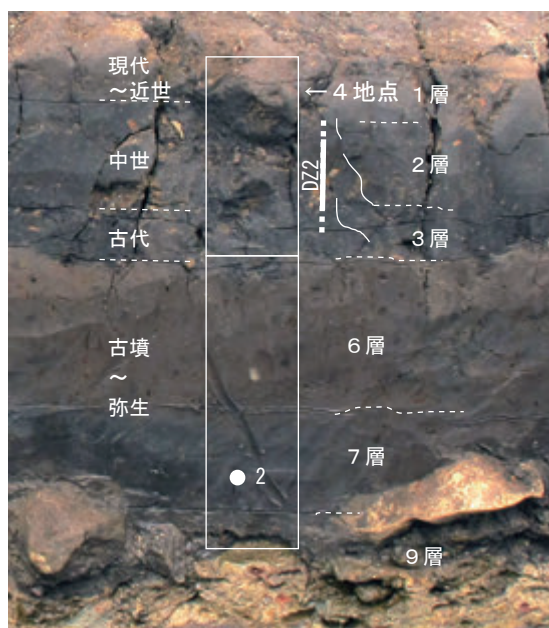
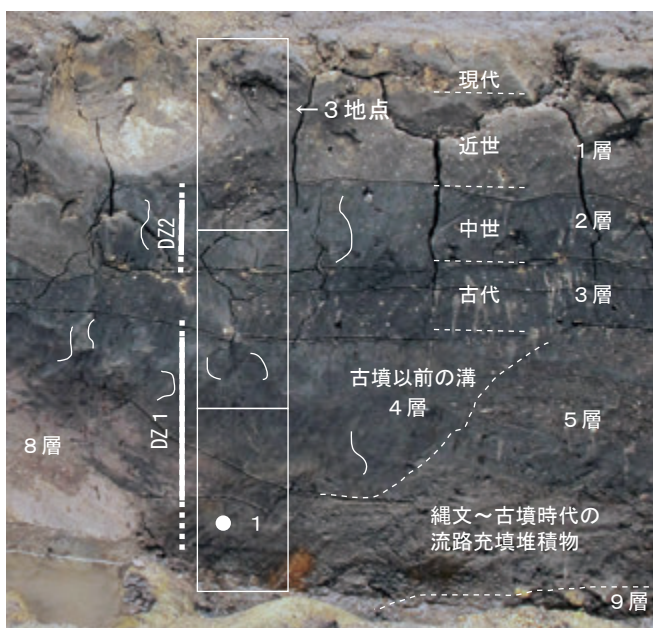
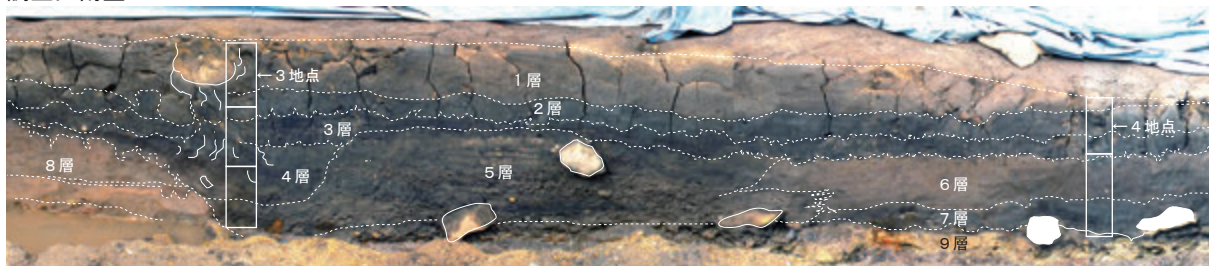
2層は黒色を呈する中粒砂～細粒砂混じり腐植質泥からなる。著しく攪拌されており、塊状をなす。粒団などの土壌構造は確認されない。上位層準から連続する幅1mm以下の根成孔隙が分布する。根成

調査区北壁



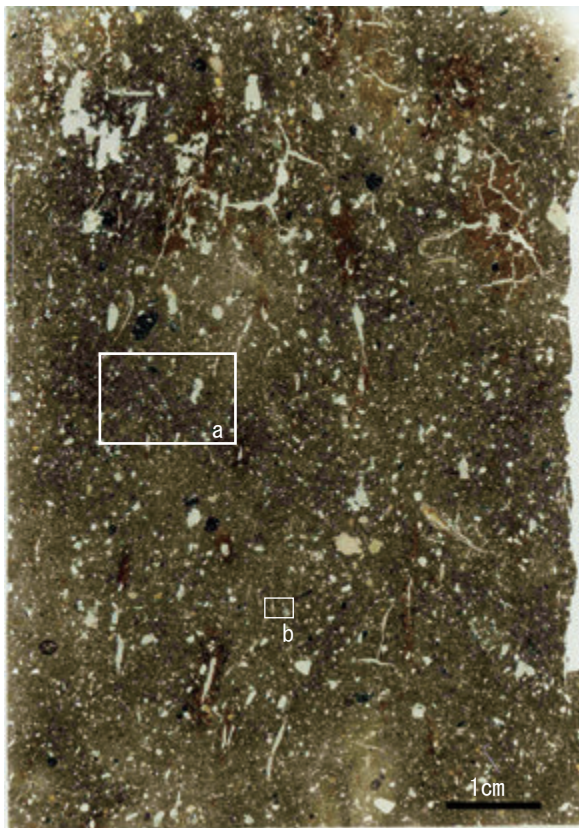
□範囲は不攪乱柱状試料採取位置 ○植物化石分析試料位置 □土壌薄片位置 DZ: 変形ゾーン

調査区南壁

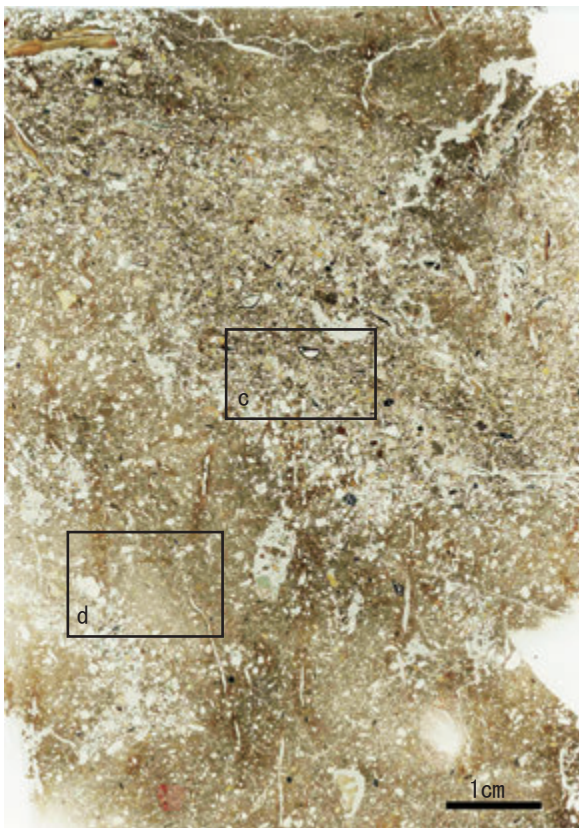
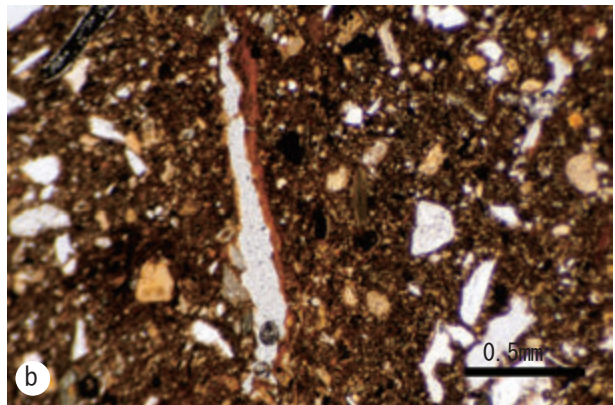
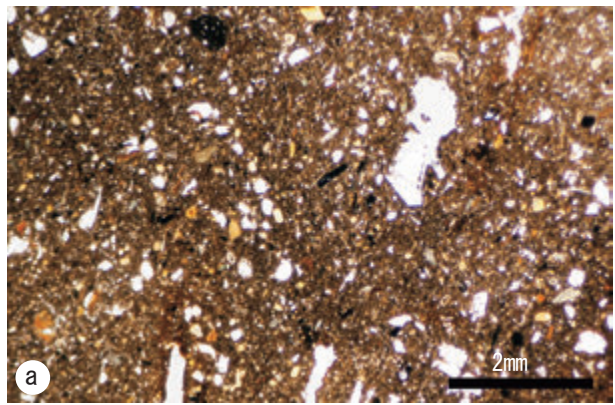


□範囲は不攪乱柱状試料採取位置 ○植物化石分析試料位置 DZ: 変形ゾーン

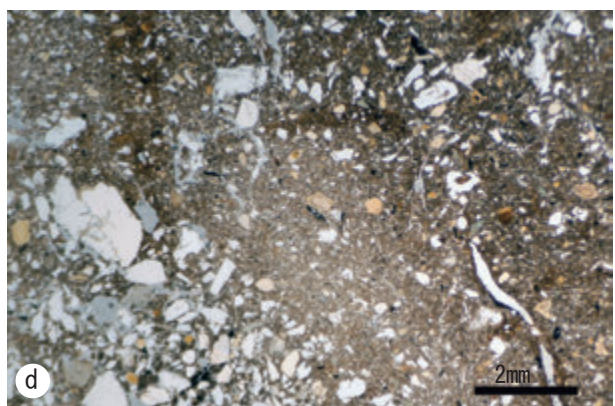
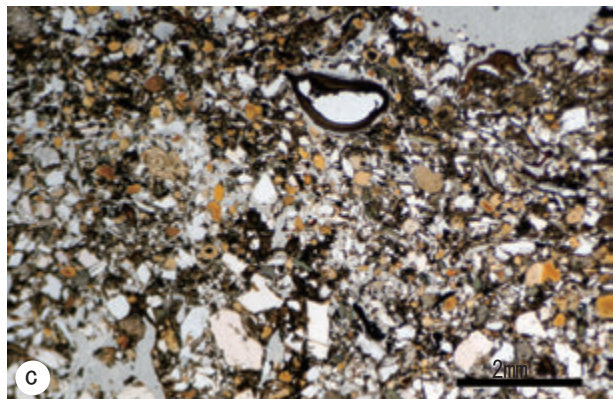
第75図 調査区北壁・南壁断面の堆積状況



2層上部



3層中部



第76図 土壤剥片写真

孔隙は泥で充填されたものや空隙のもの、連続性の良いもの不連続なものが存在する。また、本層は著しく流動変形しており、下位層準の3層由来の砂質泥からなる偽礫が引きずり上げられている状況が確認される。この変形構造は後述するように地震動による変形構造に相当する。

本層上部（試料1）の微細構造は、チャンネル構造で主要な孔隙が幅0.5～1.0mm前後のチャンネル孔隙からなる（第76図）。分離した粒団は存在しない。構成層は、砂混じりの泥層である。構成層の粒度組成および微細堆積相は、垂直および水平方向に変化せず、全体的に均質である。層内の腐植ないし泥中には、多量の微細な炭片が含まれる。炭片については、幅2.0～4.0mm前後の比較的大きなものも多く存在する。層内に含まれる砂粒子は、単粒で存在しており、砂粒子の集合が認められない。この砂粒子については、配向や級化が確認されない。以上の層相から2層は、著しく攪拌された堆積物であることが窺える。このような構造は水田土壌の構造に類似するもので、発掘調査において水田遺構が確認されていることとも同調的である。

3層は、暗灰色を呈する、粗粒砂混じり砂質泥ないし泥質砂からなる。上部は著しく流動変形しており、初生の堆積構造は不明瞭となっている。変形が少ない部分をみると砂質泥～泥質砂の葉理が確認される。また、変形構造は、肉眼観察では中部層準で顕著でなくなり、最下部で下位の4層・5層より連続する変形構造が確認される。

本層の微細構造は、右下から左上への明瞭な流線が形成される（第76図）。この流線に沿って、砂泥層互層が累重する。このうち中粒砂～極粗粒砂からなる砂層部分では、パッキングおよびバグ孔隙が存在する。砂層内には、種実遺体が多く含まれる。砂層を構成する砂粒子間には、腐植や泥が充填される。泥層部分では、砂粒子が多く含まれる。含まれる砂粒子は、複数の粒子が接して存在する。層内には、幅1.0～3.0mm前後の炭片が多く含まれる。チャンネル孔隙が試料下半部で相対的に多く分布する。このチャンネル孔隙は、上記した構成層の流線に沿わず直線状に伸びる。孔隙には、酸化鉄の準被覆がみられる。以上の層相から、3層は氾濫堆積物と判断される。形成年代は出土遺物から古代頃と推定される。

4層は下位の6・7層をガリー状に侵食された溝を充填する堆積物である。灰色を呈する中～細粒砂の薄層を挟在する、灰～暗灰色を呈する有機質砂混じり泥～砂質泥からなる。本層も全体的に火焰状に流動変形している。この変形により、挟在する砂層は不連続となっており、直下層準の6層・7層堆積物が火焰状に引きずり上げられている状況が確認される。上述の変形構造に連続する可能性もあるが、上記したように2層下部で不明瞭となることから、別の変形の可能性がある。以上のような層相から、本層はガリー状の溝を充填する堆積物からなり、氾濫堆積物が流入する時期を挟在する湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。出土遺物から古墳時代～古代にかけて形成されたものと推定される。

5層は溝岸に認められるやや腐植質な泥質砂からなる。本層も4層で認められた変形構造が確認される。著しく変形しているため、初生の堆積構造を把握できないものの、腐植含量が高く、変形が小さい部分で著しく擾乱されていることから、土壌生成が進行する時期を挟在する湿地のような堆積環境で形成された堆積物と推定される。

6層は上方細粒化する黄灰を呈する泥質細粒砂～極細粒砂質泥からなり、上部は火焰状に流動変形しているが、下部では不明瞭ながら葉理構造が確認される。7層は葉理構造をなす、細粒砂～中粒砂からなり、上部では土壌生成の進行は確認されない。これら堆積層がどのような堆積空間に形成され

たかは7層の下方外形が不明のため特定できないものの、上方細粒化する一連の堆積物であることから、流路充填堆積物の可能性がある。

南壁断面

本断面の堆積物は1層～9層に区分される。1層～3層堆積物は上記の北壁と基本的には同様な層相をなすが、全体的に細礫サイズの岩片が比較的多く混じる。また、2層は南壁ほど顕著ではないが、流動変形が確認される。

4層は断面西側の8層および5層を掘削して形成された溝を充填する堆積物である。細粒砂混じり泥からなり、人為的掘削時に生じたとみられる8層由来の亜角を呈する偽礫が下部に混じる。本層は流動変形しており、初生の堆積構造は不明瞭となっている。

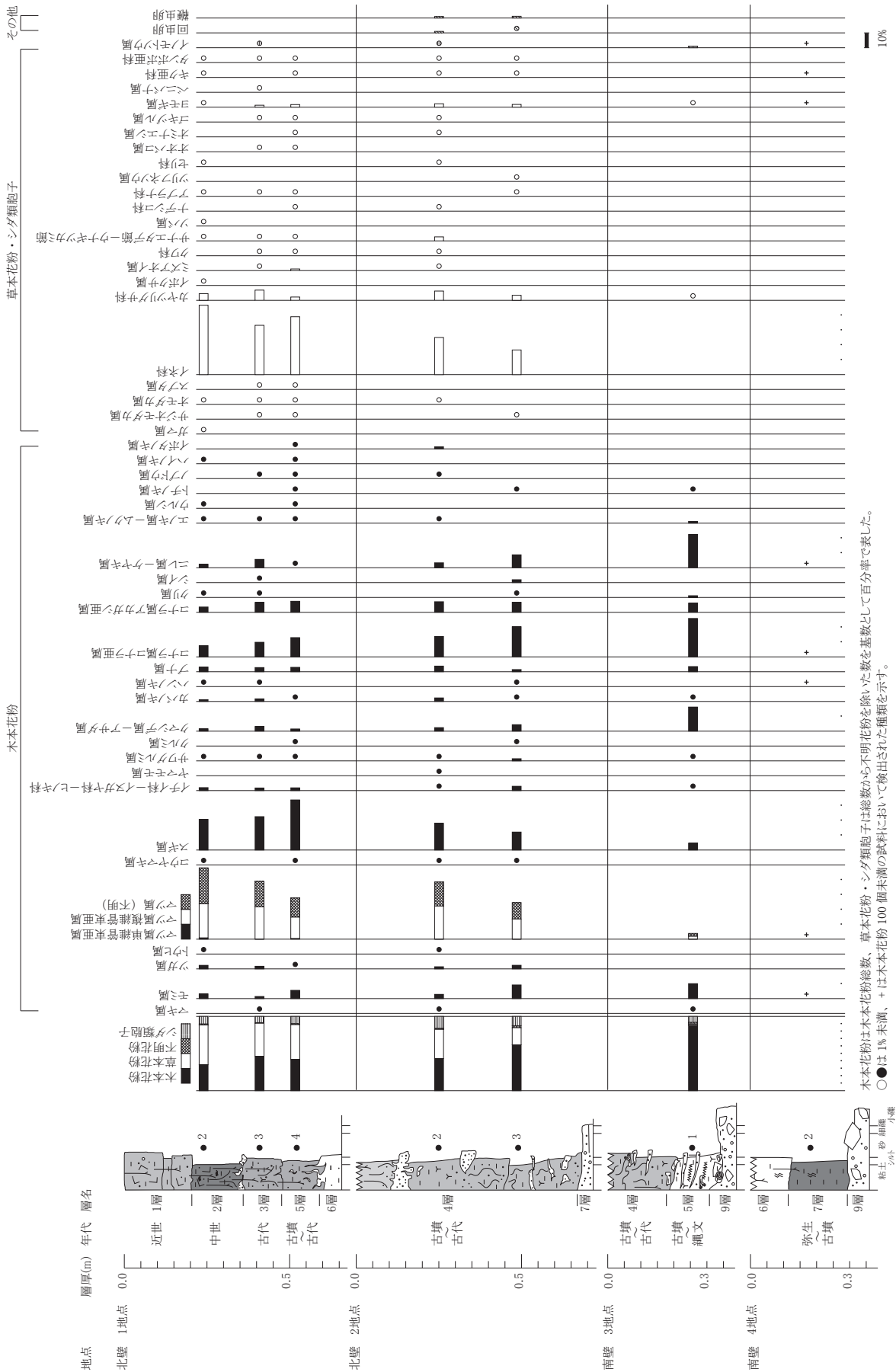
5層は下に浅い凸な外形をなす堆積空間を充填する、砂礫～泥質砂の積層からなり、上方細粒化する。また側方への粒径変化も著しく、黄灰色を呈する砂質泥からなる6層と同時異相の関係にある可能性がある。このような層相から、5層は流路充填堆積物、6層はその氾濫堆積物と推定される。

7層は黒色を呈する塊状をなす腐植質泥からなり、黒泥状を呈する。後述する植物化石分析において、化石の保存状態が著しく悪いことを踏まえると、埋没古土壌の可能性が高い。

8層は上方細粒化する黄灰色を呈する泥質細粒砂～極細粒砂質泥

第4表 花粉分析結果

種類	北壁					南壁	
	1地点			2地点		3地点	4地点
	2	3	4	2	3	1	2
木本花粉							
マキ属	—	1	—	1	—	2	—
モミ属	8	4	15	6	19	26	1
ツガ属	6	5	1	3	5	—	—
トウヒ属	1	—	—	1	—	—	—
マツ属単維管束亜属	2	—	1	—	—	—	—
マツ属複維管束亜属	58	62	39	47	28	5	2
マツ属(不明)	61	49	35	34	23	5	9
コウヤマキ属	2	—	1	2	2	—	—
スギ属	52	64	91	38	25	12	—
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	5	5	5	1	6	2	—
ヤマモモ属	—	—	—	1	—	—	—
サワグルミ属	1	1	2	2	3	2	—
クルミ属	—	—	1	—	2	—	—
クマシデ属-アサダ属	4	9	4	5	9	42	—
カバノキ属	3	5	2	5	1	2	—
ハンノキ属	1	2	—	—	1	—	1
ブナ属	8	8	8	8	3	9	—
コナラ属コナラ亜属	19	28	35	29	42	67	1
コナラ属アカガシ亜属	9	19	20	15	14	16	—
クリ属	1	1	—	—	1	3	—
シイ属	—	2	—	—	4	—	—
ニレ属-ケヤキ属	6	16	2	7	18	58	2
エノキ属-ムクノキ属	1	1	2	1	—	3	—
シキミ属	1	—	—	—	—	—	—
コクサギ属	—	—	1	—	—	—	—
センダン属	1	—	—	—	—	—	—
ウルシ属	1	—	1	—	—	—	—
カエデ属	—	—	—	—	—	2	—
トチノキ属	—	—	1	—	1	2	—
ブドウ属	—	1	—	—	—	—	—
ノブドウ属	—	1	1	2	—	—	—
ウコギ科	—	—	—	—	—	1	—
ミズキ属	—	1	—	—	—	—	—
ハイノキ属	1	—	1	—	—	—	—
イボタノキ属	—	—	1	3	—	—	—
草本花粉							
ガマ属	1	—	—	—	—	—	—
サジオモダカ属	—	1	1	—	1	—	—
オモダカ属	1	1	4	2	—	—	—
スプタ属	—	1	1	—	—	—	—
イネ科	332	203	247	120	54	—	—
カヤツリグサ科	32	42	14	30	11	2	—
イボクサ属	1	—	—	—	—	—	—
ミズアオイ属	—	5	7	4	—	—	—
ユリ科	—	1	—	—	—	—	—
クワ科	—	3	1	1	—	—	—
サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	3	2	13	—	—	—
ソバ属	1	—	—	—	—	—	—
アカサ科	—	1	—	—	—	—	—
ナデシコ科	—	—	2	1	—	—	—
アブラナ科	2	1	1	—	1	—	—
ツリフネソウ属	—	—	—	—	1	—	—
カラスノゴマ属	1	—	—	—	—	—	—
セリ科	1	—	—	2	—	—	—
オオバコ属	—	1	2	—	—	—	—
ヤエムグラ属-アカネ属	—	—	—	—	—	1	—
オミナエシ属	—	—	1	2	—	—	—
ゴキヅル属	—	2	1	1	—	—	—
ヨモギ属	6	8	11	11	6	2	2
ベニバナ属	—	1	—	—	—	—	—
キク亜科	2	—	2	2	2	—	1
タンポポ亜科	3	1	4	2	1	—	—
不明花粉							
不明花粉	9	5	8	6	9	7	—
シダ類孢子							
ヒカゲノカズラ属	—	—	—	—	—	—	1
ゼンマイ属	1	—	—	—	—	—	—
イノモトソウ属	—	1	—	1	—	3	1
他のシダ類孢子	73	51	63	78	42	21	27
合計							
木本花粉	252	285	270	211	207	259	16
草本花粉	385	275	301	191	77	5	3
不明花粉	9	5	8	6	9	7	0
シダ類孢子	74	52	63	79	42	24	29
合計(不明を除く)	711	612	634	481	326	288	48
その他							
回虫卵	—	—	—	5	2	—	—
鞭虫卵	—	—	—	5	4	—	—



第77図 主要花粉化石群集の層位分布

からなり、上位層準との層界は火焰状に流動変形している。また、上部層準は下部に比較して擾乱されている状況が確認される。本層は6層と同様に氾濫堆積物と推定される。9層は淘汰不良の砂礫からなる土石流堆積物である。

(2) 花粉分析

結果を第4表、第77図に示す。1地点の試料番号2、3、4は組成が類似する。木本花粉と草本花粉の比率は草本花粉の方がやや多いが、上位ほど草本花粉の割合が若干高くなる傾向にある。花粉化石の保存状態は普通である。木本花粉はマツ属が30～40%と多く、次いでスギ属が20～30%検出される。コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属、モミ属の順に多く検出される。上位ほどマツ属が漸増し、それに伴って他の種類が相対的に減少する。草本花粉はイネ科の割合が非常に高い。カヤツリグサ科、ヨモギ属等がみられるほか、サジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属、などの水生植物、ソバ属、ベニバナ属といった栽培植物がみられる。

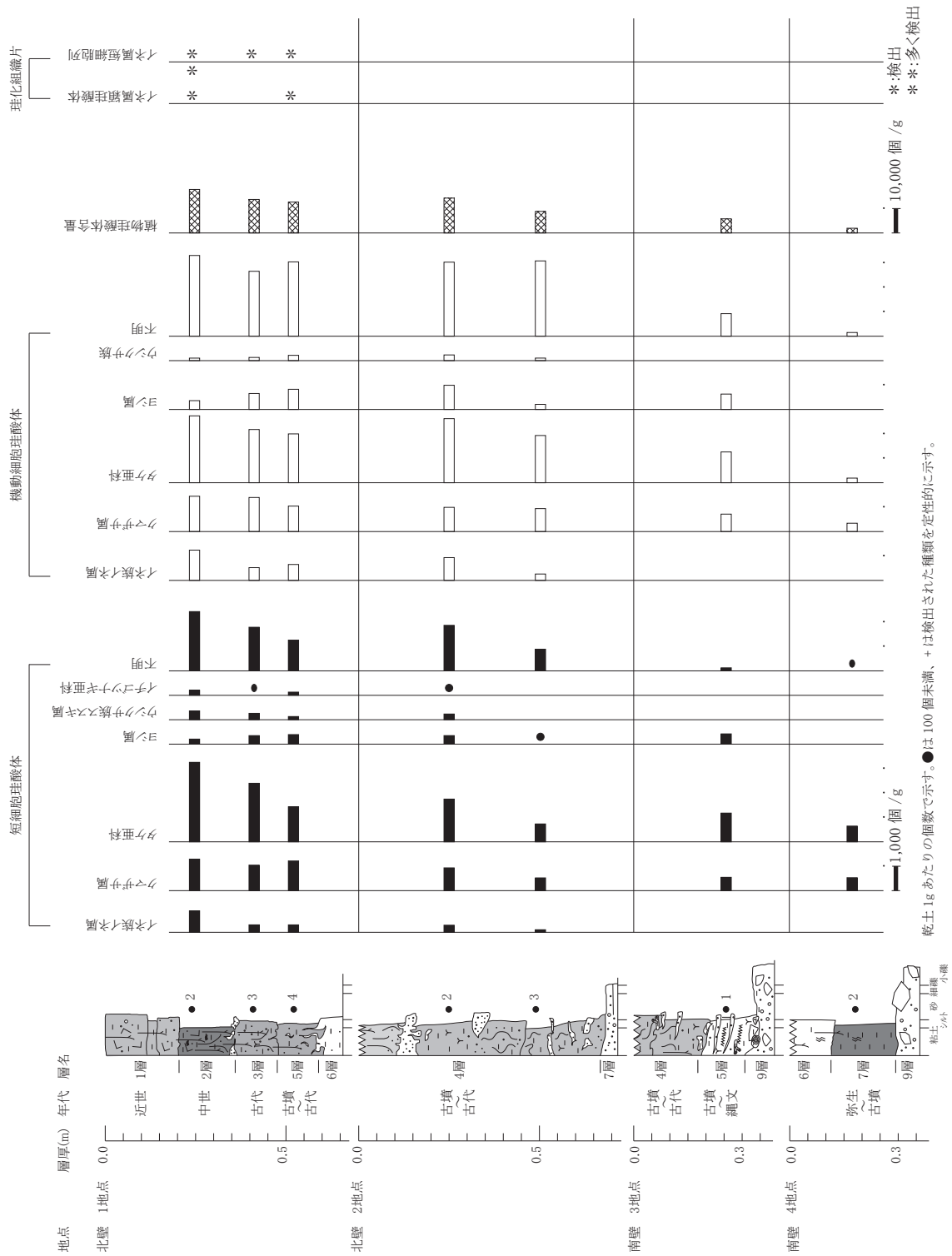
2地点の2、3の木本花粉と草本花粉の比率は、試料番号3では木本花粉の方が多いが、試料番号2ではほぼ同率である。保存状態は2試料ともこの時期のものとしては普通である。木本花粉はマツ属、コナラ亜属、スギ属、アカガシ亜属の順に多く、マツ属とスギ属は漸増傾向にある。草本花粉はイネ科が多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属が検出される。

3地点は、木本花粉がほとんどを占める。保存状態はこの時期のものとしては普通である。コナラ亜属とニレ属—ケヤキ属が多く、クマシデ属—アサダ属、モミ属、アカガシ亜属、スギ属の順に多い。

第5表 植物珪酸体含量

分類群	北 壁					南 壁	
	1 地点			2 地点		3 地点	4 地点
	2	3	4	2	3	1	2
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	900	300	300	300	100	—	—
クマザサ属	1,300	1,000	1,200	900	500	500	500
タケ亜科	3,300	2,400	1,400	1,700	700	1,200	600
ヨシ属	200	300	400	300	<100	400	—
ウシクサ族ススキ属	400	300	100	200	—	—	—
イチゴツナギ亜科	200	<100	100	<100	—	—	—
不明	2,400	1,800	1,300	1,900	900	100	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	1,200	500	700	900	300	—	—
クマザサ属	1,400	1,400	1,000	1,000	900	700	300
タケ亜科	2,700	2,200	2,000	2,600	1,900	1,300	200
ヨシ属	400	700	800	1,000	200	600	—
ウシクサ族	100	100	200	200	100	—	—
不明	3,300	2,700	3,000	3,000	3,100	900	200
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	8,600	6,200	4,900	5,500	2,300	2,300	1,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9,200	7,500	7,800	8,800	6,500	3,500	700
合 計	17,800	13,700	12,700	14,300	8,800	5,800	2,000
珪化組織片							
イネ属類珪酸体	**	—	*	—	—	—	—
イネ属短細胞列	*	*	*	—	—	—	—

数値は含量密度（個/g）を示し、10の位で丸めた値で示す。<100は100個/g未満、—は未検出を示す。珪化組織片の産状は、*：検出、**：多い で示す



第78図 植物珪酸体含量

草本花粉はほとんど検出されない。

4 地点は、花粉化石の保存状態が悪く、ほとんど検出されない。

(3) 植物珪酸体分析

結果を第5表、第78図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表

面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

1 地点の各試料での産状は同様であり、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やスキ属、イチゴツナギ亜科なども認められる。また栽培植物であるイネ属も産出し、葉部の短細胞列や糊（穎）の植物珪酸体も見られる。植物珪酸体含量は1.3万～1.8万個/gであり、上位の試料で増加する傾向が見られる。イネ属も同様な傾向が見られ、試料番号4と3では短細胞珪酸体が約300個/g、機動細胞珪酸体が500～700個/gであり、試料番号2では増加して短細胞珪酸体が約900個/g、機動細胞珪酸体が約1,200個/gとなる。

2 地点の試料番号2と3では上位で植物珪酸体含量が多くなるものの、産状は共通しており、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立つ。イネ属も産出し、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、上位で多い傾向が見られ、試料番号3の短細胞珪酸体が約100個/g、機動細胞珪酸体が約300個/g、試料番号2の短細胞珪酸体が約300個/g、機動細胞珪酸体が900個/gである。

3 地点の試料番号1は、植物珪酸体含量が約5,800個/gであり、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属などが見られる。なお、イネ属は産出しない。

4 地点の試料番号2は、植物珪酸体含量が約2,000個/gであり、調査した試料の中で最も少ない。検出される分類群も少なく、クマザサ属を含むタケ亜科や不明である。イネ属は産出しない。

（4）種実分析

結果を第6表に示す。全試料を通じて、裸子植物1分類群（針葉樹のカヤ）の葉が1個と、被子植物70分類群（広葉樹のイヌシデ、ナラガシワ、ケヤキ、クワ属、ヒメコウゾ近似種、キイチゴ属、アカメガシワ、イヌザンショウ、カラスザンショウ、ブドウ属、タラノキ、ムラサキシキブ属、草本のオモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、スブタ、ヒルムシロ属、トリゲモ－オオトリゲモ、サガミトリゲモ、ホッスモ、コナギ近似種、イボクサ、イネ、イネ科、アゼスゲ類、スゲ属（2面、3面）、テンツキ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、ハリイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科（小型、2面平滑、他）、ミズ属、カラムシ属、イラクサ科、ギシギシ属、ミゾソバ近似種、タデ属（2面網目、3面網目、3面平滑）、ナデシコ科、ヒユ科、キンポウゲ属、ミズオトギリ、ネコノメソウ類、キジムシロ類、ヒメミカンソウ、キツリフネ、ツリフネソウ、スミレ属、ミズユキノシタ、ウド、チドメグサ属、ツボクサ近似種、セリ科、キランソウ属、ニガクサ属、エゴマ、シソ属－イヌコウジュ属、シロネ属、トウバナ属、ナス属、ハダカホオズキ近似種、イガホオズキ属、オミナエシ属、キク科（A、B）1274個の種実遺体の、計1275個が検出・同定された。6個は同定ができなかった。4地点からは、大型植物遺体が検出されなかった。種実や葉以外では、ヨシの地下茎?、木材、炭化材、蘚苔類の枝・葉、昆虫類、土器片などが確認された。

栽培種は、イネの穎の破片が1地点と2地点から計91個、エゴマの果実の破片が2地点から3個と、栽培種の可能性を含むシソ属－イヌコウジュ属の果実が1地点と2地点から計58個確認された。また、イネの穎11個には炭化が認められた。

栽培種を除いた組成は、草本類を主体とする。特に、1地点と2地点では、沈水植物（根が水に固着し、植物体全体が水中に沈む植物）のトリゲモ類、スブタ、沈水～浮葉植物（根が水に固着し、水面に浮く葉（浮葉）を展開する植物）のヒルムシロ属、浮葉～抽水植物（根が水に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物）のオモダカ属、抽水植物のコナギ近似種、イボクサ、ホ

第6表 種実分析結果①

分類群	部位	状態	北 壁				南 壁		備考
			1地点			2地点	3地点	4地点	
			2	3	4	3	1	2	
木本									
カヤ	葉	破片(先端部)					1		
イヌシデ	果実	完形					1		
		破片					1		
ナラガシワ	幼果	完形					1		
ケヤキ	果実	完形					1		
		破片					1		
クワ属	核	完形					2		
		破片					1		
ヒメコウゾ近似種	核	破片				1			
キイチゴ属	核	完形			1	1		1	
		破片			1	3			
アカメガシワ	種子	破片		1					
イヌザンショウ	種子	破片			1				
カラスザンショウ	種子	完形		1					
ブドウ属	種子	破片			2				
タラノキ	核	破片					1		
ムラサキシキブ属	核	完形		2		1			
		破片					1		
草本									
オモダカ属	果実	完形	1	4	1	10			
サジオモダカ属	果実	完形	4	3		10			
		破片	1						
オモダカ科	種子	完形	17	3	5	5			
スプタ	種子	破片	1	3					
ヒルムシロ属	果実	完形	2	1					
		破片	2	3					
トリゲモ-オオトリゲモ	種子	完形	1						
サガミトリゲモ	種子	破片		3					
ホッスモ	種子	完形	16	17	28	12			
		破片	19	11	14	20			
コナギ近似種	種子	完形	8	25	48	31			
イボクサ	種子	完形		1	2	7			
イネ	穎	破片(基部)	4		6	9			
		破片(基部) 炭化	2	2					
		破片 炭化	1	5	11	44			
イネ科	果実	破片 炭化	3	1	2	1		複数種	
		完形 炭化	1			5			
		破片				6			
アゼスゲ類	果実	完形				31			
		破片				3			
スゲ属(2面)	果実	完形	22	31	8	45		一部果胞附着	
		破片	2	6		6			
スゲ属(3面)	果実	完形	5	1	4	25		一部果胞附着	
		破片	1	2	1	3			
テンツキ属	果実	完形				1			
ウキヤガラ	果実	破片	1						
ホタルイ属	果実	完形	32	15	22	27			
		破片	55	13	49	14			
ハリイ属	果実	完形	10	7					
		破片	8	2					
カヤツリグサ属	果実	完形	6	8	7	44			
カヤツリグサ科(小型)	果実	完形	2	1		5			
カヤツリグサ科(2面平滑)	果実	完形	6	4					
		破片	8	3					
カヤツリグサ科	果実	完形					16	ヌカスゲ類?	
		破片					4		
ミズ属	果実	完形				2			
		破片				1			
カラムシ属	果実	完形				1	1		
		破片			1	1			
イラクサ科	果実	完形		2				別種	
ギシギシ属	果実	完形			1				
ミゾソバ近似種	果実	破片				12	1		
タデ属(2面網目)	果実	完形				8		ヤナギタデ近似	
		破片			2				
タデ属(3面網目)	果実	完形				6			
		破片				5			
タデ属(3面平滑)	果実	完形				2			
ナデシコ科	種子	完形	1		12				
ヒユ科	種子	破片				1			
キンボウゲ属	果実	完形		1		1			
		破片				1			
ミズオトギリ	種子	完形	4	2		14			
		破片	4	1		7			
ネコノメソウ類	種子	完形			1				

第7表 種実分析結果②

分類群	部位	状態	北 壁				南 壁		備 考
			1地点			2地点	3地点	4地点	
			2	3	4	3	1	2	
キジムシロ類	核	完形破片		1			1		径1.2~1mm 長さ2.03mm、幅1.94mm、厚さ0.36mm 長さ1.47mm、幅1.61mm、厚さ0.46mm ニガナ類
ヒメミカンソウ	種子	完形				1			
キツリフネ	種子	完形					1		
ツリフネソウ	種子	完形	1						
スマレ属	種子	完形			2	3			
ミズユキノシタ	種子	破片		1		4	3		
ウド	核	完形				1			
チドメグサ属	果実	破片					1		
ツボクサ近似種	果実	完形	2	1	5	11			
セリ科	果実	破片	1		5	1			
キランソウ属	果実	完形					2		
ニガクサ属	果実	破片		1		1			
エゴマ	果実	完形					3		
シソ属-イヌコウジュ属	果実	破片	14	2	4	5			
シロネ属	果実	完形	7	12		14			
トウバナ属	果実	破片		2		2			
ナス属	種子	完形		1					
ハダカホオズキ近似種	種子	破片			1				
イガホオズキ属	種子	完形	1			1			
オミナエシ属	果実	完形		1					
キク科A	果実	破片		1		2			
キク科B	果実	完形	1			1			
合 計			30	23	18	51	7	0	合計129個
不明					3	1	2		
その他									
ヨシの地下茎?						1			
木材							+		
炭化材			+	+		+	+	+	
蘚苔類の枝・葉					+	+	+		
昆虫類			+	+	+	+	+	+	
土器片				1					
分析量 (cc)			50	50	100	200	200	200	
分析量 (g)			85.09	84.44	179.54	333.62	348.49	371.31	

タルイ属、ハリイ属、沈水～湿生植物のミズユキノシタ、抽水～湿生植物のサジオモダカ属や、アゼスゲ類、テンツキ属などのカヤツリグサ科、ミズ属、ミゾソバ近似種、キンポウゲ属、ミズオトギリ、ツリフネソウ、セリ科、シロネ属などの水湿地生植物が大半を占める。以下に、大型植物遺体の出土状況を記す。

1 地点

試料番号2、3、4の組成は類似し、特に試料番号2、3は水湿地生草本が多産する点で類似する。試料番号2 (50cc) からは、草本27分類群 (オモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、スブタ、ヒルムシロ属、トリゲモ-オオトリゲモ、ホッスモ、コナギ近似種、イネ、イネ科、スゲ属 (2面、3面)、ウキヤガラ、ホタルイ属、ハリイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科 (小型、2面平滑)、ナデシコ科、ミズオトギリ、ツリフネソウ、チドメグサ属、ツボクサ近似種、セリ科、シソ属-イヌコウジュ属、ハダカホオズキ近似種、キク科B) 280個の種実遺体が検出されたほかに、炭化材と昆虫類が確認された。ホタルイ属 (87個) を含むカヤツリグサ科複数種が最多 (158個) で、ホッスモ (35個) が次ぐ。栽培種は、イネの穎の破片が10個と、栽培種の可能性があるシソ属-イヌコウジュ属が21個確認され、イネ5個は炭化している。

試料番号3 (50cc) からは、木本3分類群 (落葉高木のアカメガシワ、カラスザンショウ、落葉低木のムラサキシキブ属) 4個、草本29分類群 (オモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、スブタ、ヒルムシロ属、サガミトリゲモ、ホッスモ、コナギ近似種、イボクサ、イネ、スゲ属 (2面、3面)、

ホタルイ属、ハリイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科（小型、2面平滑）、イラクサ科、キンポウゲ属、ミズオトギリ、キジムシロ類、スマレ属、チドメグサ属、ニガクサ属、シソ属－イヌコウジュ属、シロネ属、トウバナ属、オミナエシ属、キク科A）204個、計208個の種実遺体が検出されたほかに、土器片が1個と、炭化材、昆虫類が確認された。カヤツリグサ科複数種が最多（93個）で、ホッスモ（28個）、コナギ近似種（25個）が次ぐ。栽培種は、イネの穎の破片が8個と、栽培種の可能性があるシソ属－イヌコウジュ属が14個確認され、イネ3個は炭化している。

試料番号4（100cc）からは、木本3分類群（落葉低木のキイチゴ属、イヌザンショウ、落葉籐本のブドウ属）5個、草本20分類群（オモダカ属、オモダカ科、ホッスモ、コナギ近似種、イボクサ、イネ、スゲ属（2面、3面）、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カラムシ属、ギシギシ属、タデ属（2面網目）、ナデシコ科、ネコノメソウ類、スマレ属、チドメグサ属、シソ属－イヌコウジュ属、ナス属、イガホオズキ属）243個、計248個の種実遺体が検出されたほかに、蘚苔類の枝・葉と昆虫類が確認された。ホタルイ属（71個）が最多で、コナギ近似種（48個）、ホッスモ（42個）と次ぐ。試料番号2、3とは、カヤツリグサ科の分類群数が少なく、スブタやヒルムシロ属が確認されない点でやや異なる。栽培種は、イネの穎の破片が19個と、栽培種の可能性があるシソ属－イヌコウジュ属が4個確認され、イネ2個は炭化している。

2地点

試料番号3（200cc）からは、木本3分類群（落葉低木のヒメコウゾ近似種、キイチゴ属、ムラサキシキブ属）、草本34分類群（オモダカ属、サジオモダカ属、オモダカ科、ホッスモ、コナギ近似種、イボクサ、イネ、イネ科、アゼスゲ類、スゲ属（2面、3面）、テンツキ属、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科（小型）、ミズ属、カラムシ属、ミゾソバ近似種、タデ属（2面網目、3面網目、3面平滑）、ヒユ科、キンポウゲ属、ミズオトギリ、ヒメミカンソウ、スマレ属、ミズユキノシタ、チドメグサ属、セリ科、キランソウ属、エゴマ、シソ属－イヌコウジュ属、シロネ属、キク科A）492個、計498個の種実遺体が検出されたほかに、ヨシの地下茎?が1個と、炭化材、蘚苔類の枝・葉、昆虫類が確認された。栽培種のイネの穎が最多（54個）で、スゲ属（2面）（51個）、カヤツリグサ属（44個）が次ぐ。栽培種は、イネとエゴマの果実の破片が3個、栽培種の可能性があるシソ属－イヌコウジュ属が19個確認され、イネ1個は炭化している。

3地点

試料番号1（200cc）からは、木本8分類群（常緑高木のカヤ、落葉高木のイヌシデ、ナラガシワ、ケヤキ、クワ属、落葉低木のキイチゴ属、タラノキ、ムラサキシキブ属）12個、草本7分類群（カヤツリグサ科、カラムシ属、ミゾソバ近似種、キジムシロ類、キツリフネ、スマレ属、ウド）29個、計41個の大型植物遺体が検出されたほかに、木材、炭化材、蘚苔類の枝・葉、昆虫類が確認された。木本類は、山地の森林内に生育するカヤ、イヌシデ、ナラガシワや、河畔林要素のケヤキ、伐採地や崩壊地、林縁等の明るく開けた場所に生育するキイチゴ属、タラノキ、ムラサキシキブ属などが確認された。草本類は、山地のやや湿った木陰などに生育するキツリフネ、ミゾソバ近似種、スマレ属や、林縁等の明るく開けた場所などに生育する分類群が確認された。

4地点

試料番号2（200cc）からは、大型植物遺体は検出されず、炭化材と昆虫類が確認されるのみであった。

4. 考察

ここでは上述の分析結果に基づいて、調査区の古環境および周辺森林植生の変遷について検討する。

(1) 調査区の堆積環境変遷

土石流堆積物である9層が形成された後、調査区南側は土壌生成が進行する場所になる。この時期に形成された堆積物が南側7層であり、弥生時代の遺物が出土している。7層からは、花粉化石・種実化石などの植物遺体はほとんど検出されず、植物珪酸体も保存状態が悪く、検出量も少なかった。花粉・種実化石や植物珪酸体は乾湿を繰り返すような場所では分解されやすいことから、調査区内は土壌生成が進行する堆積環境におかれていたため、化石の残りが悪かったと考えられる。

その後、調査区は南壁6～5層、北壁7～6層などの流路充填堆積物ないし氾濫堆積物が累重する、不安定な氾濫原の堆積環境に変化した。

古墳時代～古代の4層・3層形成期になると、調査区内の堆積環境は大きく変化し、湿地へと変化する。種実遺体の産状をみると、沈水植物（根が水に固着し、植物体全体が水中に沈む植物）のトリゲモ類、スブタ、沈水～浮葉植物（根が水に固着し、水面に浮く葉（浮葉）を展開する植物）のヒルムシロ属、浮葉～抽水植物（根が水に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物）のオモダカ属、抽水植物のコナギ近似種、イボクサ、ホタルイ属、ハリイ属、沈水～湿生植物のミズユキノシタ、抽水～湿生植物のサジオモダカ属や、アゼスゲ類、テンツキ属などのカヤツリグサ科、ミズ属、ミゾソバ近似種、キンポウゲ属、ミズオトギリ、ツリフネソウ、セリ科、シロネ属などの水湿地生植物が多数確認されている。花粉化石でもサジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属などの水生植物が産出する。これらの植物が調査区およびその近辺の湿原において、水深に応じて分布していたことが推定される。このように4層・3層形成期は、調査区の基準面が上昇傾向にあったことが推定される。

なお、古墳時代～古代に形成された4層・3層からは栽培植物の化石が産出する。花粉化石ではイネ科を中心とした草本花粉が増加し、イネ属の植物珪酸体やベニバナ属が産出する。これらの栽培植物は、4・3層形成期の調査区の堆積環境を踏まえると、集水域よりもたらされたものと判断される。古墳時代以降には調査区後背の領域での稲作や耕作地化が示唆される。また、サジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属などの水生植物は、水田雑草として周辺の耕作域に生育していた可能性もある。

中世に形成された2層は、人為的に著しく攪拌されていた。また、2層では栽培植物のイネ属の植物珪酸体が組織片等も含め多くなる。このような状況から2層形成期には調査区内において稲作が行われるようになったことが推定される。このことは発掘調査成果とも同調的であり、堆積物の層相および植物化石の産状からも追認できたことになる。このような中世におけるイネ属の植物珪酸体は、上流の支谷に位置する坂長ブジラ遺跡でもみられるほか、大山町の門前上屋敷遺跡や門前第2遺跡でも確認される（鈴木 2005a・b）。このことは、大山南西麓の開析谷では中世以降に広い範囲で稲作が行われていたことが示唆している。

ところで、今回の調査区の堆積層は、肉眼観察の結果、垂直方向の2つの範囲において変形している状況が確認された。これら確認された変形構造は、Matsuda(2000)により定義されている、水底下の堆積物にみられる地震動による変形構造に相当する。Matsuda(2000)によると、1回の地震動

によって変形した堆積物の垂直範囲を変形ゾーン (Deformation zone) と呼び、上から順に (1) 水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット (liquidized deformation unit)、(2) 上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焰状 (ただしフレーム構造とは別種) の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット (hydroplastic deformation unit)、(3) 下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット (brittle deformation unit)、から構成される。また、地震イベントの年代は変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まる。今回の調査地点で確認された変形構造を下位よりDZ-1・2と呼ぶ。DZ-1は3最下部より下位層準にかけて確認される変形ゾーンであり、4層直下の堆積物との層界は含水塑性変形ユニットに対比される火焰状の変形をなす。また場所によっては水平方向の剪断応力によって、ずれが生じており明瞭な層界をなしている。

DZ-2は3層上部～2層上部にかけて確認される変形ゾーンである。下位層準の堆積物ブロックが流線状に引きずり上げられている構造を呈しており、含水塑性変形ユニットに対比される。

これらDZ-1およびDZ-2は、場所によっては連続しているように見えることから、一連の変形構造である可能性もある。この点については肉眼観察では判断がつかず、今後X線写真による検証が必要である。なお、地震イベントの発生日代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まることから、今回の変形ゾーンが各々別々の地震動に由来するとすればDZ-1が古墳～古代、Dz-2が中世頃に発生した地震動に由来することになる。

(2) 調査区周辺の森林植生変遷

弥生時代の遺物を含む8層 (4地点) 花粉化石・種実化石はほとんど検出されない。植物珪酸体も保存状態が悪く、検出量も少ない。花粉化石や植物珪酸体は乾湿を繰り返すような場所では分解されやすいことから、調査区内は土壌生成が進行する堆積環境におかれていた可能性もある。

縄文時代～古墳時代の流路充填堆積物の花粉化石群集は、木本花粉がほとんどを占める。落葉樹主体であり、コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、クマシデ属一アサダ属が多く、モミ属、スギ属、マツ属といった針葉樹を伴う。種実遺体でもヌシデ、ナラガシワ、ケヤキ、クワ属、落葉低木のキイチゴ属、タラノキ、ムラサキシキブ属などが確認される。調査区の立地から考えて、検出された落葉樹は、林縁や流路沿いに生育していたと考えられる。これらの落葉樹は、成長が早く、萌芽再生しやすいなど、傷害を負っても復旧しやすいのが特徴であることから、河川沿いや林縁などに分布することが多い。また、モミ属、マツ属、スギ属は斜面地や崩壊地など土地条件の悪い場所に生育していたとみられる。一方、アカガシ亜属やシイノキ属常緑広葉樹も検出されるが低率である。調査地の下流域にあたる、米子市目久美遺跡の分析成果によれば、縄文時代の分析結果は、アカガシ亜属やシイノキ属など常緑広葉樹が優勢な花粉組成であり (渡辺ほか 2003)、周辺の森林植生も常緑広葉樹林に覆われていたと推測されている。本遺跡周辺で常緑広葉樹が少ない理由としては、遺跡の立地が台地縁辺部にあたるため、林縁や河川沿いの植生の影響を強く反映しているからと考えられる。また、目久美遺跡が立地する場所は海岸沿いの温暖な場所であるため、常緑広葉樹林が成立しやすい環境にあったのに対し、本遺跡周辺は内陸あたるため気温の年較差が大きく、冬の低温により常緑広葉樹が生育しにくい環境にあった可能性がある。

古墳時代～古代に形成された4層からから古代の3層にかけては、花粉化石群集ではマツ属が多産し、漸増の傾向がある。この傾向は、上流域に位置する坂長ブジラ遺跡でも同様である。マツ属は成長が早く、痩地も育つことから、広範囲の伐採など大きな植生改変があった場合に先駆的に侵入してマツ林を構成する。特に有史以降のマツ属花粉の増加は、日本の場合、人為的な植生破壊の結果生じることが多い。このことから、古墳時代の遺跡周辺で、森林伐採などの人為的な植生改変があったと考えられる。ただし、これまで検出されていた種類も相対的に減少しているものの、ある程度の出現率を示していることから、自然度の高い植生も、周辺域に残存していたと考えられる。なお、先出した米子市目久美遺跡の組成をみると、弥生時代にマツ属が増加する兆候はなく、マツ属の増加は中世以降である。周辺域での遺跡、遺構の分布なども詳しく調査する必要があるが、森林への植生干渉という面からみれば、本遺跡周辺の方が早くから始まっていた可能性がある。また、この時期スギ属が増加する。スギ属は今日では低地に生育する場所は少ないが、過去の花粉分析結果や埋没林の樹種同定結果をみると、かつては日本海側を中心に、扇状地末端の湧水地など多湿な場所にスギ属が生育していたことが推測されている（鈴木 2002）。本遺跡周辺でスギ属が増加した可能性もあるが、この時期目久美遺跡でもスギ属の増加が確認されていることや、スギは風媒花で花粉生産量が多いことから、本遺跡のスギ属増加は、海岸に近い低地のスギ林の増加を反映している可能性もある。この時期にスギ属花粉が増加する傾向は、北陸から山陰の日本海側の多くの花粉分析調査地点において認められる傾向である（高原 1996）。

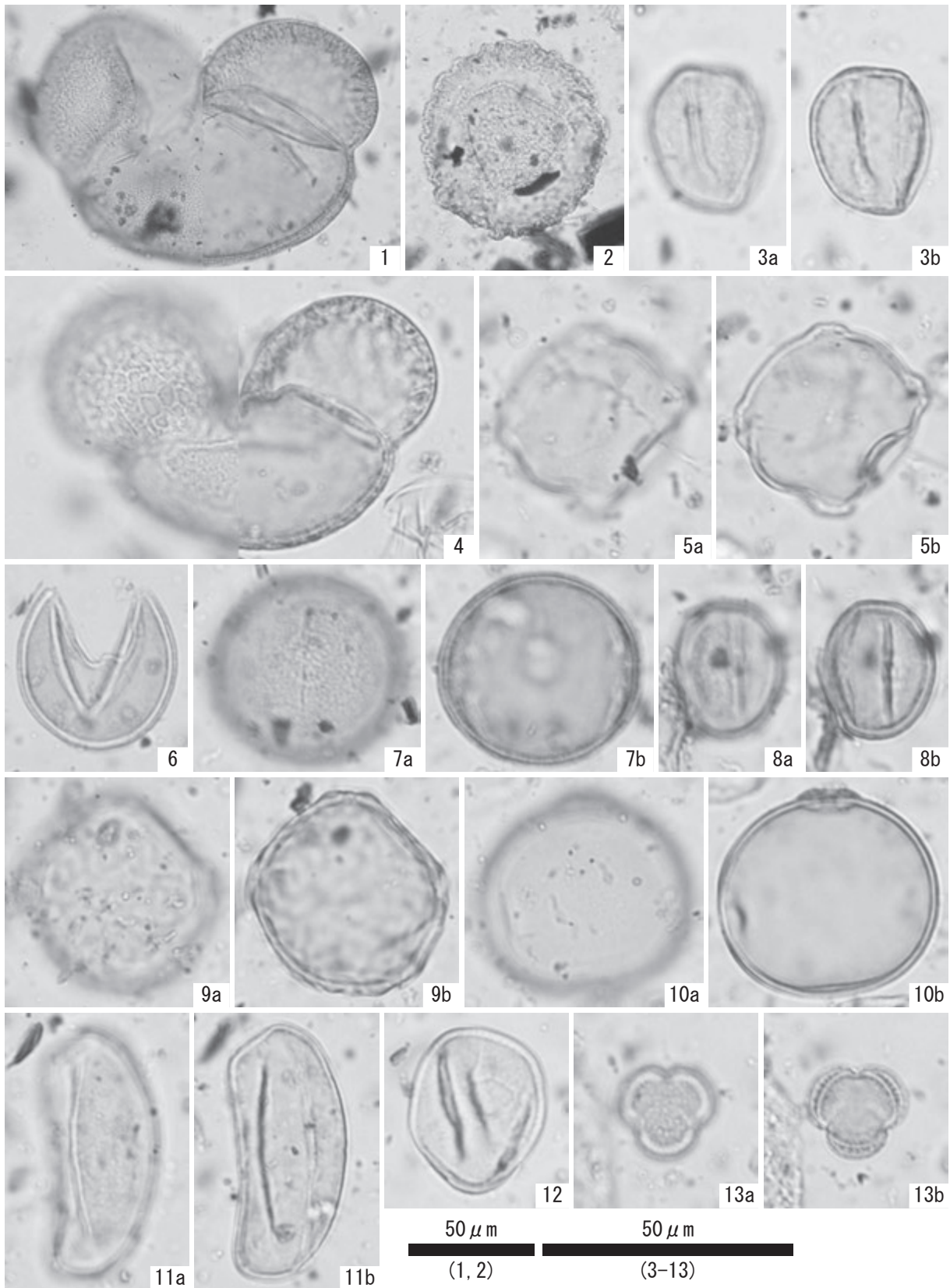
また、植物珪酸体では、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立った。上流の支谷に位置する坂長ブジラ遺跡でも同様な傾向が見られている。クマザサ属は林床に生育する種類が多く、特に日本海側の多雪地帯で多い傾向にある。遺跡の後背には大山など積雪の多い山地があり、本地域も積雪に見舞われることもあることから、これらは林床や、土地条件が悪く、樹木が生育しにくい場所などに分布していたと考えられる。

中世の2層ではマツ属が増加することから、周辺の山野の開発がさらに進んだと思われる。また、上述した草本花粉が増加し、イネ属やソバ属などの栽培植物もみられるようになることから、周辺の開発による耕地の拡大が起こったと考えられる。なお、目久美遺跡では、草地の拡大は古く見積もって古墳時代～平安時代とされている。なお、今回の調査区の上流の支谷に位置する坂長ブジラ遺跡では、主に弥生時代中期以降の花粉分析を実施しているが、その結果は今回の結果と概ね一致する。

引用文献

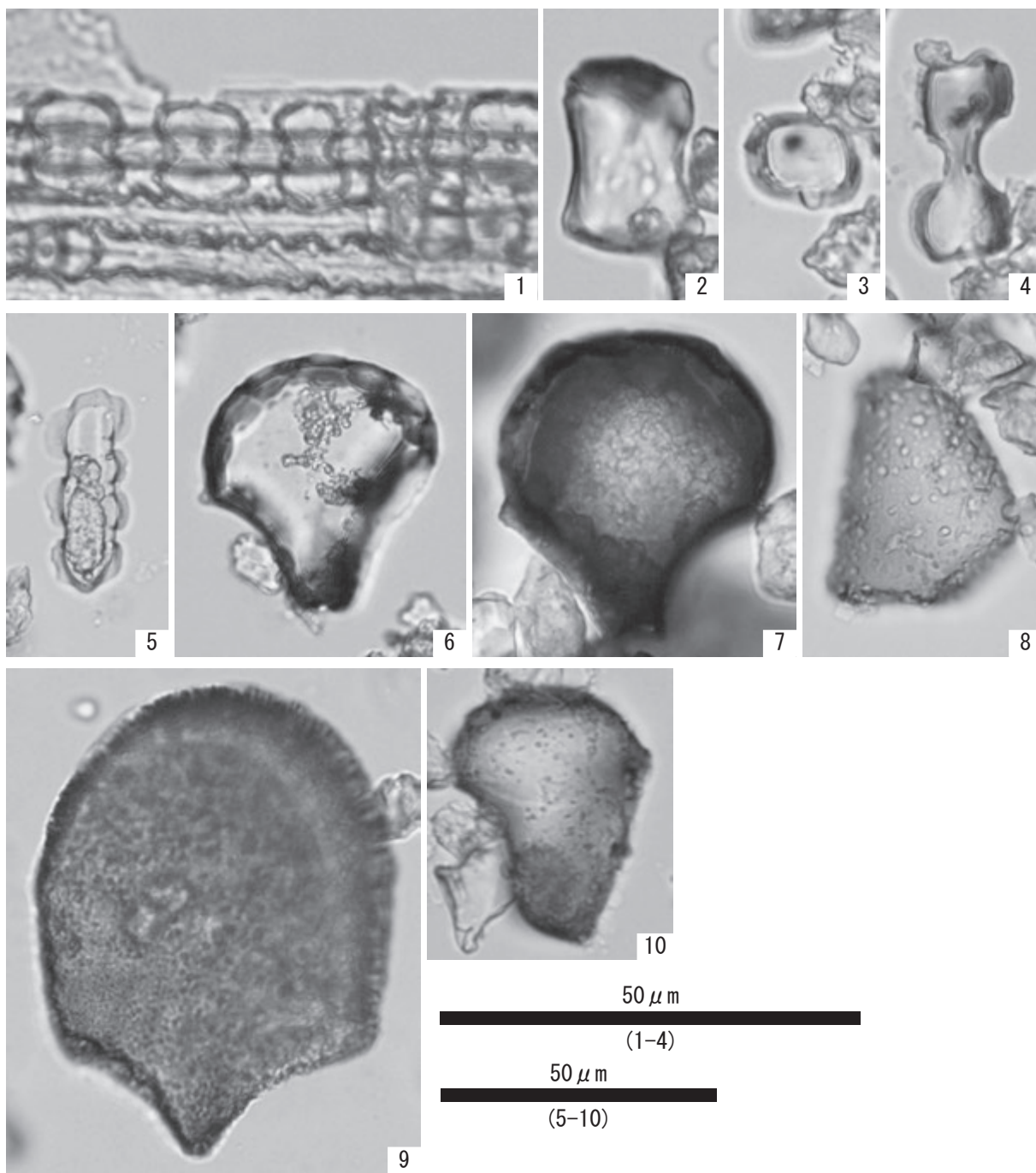
- Erdtman G., 1952, Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I). Almqvist&Wiksell, 539p.
- Erdtman G., 1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II), 147p.
- Feagri K. and Iversen Johs., 1989, Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.
- 藤木利之・小澤智生 2007「琉球列島産植物花粉図鑑」アクアコーラル企画、155p.
- 石川茂雄 1994「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会、328p.
- 近藤錬三 2010「プラント・オパール図譜」北海道大学出版会、387p.

- Matsuda, J.-I, 2000, Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan, *Sedimentary Geology*, 135, 99-116.
- 中村 純 1980「日本産花粉の標徴ⅠⅡ（図版）」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第12・13集』、91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000「日本植物種子図鑑」東北大学出版会、642p.
- 鈴木三男 2002「日本人と木の文化」八坂書房、255p.
- 高原 光 1998「スギ林の変遷」『図説日本列島植生史』安田喜憲・三好教夫編、朝倉書店、207-223.
- 鈴木三男 2002「日本人と木の文化」八坂書房、255p.
- 鈴木 茂 2005a「門前上屋敷遺跡の植物珪酸体」『鳥取県教育文化財団調査報告書105』財団法人鳥取県教育文化財団、116-119.
- 鈴木 茂 2005b「門前第2遺跡の植物珪酸体」『鳥取県教育文化財団調査報告書106』財団法人鳥取県教育文化財団、145-148.
- 渡辺正巳・佐伯純也・平木裕子 2003「目久美遺跡発掘調査における花粉層序の成果」『鳥取地学会誌7』、1-9.



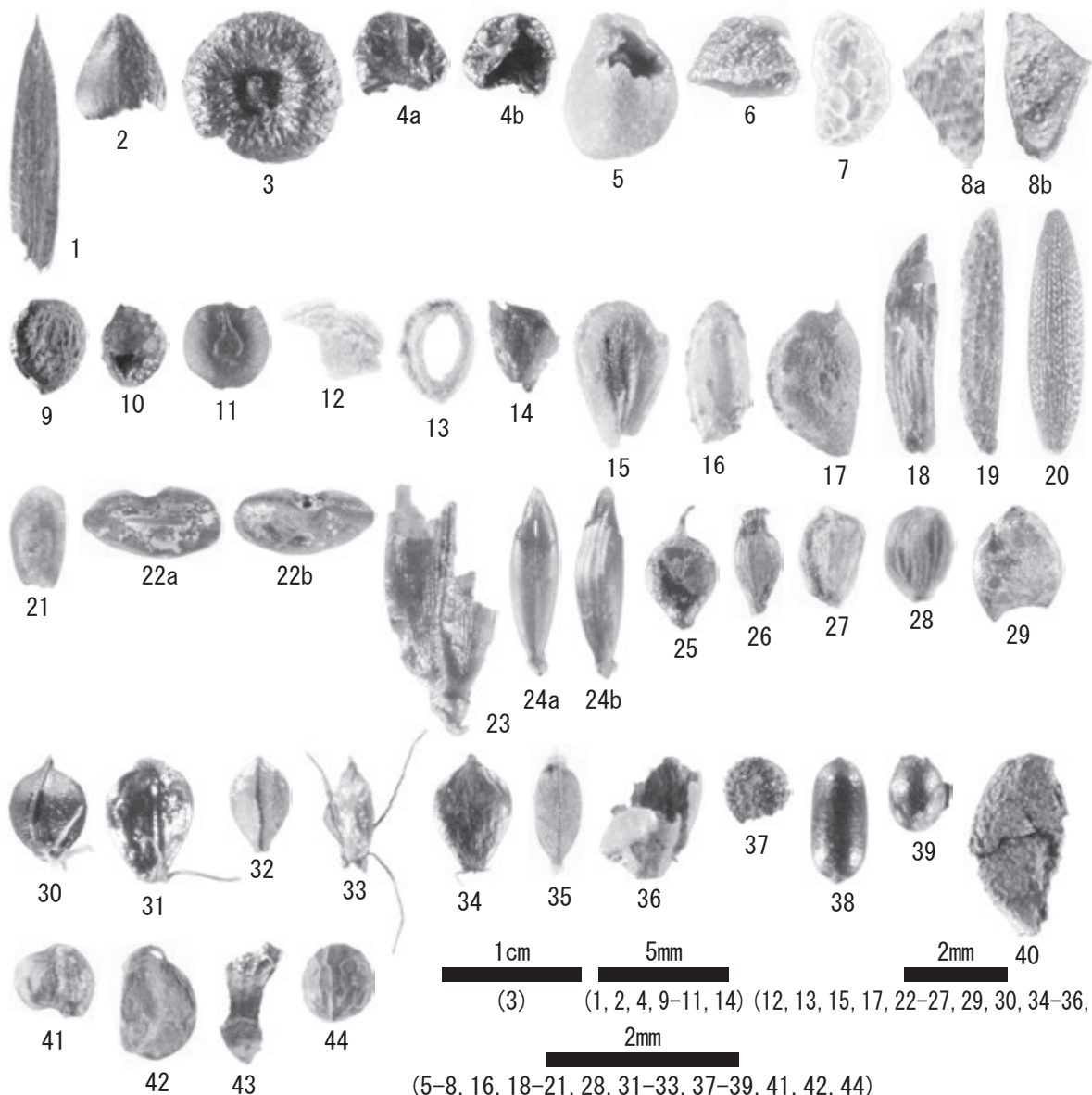
- | | | |
|-----------------|----------------------|---------------------|
| 1. モミ属(1地点;2) | 2. ツガ属(1地点;3) | 3. コナラ属コナラ亜属(1地点;2) |
| 4. マツ属(1地点;2) | 5. クマシデ属-アサダ属(1地点;3) | 6. スギ属(1地点;2) |
| 7. ブナ属(1地点;2) | 8. コナラ属アカガシ亜属(1地点;2) | 9. ニレ属-ケヤキ属(1地点;3) |
| 10. イネ科(1地点;3) | 11. ミズアオイ属(1地点;3) | 12. カヤツリグサ科(1地点;3) |
| 13. ヨモギ属(1地点;3) | | |

写真5 花粉化石



- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (1地点;2) | 2. クマザサ属短細胞珪酸体 (1地点;3) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (1地点;3) | 4. ススキ属短細胞珪酸体 (1地点;3) |
| 5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (1地点;2) | 6. イネ属機動細胞珪酸体 (1地点;2) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (2地点;3) | 8. クマザサ属機動細胞珪酸体 (1地点;3) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (3地点;1) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (1地点;3) |

写真6 植物珪酸体



- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1. カヤ 葉(3地点:1) | 2. イヌシデ 果実(3地点:1) |
| 3. ナラガシワ 幼果(3地点:1) | 4. ケヤキ 果実(3地点:1) |
| 5. クワ属 核(3地点:1) | 6. ヒメコウゾ近似種 核(2地点:3) |
| 7. キイチゴ属 核(2地点:3) | 8. アカメガシワ 種子(1地点:3) |
| 9. イヌザンショウ 種子(1地点:4) | 10. カラスザンショウ 種子(1地点:3) |
| 11. ブドウ属 種子(1地点:4) | 12. タラノキ 核(3地点:1) |
| 13. ムラサキシキブ属 核(2地点:3) | 14. オモダカ属 果実(2地点:3) |
| 15. サジオモダカ属 果実(2地点:3) | 16. スブタ 種子(1地点:2) |
| 17. ヒルムシロ属 果実(1地点:2) | 18. トリゲモ-オオトリゲモ 種子(1地点:2) |
| 19. サガミトリゲモ 種子(1地点:2) | 20. ホッスモ 種子(1地点:2) |
| 21. コナギ近似種 種子(1地点:4) | 22. イボクサ 種子(2地点:3) |
| 23. イネ 穎(2地点:3) | 24. イネ科 果実(2地点:3) |
| 25. アセスゲ類 果実(2地点:3) | 26. スゲ属(2面) 果実・果胞(2地点:3) |
| 27. スゲ属(3面) 果実・果胞(2地点:3) | 28. テンツキ属 果実(2地点:3) |
| 29. ウキヤガラ 果実(1地点:2) | 30. ホタルイ属 果実(1地点:2) |
| 31. ハリイ属 果実(1地点:2) | 32. カヤツリグサ属 果実(1地点:3) |
| 33. カヤツリグサ科(小型) 果実(2地点:3) | 34. カヤツリグサ科(2面平滑) 果実(1地点:2) |
| 35. カヤツリグサ科 果実(3地点:1) | 36. ミゾソバ近似種 果実(2地点:3) |
| 37. ナデシコ科 種子(1地点:4) | 38. ミズオトギリ 種子(2地点:3) |
| 39. ネコノメソウ類 種子(1地点:4) | 40. ツリフネソウ 種子(1地点:2) |
| 41. ミズユキノシタ 種子(2地点:3) | 42. チドメグサ属 果実(2地点:3) |
| 43. エゴマ 果実(2地点:3) | 44. シソ属-イヌコウジュ属 果実(1地点:2) |

写真7 大型植物遺体

第6章 総括

1. はじめに

坂長第7遺跡は標高約55mの長者原台地と標高226mの越敷山から北へとのびる丘陵に挟まれた谷部に位置する遺跡であり、坂長第8遺跡は、その北側に隣接する丘陵の先端部にある遺跡である。これらは地形によって谷部の遺跡と丘陵部の遺跡として分かれるが、その境界は明瞭ではなく、密接な関係がうかがわれる。

さて、今回の調査の結果、坂長第7遺跡からは縄文時代から近世までの自然流路や溝38条、水田に伴う畦4基を確認した。また坂長第8遺跡では、縄文時代から古代までの竪穴建物9棟、掘立柱建物1棟、柵列4基、土坑8基、落とし穴3基、溝3条などを確認した。

ここでは、今回確認した遺構、遺物について、時期ごとに概観し、本報告の総括としたい。なお、坂長第7遺跡は平成18年度、坂長第8遺跡は、平成18年度と平成22年度に調査が行われており、すでに報告書が刊行されているが、適宜、その状況も踏まえて述べていく。

2. 縄文時代

縄文時代後期以前の遺構、遺物は、両遺跡ともに希薄である。坂長第7遺跡では平成18年度の調査で早期の押型文土器、坂長第8遺跡では平成18年度の調査で草創期とみられる尖頭器、平成22年度の調査では早期の尖頭器が出土しているが、いずれも遺構に伴わず周辺からの混入とみられる。今回の調査では、坂長第8遺跡で草創期以前に形成されたとみられる溝（SD5）を確認したが、雨水や土石流によって形成されたものとみられ、人の活動の痕跡を示すものではなかった。

縄文時代後期以降になると、数は少ないものの、遺構や遺物がみられるようになる。坂長第7遺跡のある谷部では、比較的水量のある自然流路が流れており（SD52～57）、そこから縄文時代後期から晩期頃の遺物が出土している。またSD56には、水の流れを調節するための堰が認められ、そこにはトチノミなどの堅果類がまとまって出土しており、堅果類のアク抜き場など、水場として利用していた様子がうかがわれる。

坂長第8遺跡のある丘陵先端部では、縄文時代後期から晩期と考えられる土坑1基（SK12）、時期は定かではないが、当該期のものとみられる落とし穴3基を確認した（SK13～15）。また、遺物は突帯文土器が僅かに出土したのみであり、遺構、遺物ともに希薄である。

ところで、平成18年度の調査では遺構を確認していないが、多量の突帯文土器が出土しており、この大半は東側の丘陵尾根ないし斜面から転落した可能性が指摘されている。前回の遺物の出土状況や、今回の調査結果を踏まえると、晩期頃の集落が、調査地の東側にある丘陵尾根上に展開していたことが予想される。

落とし穴については、坂長第8遺跡のほか、南側の丘陵上に隣接する坂長下門前遺跡をはじめ、坂長武寿羅遺跡、坂長前田遺跡などで確認されている。このため調査地周辺の丘陵上は、狩猟場として広く利用されていたとみられる。

3. 弥生時代

弥生時代についても、坂長第7遺跡のある谷部では、平成18年度の調査において中期前葉から後期中葉の溝が確認されていることや（SD15～19）、谷部と丘陵部の境を調査した平成22年度の坂長第8遺跡の調査地で中期の溝（SD2）が確認されていることから、引き続き自然流路が流れていたとみられる。遺物は前期から終末期の土器や石器が出土しているが、このうち前期後葉から中期中葉頃のものが目立つ。また、遺物の中には磨製石庖丁が1点含まれており、平成18年度の調査で平鋏・又鋏の身や木庖丁などの木製農具が出土したことや、そこで実施した自然科学分析でイネの植物珪酸体が検出されたことを踏まえると、この周辺で稲作が行われていたことが想定される。ただし、調査地内には人為的な攪拌を受けた堆積物が認められず、この近辺で耕作が行われていたとは考えにくく、やや離れた場所において行われていたとみられる。

坂長第8遺跡では、縄文時代に引き続き、遺構や遺物が希薄である。確認した遺構は、弥生時代中期頃の土坑1基（SK11）のみであり、遺物は遺構の年代とほぼ同じ時期のものが僅かに出土したにすぎない。SK11は長軸198cm、短軸164cmの周囲には壁溝が巡る平面形が方形を呈した、いわゆる方形土坑である。方形土坑については、堅穴建物に近接して分布するものと、その周縁に配置するものが存在するようであることから（湯村2008）、この周辺に集落が存在していたと考えられる。ただし、坂長第7遺跡や坂長第8遺跡の遺物の出土状況からすると、比較的短期間に営まれた小規模な集落であったと想定される。なお、坂長第8遺跡の南側に隣接する坂長下門前遺跡では、古墳時代以前とみられる貯蔵穴が1基確認されている。これ以外、当該期の遺構を確認していないことから、貯蔵穴もこの集落の中に含まれていたのかもしれない。

4. 古墳時代

古墳時代になると、坂長第7遺跡のある谷部では溝や自然流路が認められるが（SD33～51）、縄文時代から自然流路によって運び込まれた土砂が厚く堆積し、上流から流れ込む水の量も減少したとみられ、縄文時代の自然流路に比べて幅が狭くなる。また、SD37の埋土が、氾濫堆積物が流入する期間を挟在する湿地のような堆積環境のもので形成されたと考えられ、この谷部が比較的水量のある自然流路が流れる場所から、湿地へと環境が変化した様子がうかがわれる。

ところで、中期後葉頃のSD33において遺構埋土が地山に入り込むなどの変形がみられた。また周辺の堆積物も火焰状に変形する状況が認められたことから、中期後葉から古代の間に地震があったと考えられる。

坂長第8遺跡では、中期中葉から後期前葉頃にかけて集落が営まれるようになる。これに伴い周辺部は樹木の伐採が行われたようであり、それまで落葉樹が主体であったが、マツ属が多くみられるようになり、植生の変化が認められる。

さて、遺構の状況であるが、平成18年度の調査では中期中葉頃の堅穴建物3棟（SI1～3）を確認したほか、今回の調査では、中期後半から後期前葉頃の堅穴建物9棟（SI4～12）を確認した。これらは、3棟が重複または近接してまとまっており、それぞれ10～20mほど離れて分布している。分布状況からみると、同時併存が可能なものは最大で4棟と考えられるが、遺構の時期をみると、実際にはそれよりも少なかったとみられ、小規模な集落であったと考えられる。

なお、周辺遺跡の状況については、長者原台地で古墳時代前期前葉頃の堅穴建物が確認された坂長

第6遺跡や諏訪西山ノ後遺跡、後期前葉頃の竪穴建物のある坂長宮田ノ上遺跡、丘陵裾部では中期前半頃の竪穴建物が認められる坂長尻田平遺跡などがある。本遺跡を含め、これらは長期間にわたり営まれたものが認められないことから、この周辺では、古墳時代を通じて短期間に営まれた小規模な集落が点在していたとみられる。

5. 古代

古代になると、本遺跡の北側に広がる長者原台地上に坂中廃寺といった古代寺院のほか、長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡周辺、坂長第6遺跡において相見郡衙に関連する官衙施設とみられる大型建物群が確認されるようになる。官衙施設とみられる建物の年代は概ね8世紀頃であり、その性格については、長者屋敷遺跡が正倉、坂長下屋敷遺跡周辺が館や曹司などの郡庁以外の官衙施設、坂長第6遺跡が鍛冶工房を伴う曹司が想定されている（坂本2009）。また、これらの遺跡は250～400mほど離れていることから、相見郡衙は、空地を挟みながら広範囲にわたり分散した状態で官衙域を形成していたとみられる。なお、郡庁の所在地については、坂長第6遺跡から坂中廃寺の間にあったと推測されている（坂本前掲）。

さて、坂長第7遺跡の状況であるが、平成18年度の調査では、坂長第6遺跡との境にあたる長者原台地の斜面で8世紀前半頃とみられる段状遺構1基のほか、谷部では10世紀頃の溝1条（SD11）、時期の定かではない溝8条（SD3～10）、8世紀後半から9世紀頃の性格不明遺構3基（SX1～3）が確認されている。また、今回の調査では、8世紀後半頃の自然流路や溝（SD30・31）がみつまっている。谷部に堆積する土壌については、土壌形成が進行する期間を挟在する湿地のような堆積環境のものとして形成されたと考えられ、自然流路が流れていた状況を踏まえると、古墳時代に引き続き湿地となっていたとみられる。

出土遺物については、遺跡のすぐ北側に位置する坂長第6遺跡のためか、官衙に関連するとみられるものが多い。このうち注目すべきものとして、文字が記された遺物が挙げられる。文字が記された遺物として、平成18年度の調査では、底面に「東」と刻書された可能性のある須恵器の皿が出土したほか、今回の調査では木簡が7点出土している（墨痕のみられるものや木簡状の木製品を含む）。なお、出土した木簡のうち、文字が認められるものはW15・47・48であり、その中で明確に判読できるものはW15・48である。

このうちW15については「河村郡合定貳仟柒佰参拾陸束 久米郡定五千壹百壹拾陸束 相見郡合定伍千陸拾貳束 合三郡定税員一万二千九百十四束」と、伯耆国にある6郡（河村、久米、八橋、汗入、相見、日野）のうち河村郡、久米郡、相見郡の3郡の名称が記されている。また、「束」や「税」などの文字がみられることから、伯耆国における正税の一部を示した木簡とみられる。具体的な内容については定かではないが、表面が削られ僅かに墨痕がみられ、何度も同じ用途として使用された状況がうかがわれることや、相見郡衙の所在地周辺において廃棄された状況を考えると、相見郡衙あるいはこの周辺にある伯耆国に関連する施設に保管または運用されるために持ち込まれたものである可能性が想定される。

W48は付札とみられ、表面に「星川マ小身□」と人名が記されている。この「星川」については、倭名類聚抄にみられる相見郡の12郷（日下、細見、美濃、安曇、巨勢、蚊屋、天万、千太、相見、星川、鴨部、半生）に郷名として記されている。この星川郷は、鳥取県史において、星川臣の一族が居

住していた場所と想定され、正倉院文書（天平十四年優婆塞貢進物）に記された「因幡国高草郡古海郷戸主星川君虫麻呂戸口」との関係が指摘されている（鳥取県1972）。今回確認したW48は、これを裏付ける史料となるといえ、星川郷に「星川マ小身□」なる人物が居住していたことを示しているといえよう。

ところで、星川郷は本遺跡から南西側にやや離れた小松谷川中流域にある。W48はそこから物資が運び込まれた状況を表しているものとみられ、この近辺に各郷からの物資を集約する郡衙が存在していたことを示す資料となるだろう。

そのほか、注目すべきものとして、祭祀に関連する遺物が挙げられる。平成18年度の調査では人形、今回の調査では斎串が出土している。また、その可能性のあるものとして、木材を棒状に割り、その先端が炭化した棒状木製品、先端部を尖らせた棒状木製品などがある。なお、このような祭祀に関わる遺物は、谷の上流に位置する坂長前田遺跡や坂長ブジラ遺跡でも認められ、ここでは陽物や土馬など坂長第7遺跡で認められなかった遺物も出土している。このため、相見郡衙との境界にあたるこの谷部では、広範囲にわたり水辺の祭祀が行われていたと想定される。

坂長第8遺跡では、9世紀後半から10世紀前半頃の溝1条（SD3）を確認したのみである。また当該期の遺物についても、包含層中から僅かに出土したにすぎず、土地の利用状況は希薄であったとみられ、谷部を挟んだ長者原台地の状況とは対照的である。

6. 中世

中世になると、坂長第7遺跡のある谷部では、上流から運び込まれた土砂の堆積が進み、上流から流れ込む水の量も減少するようになったとみられ、自然流路の痕跡は11世紀頃とみられるSD32のみであり、古代に比べさらに乾燥した土地へと変化したと思われる。このため、水田耕作に適した土地となったようであり、坂長第7遺跡では、11世紀から15世紀の間に形成されたとみられる水田の痕跡（畦4）がみつまっている。

ところで、この谷部の水田耕作の状況であるが、この上流に位置する坂長ブジラ遺跡についてみると、自然科学分析の中で、中世の堆積物が耕作土の特徴を示すことが指摘されており、水田耕作が行われていたとみられる。このように、上流に位置する遺跡においても水田耕作が行われていたと考えられることから、この谷部一帯には水田が広がっていたと思われる。

出土遺物については、僅かながら中世の土師器のほか、青磁や白磁といった貿易陶磁器、瀬戸・美濃産の皿など国産陶器が出土しているが、いずれも破片の状態であり、周辺から流れ込んできたものと考えられる。

坂長第8遺跡については、遺構が認められず、遺物についても土師器の杯が数点出土するのみであり、土地利用が低調であったと考えられる。なお、周辺の状況については、12世紀頃の段状遺構が確認された坂長第6遺跡のほか、14～15世紀頃の掘立柱建物や柵列などが確認されている坂長尻田平遺跡などがあり、長者原台地上や丘陵裾部において、集落が点在して営まれていたと思われる。

7. 近世

近世の遺構として、坂長第7遺跡で水田の痕跡（畦1～3）を確認した。このため中世に引き続き、近世においても坂長第7遺跡のある谷部は、水田耕作が行われていたとみられる。

坂長第8遺跡では、遺構が認められず、中世に引き続き、土地利用が低調であったとみられる。

8. 結語

以上、各時期の状況について概観してきた。坂長第7遺跡は縄文時代から弥生時代は比較的水量のある自然流路が流れていたとみられ、堅果類などのアク抜き場など水場として利用されていたと想定される。古墳時代になると土砂の堆積が進み、湿地へと変化したようであり、古代までその状況がつづく。なお、古代では人形や斎串など祭祀に関連する遺物が出土しており、長者原台地上にある相見郡衙に関連した水辺の祭祀が行われていたとみられる。中世になると、さらに土砂の堆積が進み、比較的乾燥した土地となったようで、水田耕作が行われるようになり、現代にいたると思われる。

坂長第8遺跡では、縄文時代後期から晩期頃になると集落が営まれたり、狩猟場として利用されていたようである。弥生時代では中期頃に集落が営まれたと考えられるが、比較的短期間のものであり、小規模であったとみられる。古墳時代には中期中葉から後期前葉にかけての堅穴建物がみられ、集落が形成されるようになる。これ以降、古代の溝が1条認められるにすぎず、土地利用が低調となるようである。

参考文献

- 財団法人鳥取県教育文化財団1997『長者宮田ノ上遺跡・坂中第5遺跡・坂長佛谷遺跡・小町越城野原第1遺跡・小町越城野原第2遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書51
- 財団法人鳥取県教育文化財団2006『長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書107
- 財団法人鳥取県教育文化財団2007『坂長下門前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書109
- 財団法人鳥取県教育文化財団2009『坂長第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書111
- 財団法人鳥取県教育文化財団2009『坂長第7遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書112
- 財団法人鳥取県教育文化財団2009『坂長第8遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書113
- 財団法人鳥取県教育文化財団2011『坂長武寿羅遺跡・坂長第8遺跡2』鳥取県教育文化財団調査報告書116
- 財団法人鳥取県教育文化財団2012『坂長ブジラ遺跡・坂長尻田平遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書117
- 財団法人米子市教育文化事業団2006『諏訪南山崎遺跡』(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書50
- 坂本嘉和2009「第6章 総括—坂長第6遺跡と会見郡衙—」『坂長第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書111、財団法人鳥取県教育文化財団
- 鳥取県1972『鳥取県史1 原始古代』
- 湯村 功2008「第5章 総括 第3節 方形土坑の性格と位置づけ」『梅田萱峯遺跡Ⅳ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書22、鳥取県埋蔵文化財センター

plate



1. 第1遺構面全景(南東から)



2. 第2遺構面全景(東から)



1. 畦4完掘状況(東から)



2. SD30遺物出土状況(東から)



3. SD30木簡出土状況
(W15、西から)



1. 第3遺構面全景(東から)



2. 第4遺構面全景(南東から)



1. SD56壇完掘状況(西から)



2. SD56壇検出状況(東から)



3. SD56堅果類出土状況
(西から)



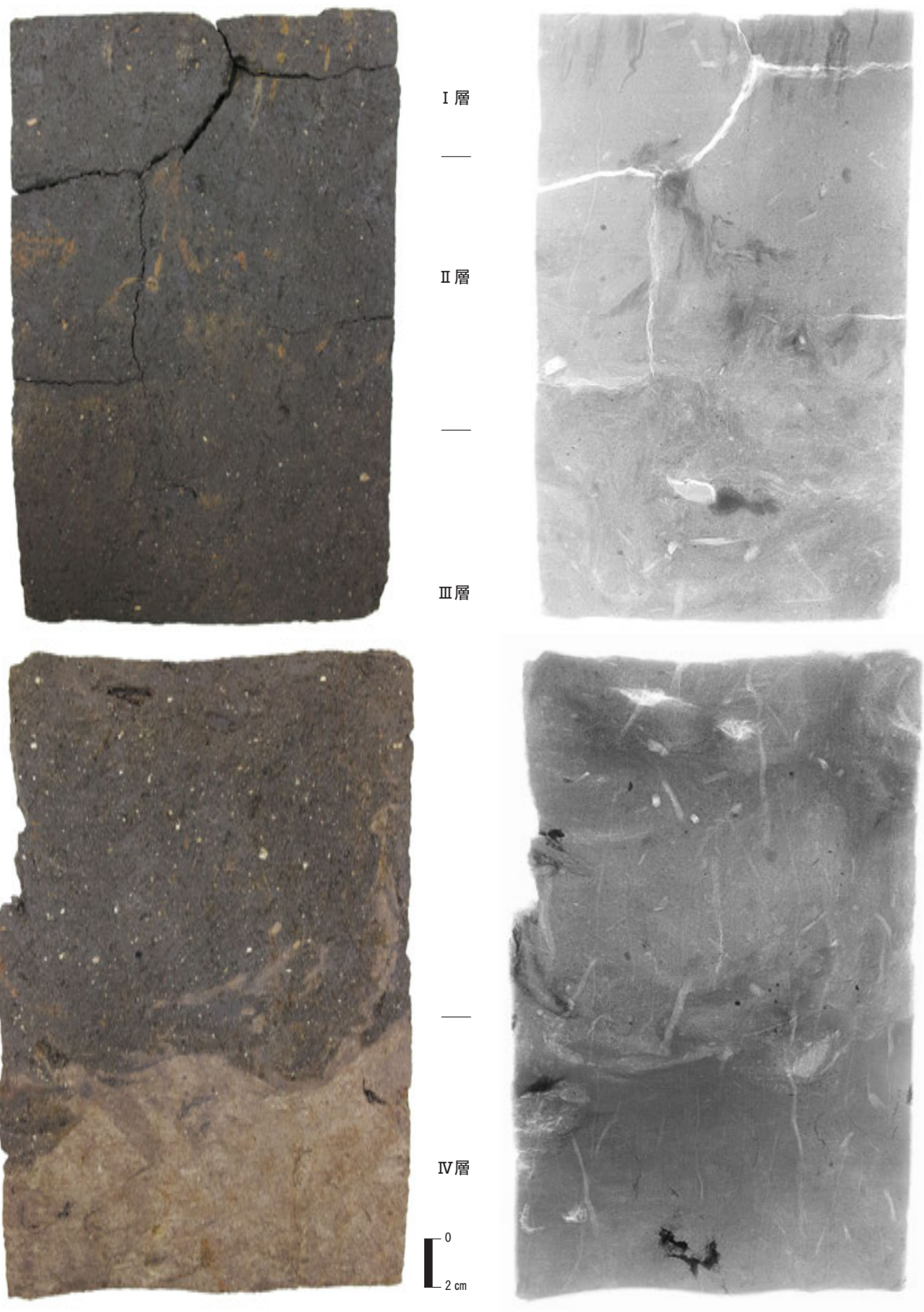
1. A-A断面全景(西から)



2. A-A断面近景(北西から)



3. A-A断面SD33変形状況
(北西から)



調査区内土層堆積状況(A-A'断面)



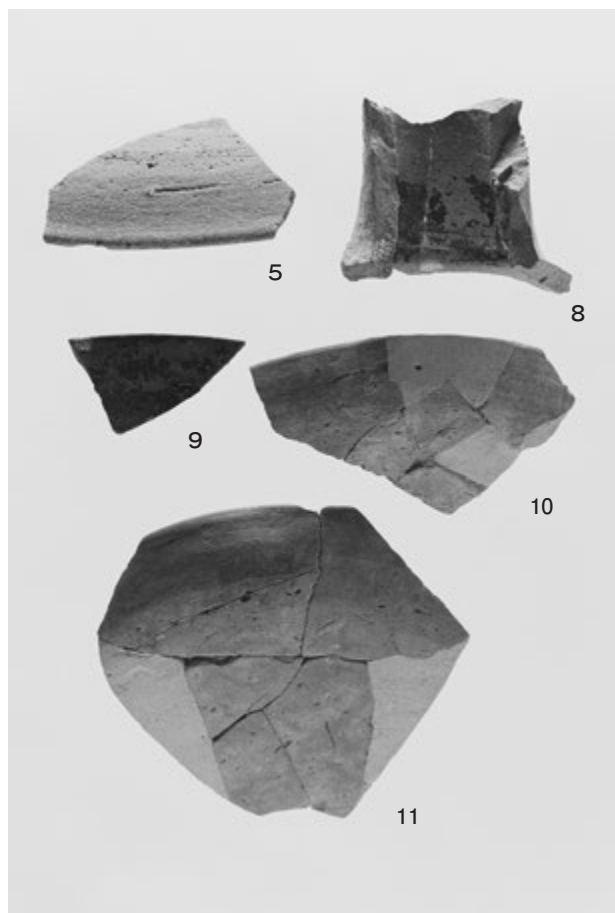
SD30・包含層出土木簡(保存処理前)



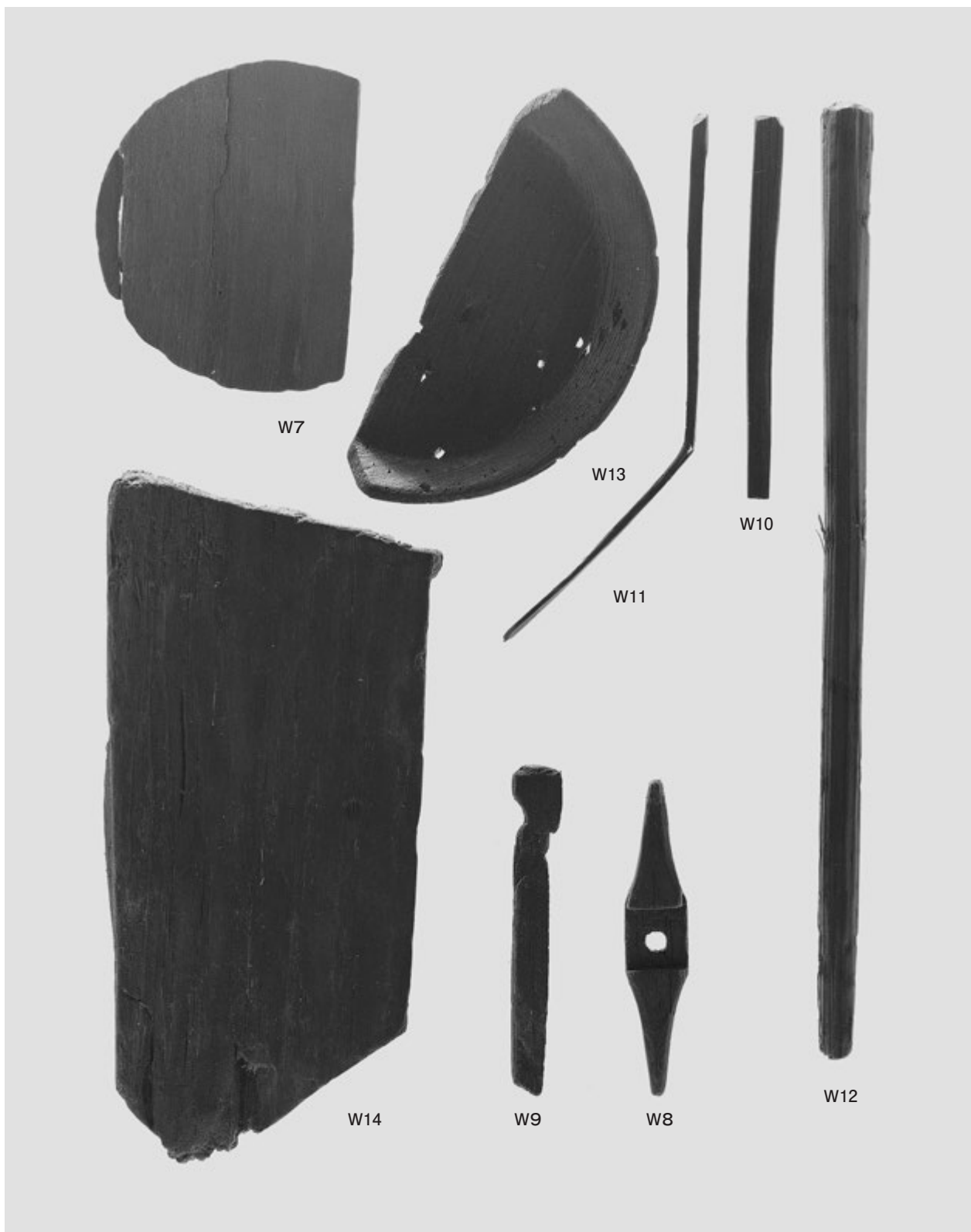
SD30・包含層出土木簡(赤外線写真)



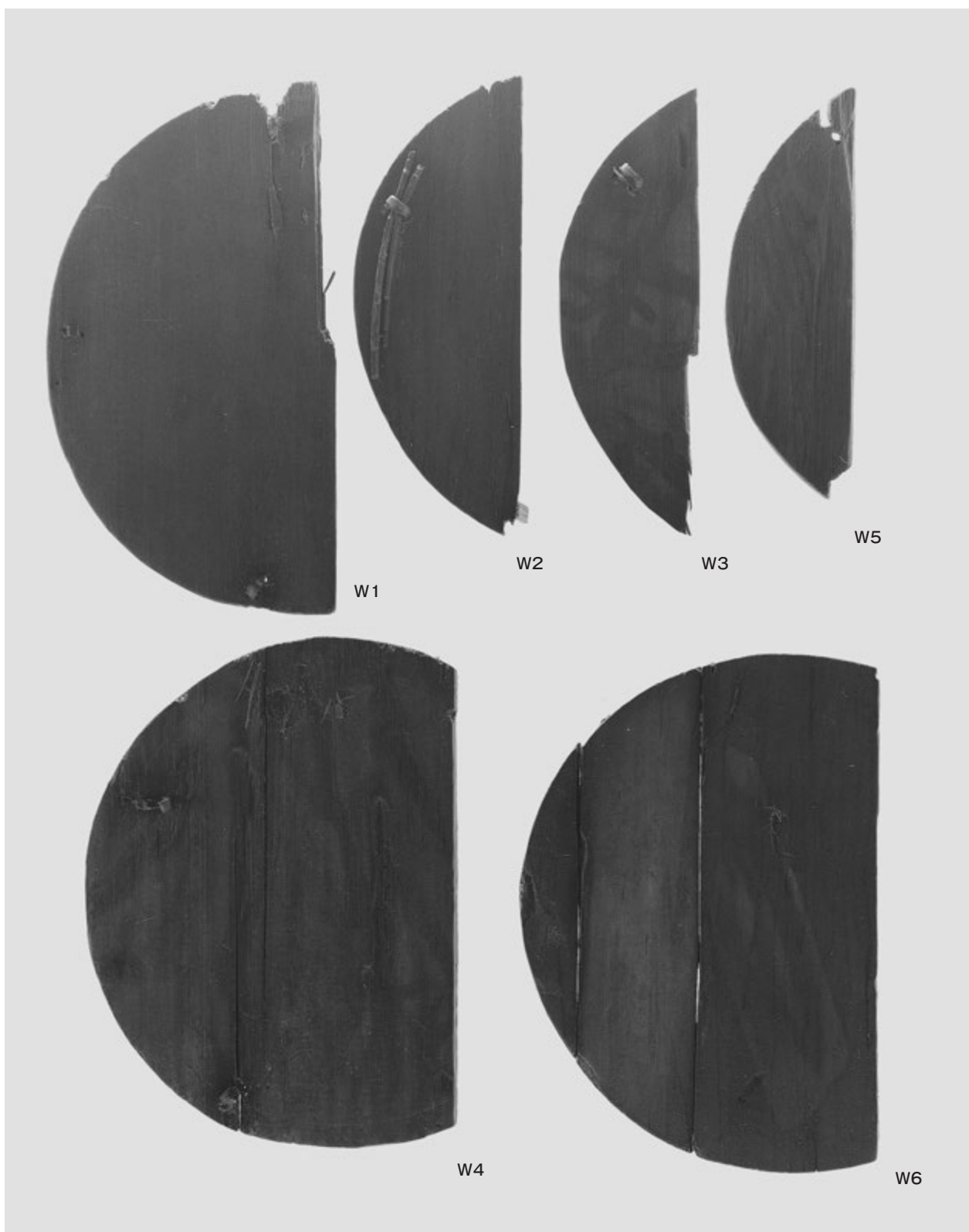
SD30・包含層出土木簡(保存処理後)



SD30出土遺物



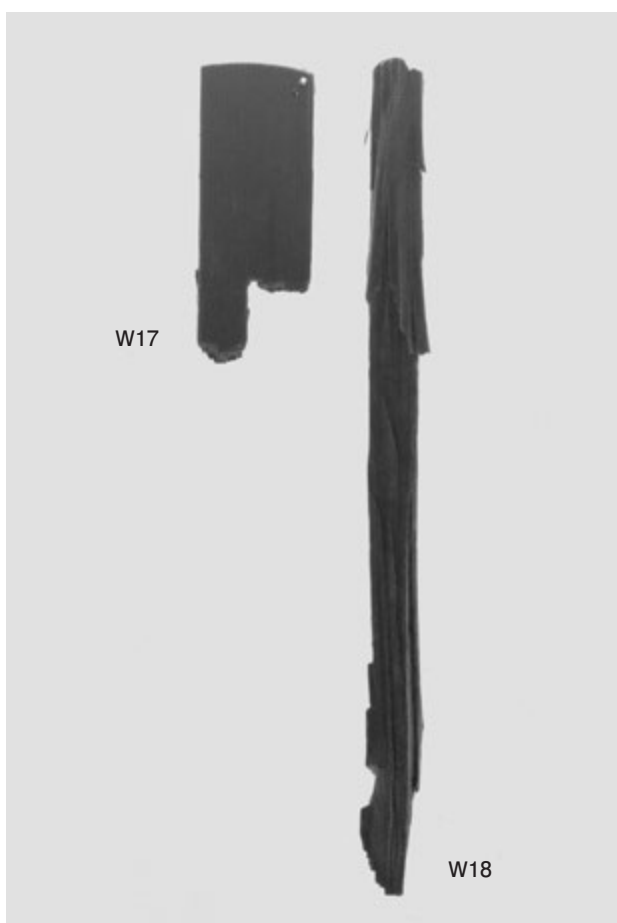
SD30出土遺物



SD30出土遺物

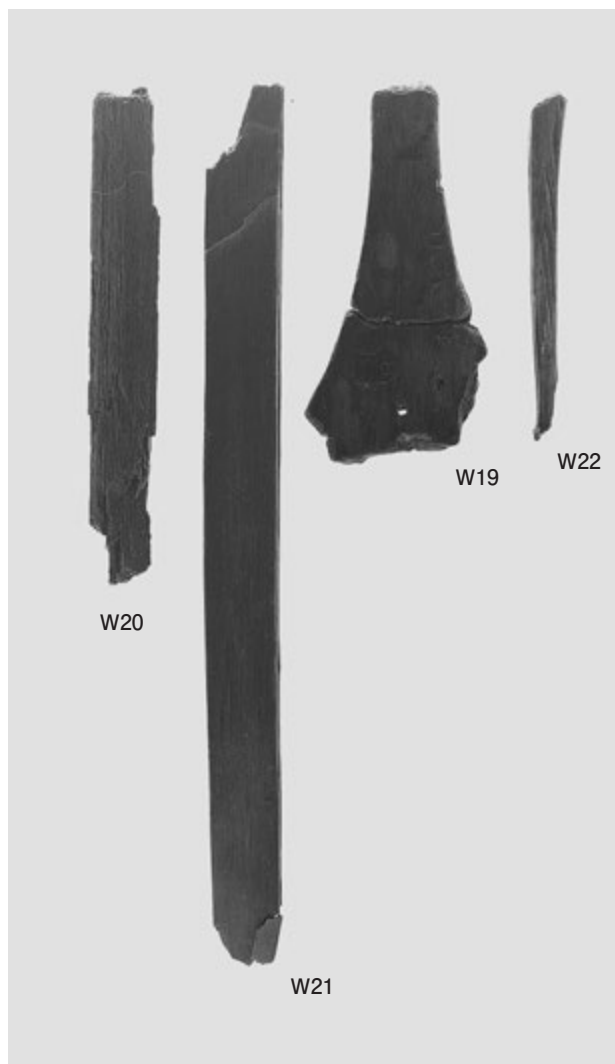


1. SD31出土遺物

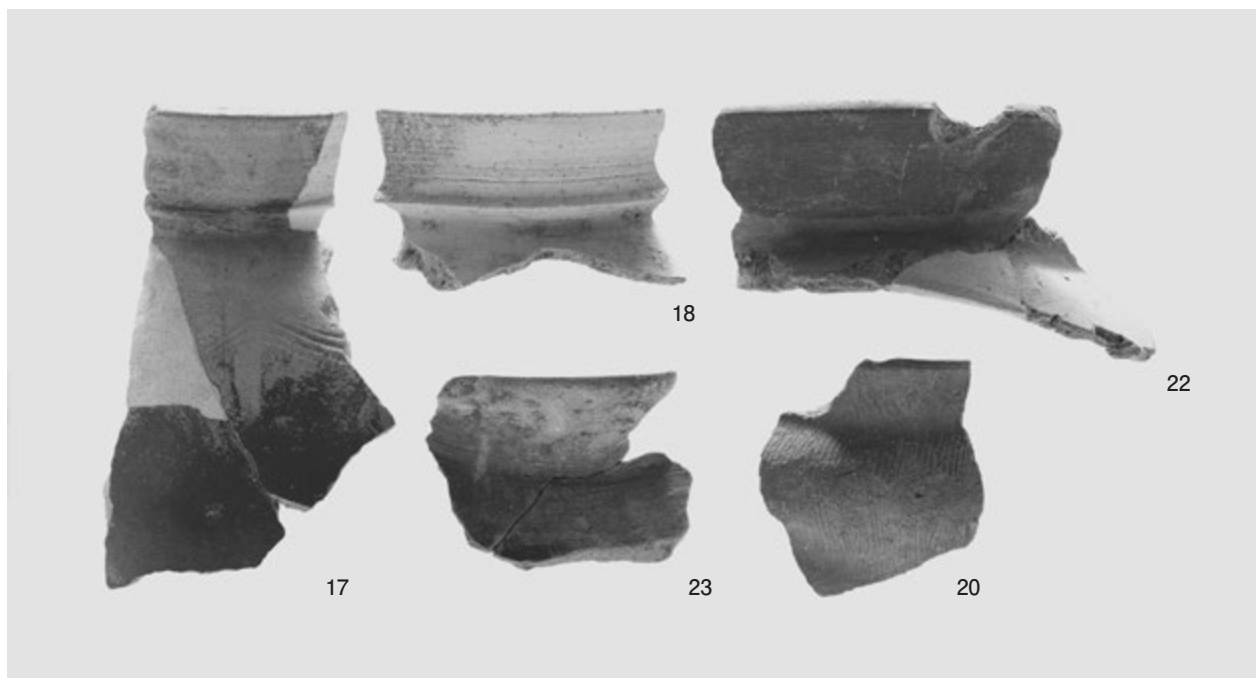


2. SD32出土遺物

3. SD33出土遺物



SD33・39出土遺物



1. SD33出土遺物



2. SD35出土遺物



1. SD35出土遺物



3. SD39出土遺物



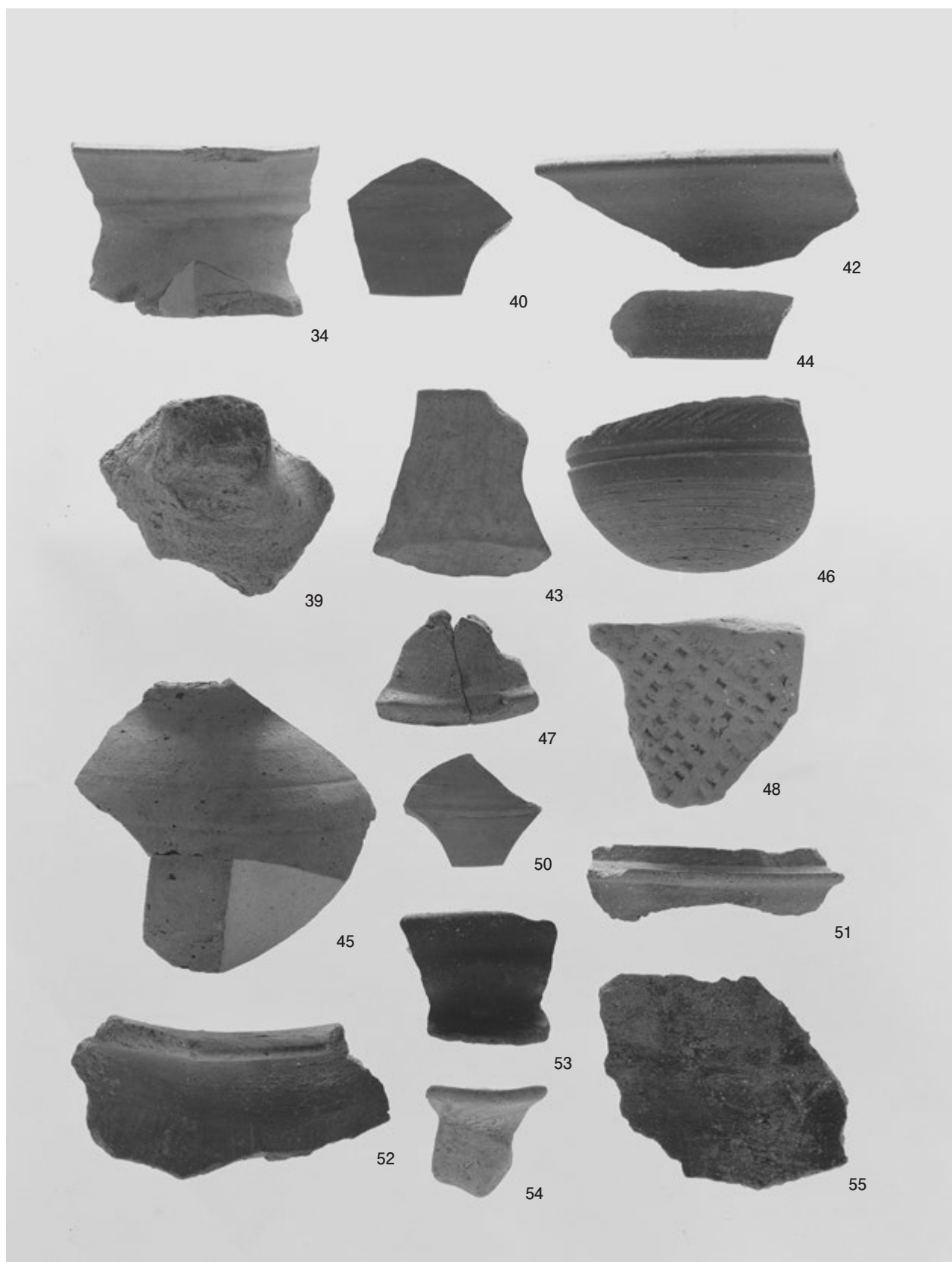
4. SD41出土遺物



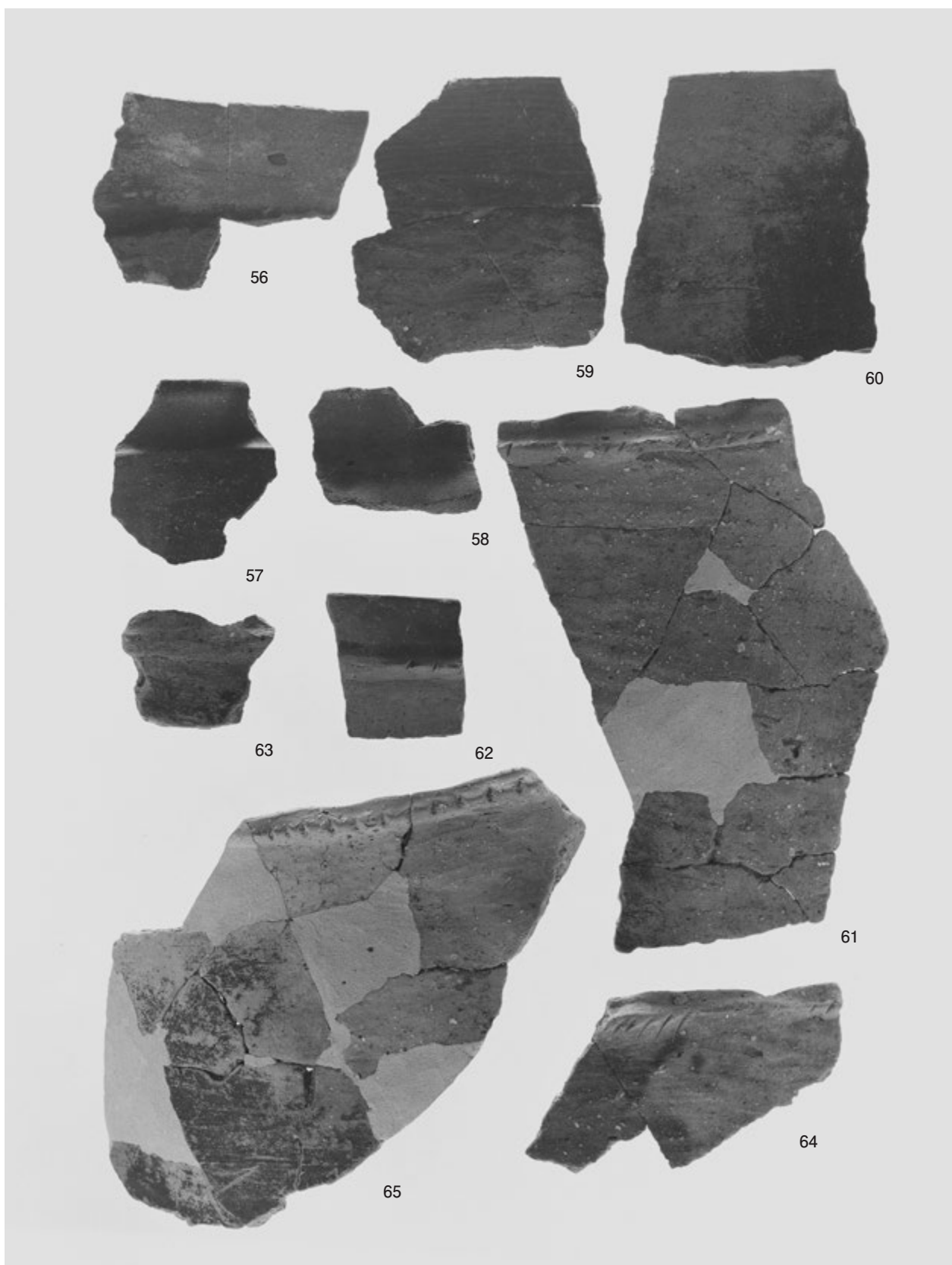
2. SD36出土遺物



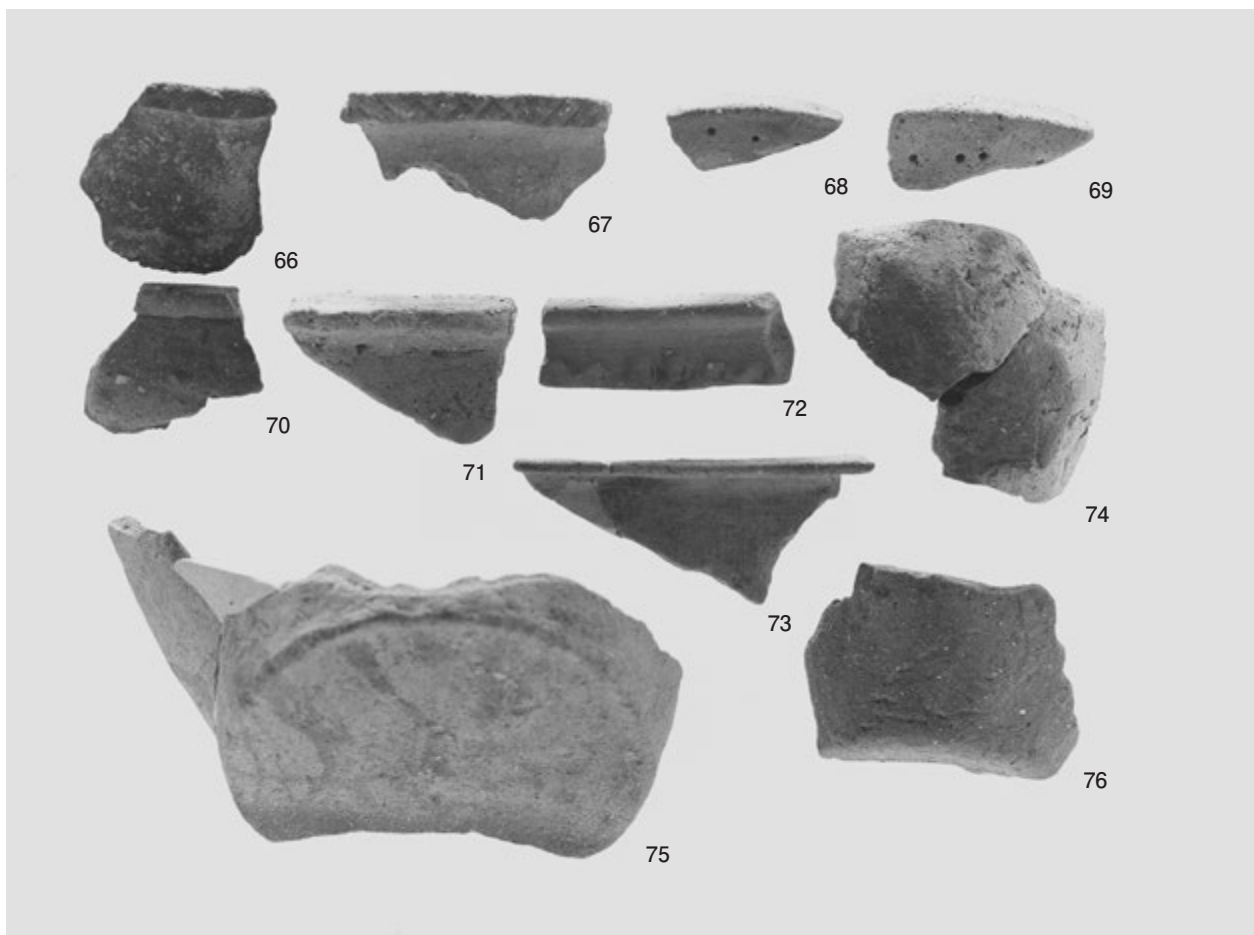
5. SD47出土遺物



SD36・40～42・45・48～50・54出土遺物

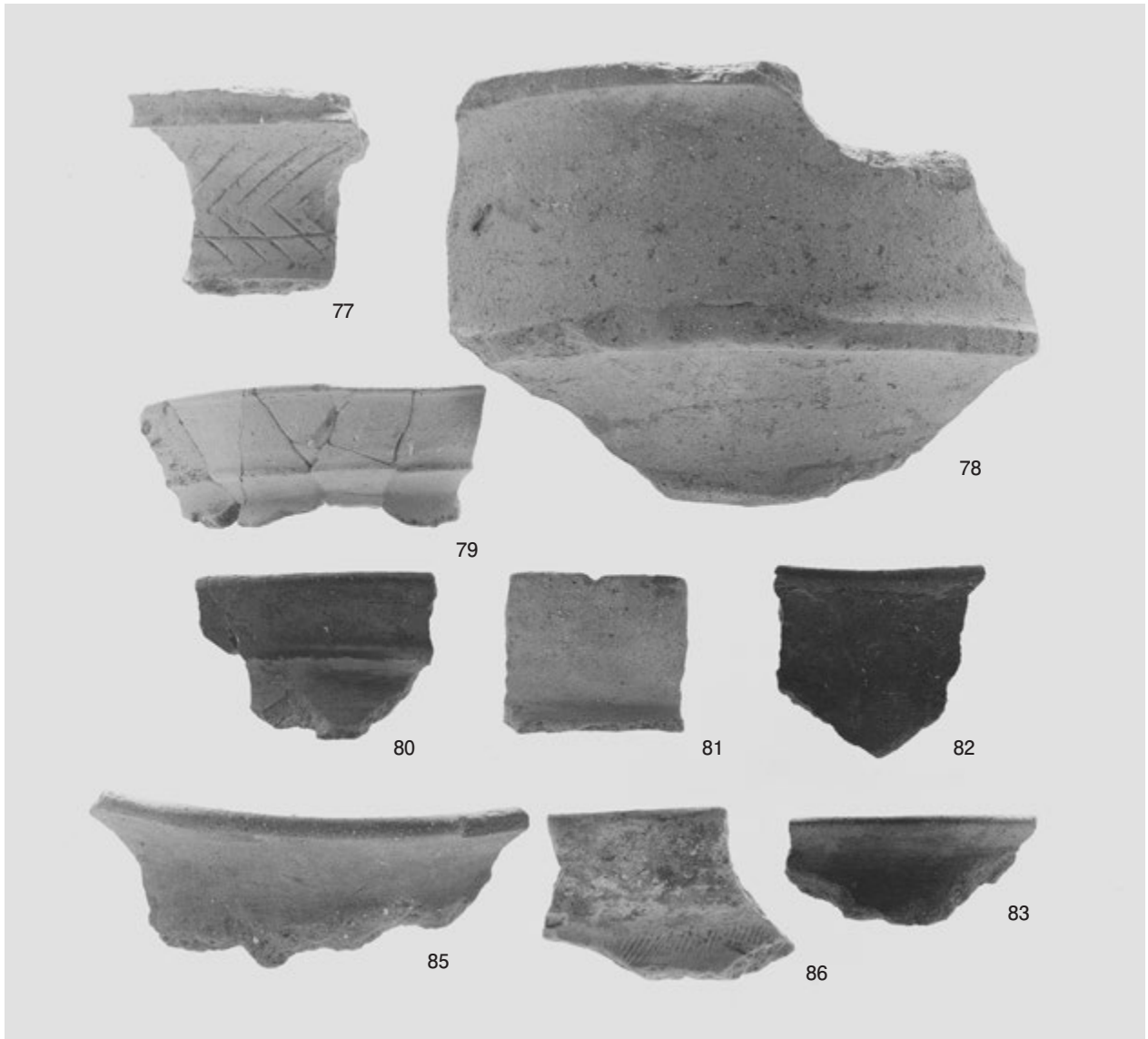


遺構に伴わない遺物

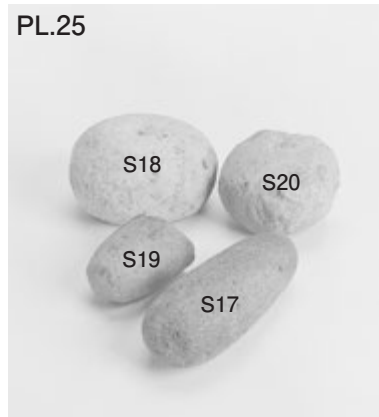
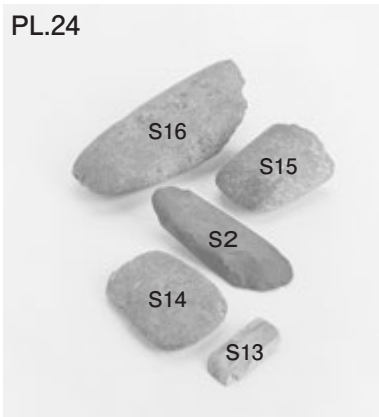


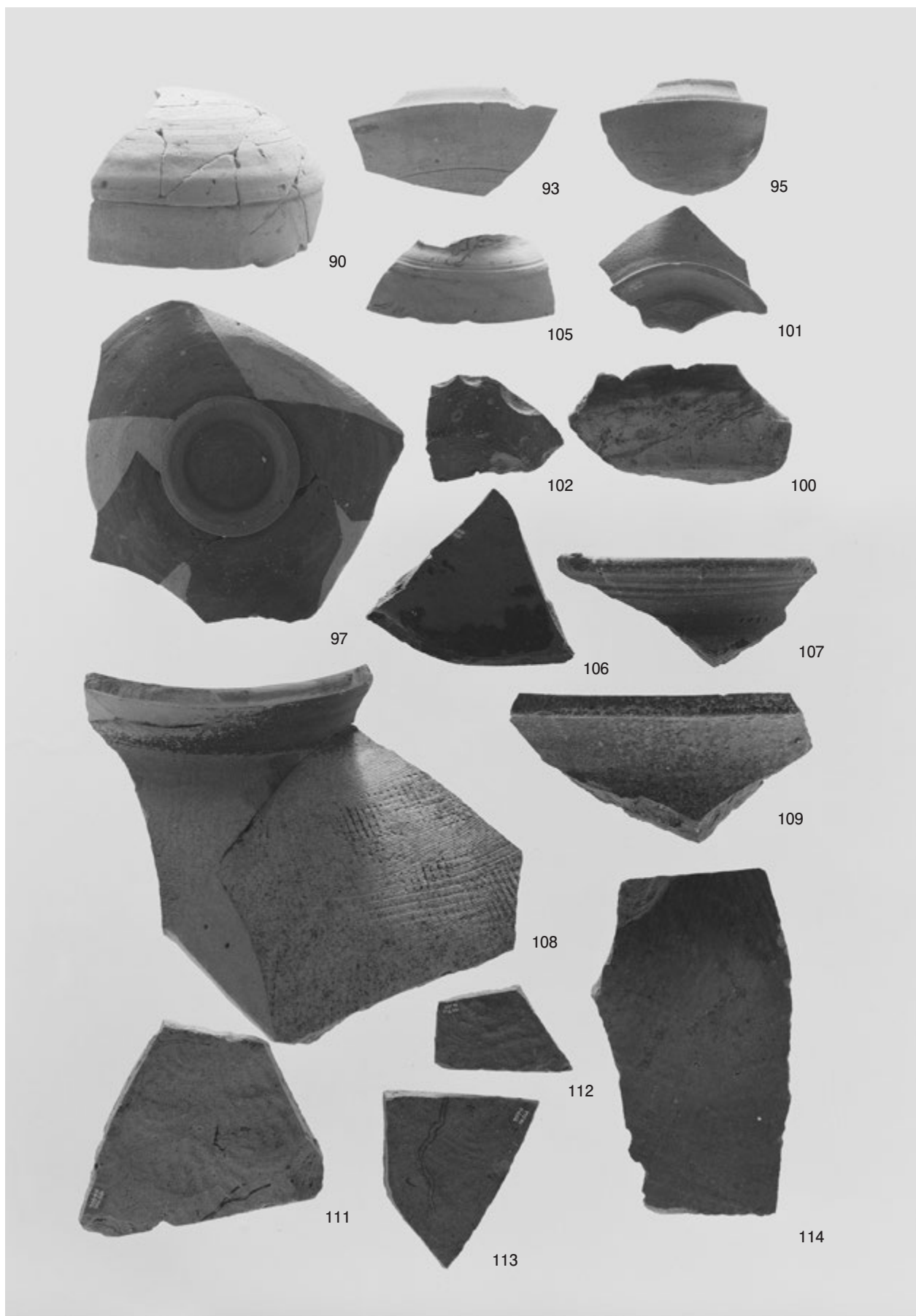
遺構に伴わない遺物





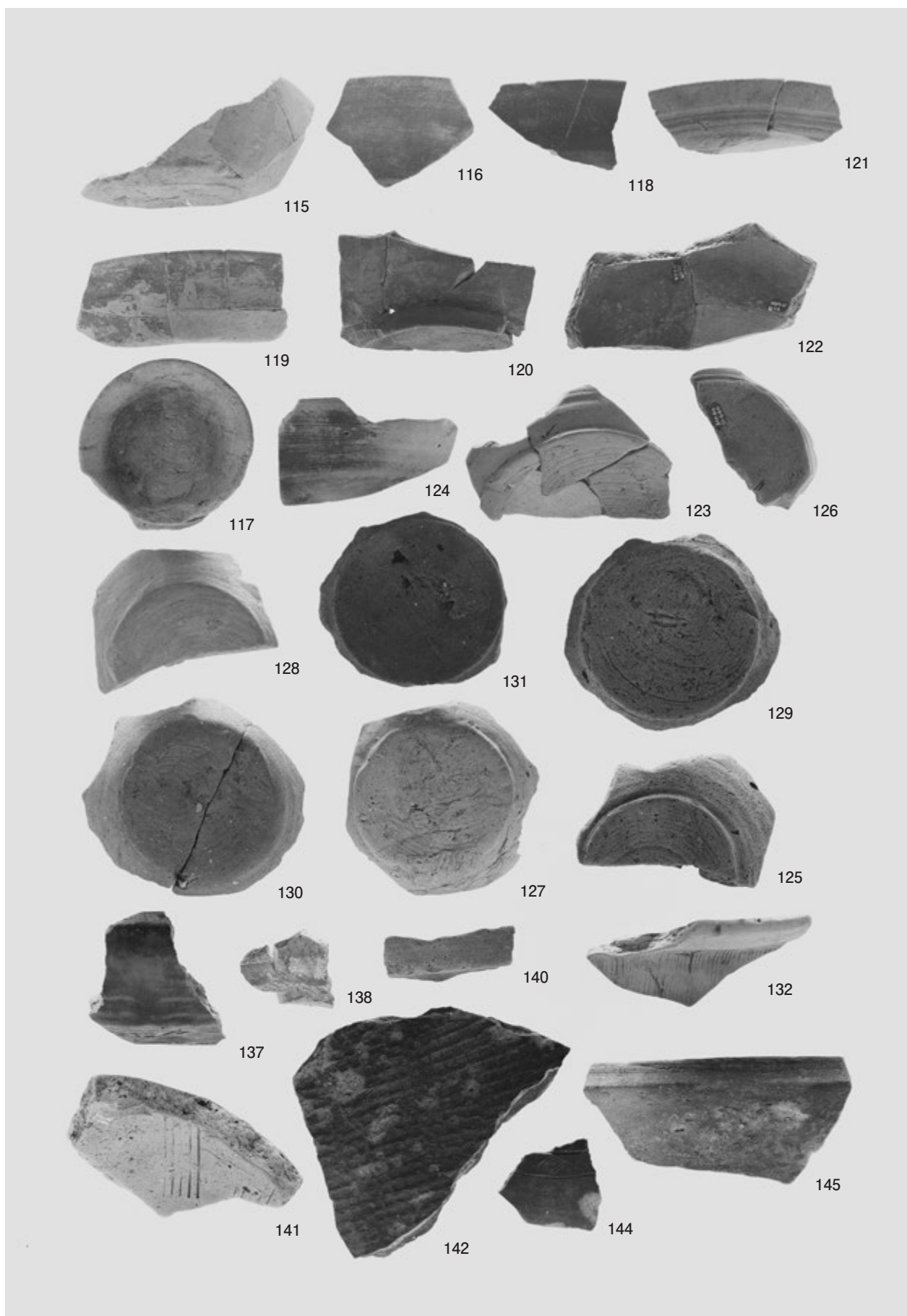
遺構に伴わない遺物



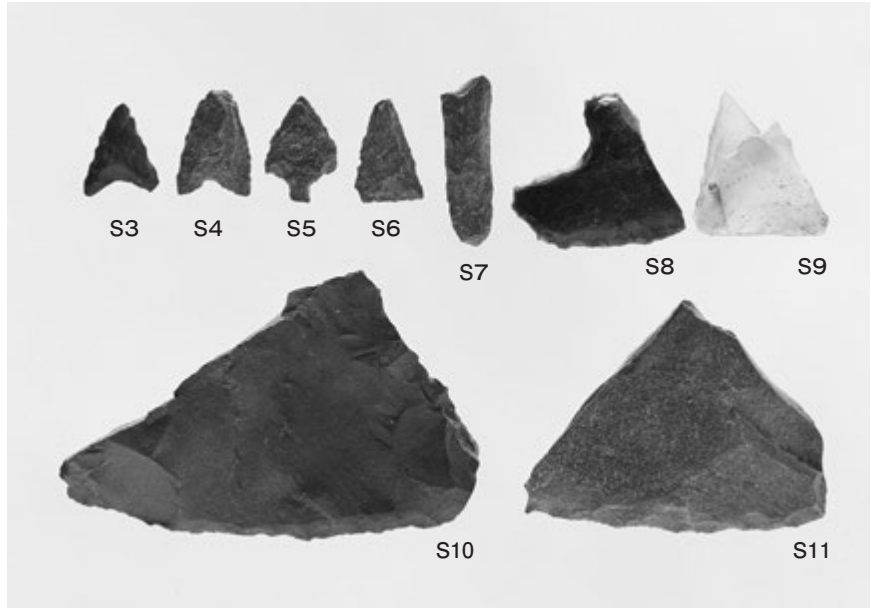


遺構に伴わない遺物





遺構に伴わない遺物



SD54・遺構に伴わない遺物



S12



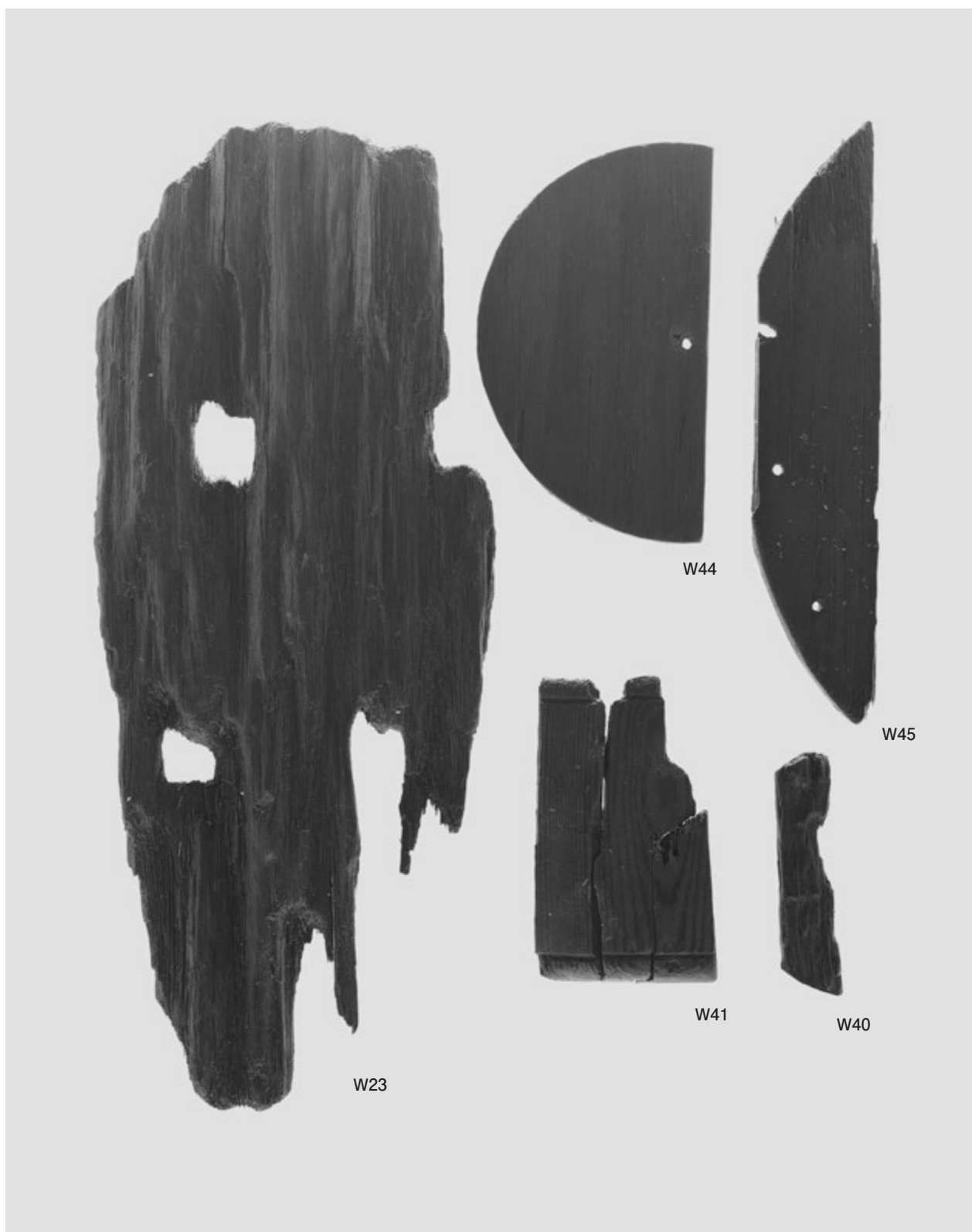
F2

F3

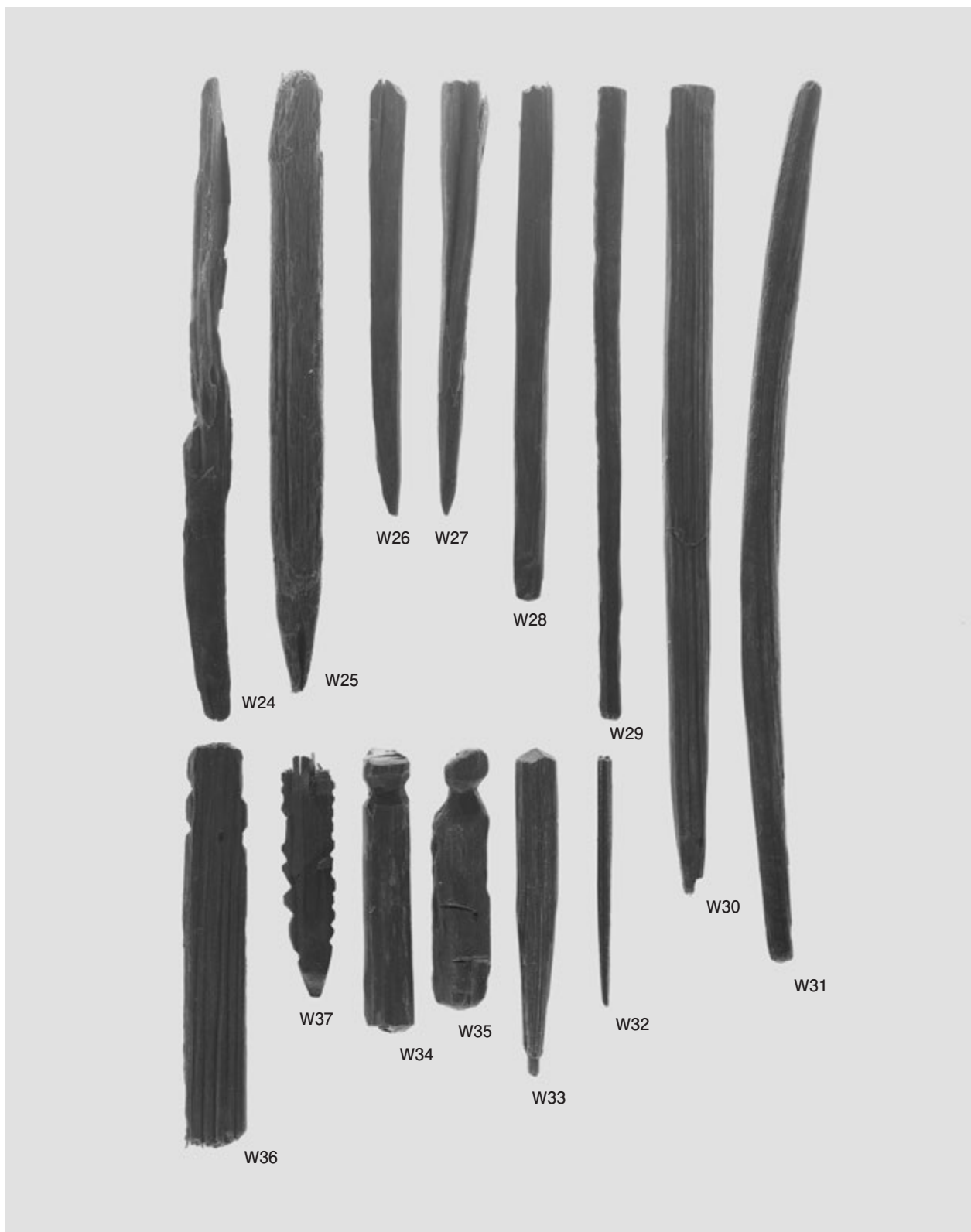


F1

SD33・遺構に伴わない遺物



遺構に伴わない遺物



遺構に伴わない遺物



1. 第1遺構面全景(北西から)



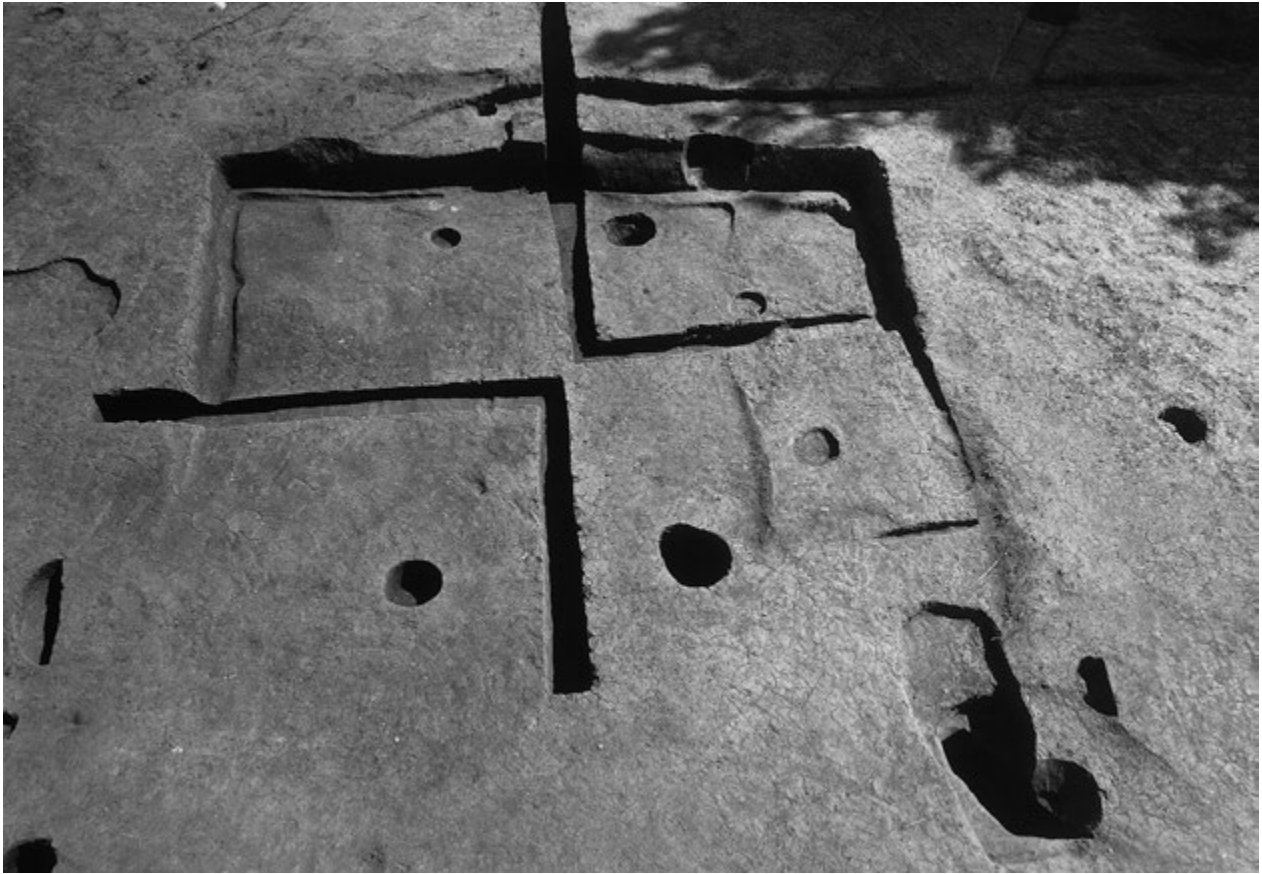
2. 第1遺構面近景(西から)



1. SI4 ~ 6完掘状況(東から)



2. SI7 ~ 9完掘状況(西から)



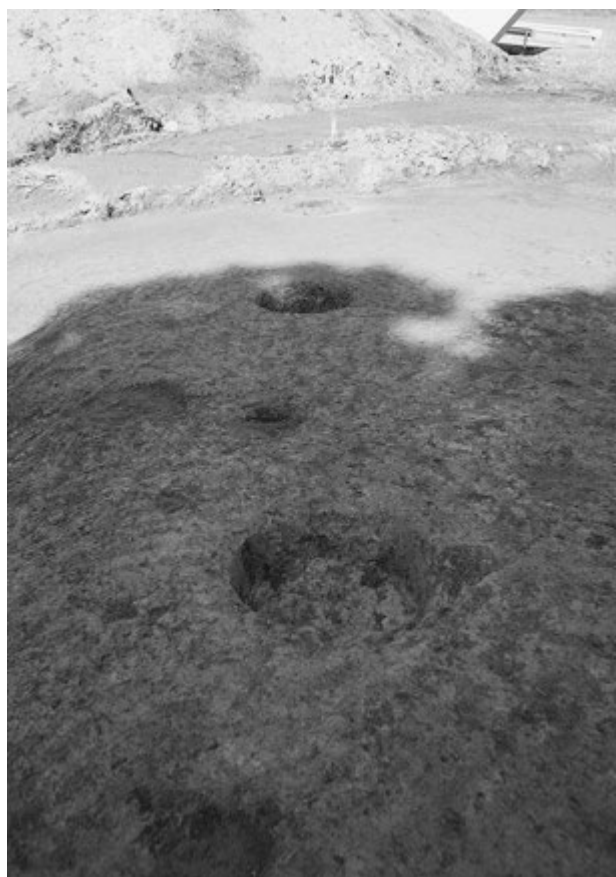
1. S110完掘状況(北から)



2. S111・12完掘状況(北から)



1. SA1完掘状況(南から)



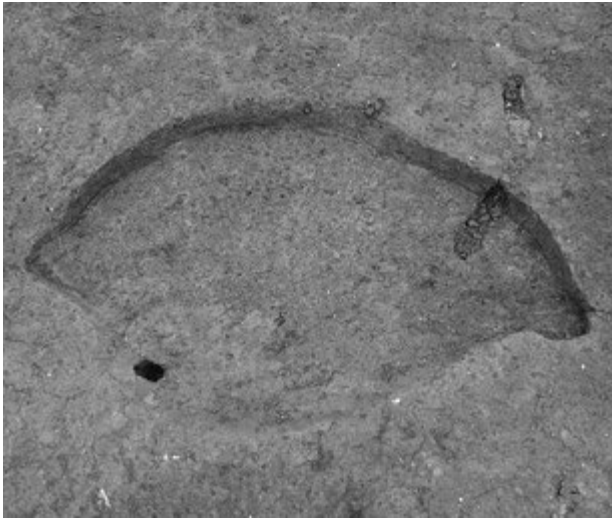
2. SA2完掘状況(南から)



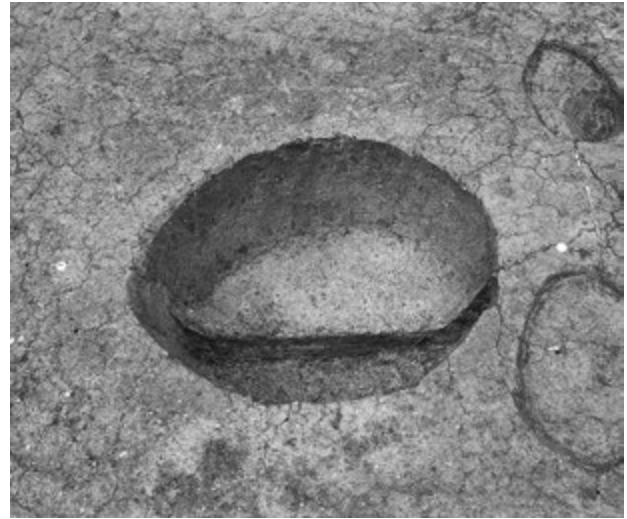
3. SA3・4完掘状況(東から)



4. SD3完掘状況(北から)



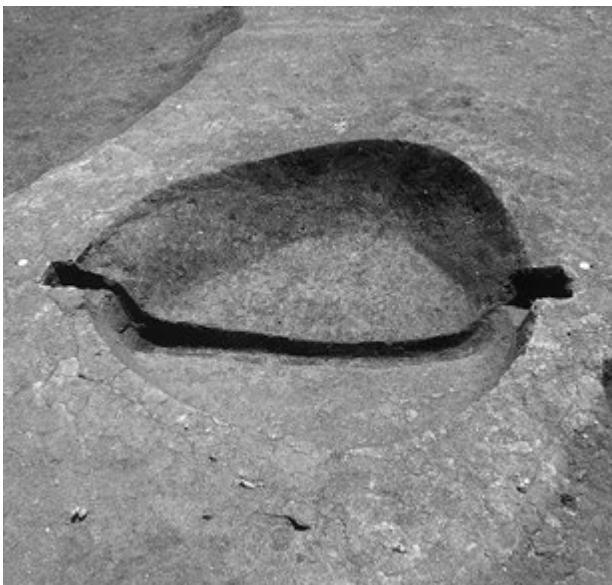
1. SK6完掘状況(北西から)



4. SK9完掘状況(東から)



2. SK7完掘状況(東から)



3. SK8完掘状況(北西から)



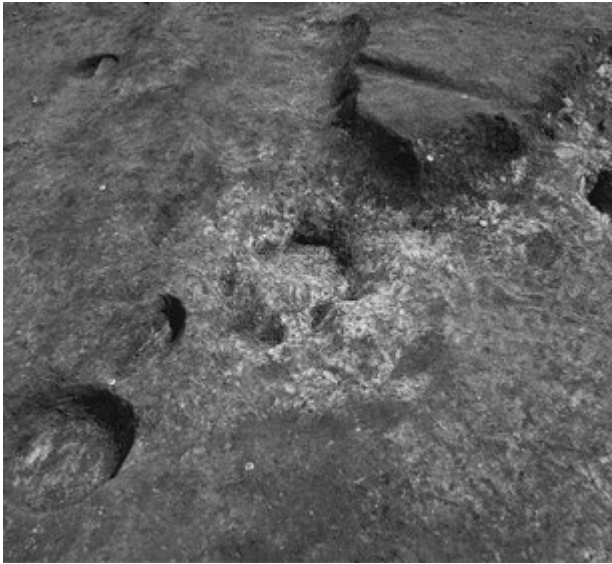
5. SK10完掘状況(南西から)



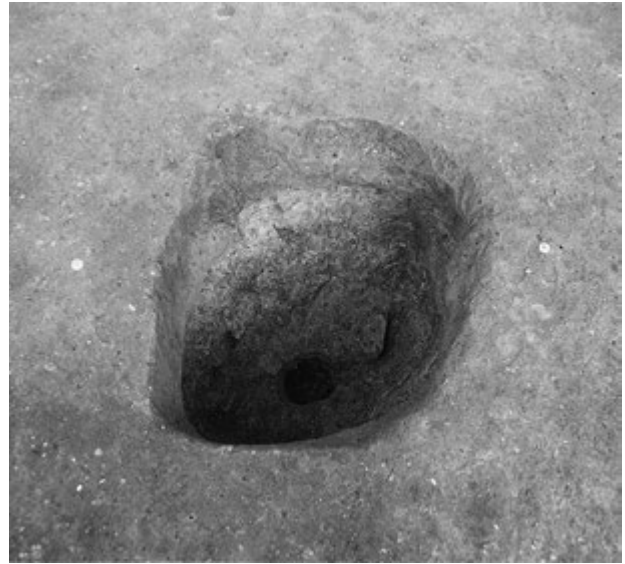
1. 第2遺構面全景(北西から)



2. SK11完掘状況(東から)



1. SK12完掘状況(北から)



4. SK15完掘状況(西から)



2. SK13完掘状況(西から)



3. SK14完掘状況(北から)



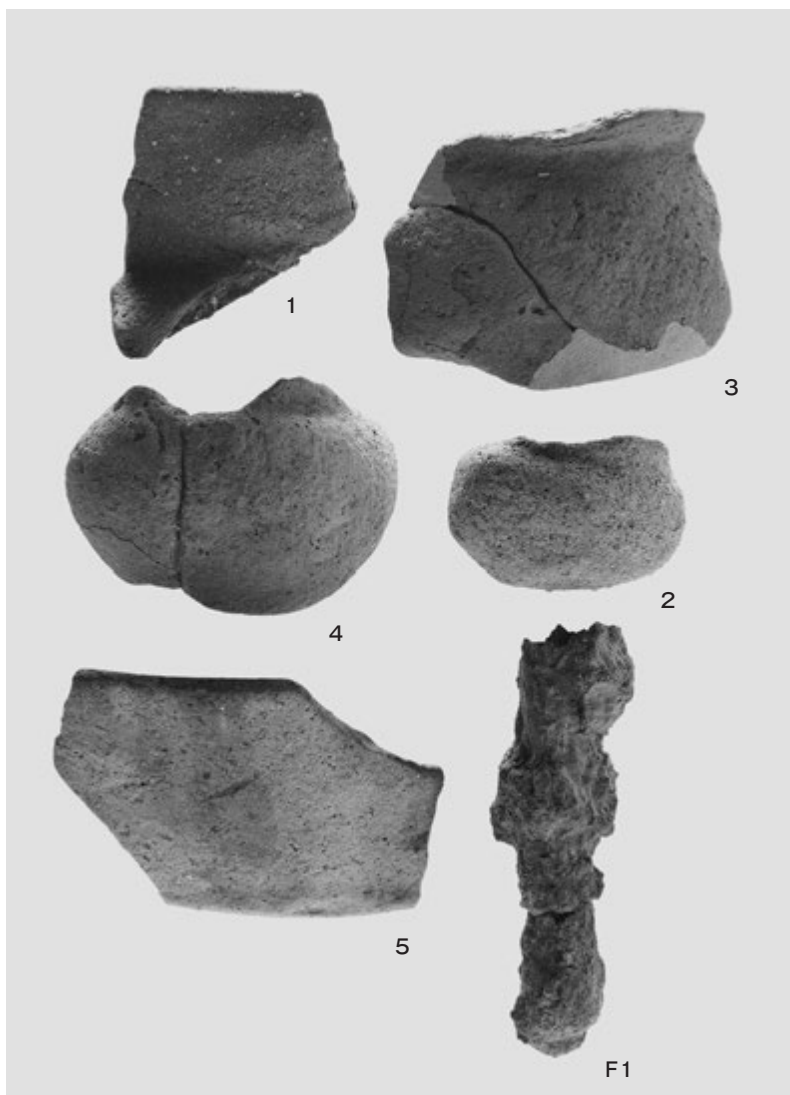
5. SD4完掘状況(北から)



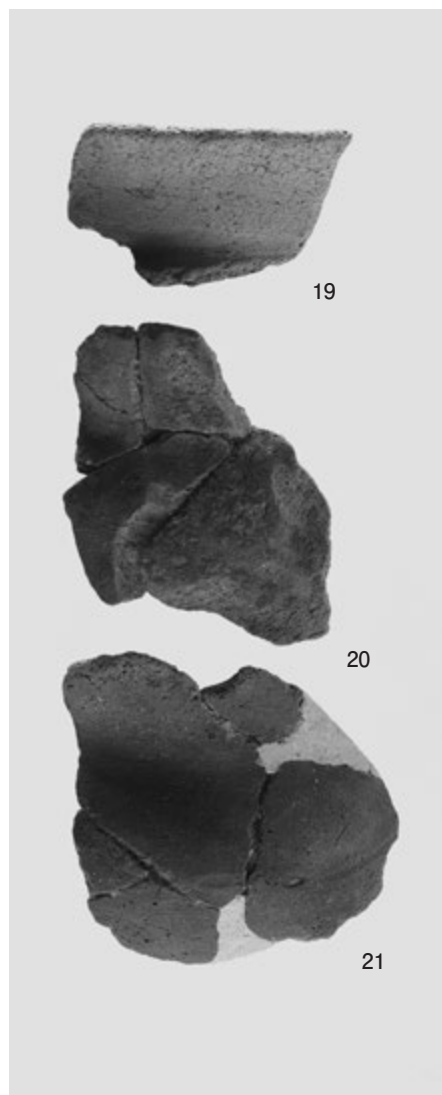
1. 第3遺構面全景(北西から)



2. SD5断面(北西から)



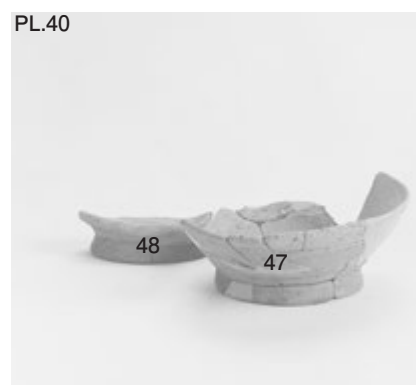
1. S14 ~ 6出土遺物



3. S19出土遺物



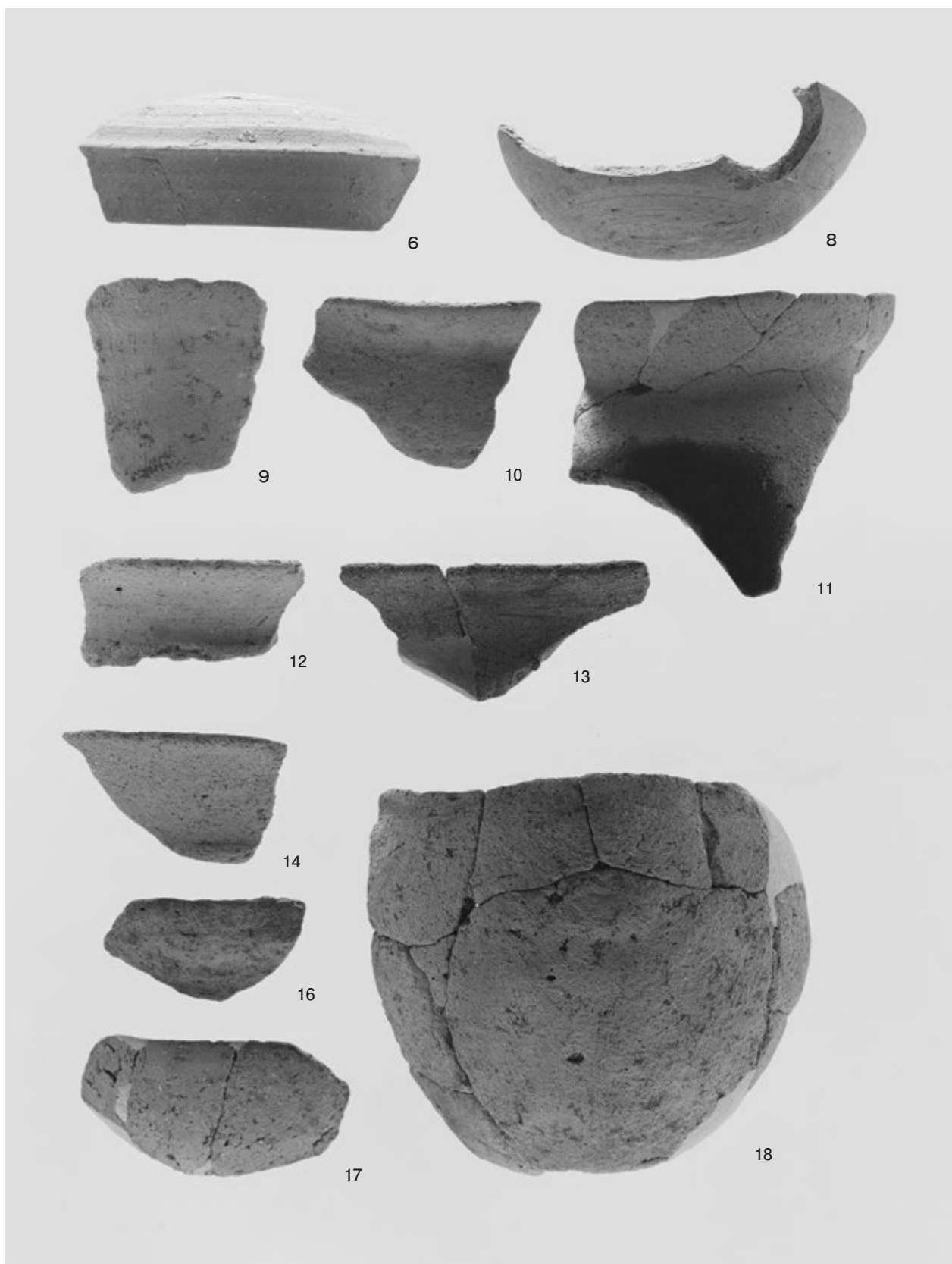
2. S18出土遺物



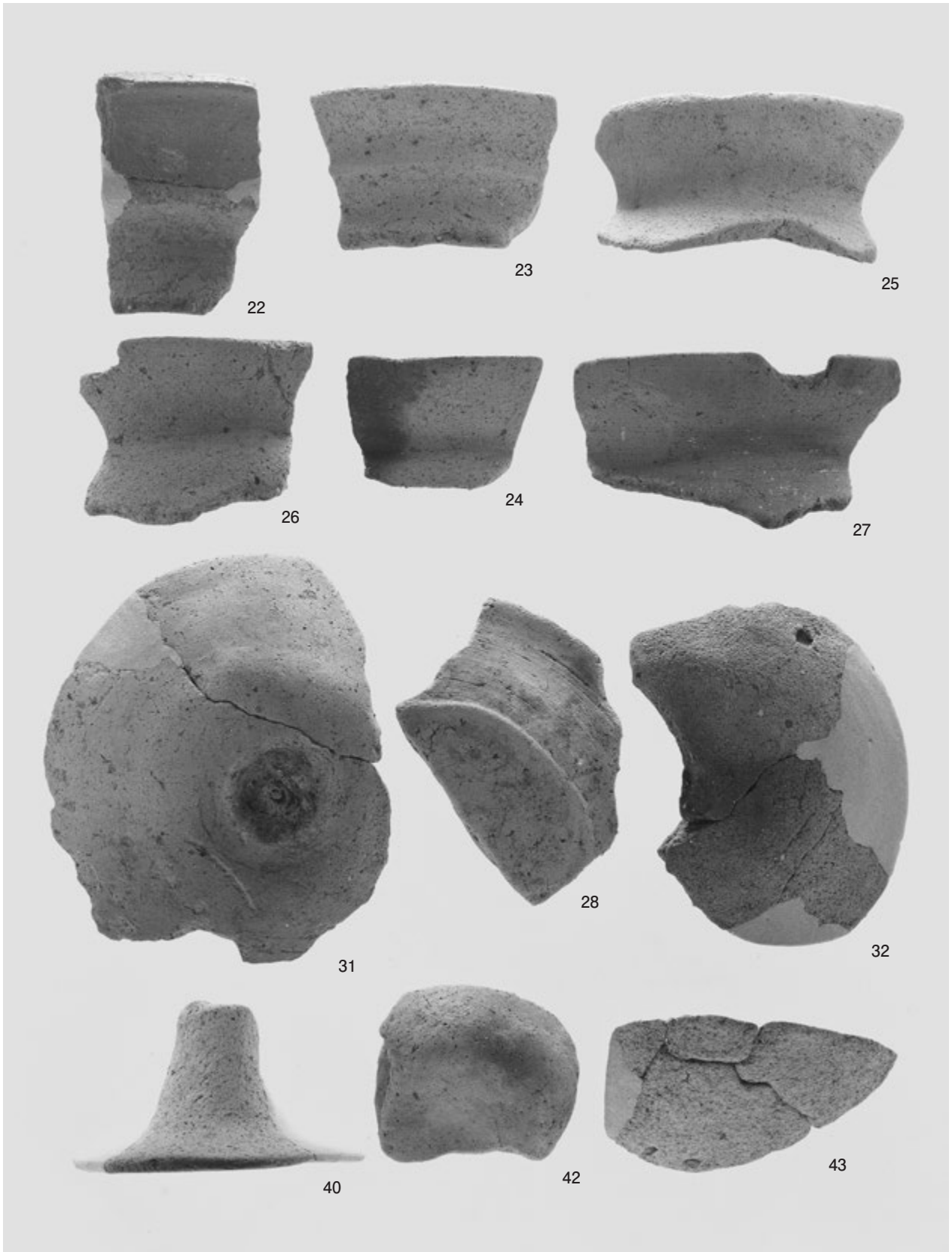
PL.40

48

47



S18出土遺物



SI10・12出土遺物



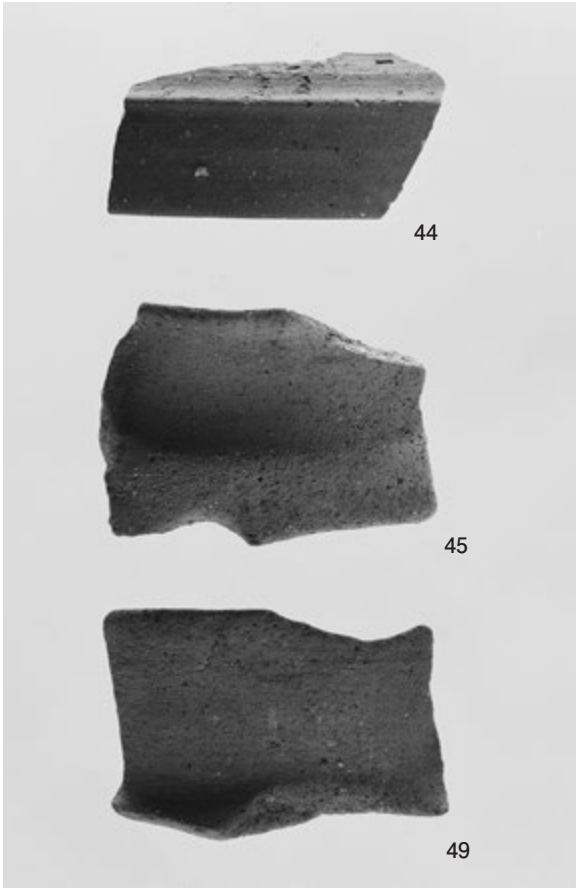
2. SK7出土遺物



1. SI10出土遺物



3. P40出土遺物



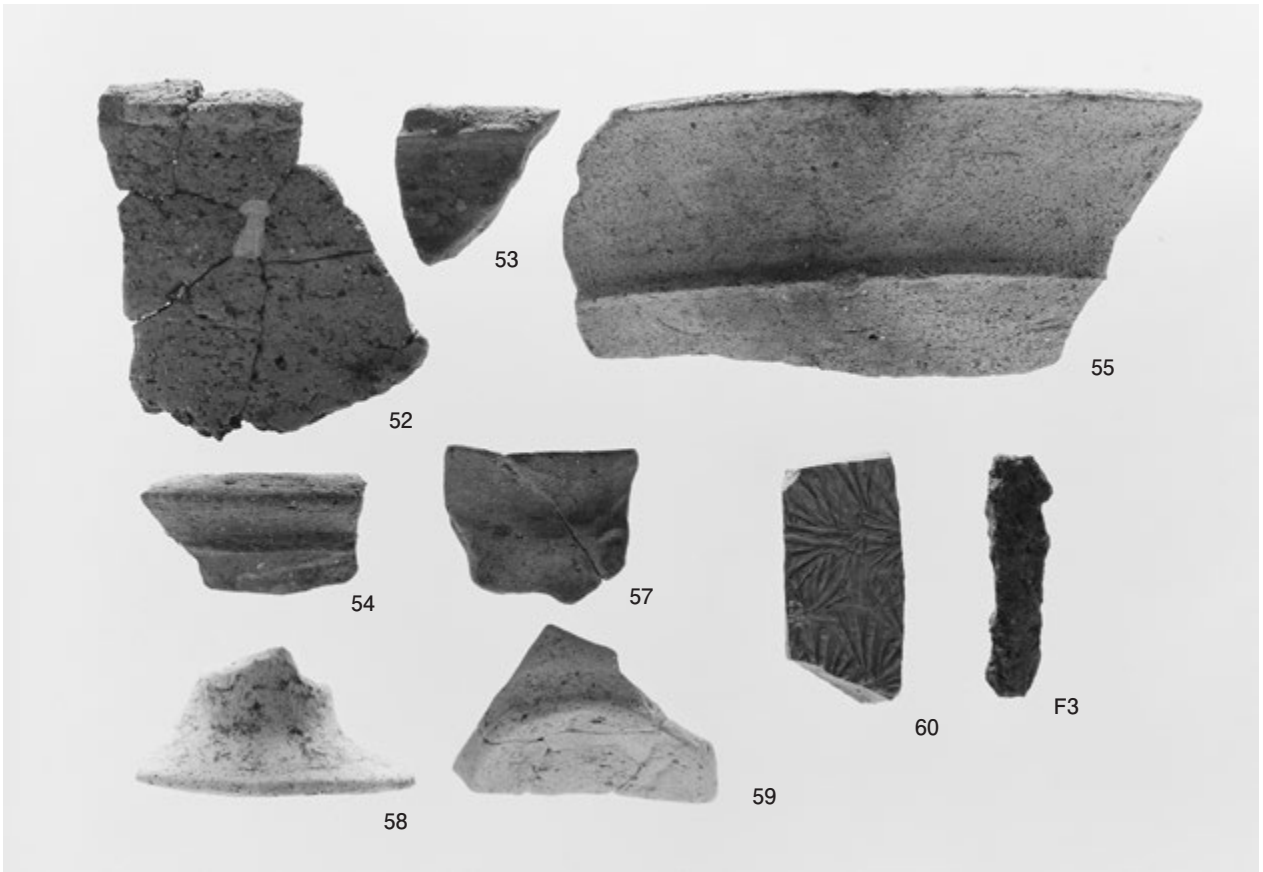
1. SK7・P40出土遺物



2. SD3出土遺物



56



3. 遺構に伴わない遺物

報告書抄録

ふりがな	さかちょうだい7いせき		さかちょうだい8いせき					
書名	坂長第7遺跡2		坂長第8遺跡3					
副書名	一般国道181号(岸本バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IX							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	118							
編著者名	玉木秀幸							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話(0857)51-7552							
発行年月日	2013(平成25)年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかちょうだい7遺跡	とっとりけんさいはくぐんほくさかちょうだい7いせき 鳥取県西伯耆町坂長字大清水 2259-1番地ほか	31371	1-21	35°22'54"	133°23'45"	20110831 ～ 20111130	1,015㎡	一般国道181号(岸本バイパス)道路改良工事
さかちょうだい8遺跡	とっとりけんさいはくぐんほくさかちょうだい8いせき 鳥取県西伯耆町坂長字狐谷尻1582-1番地ほか	31371	1-22	35°22'48"	133°23'30"	20110606 ～ 20111028	1,780㎡	一般国道181号(岸本バイパス)道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
坂長第7遺跡	その他	縄文時代から古代	自然流路、溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、鉄器、石器、木製品、木簡				
		中近世	水田	陶磁器				
坂長第8遺跡	集落跡その他	縄文時代	土坑、落とし穴	縄文土器				
		古墳時代	竪穴建物	土師器、須恵器				
要約	<p>坂長第7遺跡では、縄文時代から近世までの自然流路や溝38条、水田に伴う畦4基を確認した。縄文時代は水場として利用され、古代は水辺の祭祀、中世以降は水田耕作が行われていたとみられる。坂長第8遺跡は、縄文時代から古代までの竪穴建物9棟、掘立柱建物1棟、柵列4基、土坑8基、落とし穴3基、溝3条などを確認し、縄文時代は、集落や狩猟場、弥生時代や古墳時代では集落が営まれていたと考えられる。</p>							

鳥取県教育文化財団調査報告書 118

一般国道 181 号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

鳥取県西伯郡伯耆町

**坂 長 第 7 遺 跡 2
坂 長 第 8 遺 跡 3**

発 行 2013 年 3 月 18 日

編 集 財団法人鳥取県教育文化財団 調査室

〒 680-1133 鳥取県鳥取市源太 12 番地

電話 (0857) 51-7552

発行者 財団法人鳥取県教育文化財団

印 刷 勝美印刷株式会社